満洲文化綜合雑誌

藝文

民族の本質と
民族研究の立場　安倍三郎

林柏生氏と語る　武藤富男

協和青少年戰爭詩集

七月號

德九年七月一日發行（毎月一回一日發行）

感冒
扁桃腺炎
肺炎
中耳炎
テラポール錠
化膿菌・淋菌のみならず肺炎菌インフルエンザ菌をも撲滅するテラポールの生體内殺菌作用は既に昨冬・感冒肺炎・氣管支加答兒・扁桃腺炎中耳炎・耳下腺炎等に廣く實驗せられて顯著なる治癒効率を示したり。
THERAPOL
20 TABLETS
東京市日本橋區江戸橋 第一製藥株式會社
奉天市大和區琴平町 滿洲第一製藥株式會社

美しさ!
健やかさ!
滿點の
お肌を
創る!
YALE
ホノクリーム
Hono
大陸の氣候に
ピッタリ合ふ
新發賣
ホノクリームは、大陸の風、大陸の陽に荒されるお肌をまもり、日本女性の誇る特有の肌の美を輝かせる、御待望のクリームです。
ホノクリームは、深く肌に滲透して、根本から肌を美化、強化する新榮養素を豐富に含んでゐます。
血色のよい、つや〳〵した、白粉のよくのびる、さつぱりした、滿點の肌をお望みの方に御推奨いたします!
柏内化學工業所

DS781
G43
1:8

藝文 目次

第一巻 第八號 七月號

扉・目次カット……赤羽末吉
民族の本質と民族研究の立場……安倍三郎 (6)
自體翼贊運動と協和會……稲津宗雄 (22)
新東亞に於ける映畫文化建設の基礎的問題……高原富次郎 (36)
汪國府主席と滿華本然關係……金崎賢 (44)
林柏生氏と語る……武藤富男 (54)
民族と迷信……瀧澤俊亮 (70)
興亞國民動員大會に參加して……本社記者 (68)
印度及印度人……田所耕耘 (62)

月評 方寸錄……宗甚六 (58)
蘇州ところどころ……瀧川政次郎 (78)
書物談義……田中總一郎 (154)
滿洲の鑛脈を歩く……赤瀬川安彦 (110)
ロシヤに於ける滿洲研究(下)……坂口數雄 (162)
陸軍軍官學校訪問記……文・大内隆雄 繪・赤羽末吉 (96)
濱北線を行く(現地報告)……横山敏男 (118)
鍬の文化と犁の文化……薗村光雄 (180)
早春(或るマクシムの手記)……長谷川濬 (124)
現實主義の諸問題(文化時評)……桐天吉 (88)
聖戰と俳句(日淸役)……宮澤千代咲 (104)
協和靑少年戰爭詩集
靑少年戰爭詩に就いて……大村次信 (146)

満洲文學の二十年(七)……大内隆雄(138)
満洲のメイン・テーブルを圍む人々(五)……雅本秀敏(198)
托鉢放談「寒月清光第一賓」……溪白雲(174)
詩 正氣の歌……明石寺雪夫(170)
繪と文 鐵つくる人……中村伊助(152)
短歌 天兵の戈……天野耿彦(185)
大東亞戰爭川柳日記(三)……居平洞學人(202)
満洲文化映畫の方向(座談會)……(186)
音樂近事……鳥羽亮吉(77)
寫眞近事……加持正範(179)
演劇近事……藤川研一(161)
映畫近事……高尾憲太郎(137)
美術近事……古長敏明(117)
放送近事……新間愼吉(197)
小說 老宋……山田清三郎(207)

初版發賣・賣切近し

阿片戰爭

棵本捨三著
池邊青李裝幀

貪婪飽くなき米英の東洋への點火は實に廣東香港澳門を中心として捲起された『阿片戰爭』であつた。小說『阿片戰爭』は史材文學の領野に新しく逞しい巨步を占めつゝある棵本捨三氏の問題作『成吉思汗』につぐ第二の巨彈である祖國の急に一身を棄てて顧みなかつた林則徐の人間悲劇を周到綿密な史料に依據しつゝ飽くまでも深く掘り下げ綴つた、これは一大敍事詩である。

曲家として圓熟せる技法を驅使し、しかもその比類なき史眼は米英が東亞に描いた惡虐の足跡を烈々の正義感もて冷徹に剔り、新しい國民文學として、寔に裨益するところ大であると云はねばならぬ。

今や諸作家競つて同じ題材を取上げてゐる際、哈爾濱日日新聞に連載既に一年も以前に在滿作家がその先鞭をつけ、堂々六百枚の大作をなしてゐることはわが滿洲藝文界の誇りたるばかりでなく、非常時局國民必讀の書として、聲を大にして江湖にお薦めする所以である。

藝文社處女出版、B6版、定價 貳圓

發行所 藝文社

結核時の榮養補給に

三共 SANKYO

强力ビタミンB劑

オリザニン

ビタミン缺乏は、細菌感染に對する抵抗力の減退を來し、特にビタミンB缺乏に於ては著明なる結核菌の增殖、潜伏結核の進行、一般榮養障碍等病狀の增惡を示すことは臨牀醫家の實證するところである。斯かる場合强力ビタミンB劑たる**オリザニン**の應用が推奬せられてゐる。

（末・錠・液・エキス・注射液）

東京市日本橋區室町
三共株式會社
奉天市琴平町
滿洲三共株式會社

消化力强增

粗食よし代用食結構！何でも食べて無駄なく

消化し胃腸障碍を防ぐため「若素」を今年から常備しよう

豐富な消化酵素と强力なV・B外諸榮養素の協力で「若素」は細胞賦活作用を發揮し胃と腸に活力を與へます

食慾振起

故に消化力は數倍に昂まり胃弱胃下垂胃腸カタルが恢復し食慾が腹の底から湧起ります

奉天 若素製藥株式會社

V（ビタミン）のA-D劑なら

農林省 水産試驗場創製 **エーデー** である

名は エーデーでも、實はVのA・D+B_2+アミノ酸十造血素＝全肝臟實質劑である

故に 結核・貧血・骨齒不全・弱視に卓效あるのである

しかも その無臭・甘美の快さは

他類似品 を口にして、後はじめて知る可きである

タナベの吹奏楽器

ブラスバンド
旋律ラッパ隊
信號ラッパ
輸入販賣

樂譜

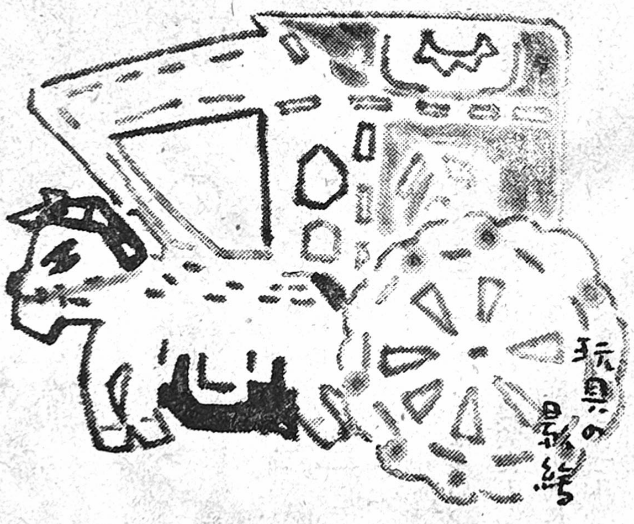
滿洲唯一の
管樂器修理工場
中古樂器買取交換

株式會社田邊樂器本社滿洲出張所

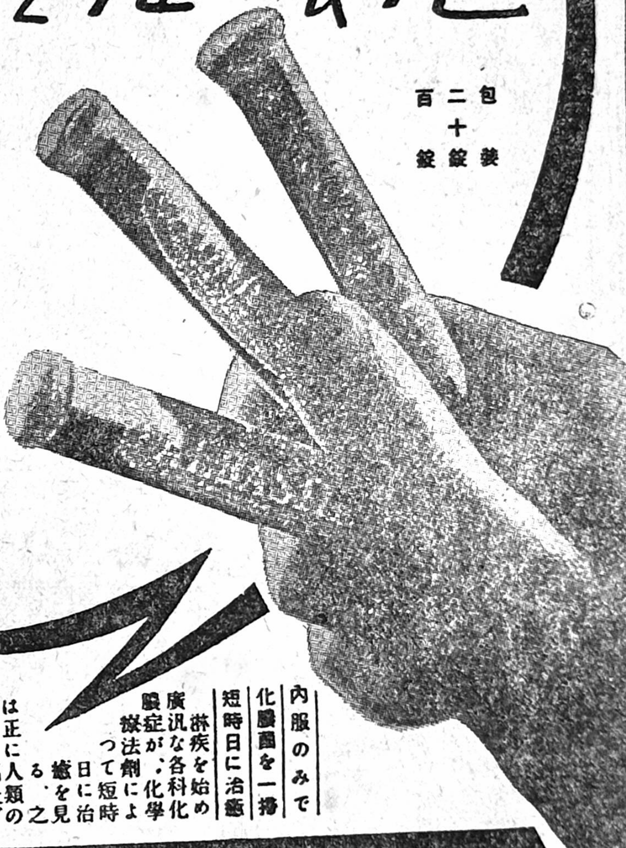
新京特別市大和通四二　電話③二七九二
本社　東京市芝區新橋二ノ二　電話銀座一四八〇・四四四一
玉川工場　東京市世田ケ谷區三〇五五
日暮里工場　東京市荒川區日暮里一丁目
臺灣出張所　臺北市建成町一ノ一二

藝文

第一巻・第八號・七月號



化膿症に



包装
二十錠
百錠

淋疾
横痃・下疳
第四性病
中耳炎
扁桃腺炎
歯槽膿漏
眼瞼炎
皮膚化膿

内服のみで
化膿菌を一掃
短時日に治癒

淋疾を始め
廣汎な各科化
膿症が、化學
療法劑によ
つて短時
日に治
癒を見
る。之
は正に人類の
大きな福祉で
ある。
而も數ある
化學療法劑中
効果的確にし
て副作用の懸
念なきは、獨
リアルバジル
の特長とする
ところである

アルバジル錠

製造發賣元 東京・大阪 山之内藥品商會 北京・上海・廣東
奉天市大和區紅梅町二番地

民族の本質と民族研究の立場

安倍三郎

一

或特定の民族を他の民族から識別せんとする場合、其手掛りとなるべき徴表と考へられるものは決して一二に止まらない。其主なるものを擧げてみても血縁關係、地縁關係、言語、慣習、傳統歴史、世界觀、民族精神、民族性格、民族運命等等、誠に其民族徴表と云ふべきものは多い。しかし是等の諸徴表中いづれが最も其民族をして民族たらしめる本質を擔ふものであるかは今日其觀る人の立場の相異により、且又其人が夫等の徴表を冠せしむべき對象として具體的に如何なる民族像を心に描いてゐるかによつて必ずしも同一ではない。

此處から人々によつて主張せられる民族の本質は實に多種

多様である。例へばゴビノーの如きは血縁をもつて、シュミットは地縁をもつて民族の本質的徴表であると考へてゐる。又、血縁と地縁とは離すべからざるものと考へ、血縁と地縁とによつて結合せられたる共同體をもつて民族の本質と考へる考想もある。ナチスの民族觀の如きは其適例であらう。之に對して上述の如き生物學的徴表ではなく言語の如き精神的徴表をもつて民族の本質とみるものも少くない。森谷克巳氏の如きは民族を國語共同體とみて居り、畏友稲富教授も言語は共儘民族の生命であることを强調して居り、古くはジャン・パウルも國語こそ民族又は國民の本質であると見てゐる。更らに又民族精神こそ民族の本質であると認める考想は古くはフイヒテ・ヘーゲル等の哲學者などの思想にもうかがはれ、篠原助市博士などは其然る所以を斷言して居られる。更らに又、バウエルの如きは民族を集團的に體驗し相共に忍び相共に喜ぶ所の運命共同體であるとみてゐる所もあり、其運命共同體から由來した民族性格が民族の本質で其點から云へば民族は性格共同體であると見てゐる所もある。此外に民族を共通な生活様式、共通な言語、慣習、傳統、世界觀等を共有し之によつて形成されてきた文化共同體であると見るもの、或はかかる文化共同體の目的性・創造性を强調して集團的に或目的を志向し或理念を追求し其處に民族特有の文化を創造して行く目的共同體、深い意味での文化共同體を民族の本質的特質と見るものもある。(フイアカント)

以上の如く民族の本質とするところ、從つて民族の概念は各學者によつて必らずしも一定してゐない。かくの如く民族の概念が多義にして一見曖昧の如く見らるる所以のものは果して何に起因するであらうか。前述すでに暗示した如くこれには少くとも二つの有力な原因があると私は思ふ。即ち其一つは各學者が民族の本質を規定する立場の多様であることであり、他の一つは各學者が其際に其對象として心に描きつゝある具體的な民族形態或は民族像が區々であるか或は曖昧であるかによることとであらう。同じ對象を問題としてさへ其據つて立つところの立場の相異によつて異ることは衆知のことである。況んや今日民族と呼稱せられてゐる現實の具體的な民族形態には種々あるのであるから、今各學者が暗々裏に如何なる民族形態を共對象として心に描きつゝあるかによつて共民族の本質觀の異ることは當然のことであらう。民族の現實の姿をも突止めずして架空なる民族像を心に描きそれに基いて民族の本質を規定せんとするならば其本質觀が曖昧となるべきことも亦當然といはねばならない。夫故に今吾々が民

族の本質を明かにし其概念を規定するにあたつて其立場を先づ明示し其對象とする民族形態に一定の限定を與へないならば其處には不必要なる錯綜と迂路の旋向を餘儀なくせしめられることになるであらう。されば吾々は先づ民族研究に最も適しき立場を吟味し他面今日民族なる概念の適用されてゐる現實の民族形態を調査し然るのち民族の本質を把握することが必要となるであらう。

二

民族存在は今日いろ／＼の方面から研究の對象となつてゐる。例へば人種學、民族學、民族生物學、民族社會學、民族心理學等に於ても民族は好箇の研究對象になつてゐる。人種學では主として人間種族の趨移發達の觀點から民族を眺め、民族學は主として民族文化の起原、發達、個性等の考證、記述、說明等の觀點から民族を研究し、民族生物學は民族を生物學的に研究し、民族社會學は民族を社會現象の基體として研究してゐる。又、民族心理學は民族心の表現としての言語・神話・宗教・藝術等の民族文化の現象と見られる一般法則性、竝びに民族精神や民族性格にあらはれる特殊性に着目して之を研究してゐる。

かくの如く各科學は均しく民族を研究の對象としてゐるものゝ、嚴密には各科學の性質によつて民族の異る面が夫々取扱はれてゐるのであり、從つて其研究法も亦夫々の科學によつて必らずしも同一ではない。それにも拘らず民族を對象とする場合の根本的な立場は夫々の科學によつてそれ程多樣に存するとも思はれない。私の見るところでは從來各科學によつて取られてきた根本的立場には先づ二つの根本的に對立したものが見られる樣である。其一つは民族存在を外からみる立場であり、他の一つはそれを內からみる立場である。

私が民族を外からみる立場といふのは、民族を世界全存在體系中の一つの存在として之を客觀的に外から眺めるといふ立場をさすのである。此樣な立場に於ける第一の特色は、民族或は民族表現を合理的に見ると云ふことである。民族及民族表現は吾々の感情や意欲や實踐の對應者となる場合も少くないわけであるが、それ等の場合をば問題とはせず先づ民族或は民族表現を吾々の悟性の對應者としてあく迄も冷靜に、あく迄も合理的に眺め、悟性が證明し悟性が許容しうるもののみによつて夫等を認識し之を理解して行くと云ふ態度、いはば主知的態度が此立場をとるものの一つの特色なのである。民族或は民族表現には吾々の直觀をもつて感じ吾々の情念を

もつて共感し吾々の實踐に訴へてみて之を理解しうる面もあるのであるが、是等の面をば問題としないで專ら悟性の網によつてすくはれうるものに絕對の信賴を與へ之のみによつて民族或は民族表現を把握しようとするのが此立場の一つの特色とみられるのである。

此立場の第二の特色とする所は、民族或は民族表現を吾々の主觀から獨立に、全く客觀的に把握し樣とすることを理想とする傾向の强いことである。即ち民族的事實を吾々の組織的な觀察や實驗によつて出來るだけ多く之れを蒐集して統計し、夫等の中に最も多く共通に分有せられてゐるものを普遍的にして客觀的な本質と解し、然らざるものを偶然的又は主觀的なものと考へ、後者を捨象し前者を抽象してそこに民族或は民族表現の本質を把握しようと云ふ客觀化的態度即ち客觀主義的傾向が見られるのである。

此處から此立場の第三の特色として民族を存在論的に取扱ふとする態度も生じて來るであらう。即ち民族を客觀化的にして取扱ふ特色はやがて民族を自然物などの樣に客觀的な存在として取扱ふ特色も伴ふて來るのである。民族は一定個人の集團であり其限り一定の空間を占めて一定の民族行動をとるとみる。それ故に民族には本來客觀的な一面をもつて居り、此面を一つの存在として客觀的に取扱ふことが可能である。又他面、民族は民族意欲や民族理想や民族感情等の主觀面をも持つてゐる。しかし之も外から眺めてみると此主觀面もやつぱり客觀化されて一つの存在となるのであるから其本質把握に適はしいか否かは別として此主觀面をも一つの存在として之を客觀的に取扱ふ途もあるのである。民族を外から眺める立場を徹底する場合に於ては、主觀も客觀も、主體も客體も生命も生命創造物も悉く一つの存在として大膽にもすべて之を客觀的に究明し樣とする傾向が强いのである。

民族は決して自然物の樣に死んだ存在ではない。寧ろ生命的主體的な存在である。從つて常に主體的に行動し發展し自から樣々な性格を形成して行くのが民族の常態である。けれども之を外から客觀的に見る立場を徹底して行けば生命的なものも之を無生物の如くに殺し、躍動的な趣も之を靜止的な貌に變へて把握せざるを得ない樣になる。此處に亦、民族を外から客觀的に眺める立場の第四の特色があると云へるのである。

之を要するに民族を外から見る立場に於ては、吾々の悟性を其究明の武器とし、民族や民族表現を一つの存在として客觀化的に觀じ靜止的の貌に於て之を分析しそれ等の材料の多

數に共通に看取される趣に其普遍的本質を認めようとする態度なのである。從つてそれは主知主義的客觀主義的であり、又存在論的機械觀的であると見られ勝ちなのである。斯様な立場を最もよく代表するものは云ふ迄もなく自然科學の立場である。而して斯様な行き方をするものを民族に關する科學に求むるならば、從來の人種學や民族生物學は勿論のこと、自然科學的な民族學、自然科學的な民族社會學、自然科學的な民族心理學などがそれであらう。是等の民族諸科學は民族又は民族表現の客觀化されても差支なき部面の研究に於ては確かに大きい貢獻をなしてきたといはねばならない。しかし、民族が生命をもつてゐるもので從つて主體的に自から行動するものであることは假定や推定ではなくて現實の事實である。此生命的主體的な民族表現の意味や本質は果して前述の如き外から見る立場のみによつて把握することができるであらうか。成程、前述の如き立場からは民族或は民族的なものが、世界存在の一部として様々な客觀的理法によつて支配されてゐる趣や民族の體型體質に見られる客觀的特徴や、民族行動や民族現象に見られる客觀化的特質や、民族の客觀的構成狀態等については確かに或眞實性を把握することが出來るであらう。しかし民族を外から眺める此立場によつて民族表現民族現象から生命的主體的のものを切離して客觀化せられた資料を如何に穿鑿しても民族の主體的生命的な本質を把握することは困難なことであらう。例へば民族形成の動的な理法、民族精神、民族文化の中に內在する生命的な理法、各種民族表現の眞の意味などは、民族表現から生命的主體的な趣を抜きとつて眺める客觀化的方法によつては到底之を把握することは困難でなければならない。ここから民族研究に於ては、就中民族精神、民族文化、民族性格等を主題とする研究に於ては前者と異る別の立場即ち民族を內から見る立場が新しく要請されてこなければならないのである。

三

此處に私が民族を內から見る立場といふのは民族や民族表現を民族生命又は民族主體性から切離して見ないでディルタイの所謂「生を生の立場」から內面に即して見る態度をさすのである。即ち生命的主體的民族を殺してみないで生命性や主體性が働いてゐるまゝの理法を內面的に見ようとする立場を云ふのである。

かかる立場に見られる第一の特色は、民族又は民族表現を靜止的なものとしてではなく動的存在として把握することで

あらう。すべて生命あるものは創造的進化を續けて行く躍效的なものである。夫故にそれは只存在すると云ふよりは寧ろ常に生成發展して行く動く姿をもつてゐるものである。民族と雖も生命體である以上常に生成發展するものであることは云ふ迄もない。若しかかる民族生命體を第一の立場に立つて悟性の對應者とし、悟性のみによつて合理的に把握せんとするならば、そのものは無生命的な靜止狀態に留つて了ふであらう。何故ならば悟性的に分析綜合することは夫自身靜止的意味をもつものであつて強いてこれをそれによつて把握せんとする彼のツェノンの運動否定論の如く運動や持續が現實にあるのに之を否定せざるを得ない結果に終るであらうからである。それ故に生を生の立場から內面に即して把握せんとする第二の立場に於て民族を生命的動的な存在として把握せんとする場合には、民族表現を悟性のみに訴へて冷かに處理することよりは吾々の全人をそれに投げかけ彼等と同じ様な狀況に吾々も立つて之を直觀することや、彼等との交渉に於いて實踐的に體認することと等によつて了解する方面を重視する傾向があるのである。

かかる立場は又その第二の特色として民族を具體的全體的に把握し様との傾向を伴ふものである。民族を具體的全體的に見るといふことは例へば部分的な民族表現でも常に全體的な民族意欲とか民族感情とか民族性格といふものを先づ把握してその現れとして其部分的な民族表現に內面的な絡りをつけて見るとか、或は民族表現を單に吾々の知性面にのみ投射して眺めずに吾々に直觀的に洞察される面とか吾々の實踐的體認に於て看取される面などにも關聯せしめて出來るだけ現實的具體的な姿として把握する様なことを云ふのである。單に悟性によつて把握された知識構造などは生命的な民族の外皮的一面に過ぎないのでそれは決して具體的民族の全體構造ではないのである。而かも生命的なるものの本質は悟性の如き合理的層にあるのではなく寧ろ本能意欲感情の如き非合理層にこそ多分に分有されるとするならば之を把握するの途は民族或は民族表現を吾々の悟性面のみでなく吾々の心情的な全人に對應する具體的全體的なものと觀じ、把握する自己の全人的心情を其中に含む特殊な仕方をもつてしなければならぬものであらう。

尚更にかかる立場の第三の特色は民族を主體的なものとして把握することであらう。個人的な人間を主體的に見るといふことは、人間を精神と身體とこれを統一する自我とに切離してみないでこれを全一的な統體としてみて行くことである

民族も人間と同じく生命的であり主體的である。それ故に民族は自から表現し自から生産し自から創造し自からを形成し行く全一的なものである。いはゞ民族は只在るのではなく成るものである。此民族を第一の立場に立つて客觀的に眺める場合は民族存在の各横斷面の在る姿のみが抽象され勝ちなのであるが其民族が主體的に自から表現し自から生産創造し自から形成し自から行動する歴史的にして全一的な一貫の原理は容易は把握されてこないのである。反之、第二の立場に立つて民族を生の內面に即してみる見方に於ては、民族表現を生産の動き、創造の働き、形成の働き、實踐行動の働きの表現として主體的全一的に把握しその理法を理解し樣とする傾向をもつのであらう。

之を要するに民族を內から見る立場は、知情意分化以前の全人的理解を其究明武器とし民族を主體的生命的なものと觀じ、之を具體的全體的動的な形成態と見、民族表現の中に一貫して看取される全一的な理法を其本質として把握しようとする態度なのである。斯樣な立場は獨り民族の把握にのみ限つたわけでなく一般に生命的なものゝ把握に見られる一つの立場で主として生命哲學、人間學、實存哲學等に見られるものではある。しかし斯樣な立場を科學の領域に求めるならば之を精神科學に於ける新しき立場に見ることができやう。就中、心理學の領域に於けるディルタイ・シュプランゲル一派の精神科學的構造心理學、ミュラーフライエンフエルス一派の生命心理學、シュテルン一派の人間學的心理學、クリューゲル一派の全體心理學、ケーレル一派の形態心理學等はそれぞれ相異る一面も勿論あるが他面夫々一脈相通ずる所があつて多かれ少かれ上述の傾向をもつことが認められる。社會學の領域については私は餘り之を知らないがシエラーの如き人間學的社會學には此傾向を指摘することができやうかと思ふ。新しい民族學方面にもかかる傾向が見られるとは聞くが柳田國男氏の民俗學的態度以外については不幸にして私は之を知らない。以上は人間の精神や文化を取扱ふ一般の精神科學についてかの傾向のあることを述べたのであるが民族及民族精神、民族性格、民族文化、民族世界觀等を考察せる面にも最近かかる第二の立場若くはこれに近いもののあることを指摘することができるのである。

四

第二の立場は確かに民族及民族表現の本質的把握に至る本道であるに相異ない。吾々も亦此立場を支持することを躊躇

するものではない。只如何に吾々が此立場に立つて民族及民族表現を主體的生命的動的な形成態と觀じても、それだけでは尙民族及民族表現を把握する大前提が確立したに過ぎない。かかる大前提に立つて民族の本質的理法を事實的に把握するには多くの民族表現を觀察の資料とせねばならないのである。此場合、日常偶然的に看取する任意の民族表現のみを資料としても此立場に立つ限り或程度迄民族及民族表現の本質に觸れることが出來るであらう。併乍、かかる偶然任意な民族表現のみによつては往々にして主觀的にして淺薄なる理解に達する懼がないとはいはれない。從つてかかるもののみによる理解は前科學的程度に終る懼なしと保證し得ないのである。然らば此前科學的理解を科學的理解に迄高めるには如何にすべきであらうか。第一にそれには考察の資料たる其民族表現を組織的方法的に彙集整理して其全貌を明かにする必要があらう。從來此第二の立場に立つ人々は其立場を啓蒙的に主張するに急であつて其立場に立つて考察すべき資料を方法的組織的に彙集する努力に於ては幾分缺くるものがあつたではないかと見られる。

然らば民族表現の全貌を示すべき資料を客觀的組成的方法的に彙集する場合、吾々は如何なる手段をとるべきであらうか。民族表現の中には直接之を直觀しうるものもあり、間接に文獻より之を推定し得るものもあり、時代的層を異にするものもあり、場所を異にするものもあり其動機にも樣々あるであらう。それ故に其民族表現の全貌を明かにするため之を組織的方法的に夫等を彙集整理するためには其資料を十分客觀的に考證吟味批判する必要があるであらう。吾々は此客觀的に考證批判吟味せられたる資料を第二の立場に立つて內面的に理解するのであるが、資料其物の眞僞考證整理するにはあく迄も吾々の悟性に訴へて客觀的に之を處理しなければならぬであらう。其場合吾々がとらねばならぬ立場はまさに第一の立場、卽ち民族資料を客觀的に外からみる立場である。夫故に第二の立場が科學として實際の業績をあぐるためには資料の方法的組織的吟味や彙集整理の點に於て第一の立場を其中に含むといはざるを得ないのである。此第三の立場が第一の立場と異る所以は前者が其客觀的資料を基礎として民族の生命的主體的理解に向はんとするのに對し、後者は其客觀的資料を基礎としてあく迄も悟性的認識に向ふところにあるとも云へる。而して又悟性的認識に向ふ純乎たる第一の立場と、此第三の立場に於いて資料彙集のためにとらるゝ第一の立場と異る所は前者はやゝもすれば民族の悟性的認識に便利な樣

に其民族表現を抽象的に分析し生のまゝの姿を變容して其具體的全一的な趣を失ふて了ふことがちなのに反し、後者はもと／＼民族表現の生命的主體的理解を志してゐる以上其資料彙集に際しても其民族表現の具體的全一的な趣を失はぬ樣に努める點に存するであらう。生命的な人間精神の科學たる心理學の方法は、其客觀化的方法によつて得られた資料を基礎として之を生のまゝの姿に再構成せねばならぬと唱へたナートルプの考想も又恐らく吾々の如き立場を既に暗示してゐたものと思はれる。即ち客觀化的に吟味考證して組織された資料に「生」を吹き込んで其資料の背後にかくされた表現者の心を追體驗し、其表現の意味を感得し、元の姿に還元して之を理解する手段が彼の所謂再構成であらねばならない。

尚又、合理的認識は對象を吾々の悟性とのみ對應せしめて、それをあく迄も客觀的合理的に把握するのに對し、理解は人間の表現物を吾々の全人に對應するものとして吾々の悟性のみに訴へることとなしに、吾々の情意にみち／＼た體驗を働かして、それを全人的に把握することである。即ち人間の樣々なる表現物を通じて其表現者の心情を追體驗し彼等の全人を先づ把握しこれを背景として再び其表現物の眞の意味を把握することが普通いはるゝ處の理解である。それ故にかかる理解は民族を把握するには適しき把握方法で其限りに於て理解は第二の立場から當然要請されるべき一つの方法ではある。併乍他面、民族の把握が只單に其民族を內面的に理解することのみに終始してゐては遂には其眞の姿を把握し得ないであらう。日本を理解するには日本の立場から內面的に理解することは必要ではあるが、併しそれのみでは尚不十分である。吾々は日本の立場から超越して、これを含むより廣い領域からこれを眺めなければならない。即ち支那や蒙古や歐米をみた眼で日本を見直してみなければならない。然らざれば日本の優れてゐること劣つてゐること、日本の世界に於ける地位や意味や使命などが理解されないのである。「カントを理解するものはカントを超越しなければならぬ」といふ言葉は此事を意味するであらうか。又、シュプランゲルが內面的記述的理解、即ち被理解者の體驗以上に出でない理解の外に、別に優越的包括的理解を區別して、對象の內面的記述的理解を更らに超越し、それをより廣範な客觀精神の領域から見直して其處に超個的意義聯關を把握するものとし、これこそ眞箇の全き理解であると主張した眞意も此處にあるであらうと思はれる。

かく考へてくれば吾々が民族を眞に把握するためには只單に第二の立場のみを固執すべきではない。寧ろ吾々は先づ民族や民族表現を理解するに必要な資料を考證吟味して之を組織的に彙集、整理する上に於て既に第一の立場を合蓋的に取れる必要があつたのであり、其組織せられた民族表現資料を內面的に理解する上に於ては勿論第二の立場をとるものではあるが、しかし其立場による理解を更らに優越的理解に迄深めて眞箇の理解に達するために吾々は又其第二の立場による內面的理解を、それを包むより廣範な領域から超越的に眺める上に於て又第二の立場を超越するものである。而してかかる理解は歷史的認識に吾々を導くものではあるがここではこれに觸れないことゝする。

五

以上吾々は先づ民族研究の立場に二つの對立した立場のあることを指摘し、生命的なる民族又は民族表現の本質把握に最も適しき科學的立場は寧ろ其兩者の止揚に基づく第三の立場にあるのではないかとの私見を提出した。次に吾々は今日實際に民族と呼稱されてゐる共同體には如何なる形態のものがあるかを簡單に吟味することにしたいと思ふ。

私は今日民族と呼稱される形態には少くとも四つを數へることが出來ると思ふ。

其第一の民族形態は具體的には北海道樺太等に於けるアイヌ族、滿洲興安嶺山中に見られるオロチョン族、ソ滿國境ウスリー沿岸に於けるゴルゲ族の如き民族形態である。これ等の最も重要な特質と見られる點は、客觀的には比較的純粹な同一血緣につながり、主觀的には各員が少くとも同一血緣につながるものであるとの信念を基調とせる同族意識を以て堅く結合し、其共同集團の歷史的傳統も、言語慣習生活樣式社會制度も皆此血緣共同と云ふ信念と事實の上に深く結びついてゐると云ふことであらう。即ちかかる民族は同一血緣にある酋長を立て、民族制度的社會機構內に同一の生活樣式をもつて生活し、同一の慣習をもつて同一の言語を話す。而して各成員は此集團の運命を自己の運命とし、此集團の繁榮を死守し、此集團を追はれることは恰も自己の生命を奪はれる如き情感をもつ。かかる意味に於て此民族形態は實に他の民族形態とひとしく一つの生命共同體であり且又運命共同體であり又たとへ幼稚とはいひながら傳說、言語、信仰、藝術等の文化財を共同に所有するところから一種の文化共同體でもある。而し此の民族形態の本質を最も端的に表明し得ることはそれは血緣を最大の紐帶とせる生命共同體であると云ふことであらう。ゴビノーの如く民族の本質を血緣にありとする考想は

かゝる民族形態を對象としてこそ妥當するものであり、事實又恐らくかゝる民族形態を對象として生れたものであらう。

次に第二の民族形態は具體的には現在の蒙古民族とか朝鮮民族とか大和民族等の如きものを指すのである。例へば今日蒙古民族と稱せられるものは史上、匈奴、東胡、烏桓、鮮卑、柔然、突厥、羅、契丹、韃靼等と稱せられ其風土的性格、生活樣式等を同じくする所謂塞外民族の後裔が第十三世紀の頃オノン、ケルレン二河地方に興起せる韃靼の一部族、蒙古部族の英雄達によつて征服統一せられて出來たものである。故に彼等は血緣的には當時の韃靼各部及東北土耳古系の數部族、若干のツングウス諸族等の融合から成つてゐるといはねばならぬ。彼の諸部族は生活樣式、言語等についても多少の類似をもつてゐたではあらうが事實に於ては相互に對抗し合つてゐたものであることは歷史の示すところである。然るに一度强力な勢力によつて統一せられ社會機構を同うしてより、他の民族集團との對抗上共運命性を均しくし徐々に同族意識のもとに融合し歷史と傳統を均しくし言語と生活樣式は益々近似し、はては血緣等に於ても多少の融合をきたして今日にいたつてゐるものである。今日の朝鮮民族についても之と略々同樣の事實を指摘しうるであらう。即ち彼等は血緣的には古朝鮮時代北鮮を占居せる沃沮族、中東鮮に居住せる穢族、三韓時代南鮮に鼎立した韓族、漢四郡時代に北支や滿洲等より朝鮮の西北部に移住せる漢族、三國時代滿洲の中原から安東を經て北鮮に高句麗國を中鮮に於て百濟國を立てた扶餘族等より成り李氏によつて長く統一せらるゝに及んで徐々に略ぼ言語を同じうし、慣習を同じうし、運命を同じうして遂に同族意識を結合し今日に於ては旣にユニークな一民族を形成するに至つてゐる。又大和民族も上古に於て旣に天孫民族を中心にして國神系統の諸族を統一し更らに朝鮮、支那、滿洲よりの著しき數の歸化人を統合し、今日に於ては全くユニークな一民族を形成するに至つてゐることは衆知の如くである。故に血緣的にいはゞこれ等の民族に於ては單一ではなく複合血緣であり、而かも夫等の血緣は決して平均化してゐるわけではないのである。從つてかかる民族の本質を血緣の共同と云ふ點におくことは必らずしも妥當しない。

要するに此の第二民族形態は血緣的には相當の差異ある數種の部族が或特殊の事情によつて同一の地域によつて統一せられ、其運命の共同を自覺するに從つて共感情の融和を來し、其處に同族意識を生じ、然る後に徐々に血緣の若干の融合も起り、言語、慣習、生活樣式の近似を招來し歷史や傳統、世界

觀や民族精神、社會組織等の精神財を共有し、それによつて團結を必要とした初期の事情の去つた後に於ても尙且つ恆常的な同族意識を自然に招來することによつて所謂文化的な生命共同體を形成する迄に至つた民族存在なのである。今此の第二民族の特質を第一民族のそれと比較するならば第一民族形態が全く血緣の共同を主因として自然的に發生したものであるに對し、第二民族形態は地緣を共にする數種の部族が偶然特殊の事情によつて共運命を共にせることから出發し軈てそれが文化的な生命共同體に迄進展し後に若干の血緣的融合さへも行はれるに至つたものであると云ふことができやう。

次に第三民族形態は具體的には日本國民、滿洲國民、獨逸國民等の如き共同體で、第一民族形態若くは第二民族形態の若干のものが一定の地緣と獨自の國家機構のもとに打つて一丸となり、一つの國家理想を掲げ共實現に向つて積極的に團結し、對內的には各自の政治、經濟文化等の各面の生活目標を均しくして協和し、對外的には外交と國防を一にして結束し、ここに共同の運命の發生を自覺し、同族意識を有意的に高めることによつて成立せるより深き文化的生命共同體である。從つて此民族形態の特質を第一第二の民族形態に比較するならば、後者は其結束が比較的に自然發生的であるのに對し前者に於ける結束は國家機構なる特別の組織機構の下に意志的强制的に行はれ、理想追求の共同性に成立する目的共同體、より深き意味での文化的生命共同體であるといふ事が出來る。此民族形態が國家機構のもとに意志的に行はれる處から或學者は之を國民と稱し、或學者は之を邦族と稱し、又或學者は之を國家民族と名付ける。又此民族形態が主として近代の特產であるとの考想から之を近代民族と稱する學者もあるが事實に於て此民族形態は近代のみの所產ではないのであるから吾々はかかる名稱を用ひないことにする。又眞の文化の創造實現がかかる民族を通じてこそ初めて成立すると見る觀點から之を文化民族と稱する人もあるが後述する如く如何なる民族も文化の觀點からみれば文化的な生命共同體なのであるからかかる名稱も必然的な名稱と見ることはできない。

吾々大和民族の中では天孫民族を初め國神民族、其他蝦夷東夷、熊襲、卑人、歸化人等の諸族が含まれてゐるわけである。然るに今日吾々は大和民族としての意識をば有するが其包含諸族の種族意識をば殆どもつてゐない。卽ち吾々は大和民族と云ふ第二民族としての意識をば十分もつてゐるのである。然るに日本國民を構成する民族は大和民族以外に尙朝鮮民族、臺灣民族等であつてこれ等諸民族はいづれも日本國民

即ち第三國民としての自覺をもつてゐるにも拘らず相互には又大和民族、朝鮮民族、臺灣民族としての意識も今尚强いのである。其限り吾々は第三民族でもあり又第二民族でもあるところの二重性格を有するのである。今日の國家民族を構成する第二民族とは曾つては純粹な民族國家を打ち立てた所謂第三民族たりしものが多い。たとへば滿洲國内の滿洲族も蒙古族も朝鮮族もそれぞれ第三民族たりしものである。

　從來は第一、第二、第三の三つの民族形態のみが民族として考へられてきた。併しここに第四民族形態が生れんとしつゝある。それは東亞民族と稱せられる廣域圏民族である。尤も西亞民族とか東亞民族とかの呼稱は或特定の廣域圏内に生息する諸民族の概括的代名詞として用ひられる場合がある。かかる意味に用ひられた民族は抽象的觀念であつて現實的主體的な民族と考へることはできない。而し吾々が今第四民族形態として指摘するものは飽迄も現實的な民族存在である。例へば東亞民族は今や現實に東亞民族主義を旗標として揭げ實力ある日本民族を其指導者として歐米民族に對して結束し現實に一定の性格を有し、主體的に獨自の活動を營む民族である。此種の民族形態は勿論未だ十分完成をみてゐない乍併、それは從來の如き觀念的代名詞的存在を一擲して今や確乎たる現實的主體的な民族存在として生育しつつあるのである。

　かかる民族存在を現實的に形成しうるためには種々なる條件が必要であらう。例へば地緣の共同、血緣の近親、相互に融合し易い民族性、世界觀の近似等といふ樣な條件も必要であらう。しかしかかる條件のみでは此廣域圏民族は容易に形成されない。それは從來かくの如き條件を自から具備されて居りながら現實には東亞民族が容易に形成されなかつたことをみても明かであらう。かかる廣域圏民族の形成を積極的に促進するための最も有力な條件には二つありと私は思ふ。即ち其一つは、悲慘なる共通の運命の自覺を强烈ならしめるための客觀的事態の存在であり、他の一つは其悲慘なる共同運命を排除解放するに足るべき實力ある指導民族を自己の廣域圏内に發見することであらう。東亞民族は數世紀の永い間にわたつて歐米諸民族の利己的政策の犧牲に供せられ或は其支配下に植民地的地位を餘儀なくせられ、或は非固有的な理念のもとに異質的文化を强制せられて其處に拙なき共通の運命を自覺するに至つたのである。然るに單に拙なき運命の相互自覺、相互同情のみでは其結束融合は未だ消極的である。其結束を積極的ならしめるためには自己の廣域圏内に此拙なき運命を排除解放するに足るべき實力ある指導民族を發見しな

ければならない。かかる實力ある指導民族は既に心あるものによつて私かに我日本國民に求められつゝあつたのであるが未だ一般には日本の實力が認められてゐなかつた。然るに此度大東亞戰勃發以來の赫々たる武勳によつて彼等はまざ〳〵と日本民族の實力を體驗自覺し、此處に大東亞民族形成の機運は急速に增大したのである。しかし此東亞民族形成のためには單に日本民族の武力的實力感のみでは未だ不十分である。日本の精神力、文化力、政治力、經濟力等に於ても彼等をして讃仰せしむるに足るべき實力を發動せしめなければならない。ここに吾々の今後の努力と行き方とに深甚の注意を拂ふべき契機が存するのである。

　併し東亞民族の如き第四民族形態は第三民族形態の如く決して鞏固なものではない。何故ならば彼等は國家にまさる制約機構をもち得ないからである。又此第四民族形態は第二民族形態の如く其承續性をも保證することが出來ないであらう。何故ならばこれは共通なる拙なき運命の排除解放を目標としての結束を基礎として居り、指導民族の實力に對する依賴感に基いてゐるのであるから、其目標が達せられ其依賴感に動搖が生ずる場合は容易に其中心力を失ふ懼れがあるからである。要するに此民族形態は形成されることは難しいが解體される事は容易であると云ふ特質をもつてゐるのである。

六

　さて前述の如き吾々の立場に立つてみれば上述の各種民族形態に一貫して流れる民族本質は果して如何なるものであらうか。而し吾々は此處で其詳細を敍述する資格も餘裕もない。何故ならば民族本質の全き姿は各種の民族形態に於ける各種の表現、各種の現象を科學的に研究しその成果を之を資料として理解し、之を優越的理解に迄高めることによつて看取されるのであり、從つてそれは廣範な夫々の科學的研究の成果の後に於て達せらるべきものであるからである。併乍、民族本質の全き姿は成程、研究成果の後に初めて達せられるであらうが、又一面民族本質の輪廓的把握は各種の民族研究の方法態度を決定する爲の大前提として寧ろ研究の最初に於ても要請されなければならぬのである。吾々が此處に於て述べんとするものはまさにそれである。以下吾々は上述の立つ、又上述の現實的な各種民族形態の特質を考慮し且又從來の民族本質に關する諸說に鑑み凡ゆる民族に一貫して存するであらうと思はれる民族本質の輪廓に就て述べてみようと思ふ。

　先づ第一に凡ゆる民族形態に一貫して認められることは、

民族は多かれ少かれ共通なる地緣、共通なる運命共通なる文化等の自覺に基いて結束統一せる一種の生命共同體であると云ふことである。生命共同體と云ふのは其構成各員が生命體だからの故ではない。利益社會集團の如きはたとへ其構成員が同じく生命的な人間であつても之を生命共同體とは云はない。吾々はかの家族や部族の如く相互に肉親的同胞的本能的な愛着の情によつて個人的利害を超越して結束し一箇の生命體の如くに統一せられた共同體を生命共同體と云ふのである。血緣を同じうすることを最强の紐帶として結束する第一民族形態が生命共同體であることは何人も異論のないところであらう。併乍、第二、第三、第四民族諸形態をも同じく生命體と云ふことができるであらうか。試みに第二、第三の民族形態に屬する實際の民族人を捉へてよく共行動的事實を觀察してみれば、彼等は可成根强き民族我をもつて主體的に民族的行動をとる。彼等民族の利害消長に關しては深甚なる民族感情をたぎらせ鬱勃たる民族意慾を發動せしめる。彼等相互の間には個人的利害を超越した本能的な同胞愛をもつて密接に結束し、彼等同志に於てはアツトホームを感ずる。是等の特色はまさに生命共同體其物の特色なのである。而かも彼等の血緣的構成を見れば必らずしも同一血緣に繋がるものではない。第四の東亞民族の如きものでも程度の差こそあれかくの如き特色を見ることができるのである。かくの如きことは何に由來するであらうか。事實は、地緣を共にし相共に忍び相共に喜んできた歷史的運命を共通に自覺してゐるのであり、その地磐の上に徐々に築かれてきた言語、慣習、生活樣式世界觀、民族精神、民族性格等の精神財文化、財を共にしてゐるのみである。吾々は彼等の結束はこれ等の精神財文化、財の背後に根ざす內面的生命力に基づくものであると解するより外はない。元來生命は決して生物學的血液にのみ擔なはれるものではない。血液を分析してみても生命をつかむことはできない。生物學的生命は生物體全體を培ふ根元力であつて血液にも肉體にも骨にも髮にも爪にも粘液にも漲つてゐる。只其の象—象徵として昔から血液が指されてきたに過ぎない。決して生命の座が血液にあるのでない。生命は寧ろ精神身體分化以前の深いところにあるのである。從つて精神財も文化財も共に生命表現なのである。されば第二、第三、第四のかくの如き特色を有する民族形態にも亦生命共同體と稱する事は何等差支へないのである。而して又第一民族形態も文化的方面から之をみれば地緣と運命の共同の自覺を地磐として成立した文化的生命共同體と稱することも亦何等差支へないことであらう

と思ふ。しかし家族も一種の生命共同體である。然らばこれと民族とは如何なる點に於て區別せらるべきものであらうか。云ふ迄もなく家族は夫婦親子兄弟等の關係に基づいて成立した血緣的な生命共同體であるに對し、民族は多かれ少かれ共通なる地緣、共通なる運命、共通なる文化の自覺に基き、指導者、被指導者、職域分擔等の組織をもつて結束統一せる文化的生命共同體である點に自から其特色を異にするものである。

第二に凡ゆる民族形態に一貫して認められることは、民族は社會的環境的歷史的形成態であると云ふことであらう。民族はそれ自身數多の構成分子よりなる一つの共同社會である此民族社會は民族の主體性が現實となつた姿である。丁度それは人間に於ける身體と同じ意味のものでいはば民族の身體ともいふべきものである。人間に於ては主體的な身體以外に別に人間がないと同じ樣に、此主體的な民族社會以外に別に民族それ自體があるのではない。此民族社會の統一的自我が民族我であり、此社會に漲る感情や意欲が民族感情民族意欲であり此社會の機構が卽ち民族の構造である。然るに全人類の集團の中から或限られたる一團のみが何々族として特色附けられて民族を構成するのは抑々如何なる理由によるであらうか。之は他の民族社會、集團社會があつて之によつて區別されるからである。卽ち民族は他者限定によつて他から特色附けられると同時に又、自己限定によつて自己を他から區別することによつて成立するのである。だから或一團のものが他の民族から差別されればされる程、又其一團のものが自からを他と區別すればする程、そこには確固たる民族が形成されるのである。斯樣に民族は他からの織別に於て他の限定を其中に含むといふ本質をもつのである。

又或特定の民族社會を取圍く環境は其民族に對して存在すると考へられてゐるが實は民族は其環境の中にあつて自らを現實的なものにするのである。いはば環境は民族を形成する場であり、民族に特性を與へる限定力でもある。

民族は又瞬時にして形成されるものでない。長い歷史的經過をとつて育成され、歷史的に傳承されるものによつて共發展方向を規定して行くものである。故に歷史は民族の形成されて行く時間的場として環境同樣の規定力をもつのである。斯樣に民族は社會的環境的歷史的形成態であることをその一つの本質とするのである。それ故夫々の民族の特異性は其民族の歷史的經過、其民族を育ててゐる環境、社會、風土等を見ることによつて把握されるのである。

尙、民族の本質について述ぶべきことは少くないが既に與へられた紙數を遙かに超えてゐるのでそれを他日に期してこれで擱筆することにする。(筆者は建國大學敎授・文學博士)

自體翼賛運動と協和會

稻津宗雄

一

世界史の展開は時に悠遠なるかに見え、時に又急激なるかに見える事があるけれども、其の實體の動きを史的に觀察するならば、實に人間的な視野の狹さを超越して、如何に大規模にして、宏壯なるかに一驚せしめられるものがある。

大東亞戰爭の開始もその直面せる現實に於ては、假令突發的なる觀ありとするも、靜かに思を廻らせば遙かに祖國日本肇國の時に始まり、神功皇后三韓征伐の時代を經て日本民族大陸交涉の絕えざる歷史の展開であり、悠久なる民族發展史の一齣であるに過ぎないであらう。又之を近世史に劃して考察するならば、明治維新に相前後して日本が始めて世界の檜舞臺に地歩を占めてより靜かに貯へ來つた國力の自發的膨脹であり、國際的不正義への敢然たる蹶起と見るべきであらう。ともあれ今や大東亞戰下に於ける日本民族はその限りなき自力に基いて、あらゆる部面に亙つての顯著な變革を自覺し且つ實踐しつゝあるのである。それは一面に於ては民族的思想、民族的性格の變質であり、他面に於ては社會の構成又その動向の明らかな轉移であり、更にその上に政治面竝に經濟面に於ける急激なる飛躍であると云はなければならない。これ卽ち現代を以て日本歷史始つて以來の最大事實とも云ふべき昭和維新の徐々たる又時には急激なる進行過程にあるの

時期となすの所以である。

玆に於て從來殆ど無自覺に運動されて來た一般的國民運動が、これ等の性格と時代的轉換との脚光を浴びて、明確なる自覺運動として把握せらるゝの結果が生じ來つたものと云はなければならない。自體翼賛運動は卽ち此の自覺化せられた國民運動の一斷面と云ふ事が出來る。自體翼賛運動はその個人的立場の面に於ては各個々人の世界觀、人生觀の修正運動であり、その組織體的立場に於ては國民運動の社會機構上に於ける職域奉公的運動である。斯かる意味に於て自體翼賛運動はそれ自體滿洲國に於ては協和會運動を通じ、密接不可分な兩者の聯關が實在する。併しながら此れを現實の實相に就て見るならば、此處に諸々の重要なる問題を伏在し、相寄るが如くにして相離れ、相離るゝが如くにして相寄らんとする相互矛盾の姿が存在する。

二

現在滿洲國に於ける重點產業經營の任に當る事業體……特に特殊會社又は準特殊會社に於ける內部的自體翼賛運動は各々長い歷史を持つて居るものが多い。それは日本に於ける翼賛運動が日支事變長期化の態勢に應じて生れ、第二次世界大戰の勃發に依り臨戰體制より決戰體制へ移行する過程の政治面に現はれた變革であり、社會機構竝民族思想の轉換に對應するものであつたのに比して、滿洲に於けるそれは更に遠い根元を持つて居る事に基因する。

滿洲國に於ては……遠い日露戰爭以來の日本の大陸政策は暫く問はずとするも……昭和六年九月の滿洲事變竝同七年の滿洲建國が特殊の意義を有し、重大なる歷史的變革の出發であつたのである。今や日本は滿洲國及中華民國と緊密なる連繫の下に大東亞共榮圈の中核體として世界史の中に登場しつつある。此の事は英國及米國を中心とする舊體制的世界支配への挑戰であり、世界新秩序建設への序曲であると云はれる。然しながら斯かる事態は決して昨年十二月に突如として幕を落されたものでなくて、歷史の步みは旣に十年前に踏み出されて居たものと見なければならない。否寧ろ之を遙かに遡れば、日露戰爭に依る日本の大陸への第一步にまで、或は又嘉永六年米國ペルリ提督の日本訪問に因る日本の世界史への近代的接觸にまで遡らなければならないかも知れない。然し此處には最も現實的な滿洲事變卽ち十年以前の事態に限つて考察する事としよう。滿洲事變と云ふものは決して當時に於て極めて狹く解されたが如く、單に一東北政權としての張

軍閥に對する否定行動としての意義に止まつたのではなく、其の遙かに以前から續けられた歷史的日支關係に、英國及米國の干渉をも意に介せず、決然として解決の斷を實行したものとして取り上げられなければならない。卽ち國際聯盟を背景とした英國の恫喝をも、二十一箇條問題を名目とした米國の壓迫をも一顧だにせず、斷々乎として日本の東洋に於ける地位の確保を維持し續けんとした日本民族總意の現れとして考へられねばならないのである。

斯るが故に滿洲事變はやがて起つた昭和十二年の支那事變の遠因であつたし、又支那事變が決して一局地的問題として處理し得られるものでなく、其の背後にある英米露等の歐米諸列强に對する正面からの抗議であつた意味に於て、其の後に於ける第二次世界大戰の遠因ですらもあつたのである。勿論日本は此の十年間に數々の外交的態度を採つて來た。飽くまでも日本は世界の平和を熱愛するが故に、日本の止むに止まれぬ自體膨脹の趨勢を是認する傾向のある限り、舊體制的世界秩序を一擧に粉碎する決意を一方的に固めはしなかつたのである。然しながら日獨伊三國同盟が締結せらるゝに至つた時、も早日本の歷史的前途は一應不動のものに固められ、英米的奮勢力の東亞よりの後退竝世界に於ける英米的支配體制の潰滅が日本としての決定的要求とせらるゝに至つたのである。既に現在の日本は東洋に於ける英米的支配勢力を大東亞戰爭の緒戰に於て潰滅し、英米蘭に代つて大東亞の建設者とならんとしつゝある。然して歐洲に於ける獨伊兩國の樞軸同盟と相提携して世界新秩序確立の明日に向つて進軍しつゝある。假令英米の老大國との抗爭が如何に長期化するにせよ、既に方向は確定して微塵も搖ぐべからざるものになつて來て居る。

滿洲に於ける政治も經濟も社會も、此う云ふ大勢の中に造り上げられて來て居るのであり、其の中に於ける自體翼贊運動も必然的に同樣な歷史的性格を造り上げて居るのである。

三

滿洲に於ける經濟及政治は斯かる歷史的背景を以て建國當初からの國家計畫に依り統制された出發を爲したのである。特にその中に於て特異の發達を爲して來た特殊會社制度の成熟と共に、重點産業を擔當する事業體の內部層に於ては、舊日本的な事業經營思想と異つた事業意識が當初より存在し、成生して來たものである。茲に於ては事業經營其のものが決して恣意的な自由企業としての思想ではなく、直接日本の大

陸政策竝之に對應する滿洲建國精神につながるものであつた。殊に第一次五箇年計畫の策定と其の實踐の過程に於て、滿洲國の國防國家的性質が明確にされ且つ漸次之が濃化されるに連れて、重點産業の使命は常に國家目的への卽應であり、世界情勢への拮抗である事實が痛感せられるやうになつて來た。斯かる事業體の中に於ては、過去の自由企業體內部に於けるが如き、從業者の孤立的、分派的な考へ方は許される筈がないのである。

更に又滿洲に於ける産業經營體の日本に於けるそれと最も著しく相違する點として、其の事業內部に於て常に民族問題を當初より包含すると云ふ事實がある。茲に於ては他民族との共同活動を通して常に日本民族の指導性が認識され、實踐されて來たのである。大東亞共榮圈的諸問題は其の規模の小ささのまゝ既に其の濫觴を各事業體內部に包藏して來て居たのである。滿洲に於ける自體翼贊運動は斯かる思想の中から既に生れ來たつて居たものである。既に此の事は新時代的世界觀の萌芽であつたとも云ふ事を得る。滿洲國に於ける重要産業體の中に歷史的に發達した社員會その他の名稱を以てする內部的諸運動はその發生の過程に應じて種々の態容を示しては居るが、滿洲建國と其の進展に伴つて漸次質的變化を齎し、滿洲國の持つ新世界史的役割に對應する外延的性格を具備するに至つて居るのである。

統制經濟又は計畫經濟と云はれる經濟政策の形體には世界各國の例に於ても二樣のものがある。嘗て康德四年に重要産業統制法が制定公布された時、當時の實業部當局者は公開の席上で次の如き說明をせられた事がある。

「世界の各國を通觀する時に統制經濟に二つの傾向がある。卽ち一は高度なる經濟竝文化の發達を見たる國に於て、資本主義經濟高度化の結果として獨占資本的傾向の增大に伴ひ、それ自體の基本理念であつた自由思想の行き詰りを生ずるに至つて其の自己矛盾の止揚として生れた統制化的傾向と、其の二は主として植民地的國家に於て、文化度の低く經濟發達の遲れたる地域に急激に先進諸國に比肩する經濟的發達段階を招來せんが爲、經濟の自然的發達を待つの餘裕を有せず、當初より計畫的に全經濟部門の高度化を期する意味に於ける統制化的傾向との二者である。滿洲に於ける統制經濟は實にその後者に類するものである。」と云ふのが其の說明の要旨であつた。正に斯くの如く、當時以前に於ける滿洲國は紛れもなく重農的狀態であり、農業國としての實體を示して居たものである。今日に於て見るが如き、諸種の重工業、鑛業、

輕工業の發達は大正年間より關東州及び舊滿鐵附屬地に於て漸次其の形態を整へつゝあつたとは云へ、急激なる發達を遂げたのは實に滿洲建國後の十箇年にあると云はなければならない。試みに産業發達の經過を統計的に示す事を得ば明かなのであるが、建國前に比し鑛礦業、重工業、機械工業、電氣事業等に於ては、少くとも二倍乃至三倍以上の飛躍的發展が示されて居るのである。殊に第一次五箇年計畫は鑛工業、農業、交通通信等の諸部門に亙りて樹立されたのであるが、所謂修正五箇年計畫に於て見るが如く、特に鑛工業部門に最大の重點が置かれたのである。其の爲に建國前に於ては殆ど手工業的段階に過ぎなかつたとも云はれる國內の諸産業は遽かに近代産業的體容を整へ、從來殆ど其の萌芽をも有しなかつた近代科學に基く諸産業が目覺しくも各地に勃興するに至つて居るのである。然も此の事は決して歴史の自然的發達に依るものではなく、强度の國家的計畫に基いて實現せられたものであり、滿洲國第一次産業五箇年計畫の功績は決して過小評價せらるべきものではないのである。

斯かる經濟の發達過程に於て特に重要なる役割を演じて來た特殊會社が、會社の立場に於ても亦その內部に於ける從業者の思想に於ても、常に國家目的への即應を第一義とし來たつた事は當然である。特殊會社は概して獨占事業が多い爲に、獨占的立場より生ずる經營の安易さに馴れて、積極的進取性の缺乏を指摘される事が多い樣であるが、其の功績が決して無視せらるべきでない事は斯くの如き內部的原因が最も重要なる意義を有して居るものと云はなければならない。斯かる思想、斯かる立場の綜合化せられ、全體的に纒められた運動として組織づけられたものが、即ち各事業體に於ける自體翼贊運動であると云はなければならない。

四

世界史を今日の段階に迄持ち來つたもの、即ち十八世紀に於て完成せられた「アングロサクソン」の世界制霸を一朝にして潰滅し、日獨伊樞軸を中心とする同盟國家群を主體として、世界支配の再調整を實現せんとしつゝある現狀を由來した原動力と云ふものは、東半球に於ては日本民族の世界史的覺醒と、其處から出て來る其の民族的性格の轉換に中心を置いて考へねばならない。此の民族的自己擴大がアジア大陸に於て一つの大きなる波紋を生じた直接的なものであつたのであるが、更に適々西半球に於て歐洲竝アフリカ大陸を舞臺とする獨伊兩國を中心とした世界支配の再調整的動向を生じ來

たつた事とが、相牽連せる事實を見逃す事は出來ない。

最近特に地政治學的な見方として、地球を横に支配する事は經濟地理的に見て不合理である、宜しく縱に綜合支配すべきものであると云ふ事を言つて居る。寒帶から溫帶、亞熱帶竝熱帶の各地域圈に於て生産される物資は各々獨自の價値を有する。斯かる物資が彼此相通ぜらるゝ時に始めて人類の十分な經濟活動が完成せられるのであつて、同一地域圈に於ける物資のみを以てしては人類の經濟生活は十分でないとなすものの如くである。成程棉花とかゴムとか石油とか云ふものは概して南方の産である。石炭とか鐵とか其の他の鑛産資源とかは概して北方の産であるが如くである。又人類の歴史を見ても概して文化は古代より南に於て成熟して消長して居るやうであり、國家は北方に起つて南方に及んで居るやうである。然るに過去一世紀に於ける英米的世界支配は此の北方對南方の聯關を全地球面上に於て切斷して來て居た。此の支配勢力に依つて地球を帶狀に連絡して、更に又北方から南方にまで必要に依り其の支配力を及ぼして居た。斯かる支配形態に獨占せられて世界經濟の均衡は著しく破られて居た。此の不均衡を打破して東洋と西洋とに於て各々北方對南方の連鎖を造り上げんとするのが、所謂世界新秩序に依る新平衡運動であるかに思はれる。慥かに唯物的に見た經濟觀は斯かる傾向を是認せしめるであらう。東洋に於ける日本の立場と西洋に於ける獨伊の立場とには斯う云ふ點に於て近似性があり、所謂共榮圈經濟の樹立と云ふ相類似せる立場あるが故に、兩者の接近があるやうに考へられるであらう。

然し我々の持つ東洋的理想は決して此の域に止まつて居ない。我々は寧ろ世界正義の確立に精神的熱情を感じて居る。民族の平等は第一次世界大戰後の平和會議に於ても日本の世界に對する要求であつた。我々は現實に痛ましくも虐げられた東洋的諸民族の姿を見せつけられて居る。西洋的諸民族の唯物的世界觀の支配の下に、功利主義的な支配形態の下に、自主性を失はせられた各民族の姿を我々と共通な東洋民族全べての姿として見せつけられて居る。それは各民族性の尊嚴を肯定する立場の上にはなく、只功利的自己滿足の手段として遇するに過ぎない西洋的諸民族の民族政策である。此の民族的不正義の潰滅是正が正しく我々の東洋的理想の一である事は間違ひない。我々の採る世界の道義的統一なる理想は唯物的世界觀に立脚する事を排擊して、眞の民族興隆を期する精神的立場にある。日本の肇國以來の八紘一宇の理想は決して西洋的支配形態の如き獨善的一方的な態度ではない。各民

族をして其の居る處に居らしめ、然も日本の理想とする道義的統一の形態を持ち來たさんとするものであつて、飽く迄も日本の力、日本の德を中心とし、此處に歸一せしめ、此れに光被せしめんとするものであるには違ひないが、然も其の事を基礎とする全體的共存であり、全體的共榮である。舊世紀的觀念としての資本主義經濟の植民地政策と其の精神に於て顯著な相違を持つて居る。それは慥かに霸道的であるに對し、此れは紛れもなく王道的立場である。

王道的立場と云ふ事に就ては識者の中に於てもかなり簡單に取扱ふ人々がある。柳田氏の「道德的國家の理念」(改造五月號)の中に於ても同氏は

「道德的國家と云へば人は或は直ちに支那の王道國家のやうなものを聯想するかも知れないが、王道國家と云ふが如きものは云はゞ主權者の單なる心構へとしての德治主義に過ぎず、此の様な非歷史的理念に依つて今日の如き世界史的關聯を持つた國家內外の諸問題を解決する事が不可能なものである事は多言を俟つまでもなく明らかな事であらう。」

と說いて居る。同氏の所論の本旨を理解して居ないのかも知れないが、國家と個人、國家と民族の本質に徹して考へて見る時、王道的立場と云ふものを非歷史的理念とは考へたくない。國家の立場と云ふものが個人の立場と云ふものと本質的に異つたものではなく、兩者が有機的關係にあると云ふよりも、寧ろ兩者は殆ど別異のものではなく具體的現實の中に溶け込んだものであり、國家と雖も單に爲政者の心構へに依り王道的にもなり霸道的にもなると云ふ平面的な關係にあるものではなく、もつと〳〵相卽的な關係にある事を思へば、國家の道義性、國家の王道性と云ふ事はこれからの歷史の上に於ける決定的な態度の問題と考へなければならないと思ふ。日本のこれからの大陸政策は決して日本の國家的な自我意識に基く觀念で貫かれてはならないのであつて、國家に於て信義の重要なる事は個人の立場に於けると何等異る所はない。

西洋的思想に於ては國家の生活は個人の生活とは全然別異のものであるかに考へて居るやうである。個人生活に於ける信義とか道義とか云ふものは國家の生活に於けるそれとは全然範疇を異にして居て、此處に於ては完全に優勝劣敗の世界であり、力が解決して行く世界である。信義とか道義とか云ふものは單なる國際間の外交辭令に過ぎないと考へるのが西洋的國家思想であるかに考へられる。併し國家も亦單なる力のみの解決して行く生活ではない。此處に顯著に西洋的思想と東洋的思想との差異がある。

日本と云ふ國は嘗て長谷川如是閑氏が日本的文化に就て述べられて居る如く、本來君子國であつた。言揚げをせざる國であつた。此處に於ては何等の道義的規範とか倫理的制約とかを要せずして、現實そのものが道義的であり倫理的であつた。それが適々德川三百年の鎖國時代を經て明治の開化時代に入つた時に、滔々として急激な西洋的文明の流入に依つて純日本的なものの運行を暫く停止し、西洋的なものの吸收に忙がしかつたものと考へる。國家に對する思想自體が西洋物質文明の體系的思想の中に影響せしめられて終つたが如くである。此れに對して古代に復つて八紘一宇と云ふ純日本的な理念が現時代的なものとして登場して來る事となつたのである。日本の民族性を評して或者は島國根性的と云ふ。慥かに無自覺な敎養の與へられない日本の人々は成り行きに任せられた自然的な小さな枠の中でしか物を考へないが故に、獨我的になり獨善の弊に落ちるものがあるやうである。併し全體として國家は日露戰爭の時代から無意識的に道義的であり王道的であつた。今や全東亞圈を相手とした日本民族個々人の氣持ちの中には、もつと〳〵氣宇の廣大な時代思潮が息吹いて居る。此れは日本民族の本質的なものの復活である。

斯かる意味に於て日本民族の民族性の變貌と云ふものが觀取出來るのである。大東亞共榮圈に臨まんとする日本民族の態度と云ふものは然く毅然としたものであり、此の傾向の芽生えが實は滿洲事變から支那事變を經て世界戰爭にまで一系の發展過程を辿らしめたものであり、霸道的世界に對する王道的立場の立ち上りと云はねばならないであらう。此處に新たなる日本民族政策があるべきであり、斯かる理念に燃ゆる我々の大陸での日常生活の實踐が存在するわけである。卽ち我々の自體翼賛運動は各事業體の生成發展の爲の斯くの如き內部的實踐運動であらねばならないのである。民族的接觸に於て何等の理想もなく、只單純なる民族的感情に任せられて、民族的理性の昂揚を圖る事なくして今後何の民族政策も生れ得る筈がないし、滿洲に於ける十年乃至四十年の民族的經驗の參考をも供し得ない事は明らかである。

五

日本理論經濟學の過去に於ける體系はやはり西洋經濟學の亞流として、先づ個人の自由生活に於ける個々的慾望の充足から出發した。併し今起りつゝある新日本理論經濟學は此處に於ける個人と云ふ問題に再檢討を加へつゝある。現實の地球上に完全な純粹な個人と云ふものがあり得るか否か。個人

は其の出生の時に於て既に純粋な個人ではなかつた。自らの意識とすると否とに不拘、家庭の人であり國家の人であつた。即ち經濟と云ふものは決して個人的經濟を對象とするものではなく、やはり經世濟民的であり、政治經濟學的であるものである。

英國經濟學殊にアダムスミスに依つて體系づけられた經濟學は個人の生活の集合が自然的に國家の生活となり、個人生活の自由は「目に見えざる手」に依り支配せられて全體としての國家の生活に調整せられる事を説いた。個人から出發して國家に結びつき、此の國家を中心として世界との連鎖の上に立つた。其處で世界は此の國家……即ちアダムスミスに住むアングロサクソンの國家……の必要の爲にのみ存在し、此の國家の都合の爲にのみ利用せられた。斯くの如きものが所謂英國的自由主義經濟であり其の世界政策であつた。此の事は單純に我々に依つて模倣せらるべきものではない。斯かる英國的立場に於て展開せられて來た自由通商思想から封鎖經濟思想と云ふ一連の外形的事實は、相當に我々を眩惑せしめる外見を備へて居た。併し此處に解決せられなかつた獨善的根本思想が今次聖戰に於て隨處に其の破綻を示して居る。馬來戰線に於ける支配下他民族の背反、更に又ビルマ戰線然り、ヒリツピン亦然りである。

此處に我々の日本民族としての自覺と反省がある。覇道的なものは僅かにその力の續く限りだけで地に落ちる。我々の民族の世界政策はもつと悠久なものであらねばならない。其の爲には其の民族の中の個人々々である、我々の思想はかなり再檢討し再修正しなければならないものがあるやうである。我々のこれから與へられる教育にしても、それは決して單純なる個性尊重的なものではあるまい。我々の存在そのものの眞の姿の自覺、個體と全體との相關の意識の上に立つた我々の思想、我々の立場の把握であらねばならないのである。此處に日本の社會改造思想の出發點がある。日本に於ける大政翼賛會とか産業報國隊とかの運動の理論的前提があり、既成政黨的なものの解消した緣由が存在する。又滿洲に於ける協和會と云ふものの新時代的に再檢討せられた新しき行き方がある。斯かる意味を持つ國民運動の一聯の關係の中に、自體翼賛運動も夫々の展開を爲しつゞけつゝある。

特に注意しなければならないのは滿洲國に於ては行政は存在するが政治は概して貧困であると云ふ事である。協和會と云ふものは本來其の任務と役割とを持つものであらうが、現實の協和會の運動は決してさう云ふ動きを充分に果しては居

ない。政治と云ものは未だ各國民自體の中に小さく止まつて居り、又各事業體そのものの中に各々政治されて居るのである。政治は行政機關と民衆との間に厳然としては存在して居らず、各事業體其のものが其の時々に於て僅かに政治的な面を有して居るのみである。其處に自體翼賛運動の政治性がある。特殊會社の從業者は單なる被使傭人として事業體の意思に隷屬するものではなく、事業體の內部的要素として事業體を造り上げて居るものであるが故に悠久の生命を持つものである。此の生命の動きが事業體の政治性を生み出だすのである。此の事は滿洲國の政治の上で組織的に解決されねばならない問題である。斯くの如き對策は暫く問はずとするも現社會機構中に於ける特殊會社なる事業體の自體實踐は明かに一つの役割を持つものである。自體翼賛運動は斯くの如くその歴史的性質に於て日本を中心とする日滿兩國國家の運命を、或は又國家的歩みを體現せるものの一であり、新しき世界觀の芽生えに伴ふ新しき時代的役割を擔當するものであり、將來に對して民族的實踐を續けるものである。今後の日本の大陸政策に於ては斯くの如き職域的組織團體の現實の姿を價値的に把握して之を全體の形に組織づけて行くべきものと考へる。此れが我々の自體翼賛運動に對する外延的性格としての見方である。

六

自體翼賛運動は其の外延的性格に於ては世界觀の變貌と社會改造の動態とに對應する職域の轉換運動であるが、此の事は同時に事業體構成員たる各個體の內面的自己改造の運動である。我々は新日本的理論經濟學の立場が純粋個人の立場より全體としての個人或は全體の中の個人の再檢討にある事を感じるのであるが、同時に翼賛運動の內面的性格に於ては構成員たるものの自己の立場の再發見にある事を感じるものである。我々は我々の生誕に際して決して純粋なる個人であり得ないものであり、常に家庭、社會、國家と云ふ我々の環境と共にある事を自覺するのであるが、此れと同じやうに各事業體の中に於ても、先づ我々があるのではなくて先づ事業體自身があり、かるが故に當該事業體構成者としての我々が存在し得る事を自覺する。

由來我々の舊時代的認識に於ては概して知性偏重的であり、主知的であつたが故に、よく物事を分析的に、解剖的に追求する事に優れた傾向を持つ。そして肝腎な事には分析した後に之を再び綜合する事に手抜りを爲すことが多い。我々の

日常生活の反省に於ても、公生活と私生活とを概念として明らかに峻別して、そして兩者は各々範疇を異にすると云ふ樣に考へ勝ちであるが、此の兩者が具體的現實に於ては一箇の統一された現實である事に氣附かない傾きがある。殊に甚しくなると公生活と私生活とを時間的に分割して、兩者を使ひ分ける思想をも持ち易い。併しながらもと〳〵時間と云ふものは絶對的なものではなく、實は一の思辨の方法であるに過ぎない。時間と空間とは共に生活の中に同時に溶け込んで居るものであつて、各々範疇を異にするものではあるが、現實に於ては兩者は相働き合つて同存するものである筈である。其の意味で生活を區切つた見方はその見方の目的に從つて一應成り立つものであるが、公生活と私生活とを時間的に區分する見方は存立し得ない。公生活と私生活とは相繋つたものであると云ふより、公生活と私生活とは同時に同一の生活であらねばならない。

斯う云ふ考へ方で事業體と其の構成員との關係を捉へて見ると、事業體の統一意思と云ふものと各構成員の箇々の思想乃至意思とは全然別箇のものでありながら、又半面に於ては兩者の內何の一を除いても他の一は存立し得ない關係にある事を知る。即ち事業體の構成員の個體としての生活は常に事業體そのものの中に於て、寧ろ事業體そのものと共にしかあり得ないものであり、只此れに對する自覺が各個體に存するか否かの問題となる。王陽明哲學に所謂「致良知」と云ふ「良知」、古代儒教に所謂「天命是謂性」と云ふ「性」、此等のものはすべて云はゞ超主觀的なものであり、善惡以前のものである。此の超主觀的なものが主觀の中に於ても、素直に且つ率直に顯現し得るか否かと云ふ事は、少くとも自覺と反省に基くか或は此等を要せずして存在そのものが完成して居るかに依る。要するに自體翼賛運動は全體の中に於ける個體の自覺運動である。自己と云ふものが主體的であり、第一義的なものであるとなす生活に於ては何うしても全體への協力は生れ得ない。單に各個體が集合して其處に全體が存すると云ふ風に考へる事は思ひの至らざるものである。全體になり得べき個體にして始めて相集つて全體になり得るものであらねばならない。即ち全體を生かす生活であるか、個體を生かす生活であるかの別れ目が自體翼賛運動の成立の分岐點である。自體翼賛運動は或は各人の個體錬成の方法で行はれる。或は集團訓練の方法で行はれ、或は又體育奬勵的なもの、共同せる娛樂、集會、研鑽、其の他色々の具體的な方法で行はれる。だが此等の運動の到達すべき目標は體育に集中する事に依つ

て、娛樂を樂しむ事に依つて、其の儘統一意思に歸一することにある。出來るならばそれを各個人の自覺の上に立つて實現する事である。翼賛運動の內面的な本質は何うしても此の邊りに存するものと考へねばならない。

多くの翼賛運動體には靑年運動又は自興運動と云ふ形が存在する。そして各々著しく目立つた運動を展開して居る。だが其の本質はそれ等の運動の姿に現はれて居るのだが、その本質が此處であると云ふ明らかな確認と理論とは定立せられて居ないかに考へる。此れは各々其の外形を取り上げて對象とすることに起因する點が多いやうである。獨逸に於ける全體主義的運動が相當華々しく發達して來て居る樣であるが、識者の批判を聞くと未だ本質的には成熟せしめられて居ないらしいのであるが、例へばシュパンの「全體主義の原理」に於ても未だ其處までの解決は與へられて居ない樣である。只言揚げを要せぬ純日本的な民族的性格が民族の實踐を通して、默々裏に之を解決して居るが如く、翼賛運動に於ても此の醇化せられた性格的なものが自覺せられる事が全べての運動の結論であるとしか考へられない。此の邊りに協和會運動と所謂自體翼賛運動とが未だ全面的な合體を爲し遂げ得られない根本的なものがありはしないであらうか。

よく職域奉公と云ふ事が云はれるのであるが此處にも西洋的なものと東洋的なものとが歷史的な傾向として明らかな對立を持つ。民族的な性格に就いて橘樸氏は其の「職域奉公論」で「人間の歷史を遡ると吾人は其處に普遍的な狀態として氏族なる小さな血緣集團の對立を見出すであらう。西洋の歷史は何處にでも此の對立狀態を押し進めつゝ氏族から部族、民族、階級へと其の集團生活を擴大して來た過程の記錄である。東洋の歷史は些か之と歸趨を異にする樣に見える。即ち西洋的過程の直線であつたのに對し東洋のそれは對立から協和へ、協和から融合へと曲線を描いて進んで來た。」事を指摘して居られる。直線的に單純因果律的に考へる事しか知らされて居ない人々に於ては、職域奉公と云ふものも奥行きのない平面的なものとしてしか理解されない。社會の傾向としても過去の理論に於ては、原始形態の時代に共同社會的であつたものが漸次利益社會的なものに轉化して來た事を指摘するのであるが、我々の見方では既に利益社會的なものが行き詰つて、再び共同社會的なものにより高度な形態で轉換しつゝある事が論ぜられる。此の事は事業體と云ふ一箇の社會形態に於ても當てはまるものと考へられる。我々は翼賛運動に於て歸一した目標に向つて事業體と云ふ職域の完全なる創出に努

力しつゝあるものである。翼賛運動の內部的實踐に於ては時代的認識とか觀念形態とかはさう大した本質的な問題ではない。翼賛運動は斯うした性格に基いて自ら事業體の目標へ向つて實踐に依り仕上げをして行く運動と云はねばならない。

七

自體翼賛運動は滿洲國內に於ける既存の形に於て各々其の歷史に基く發達過程を持つては居るが、其の本質に於ては所謂國民組織の一部である。滿洲に於ける社會經濟の發達の特殊な地位に裏附けられて、各々獨自の動きを爲して居るやうであるが、今日の時代に於ては既に澎湃として起りつゝある民族運動の一齣に轉化しつゝある。斯かる意味に於ては協和會と其の本質に軌を一にするものと云ふべきである。併しながら協和會も既に十年の歷史を持つが、其の間運動の重點は數次の轉變を爲して來て居る。そしてこれからも未だ〱進み行くものでありそれだけに又幾多の變化を見せて行くであらう。協和會の綱領を見、之を各職域の所謂分會運動に移して見るならば、之卽ち我々の自體翼賛運動の目標其のものであると云ふ事が出來る。又其の工作の對象とする精神工作、厚生工作、宣德達情の三者に就て見るも、少くとも前二者に關する限り全然自體翼賛運動と別異のものではない。事實我々の自體翼賛運動と我々の協和會分會運動とは眞に表裏一體、其の間毫厚の差別のないのが實相である。

此處にやゝ問題となるのは宣德達情工作である。もと〱協和會運動は建國當初に於ては特に民族協和と宣德達情とに重點を置いたやうである。そしてその目標は主として地域工作或は地方行政の裏附けとしての宣德達情であつたやうである。今日に於てもやはり鄰組制度を通じての全面的國民組織の强化確立に力を注いで居るやうである。此の事は最近までの全國聯合協議會の傾向に於ても明らかである。唯問題として殘されて居るのは地域分會組織に對する職能分會組織の取り上げ方である。

國家の構成は民族と地域との外に職能組織が存するものであり、國家の興隆と云ふものが一に經濟工作に係つて居るものである以上、其の面に於ける協和會の運動も相當重點的に考へねばなるまい。今や國防國家として步一步其の基礎を固め來たつた今日に於て、經濟人の組織化を取り上ぐべきは當面の問題となつて居ると思はれる。今日に於て職能組織と云ふものは各地方本部に於ける分會運動として一應の形態は認められて居るが職能組織の全體的結成が未だ出來上つて居ない。他面に於ては科學技術翼賛體制が協和會中央本部の機構として生れ出て居る今日、協和會の運動の面も既にある多樣性と幅員とを有するに至つて居る。今や次の問題は滿洲國經濟の働きに特殊な役割を持つて居る各特殊會社の自體翼賛運動の組織化であらねばなるまい。各地方本部に於て取り上げられて居る職能分會の中央本部的取り上げ方であらう。その結果として或は全國聯合協議會の性質又はその形態に若干の變更が必要となるやうに考へられる。又其處から出て來る一つの新しき政治性の吟味が必要となつて來るであらう。併し此の問題を片附けなければ協和會は未だその使命の全部を果すこととはならないのではあるまいか。此の問題の解決の與へられる限り自體翼賛運動と協和會運動とは地方的にも中央的にも極めて相接近し、其の本質に於て相似である如く、其の形態に於ても相似性を增すものである。

だが併しながら此の問題は其の言の容易なる如く、決して其の實踐は然く容易なるものではない。協和會運動の面に於ても相當考慮すべき問題が存するであらう如く、自體翼賛運動の面に於ても未だ〱殘されたる問題は存するものと思はれる。只此處で明らかに云ひ得る事は兩者は決して全然別物ではないと云ふ事である。其の歷史に於て其の運動の過程に於て軌道を異にして來たと云ふに過ぎないものであつて、具體的には漸次相接近し相合體して行くべき筈のものであり、既にその事は地方的運動に於ては、一部解決が實現せられて居るものであると思ふのである。

（筆者は滿洲電業會社人事課長）

新東亞に於ける映畫文化建設の基礎的問題

高原富次郎

日本に於ける映畫界の新體制も、昨年一年色々な難問題にぶつかりながら、今年に入つてやうやく、基礎が確立され、夫々の部門に於て、新しく仕事が始められてゐる様子である。

日本國内の様なせまい中で、外部から見たならば、ほんの小さな映畫界の統制問題が何故こんなに手間がかゝるのか不思議な様に思はれるかもしれないが、こゝ數年來、映畫の利用價値と云ふものが高まり、純粹な興業映畫のみに限らず、宣傳、學術研究、教育、記錄用等あらゆる社會の部門にみとめられ、それが映畫業者の不統制な濫出をまねき、夫々の小さな業者が自分々々の分野を持つて、業務をつゞけて獨立してゐた。そして、お互ひの間にたゞ商賣敵としての意識だけしかなく、何の國策的な、社會的意味も考へてゐなかつた。それが、いざかんじんの原料となるフイルムの制限問題が起つてくるまで放任されてしまつてゐたと云ふことが大きな原因であつたと考へられる。

劇映畫の數だけでも日本で製作される數は世界の第三位とか二位とかに位すると、映畫研究家はよろこんでいいのか、かなしんでいゝのかわからない氣持で、二、三年前まで筆に上せてゐたのであつたが、さらに短篇の常設館に上映されない映畫を加へたならばさらに莫大な數に上つたであらう。

其の頃までは、色々な目的で映畫製作を企畫する場合に、官廳にしろ、大會社にしろ、何等確然とした計畫を立てるわけでなく、甚だしいのは、年度末に豫算が餘つたと云ふので、それでは一つ映畫でも作つてとあわてゝお出入りの映畫業者を呼びつけて、年度末の會計の締切りまでに映畫を一本作れと命じる様な始末であつた。その證據に、當時の東京にあつた群小映畫製作所は、年度末近くなると映畫製作の注文が一時に殺到して大多忙を極め、平常倉庫の奥にしまひ込まれてゐたおんぼろキヤメラや、臨時雇ひの監督や撮影技師が動員されると云ふ有様であつた。

そして製作された映畫は、いゝはずがない。常設館の劇映畫の短い場合に、一寸時間つぶしにそへ物として上映する價値さへないものが多く、中には、製作業者と注文主とが受渡しの試寫をしたまゝ倉庫の奥深くしまひ込まれて、つひぞ見物の前に出たことのないものすら多かつた。

技術者の質の良い、機械設備のそろつた大會社は、夫々、劇映畫の製作に追はれて、とても短篇文化映畫等をつくる餘裕はなかつた。劇映畫は製作中に已に封切上映の日まで定まつてをり、競爭會社とのかけ引きもいそがしく、劇映畫の上映館での大當りをとつた時のぼろいもうけを考へたならば、短篇映畫を注文を受けて、もうけのきまつた仕事を氣長にする氣持などは當時のプロデユーサーに起るはずがない。ただこの短篇映畫の注文映畫を專門にする可成り大きな組織をもつて始めて、着々と利益を上げ、政府が文化映畫を强制的に各大會社に製作させ始め、文化映畫の呼び聲がやかましくなつてから、興業的にも文化映畫を上映して可成り名を擧げた會社も一つ二つは數へられたが、それらはほんとに、企業的に文化短篇映畫をとり上げ質的にも向上させた一面の功績はみとめられるであらう。

純粹に興業的にだけ映畫が考へられた時代、即ち、觀客が見てよろこぶ映畫を作りさへすればいゝ、お客さんがくればいゝと考へられた一昔前の映畫に對する考へ方は、映畫の發達の一段階として考へて見たならば當時としては肯定し得るもので、これを云ひ更へて見るならば、觀客に見せると云ふことを考へない映畫と云ふものはあり得ないと云ふことである。映畫を製作することゝそれを上映することゝをあらゆる場合に一つにして考へて見ることである。日本の映畫界の新體制も勿論こゝに重要なポイントが置いてあることは、各製作會社の作品が一つの配給機關によつて各上映機關に配給さ

れる組織になつてゐることによつてもうかがい得られる。

所で映畫の製作から上映までの機構は色々複雜であつて、それが一つの意志をもつて貫かれると云ふことは、新しい認識を持つた從務員の徹底的な努力によらねば出來ないことである。

製作する側が如何に努力して、新しい國家目的に合致したいゝ作品を出したとしても、先づ、それに觀客の關心を吸引すべき宣傳がそれにともなはず、さらに、常設館側が營利主義の立場からその映畫の上映を拒むとか、拒まないまでも内地でも實行されてゐる强制上映等によつて拒ばみ得ないまでも、正當な上映をなさない樣なことがあつたりすれば、これは一部門の努力も亦水の泡となつてしまふものである。ここで一番重要な問題は製作と上映部門の問題でなければならない。

殊に重要なことは、映畫を以つてする新東亞に於ける文化工作上から、日本を中心とする映畫工作が他民族を對象としなければならない場合が多い上から、問題はさらに、擴大されるわけである。

この場合に先づ考へられることは、中央に於ける卽ち東京に於ける映畫の中樞機關と、各地方に於けるその地區を受持つ映畫機關との間の密接なる連絡の必要である。

大東亞戰爭以前に於ては、已に滿洲に於ては滿映が創立され、それが滿洲に於ては、いち早く滿洲國に於ける國策機關として國内に於ける新體制を確立して活躍時期に入つてゐたが、日本の映畫界が混沌たる情勢の下にあつては、有形無形の惡影響を受けざるを得ないわけであつた。さらに又、上海の敵性租界の中に於て製作される所謂上海映畫と云はれる支那映畫は、十數年來滿洲の國民大衆に大きな勢力を持つてゐた。この樣な周圍の情勢下にあつては、滿映が如何に至難の道を、一種の先覺者としての如何に大きな惱みを持たねばならなかつたかは、この一面に於ても頷づき得ることであらう。

だが大東亞戰爭勃發と同時に、上海映畫の製作所も亦擧げて、中國國民政府の國策機關として發足した中華映畫會社の統制の下に、甦生することゝなつた。さらに北京に於ては華北電影公司が已に以前から和平地區に於ける映畫工作を進めてゐる。南方に於ても、占領地文化工作の重要な一部門として、各地に東京から映畫人が派遣せられて活躍中であるとニュースはつたへてゐる。

こゝに一刻も早からんことを期待しなければならないことは、中央に於ける映畫組織の確立と各地方機關との關係の明

―（新東亞に於ける映畫文化建設の基礎的問題）―

朗な不可分關係の樹立である。

そして、こゝから、過去に於て、アメリカ映畫の植民地化してゐた東亞の映畫界が眞に獨自の、健全な東亞文化の一部門として發展して行かなければならない。

過去に於て、日本映畫が他の民族に歡迎されたことがなかつたと云ふことは、製作する側に於てそのための考慮がなされなかつた原因もあり、上映部門に於ても色々な原因はあるであらうが、現在に於ては最早、今までの實蹟から躊躇すべき時ではない。それらの原因を深く考察して、これを除却し、さし當り、文化彈として、東亞全地域の民衆の面前に示さなくてはならない。殊に、新しく占領せられた諸地域は、未だその地方の映畫工作を受持つべき機關が設立されてゐないであらうし、急激に實現されることは映畫の場合、その綜合的な性質から考へて至難なことである。そしてその地域こそ最も敵性映畫が映畫界のほとんどすべてであつたところに違ひないのである。

日本映畫が他民族に親しまれない原因として考へられる所は大體次の諸原因があると思はれる。

一、言語の問題、英語やフランス、ドイツ語に比して、日本語はそれほどに用ひられてゐなかつた。

二、風俗習慣の難解。

三、日本人の表情及び動作の映畫的でないこと、したがつて、劇映畫製作に於ては、良い映畫をつくることがこの點から難しかつた。

以上が製作上の根本に横はるハンディキャップと考へられた諸點であるが、第一の點については、表現技巧を特に留意し、研究すればある程度、おぎなふことが出來ると考へる。これは、アメリカ映畫が英語を解し得ない人達にまで歡迎された當時を考へれば、殊に映畫の持つ世界性を强張し得る技巧によれば、根本的な原因であるとは考へ得ない。第二の點は、第一の點と共に、日本が他の民族に對して、あらゆる點に於て、それほど關心を持たれなかつた。したがつて、その映畫に親しむ豫備知識であるこれらの點が不可解に終つてゐたことは考へられる。これは、過去に於て、日本の文化的對外宣傳が餘りに貧弱であつた點を遺憾としなければならないのである。

映畫は前にも述べた樣に、他の文化と直接密接な關係があり、他の藝術的要素が直接映畫的表現の材料となるのであるから、對外的な意味に於ても、他の文化材をぬきんでて、單

に映畫のみを他民族の間に進出させることは以上の點に於ても、大きなハンデイキヤツプをともなつたのである。

この點については、箇條の中に加へなかつたが、映畫表現に直接關係のあることに切りはなすことの出來ない他の藝術が餘りに、他民族に對して理解し難いものであつたこと、そして、全世界の映畫界を風靡してゐる映畫的材料としての他藝術は日本に芽生えることがおそく、他の映畫輸出國に比して見劣りのしたことである。この點は直ちに第三の點と同樣のことになるので、日本人の表情や動作が藝術的表現に不向であるとは云ひ得ない。日本に於ても過去に於て演劇も舞踊も獨得の發表を成してゐるのである。映畫はその發達の初期に於て、西洋の演劇、音樂等の直接の遺産を受け繼ぎこの影響下に於て一つの映畫劇の形式が形ちづくられたものである。而も日本に於てこれらの西洋藝術の歴史はきはめて短いものである。この點大いに遜色はあつたと考へられるのであるがいづれにしても、映畫に於ては、最も共通性のある表現技巧の探究と共に、今芽生えつゝある新しき日本藝術に對する製作擔當者達の深い理解と修錬によつて、新東亞映畫に於ては大きな遜色を示すことはなくなるであらう。

而も映畫の文化の傳播手段としての役割は現在までに完成されたる映畫の技術的手段すべてを上げて、日本文化の傳播のために、今新東亞に於ける大きな任務を負つてゐると云はなければならないのである。このためには、又、他の面に於ける過去の狀態を考察する必要がある。それは映畫の政策的な面に於けるそれである。

一、映畫關係當事者達が餘りに國內的なことのみに多忙であつて、現在の樣なさしせまつた事態に對するみとほしをして工作しておくひまのなかつたこと。

二、過去の無統制な狀態に於て、映畫の製作及び上映の技術的裝備、及び觀客に對する科學的考察の缺乏してゐたこと。

第一の點に關しては、冒頭に於て述べた如くに、映畫界が無統制狀態であつて、映畫事業家達が己の小さな地盤爭ひばかりしてゐて、眞の國家的立場に立つてゐなかつた、そして又これに對する指導的な機關も非常に消極的であつたこと、眞の映畫全般についての認識を持たなかつたことである。

過去に於ける日本映畫の指導者は一にジヤーナリストであつた。映畫に對する研究とか、批判とかの旺盛なことは、製作される映畫の數に匹敵して盛大なものであつた。而も、研究、批判も又多く、ジヤーナリズムに支配されて時のトピツクばかりにとらはれ、或ひは、非常にせまい技術的又は純藝

——（新東亞に於ける映畫文化建設の基礎的問題）——

術的面にばかりこだはつて、大局的な映畫の進路をみとほすことは出來ないで、益々日本映畫をかたよつた一隅に追込む樣な危險性が强かつた。

これら映畫批評家の今後の地位は如何になるかの點についても、自ら時勢に支配されて、發表機關である映畫雜誌、そして、指導機關との關係等によつて決定されて行くであらうが、今なほ、過去の態度と變らぬ多くの映畫記事は、それ等に對する指導統制の必要があると考へられるのである。

映畫に對する記事などは新聞、雜誌等に於ても第二義的に取扱ひ、輕く扱はれてゐた。そのために無責任な批判と映畫論が横行し、これが可成り時のジヤーナリズムに乘つて、映畫作家を迷はしめた事實がある。ある面に於ては映畫の質的向上のためにつくした功績はみとめられるとしても、過去に於て功罪相半ばするものと考へられるのである。

最近に於ける現地に對する映畫記事はまことに無責任極まるものであつて、現地機關にあるものをして憤激せしめるものがある。これは過去に於て輕々しく取扱はれたがために、自ら自分をば輕々しく扱つた自滅的行爲に外ならないのである。

第二の點については、映畫は複雜な技術的操作によつて始めて、その機能を發揮し得るのであつて、機械的設備とそれを操作する技術者が一定のレベルに達するのでなくては質的にレベルに達した映畫としての價値がないのである。この點は製作部門から上映部門にまで通じて行はれなければならないことは論を俟たない。これが日本映畫に於て、往々にして輕んぜられた點であつた。

現在に於ては、製作部門に於ては、相當な點まで注意されてゐるのであるが、上映部門に至つては甚だしい點が多いのは遺憾である。

上映機構は映畫に於ては、最も重要なものであるにかゝはらず、最も目のとゞかぬ地方にあり、多くは中央の映畫機構と切りはなされた如き地位にある。過去に於ては、地方の上映機構である常設館は夫々製作會社から料金を出して映畫を買ひこれを自由に上映して金をもうければよかつたので、常設館の狀態などは映畫會社として大して心配する必要なく館の經營者の方針にまかせ切つたものであつた。

國內に於ては已に歴史を持つてをり、地方にはその地方の經濟狀態とか風習にしたがつて、それに應じた常設館が建設せられ、觀客は又、親しみを持つて映畫に引つけられて行くであらうが、他の民族に對する場合、あらゆる點に於て、精

密な準備を以つてなさなければならないと考へる。

過去に於て日本映畫が親しまれなかつた點は又、この上映設備の點に大きな原因が見出されると考へる。

こゝで一つの例をとれば、上海に於ける日本映畫の上映館と、アメリカ映畫の上映館を比較して見れば、日本映畫の常設館はまことにこれを活動小屋と呼ぶにふさはしいおそまつな文字通りの小屋である。それに反してアメリカ映畫の上映館は堂々たるビルディングであり、内部の設備たるや、比較にならない相違である。日本館では禁煙をやかましく云ふ。勿論禁煙しなければ換氣装置の悪い小屋の中ではたちまち空氣が悪くなるばかりでなく、煙が畫面を汚くしてしまふ。所がアメリカ映畫の上映館に於ては、いくら煙草をふかしても、お隣のお客の迷惑にもならない。煙は直ぐに吸ひ込まれる様に出來てゐるらしい。喫煙の善悪は別としても、常設館の設備はこゝに、映畫に對する大きな吸引力を持つてゐることはうなづき得られるであらう。料金をさらに比較して見るならば敵性館の最上等のリザーブシートが日本館の普通席よりなほ幾分安い様な狀態なのである。

日本館は入り得るだけ客をつめ込み、席があらうとなからうと知つたことではないのである。だが、敵性の方ではちやんと座席の定員以外は一切入れない。かうしておけば觀客も安心して入場出來るであらう。支那人のモダンボーイ、ガールを氣取る連中がどちらを選ぶかと云ふことは自明の理である。

これはたゞ日本映畫の上映のためには觀客を贅澤にして見せろと云ふのではない。映畫がその目的を果す場所である常設館こそ、映畫の文化的水準にふさはしい雰圍氣を構成することこそ最も必要なことゝ思ふのである。

上映機構の問題は現地の各地の映畫機關が荷負ふべきものであるが、今までともすれば映畫を作る方ばかりが注目されてゐてそれらの上映機構についての關心が少なかつた傾向がありはしないか、この點についてはなほ、各地常設館經營業者との經濟的問題も大きく、一番難しい問題であらうと考へられる。たゞこれからの常設館は活動小屋と稱せられた頃とことなり、各都市に於ける劇場、圖書館等と共に、その地に於ての文化的施設であることを念頭に置いて考慮されなければならないと思ふ。

各地方に於ける映畫機關の設置は如何なる分布によつて決められるかと云ふ問題も愼重な考慮によつて決定されなけれ

―（新東亞に於ける映畫文化建設の基礎的問題）―

ばならないであらう。

言語、風俗習慣、及び過去、將來に於て政治的な國情を異にする各地方には又、その地方獨自の文化工作が必要であらう。映畫に於てもそれと同樣である。

しかし、各地方に於ける文化的事情、經濟的事情に應じてその地方に於ける映畫機關も夫々の特色を持ち、規模の大小も考へられるであらう。

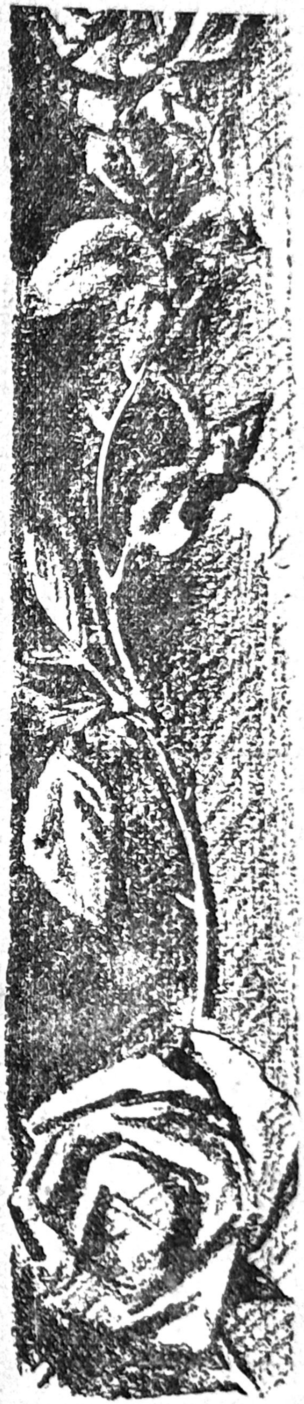
例へば、現在、滿洲國に於ては滿映が創立せられてをり、こゝに於ては、映畫の製作（時事、文化、劇にわたる）並びに配給、上映の機構をそなへ、法律に定められた所によつて一つの統制會社となつてゐる。中華に於ては、已に上海には劇映畫の撮影所が三つあり、相當の數の映畫を製作し、相當のレベルを持つてゐる。中華映畫會社は統制會社として、これらの撮影所を指導し、國策に副ふ映畫を製作せしめて配給し、上映機構をも統制すると共に持つてゐるが、自社に於ては時事、文化映畫のみを製作してゐる。現在までの所この樣な形體である。華北電影公司も亦現在では、配給、上映、並びに文化、時事映畫の製作に止まつてゐるが、中華の如くに北京には他に撮影所を持つてゐない。そして東京（主として）に於て製作される日本映畫は夫々の會社に送られて（華北はこの點については滿映との連絡を持つてゐるが）配給されてゐる。

映畫には、各地方のみに必要とするものもあり、又全東亞に上映して可能なものもあり、大陸に於ける如くに漢民族の分布してゐる地域全體に上映すべきものもある。これらの種種な映畫を如何に有効に、而も經濟的に製作し、利用するかと云ふことは、現地各映畫機關と東京に於ける中心機關との密接な一體化した連絡によつて始めて可能である。

さらにこれにともなふ各地方に配給されなければならない資材の運用についても前記の必要が痛感されるのである。

最後に大きな問題は現地に於ける映畫文化建設の任務を擔ふ人材は如何にして養成し、又現に如何にして、指導的立場に立つてその方法を苦慮しつゝあるか、これらについては稿を改めて論ずべき大きな問題である。（終）

―治淋内服藥―
ヂーユーサイド
純潔を護るは近代人の志向……であり、また、如何に速く不純から脱却し得るかが、切實な要望であればこそ、本劑の持つ効果と使命が果される譯です。
二四錠入



汪國府主席と滿華本然關係

金崎賢

一　汪主席の訪滿

中華民國政府主席汪精衞氏は康德九年五月四日大連着七日新京着、八日皇帝陛下に御會見、御答訪、御會食の榮に預り、特に有難き御言葉を賜はりたりと拜聞す。而して十日國都出發、十一日大連より南京に歸還す。此の間滿洲國及關東州の官民一同の心からなる歡迎を受け、汪氏は十二分に訪滿の目的を達して甚大な滿足を抱きて南京に歸つた。

此の間における兩國政府の發表、汪氏の聲明、滿洲國官民の歡迎會における主客の歡迎辭及び禮辭並に各答辭は詳しく

新聞紙の報道した所である。何れも情誼を盡し、理義を明にし、すべてを併讀通閱すれば、汪氏今回訪滿の意義は十分に理解され、その目的が完全に達せられたことも知悉し得て餘りある。

二　滿洲國は叛國でない

今更事新らしく云ふまでもないが、表面的の國家理論から云ふと、滿洲國は中華民國より離れて獨立したのであつて、民國から見ると叛國であり、しかもその間に日本が介在するといふやうなことで、始めの間は滿華兩國の間が圓滿なる能はざるは自然の勢ひであつた。但しこれは表面上の見方たるに過ぎない。しかもその表面上の見方を甚だ強く言ひ立てゝ私慾の遂行に便ならしむる策謀が力強く行はれた。それを行ふ者は蔣介石一派であり、舊國民黨であり（舊國民黨を引摺る一派は中國共産黨であり、他の一派は所謂英米依存派の政客軍人財閥である）および英米人であつた。（英米政府の國策として政府が糸を引いてゐる）しかしてそれに欺瞞されてゐる中國人の或る部分が滿洲國に對して好感を持たなかつたのである。

しかしながら、實情から云へば、滿洲國の獨立は決して中華民國に對する叛亂ではない。況んや中華民國人に對する何等の反感を持つものではなかつた。

三　その法理的論明

法理上の正面から説いても叛亂ではない。抑も舊國民政府なるものは國民政府が恣に中國に君臨したもので何等の正當な法理を持つものではなかつた。只中國が亂れてゐるから國民から暫時の間政權を預かつたのである。國民に政治的訓練が出來たら政權を國民に返還する建前のものであつた。此の事は國民黨自身の宣言する所であつて、軍政時代、訓政時代、憲政時代が豫定されてゐた。現に政權返還の準備として憲法の草案も編纂され、全國民に政權を返還する爲めの手續たる國民大會の開催日までも決定してゐたのである。國民大會は動亂の爲めに延期に延期を重ねてゐたが、ウヤムヤになり、結局全國民の總意より成る政府といふものは出來ず仕舞になつた。しかしそれも無理のないことで、あの樣な國情にありて歐米流の學説に依る政府などを作らんとするのがもと〳〵無理なのである。私はその始めから、國民政府の掲げた國民に對する約束の如きは、敢て虚僞とは云はないが、空名に過ぎない。憲法など出來るものでなく、出來てもそれは空名だけ

のもの、事實に卽しない架空のものたるに過ぎないと論じてゐたのである。

滿洲國が斯様な架空的な政府から脫離したとて國家に叛するものとは云はれない。例へば閻錫山も馮玉祥も李宗仁、白崇禧でも曾ては蔣介石と戰つたが、あれが叛國者とは云はれないやうなものだ。以上は表面上の法理から論じて、滿洲國の創立が叛國でないことを證明したのである。畢竟當時の支那には支那を代表する正統政府は存在しなかつたのである。隨つて支那といふまとまつた國家はなかつたのである。國家の無い所に滿洲國は舊支那の一部を領域とする政府を建てたのである。

又一方から見れば、民國の始めに淸國皇帝が（宣統帝にして只今の滿洲國皇帝陛下）國民が塗炭の苦に沈むを憐れみて遜位された。それは一時政權を民國政府に預けられたのである。所が此の民國政府なるものが頗るインチキ極まるもので民國といふのは名のみで、實は有力者の玩弄物だるに過ぎない。淸朝の狡臣袁世凱が大總統になつたり皇帝になり損ねたり、如何はしき復辟運動や政治的鬪爭が繰り返され、おもちやの様な議會や憲法が捏ね廻され、結局軍閥の戰爭になつて內訌の果てが抗日戰になつた。こんなに混亂を續けさせるのは決して宣統帝遜位の本意ではない。そんな有様なら、皇帝は民國に與へた政權を召し上げて、復位を仰せ出されても決して誰も不服は云へない筈である。こんな實情の國家だからそこの政府なるものは國家を正確に代表するものではない。故に滿洲國が斯る政府から離れたとて法理上から見ても決して叛國行爲ではない。

四　その事實上の觀察

斯様に法理上から見て叛國行爲でない滿洲國獨立は決して事實上から見ても叛國行爲ではなかつた。

抑も蔣介石の政府は漸次孫文の眞意とは異なるものに變つて行き、英米の傀儡となつて、民國を賣る政策を執るに至つた。金を借り武器を借りて代償として國家の重要な利權を與へた、結局金融の全權まで與へて在支の銀塊はすべて持ち去られた有様だ。その他多くの富と權益とを持ち去られたのである。政治的、外交的の自由までも奪はれた。

支那の領土の中で、自由を保持し得たのは滿洲であつた。つまり國民政府から離れたが故に、米英の犧牲となり奴隷にされることを免がれたのである。元來米英は他の亞細亞諸國諸民族の如くに支那全土全民をその犧牲となし奴隷化する爲

――(汪國府主席と滿華本然關係)――

めに着々その謀略を進め、その目の上の瘤たる日本を煙つたがつて、支那の國民政府要人を欺瞞して抗日戰を起させたのである。而して結局は支那を分割するか、共同管理の下に置かんとしたことは蔽ふべからざる事實である。その事は團匪事件の善後方策にも現はれその後も屢々現はれてゐる。日本は常にそれに反對して支那の領土保全を維持して來た。結局は英米との協力にては到底その目的を達し得ないが故に滿洲の獨立を援けて國民政府から脫離せしめてせめて、はその一部だけでも英米から解放させ、全支自主の基礎たらしめたのである。それから遂に支那事變となつて蔣介石を討つことになつた。支那事變は對蔣戰でなく、對米英戰であることはいふまでもないので、日本は始めから支那國、支那國民に對する戰爭でないことを宣言してゐる。之れを蔣介石一派や共產黨、英米政府は侵略主義の僞裝證だといふのだけれども、さうでないことは追々と分つて來た。大東亞戰の宣言によつて日本の滿洲國援助も支那事變も、單にそれだけのものでなく大東亞解放を始めから目的にしてゐたものなることが外國人にも知られた。對蔣戰の如きはその一過程である。（日本人は始めから知つてゐる、知らない日本人があるならよほどのボンヤリか英米思想にかぶれて自から日本人たる本質を失つた人である）

滿洲國の創立は日本から見れば八紘爲宇國是の大陸進出であるが、支那から見れば此處に支那本來の王道を實現し、英米の桎梏から脫離して民族的自由を保持する基地を固めたものである。故に滿洲國の創立は事實上から見て支那に叛いたのでなく、支那を援けたことになるのである。支那を賣る蔣介石を日本が倒さんとして戰つてゐる。それは支那を援ける意味である。その日本を援けて之れと協力する滿洲國は蔣介石といふ支那の獅子身中の蟲を殺さんと努力するものである此の行爲は支那を援くるものであつて支那に背くものではない。

五　滿洲國獨立と日本及び孫汪の意思

支那の自主自由（獨立）を常に心に掛けてゐたのは孫文であつた。それが三民主義になり、進んでは亞細亞民族解放の念願となつて大亞細亞主義の提唱となつた。蔣介石はどうしたものかグレて反對の方向に赴き、支那及び亞細亞の敵たる米英の傀儡となり、孫文の意を實行せんとする日本を滅ぼさんとかゝつた。それを少からず心配したのは汪精衞主席であ

る。國民政府にあつて常にそれを牽制せんとしたが力及ばずその身も危ふくなるに及びて重慶を脱出して新國民政府を造つた。之れは法統の關係上國民政府の正統を繼ぎたるものとなつてゐるが、その正統といふのは必ずしも孫文亡後の國民黨に拘泥しての語ではない。蔣介石が國民黨の事實上の首領になつてからの國民政府は正統のものとは云はれない。汪主席が直ちに孫文の意思を繼いだことによつてその政府が正統の國民政府なりと考へられる。即ち支那本來の自主自由の回復は孫文の考へた所であつて、その自主自由を回復し樹立するのが汪主席の目的である。故に南京政府は三民主義に就いても重慶政府の（蔣介石の）解釋には修正を加へた。而して孫文の考へた支那の自主自由（獨立）を樹立することは即ち滿洲國の獨立とその意味を同じくするのであることを考ふべきである。

滿洲國獨立の目的は日本の八紘爲宇の國是と一致するものである。故に汪精衞主席の新南京政府樹立も日本の八紘爲宇國是と全く一致する。日滿はその目的を同じくするのみならず、滿洲國の創立及びその後の經營には日本の援助を受くること最も多く、それなくては創立が出來なかつた實情であり隨つて國祖を同じくする關係上（日滿共に天照大神を國祖となす）不可分關係を生じてゐる。而して新南京政府創立の目的が全然滿洲國政府建設の目的と同樣であるから此處に滿華兩國は兄弟の國となるわけである。尙又南京政府樹立の目的が日本の八紘爲宇國是と完全に一致するが故に日滿華は此の點から見ても親善提携すべきものである。

六 日滿華共同宣言と普通條約との差異

元來日華兩國はその歷史から見ても地理から見ても民族文化關係から見ても、對英米關係から見ても提携して親善關係を固くするのが本然の姿である。此の事は日華兩國志士有識者の常に唱道する所で、私なども微力ながら十數年來唱道して來た所である。而して南京政府は此の本然の日華關係を知悉し、それを徹底的に實現する政策を執つてゐる。だから今日の日滿華三國の政府は全然その目的を同一にしてゐる。日滿華の本然的關係が提携せざるべからざるものであるのを今までの國民政府によりて妨害されてゐた。それを改めた新國民政府によつて、日滿華の現在の政府の政策が完全に一致することになつたのであるから、隨つて日滿華三國共同宣言が出さるゝに至つたのは當然である。それによつて日滿關係の

動かすべからざるものあるを聲明した外、日華本然の關係を恢復したことを示し、また同時に滿華本然の關係を實現したことを全世界に知らしめたものである。

これは一時當面的の政策に依るものではなく、自然本來の關係が斯くあるのだといふ事實そのまゝを表明したものである。だから此の條約は歐米諸國間にある普通の條約とは意味を異にする。普通の條約は所謂當面の事情に關して締結されるもので、それは決して永久不易の關係を示すものではない。日滿華共同宣言は古來將來に亙る永久不易の三國の事實上の關係を宣明したものである。故に假りに此の宣言がなくても事實上において三國は提携すべき國柄たるに變りはない。此の點は普通の條約とは異なることを知らねばならない。例へば此頃日本側で、八紘爲宇を顯著に屢々宣明してゐるが、之れを宣明しなかつた古代から日本の宏謨はそれであつたのだ。

假りに今之れを云はなくなつてもその國是は變るものではないのと同じことだ。曾ての日英同盟條約は英國の希望によつて成つたが、又英國の希望によりて廢棄された。普通の條約はそんなものである。ワシントン條約もロンドン條約も大東亞戰によつて廢棄された。ヴェルサイユ條約も九國條約も戰爭によつて廢棄された。これが普通の條約である。日滿華共同宣言の如きは事實の宣言であるから如何なる場合にも事實上に廢棄されることはない。只、その時の政府が之れに依るか依らないかの問題があるのみだ。曾つて日清間に戰爭があつたけれども、而してあのときには日滿華共同宣言はなかつたのであるけれども、此の共同宣言の精神はあの時にても內實には現存してゐたのである。日華條約も滿華條約も、共同宣言を基本として成立した條約であることを知らねばならない。

（參考。個人主義を基調として立つ國の間柄は結局は爭鬪の運命にある。食ふか食はれるかの永久關係を持つ、そこに武裝平和などの語がある。）

七 滿華本然關係强化の宣明

汪精衞主席が訪滿の爲めに出發した時、南京政府の發表した聲明の中には滿華本然の關係を鞏固にする爲めだとある。又同時に發表された滿洲國政府の聲明の中にも同樣な文句があることを注意すべきである。その兩國の本然の關係なるものは上に說明した如き、意味のものである。本然の關係なるものは一時的の便宜によりて作成されるものではない。即ち

政治的政策によるものでなく、又法律的に樹立された關係ではない。自然に存立する關係であつて、云はゞ神定のものである。

八　汪主席の使命と努力

この神定の關係が從來歪められてゐた。歪めたものは蔣介石の私心であり、英米の慾心である。私慾によつて歪められて正當なる途を支那の要人が履まなかつたが故に、支那の動亂が絕えなかつたのである。延いて日華關係が險惡の途を辿つたのである。東亞の暗雲がその爲めに晴るゝ時機を見出し得なかつたのである。此の險惡なる暗雲を一掃して明朗なる東亞の天地を見る爲めには此の神定本然の關係を樹立するのが第一番の問題である。自然に歸らねば安定はない。南京國民政府は此の點に目ざめて創建されたものであつて、日華本然關係を恢復すると同時に、滿華本然の關係を具體的に實現するのが南京政府の第一に着手せねばならぬ使命であつた汪主席は就任以來常に此事の實現に努力してゐた。故に曩に滿洲國政府から派遣した臧式毅南京政府還都祝賀使節を迎へて大いに歡待し歡談を遂げ、次で大使を交換し、今は又自身が訪滿を敢行した。

九　日滿華の本然關係

日華本然の關係は親睦提携すべき間柄だといふことであるそれは歷史的地理的民族的に見て然りで、昔からその通りに行はれた。住民及び文化の交流が有史以前から盛んに行はれてゐたことは發掘物や神話傳說によりて明證され、有史以後は勿論明白である。時に戰爭葛藤あるも極めて稀れなる一時的の現象である。歐洲諸國の如くに戰爭することが本然の關係であるが如くに見ゆる國柄とは雲泥の相違である。

滿洲の住民は太古（有史以前及び以後に亙り）日本民族に近く、むしろ漢族に緣が遠かつた。清朝が支那を統一するに至りて滿華一體となつたがそれでも尙ほ滿洲は清朝直屬の地と見られ封禁の制などもありて一般支那とは別箇の存在だつた。しかも一體不可分的關係にあり、漢民族、漢文化が滿洲に入り、滿支は大いに密接になつた。しかしながらもと〳〵別箇のものだから清帝遜位されてからは滿洲が中華民國から分れるのは至當な成行きである。隨つて此處に宣統帝が君臨さるゝに至つたのも因緣の然るべきものがあるからだ。しかも宣統帝としては君臨されず、一旦執政として就任され、それから改めて帝位に卽かれるに至つたのは清朝の復辟ではな

く天照大神の「ことよさし」に由ることを一般に示し給ふ神意なりと拜察される。之れによりて日滿關係と滿華關係とが如何なるものであるかゞ見られるのである。

中華民國が孫文の意に反して成り（始めは袁世凱の野心の爲めに、後には蔣介石の不心得の爲めに）支那の本來の行き途を誤まつたから、日華本然の關係に背き、滿華本然の關係に反する關係を生ずるに至つた。汪主席の新南京政府がその過去の誤りを是正したから、日華も滿華も本然の關係を回復するに至つたのである。

十　滿洲獨立は孫文の本意

清朝時代の滿洲と支那本部との關係は大支那統一を目的とするものだつた。中華民國以後の關係は孫文の大亞細亞主義の中に包括さるゝ筈だつた。だから孫文の考へでは滿洲が支那の領土たるや否やは必ずしも重大な問題ではなかつた。大亞細亞主義實現の爲めには、若し必要ならば滿洲を日本の領土として讓渡して然るべしとの意見だつた。それは、日華はもと〳〵內輪同志の事であり、その共通の目的として最も大切なのは、英米勢力が東洋を抑壓してその自主自由を奪ふを防止することであるから、日華間では何とでも融通し妥協すべきものとの考に基くのだ。しかも支那の內部を固めて國力を培養し、日本の蓄積せる國力と提携協力し得るだけの强みを自國が持たねばならぬと考へた。三民主義、五權憲法の提唱はそれに基くのである。

此の考へから見ると、滿洲國の獨立は孫文の（恐らくは支那の高き正しき識見を持つ人の）意に適するものだ。支那が內訌の爲めに統一出來ないのを滿洲では軍閥政客の爭鬪を絕して統一政治が行はれる。英米の奴隸たる地位より解放された。支那全土に行はれるべき筈のものが行はれずしてそれが支那の一部に行はれたのである。此の點から見て、滿洲國は支那の行くべき道の先驅者である。その點から見て滿洲國は中華民國の先輩であるといふことになる。

米英は必ずしも本來一致すべきものではない。米國は英國より離れて獨立したが、その獨立たるや、英國の利益の爲めにしたのでなく全く米地在住民の利益の爲めのみであつた。（始めはキリスト敎的人道主義だつたが漸次個人主義に轉化した）滿洲國の獨立は滿洲國自身の利益の爲めではあつたが同時に支那を救ふ爲めだつた。滿洲において支那の範となるべき政治を創めて全支をして倣はしめんとする目的を持つてゐた。鄭孝胥氏のごときは明かにその意圖を持つてゐた。そ

れが日本の八紘爲宇國是政策と全然軌を一にする。此の點米國の獨立と、滿洲國の獨立と、形を同じくして意を異にするのである。

十一　滿華現在の任務の重大

故に英米は時に深刻な鬪爭を爲すべき國柄であるが、今は時局に强ひられて提携してゐる。此の英米の勢力が外形的には或は全世界を壓倒するかに見えたが、日本の實力發揮によりて、大打擊を被むり、將に顚落せんとしつゝある。隨つて世界の大局は一大轉換の機に迫つてゐる。日滿華は先づ內部を固めて英米勢力を驅逐し、順次東洋全體から英米を驅逐する筈だつたが、機運が熟すると情勢の轉換も速いのが近代の特色である。古代なら百年もかゝつた轉勢が今日は一日にして行はれる。

（白人文化發達の結果だ、善惡は別問題だが、速くラチのあくことは良い事であらう、これも神意であらう）

日滿華も各自の內部を固めると日滿華一體關係を固めるのとその他大東亞各國各民族を救援するのと、すべてを同時に行はねばならない。順次にやつて行く遑はない。その爲めに獨伊その他の同盟樞軸國に對する援助も英米に對する防禦、攻擊も同時に行はねばならぬ。その主力たるものは勿論日本だが、滿華兩國も亦その雙翼としての任務の甚だ重大なるものがある。故にこの大東亞戰遂行といふ當面の問題に關して、滿華の協力最も密なるを要し、その本然の關係を極めて强力に遺憾なく發揮しなければならない。

十二　舊觀念是正新觀念樹立

汪主席は曩に日本に赴きて日華本然關係の回復と竝に新時局に即する兩國關係の强化と提携實現の方策とに關して協議し、新來時局に處すべき方策に就きても協定する所あり、十分にその目的を達した。今次汪主席の來滿も固より同樣の意義を有す。皇帝陛下に拜謁仰付けられ、官民の要人に接觸し又は滿洲國が此の十年間に發達し來つた物質文化の發達、精神文化の向上、法制の狀況、民心の歸向、治安の實情などを目睹耳聞することによりて、滿華提携の實際政策の樹立につきて汪主席に資益する所甚だ多かつたに相違ない。

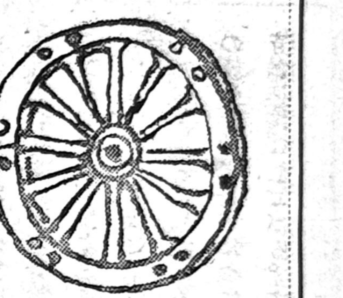
滿華は古代にありては別箇の國だつたが近代にては一つの國になり、最近には又別の國となつた。別の國とはなつたが歐洲に發達した諸國の如くに相爭ふを目的となすものでないことは前に說いた通りである。而してその共通の目的たる大東亞諸民族を救援して、解放建設の大業に貢獻する任務を、相提携して極めて急速に遂行せねばならぬ局面に迫接した。

滿華兩國は別箇の國であるが別箇の國家だといふ今までの國際法式の觀念は淸算されねばならない。元來共榮圈といふのが、世界に新秩序を建設する爲めの、今までに例のない國際關係であつて、しかもその中でも兄分たる滿華兩國は特別の密接した地位にある。故に獨立といつても從來の觀念による獨立とは趣を異にす。さりとて今までの國際法に謂はるゝ聯盟といふ如き性質のものでもない。兩國は法律的結合でなく道義的結合を爲すべきで、それによりて共榮圈內の他の諸民族を率ゐて行かねばならない共同の責任を持つ。

斯樣な新觀念による新關係は元來、兩國の本然關係に基くのであるが、舊國際法的觀念を揚棄して新觀念に從はねばならぬ。それには重慶國民黨が頻りに鼓吹した愛國心とか獨立觀とかを淸算して、別の觀點に立つ愛國心とか獨立觀とかを樹立せねばならないのであつて、その實行に相當な困難點がある。汪主席の訪滿そのことが、中華民國竝に滿洲國における此の新觀念の樹立に貢獻する所大なるものがある。しかして訪滿中の各所における兩方の禮辭、答辭によりて兩國の意思は十分に表白されて、汪主席訪滿の目的は十二分に達成された。

茲に約言すれば、汪主席の訪滿は滿華本然の關係を强化する爲めであつたが、その本然關係强化といふことには現在當面の問題としての重大なる意義があるといふことである。而してその意義なるものは提携親善といふ概念に含まるゝものには相違ないが、更に具體的に云へば、舊式の國際提携の意味よりは異なり、共榮圈の構成分子としての提携を必要となすといふ意味である。何分にも今は世界が大變化する機先である。舊觀念はすべての方面で更改されねばならない。滿洲國獨立と云つても舊觀念の獨立とは意味が異なる。共榮圈と云へば、國際提携や同盟とは異り單なる親善の語では云ひ表はせない意味がある。滿華關係は本然關係を基調として積極的なる新關係を樹立し、積極的なる新らしき意義の親善提携に進まねばならない。くれ〴〵も今までの行き掛りや舊式なる國家觀念、國際觀念に捉はれてはならない。汪主席の訪滿は此の意味において重大な意義があり、その意義が充分に貫徹された効果があつた。是れ汪主席の大に滿足した所であらう。日滿華三國の爲めに悅ぶべく、大東亞共榮圈の爲めに慶すべき一契機を作つたものである。

（筆者は滿洲日日新聞社論說委員）



林柏生氏と語る

武藤富男

五月○日南京政府宣傳部長林柏生氏とヤマトホテル應接間で會見した。汪主席一行大連着の時林部長の方から連絡員を通して會見申込があつたので之を快諾したのである。こちら側は私以外に弘報機關の首腦部十數名、協和會中央本部菅原部長、坂田部長等であつた。

私たちが先づ應接間で待つてゐると林部長は、秘書官を帯同して來られた。小柄な體軀に若々しい鬪志のみちあふれてゐる人物である。人間は携つてゐる仕事が同じであると云ふことの爲に唯それだけで親しみを感ずるものであるが、林部長との初對面において私はそれ以上に深い親しみと尊敬とを抱かずにはゐられなかつた。その風貌に接した時私は直感したのである、これは情熱を以て鬪ふ人である、と。

「滿華の携手協力は先づ精神的な結びつきより出發せねばならぬ。之が爲には文化の交流が大切である。映畫、演藝、新聞、放送、出版物其の他宣傳方面における提携が肝要である。」と前提して林宣傳部長は滿華の協力について諄々として說いた。之に對し私は日滿華三國共同宣言に基き三國文化の交流について日本內閣情報局、滿洲國弘報處、中華民國宣傳部の三者が原則的取極をなし文化の相互輸入を容易ならしめ盛んに交流を行ふべきを以て應じた。

林部長は次で三つの質問を提出し之に對する私共の解答を求めた。

第一は「滿洲國は如何なる事柄を中華民國國民にもつともよく知らせ度いと思はれるか、宣傳の衝に當る者として、貴國に關し我國民に宣傳すべき事項に付御希望をうかがひたい。」

第二は「宣傳を行ふ上に最も困難とするところは何か御教示に預り度い。」

第三に「貴國は我中華民國政府に如何なることを希望せらるゝか。我國が何をなさんことを最も強く希望せらるゝかを承り度い。」

質問の第一に對し私はかう答へた、「滿洲國についての英米及蔣介石の宣傳は、日本人が滿洲に於て諸民族を征服し之を壓迫してゐると云ふことである。この宣傳にのせられてゐる者は今尚相當殘つてゐると思ふ。だから先づ第一に宣傳して頂きたいことは滿洲における民族協和の實狀である。日本人は此の國において征服者の態度を採らない。これ英米人の東洋の植民地における態度と根本的に異るところである。日本人は優位にありながらその優位を主張せず却つて身を下して諸民族のうちに入り苦樂を共にしてゐる。すべての宗教には救がある。而してこの救は救主が身を下して庶民のうちに入り、庶民と苦しみを共にすることにより成就する。佛耶兩教において然り。而してこれ身を殺して仁を爲すの謂である。これにより民族協和は成就しつゝある。今や政府官吏層においては日系滿系力を協せて仕事をして居り、日常の働きにおいて殆んど民族の別を忘れて居る。こゝに同志としての契りは結ばれつゝあるのである。この實情を中國民衆にお傳へして頂き度い。

第二に宣傳して頂き度いことは滿洲における建設の實情である。嘗て中國人は東北三省を以て僻遠の地と考へ滿洲を片田舍として取扱つた。此の思想は今も尚人々の頭に殘つてゐると思ふ。然しながら滿洲は今日東亞の中心地の一つである。邊疆に新しき文化は建設されつゝあり而して邊疆が却て文化の中心となるは近代に至つて各地に起りつゝある現象である。三日間の御滯在において御視察になられた實狀を十分に國民に傳へて頂き度い。」

菅原總務部長は協和會の立場より民族協和の實情につき事實をあげて例證した。

質問の第二に對しては私よりも林宣傳部長の方が經驗

が豊富であり、悟りも深いと思つたので、意見を述べるのも如何かと思つたが、切角の質問であるから釋迦に說法の嫌はあるも敢て應答した。

「宣傳において最も困難な問題とは即ち最も重要な問題である。而して之は宣傳組織を作ることである。新聞、放送、映畫、演劇、出版等に關し强力にして民衆の中に深く根を下した組織を作り之に精神や思想や感情を流しこみ以て國民を動かすに非ざれば力强き宣傳は出來ないのである。我々役人は宣傳組織の頭腦である。頭腦が手足の仕事をすることは禁物である。頭腦は組織に命令し之を動かさなければならない。組織を作るには人と機材を要する。人は即ち宣傳要員である。貴國政府は南京還都と同時に宣傳學校を作られ宣傳者を養成されて居らるるが此の點は敬服に堪へぬ次第である。宣傳機材については科學技術の先端を行くものを使ふことを要する。國民が未開であるとか、無智であるとか云ふ理由で宣傳機材も原始幼稚なものを使ふがよいと考へるのは間違ひである。宣傳の內容はどこまでも無智なる民衆に分りやすいものでなければならぬが、之に用ふる機材は科學の粹を集めなければならぬ。即ち無電、電送寫眞、輪轉機、高級印刷機、撮影機、映寫器等の如きものである。無電は郵便よりも、映畫は紙芝居よりも滿洲に適するのである。」

第三の質問は私にとつて最も困難な問題であつた。然し私は之を宣傳上の立場より解釋して答へることにした即ち我々は中國政府が滿洲國國民に對し何を最も强く宣傳せんことを望むかと云ふことに局限したのである私はかう答へた。

「我滿洲國は中國における抗日運動の最も盛んなりし時に生れ、支那事變の進行中に成長した。我國々民は三國共同宣言以前は中國民衆と引離されてゐた。そして蔣介石の宣傳は時に我國に入り込むことがあつた。汪主席を主班とする南京政府が成立したが、その實力に信を措かざる者もないではなかつた。大東亞戰爭勃發するに及んで、初めて汪主席の先見の明を知り、蔣介石抗日の愚を悟る者もあつた。我國民の知り度いと又我々が國民に知らせたいことは貴國政府の和平建國の運動が如何に力强く進展しつゝあるかと云ふことである。貴國政府は

成立以來着々として內政を整備せられ或は淸鄕工作に或は産業文化の建設に力を致しつゝあることを聞及ぶも、その具體的事實を或は映畫に或は出版物に或は放送に新聞に十分に織込んで之を我國國民に傳へて頂き度い。これ我々の貴國政府に希望するところである。」

林宣傳部長は私の言葉を眞摯なる態度で聞いてくれたそして御意見を承つて大へん參考になり嬉しいことですと云つた。私の感心したことは私の意見の中には林宣傳部長にとつて必ずしも全幅の贊意を表し得ぬものがあつたであらうが、宣傳部長は之に對してはあげつらうことをせず却て感謝の意を表せられたことであつた。もし私が逆の立場におかれたなら恐らく一言反駁して後で悔いたことであらう。たつた一時間の會見であつたが、何物か心の琴線にふれ合ふものを感ずる會合であつた。別れる時に林部長は集つた人々の一人一人と握手した。私は最後に林部長と手を握り合ひ、まともに向き合つて林部長の眼を見た。聰明にして豐かなる情操をもつ人物の眼であつた。私より三つ年上のこの壯者は汪主席を取卷く人々のうち實力においては筆頭の人物に違ひないと直觀した。

林部長は最後にも一度宣傳者の提携協力と文化の交流とを强調した。私は近き將來此のことについて林部長と相談することを約した。

汪主席今度の訪滿は東亞の歷史において否世界の歷史において一新時期を劃するものである。而して林宣傳部長が主席に隨行して來滿されたことはこの盛事の意味を全うするものであつた。それは日滿華三國共同宣言以來滿華の國交は開始されたが、滿華兩國民が心と心との交りを爲しつゝあるかと言へば未だ中々そこ迄は行かなかつたのであるが、汪主席の來滿により兩國民は初めて打解けて心のふれ合ふのを感じたのであり、而して林宣傳部長は汪主席歸國後において滿華兩國民の兄弟としての交りを愈々敦うする爲に目覺ましき働きをせらるゝや必定なるが故である。

同時に林宣傳部長は滿洲の弘報界にも一石を投じた。宣傳は中國に向つてもつともつとなされなければならぬことを無言のうちに提言したのであつた。

•月•評•

方寸錄

宗甚六

◇

建國十周年の慶祝行事が次々に繰り展げられて、本年の滿洲國は多彩且つ繁忙を極めてゐるが、その裡にも搖ぎなき國礎と、限り無き國運發展の前途が内外に確認豫見せられつゝあることは甚だ意を强うし、悅ばしく思はれる次第である。

◇

中華民國々民政府汪主席の來訪は滿華兩國々交の上に一大劃期をなしたものと云ふことが出來る。その意義や經緯は詳述するまでもない。とにかく、汪氏は滿洲帝國興隆の事實を確認し讃嘆し、羨望するとともに、これによつて日本の意圖が眞に公明であり、標榜するところに背かないことを知り、今後中國再建の上に、その援助に倚賴する必要を彌々痛感したと推測されるのである。また滿洲國の大多數官民が、中國主席の極めて慇懃（いんぎん）なる來訪に對して、如何に好感を懷いたかは想察すべきものがある。それが自信を深めるとともに、中國に對する友誼の增進となり、この國礎を强化する上に對中國々交の上に多大の好影響を與へた事實は疑はれないのである。

◇

建國第二段階に入つて、今まで比較的閑却された政府その他の人事政策を更新確立することになつたと傳へられる。これまでも決して等閑に附せられてゐたわけではなく、また更新が標榜されても直に萬事圓滑に行くと即斷は出來ない。人事政策の多難は種々の理由に基き、決して單純のものでないからである。所謂基本方策として、一、官吏その他中堅分子の錬成强化

一、日滿間人事交流の積極化が擧げられてゐるこれも目新しいことではないが、結局これ以外に基本的のものは無いに違ひない。問題はその運用如何にある。日滿兩國の關係に於いて、人事交流の途が更に擴大し、圓滑になることの必要は言ふまでもないが、これもその度を過ぎて餘りに頻繁であつてはならない。滿洲國側で錬成された人々はその熱意に於いて優れたもの多いが、その半面に事務的鍛錬に缺くると云はれ、日本側からの轉出者の多くは、とかく一時的の腰掛け氣分で來るやうに見られてゐる。もとより、身分、地位、恩給及び退職に際しての相互的措置を共通にすることは必要であるが、それ以外にも考慮すべき問題は多いのである。歸するところ、根本要件としては、兩國を通じて行政機構の改革を斷行するとともに、官場の舊體制的慣習――これは特に日本に多し――を打破し去らなければ、人事政策は解決されないと思ふ。

◇

勞務政策も、滿洲國の重要懸案である。今年は勞務行政の强化實現と、北支側の好意ある措置とによつて、大體滿足すべき狀態を示してゐるとの言明であるが、たゞ將來北支依存度を漸減する方針があるとの說は果して何うかと思ふこれを人口密度から見れば尙ほ大差があり、滿洲國は更に大なる生產的人口を包容し得る。北支の豐凶治安の良否によつて勞務者の流入に消長があるやうでは困るとの見地から、その對策が講ぜられて來たのであるが、民族的經濟的關聯性を考へて、滿洲國、北支及び蒙疆地方との間には政治經濟上何等かの大乘的措置を必要とするのではなからうか。

◇

大戰下特殊の情勢に拘はらず、開拓國策が整然として進展し逞しき多くの拓士が意氣軒昂續々入植することは心强き極みである。この人々に對して、新聞記事が常に「聖鍬」「淨汗」の文字を以て、讃へることは近來の慣例となつてゐるが、一方「醜の御楯」の用語と對象して、聊

か奇異の感を懐かされるのである。これ等の用語は何人にもその意義が明らかであるが如く、一方は客觀的のもの、一方は主觀的のものである。「醜の御楯」は萬葉集の古歌に出で、防人が卑賤の身を召されて大君の御楯になる光榮に感激したもので「御楯」が「醜」であるといふ意味ではない。從つて、榮譽ある戰死者に對し、第三者が「彼は醜の御楯となつた」といふ表現は當を得ないのである。同樣に、拓士に對して「聖鍬」「淨汗」の語を他人が用ひるのは宜いがこの濫用されるまゝに、拓士自らが揮ふものを聖鍬とし、流すものを淨汗と稱して、思ひ昂るやうなことが、苟くもあつては好ましくないのである。あくまで謙抑に自らは「醜鍬」「醜汗」を以て國策の第一線に立ち大君の御楯となる心境に徹して欲しい。この事は日常用語の例ではあるが、また單り開拓者のみならず、官民各界の人々が心がけねばならぬ對時局態度である。

◇

言論機關に對する不滿の聲が多い。それは近來の新聞が、社會の實相と讀者の意志とを忠實に反映しないのみでなく、木鐸としての指導的態度にも缺くるところがあるといふに歸する。この聲は一部肯綮に當るものもあるが、そのまゝ無條件に承服するわけには行かない。社會の漠然たる要望の中には多分に利己主義的のものがあつて、自ら公然と言へないところを新聞なり雜誌なりが代辯することを期待する傾きがある。その註文通りに言論機關が躍つたならば讀者は喝采するであらうが、今日の場合それが國家のため得策でないこと勿論である。又讀者は直接自己に關係ある事以外の内面暴露記事を好む情勢を持つてゐるのであるが、今日の新聞は左樣な方面に力を注ぐべきでないことを心得てゐる。斯樣な理由による批難は言論人としてむしろ甘受してい丶筈である。

しかし、今日の新聞人に努力と用意の足らぬところ甚だ多いことを認めぬわけには行かない。言論抑壓に藉口して不必要に萎縮、退嬰、怠慢に流れるかと見れば又必要以上に阿附迎合して

雷同し誇張することを以て建設的協力と解してゐるらしいところがある。更に近來用紙難に伴ふ紙面の縮小に處して、編輯上の研究が不足であり記事の比重差に對する判別の不充分と、いよ〳〵亂雜冗漫且つ拙劣を加へて行く新聞文章と相俟つて全體の表現構成を力弱いものにしてゐる憾みが多い。切に考慮を望みたい。

◇

この頃の鐵道旅行で、考へさせられる種々の事がある。旅行が不自由になり、不愉快になつたと、超時局的の嘆聲を發するのでは毛頭ない何事につけても、忍び合ひ、讓り合はなければならぬと思ふのであるが、又何事につけても、親切味が足らず、少しく注意すれば、物事が圓滑に明朗に運ぶものをと痛感させられる場合が極めて多いのである。その一例に各驛の一列勵行がある。これは時局の然らしめた良風であつてその趣旨は誰も異存無いのであるが、主要驛の改札時刻を十數分繰り上げたならば、お互ひに手數は掛らず、構內の混雜も、よほど緩和することが出來るであらう。何の故かは知らず、甚しきは發車前十分くらゐまで、乘客の行列を釘づけにして疲勞、退屈、焦燥せしめた後勿體らしく改札を始めるのであるが、檢札者は概して不熟練であるため、徒に時間を費し、改札口を出た人々は眼の色を變へて、プラットフォームを我れがちに走り出す、その結果、階段で轉倒して負傷するものが出來る。これでは一列勵行の效果がどこにあるかと言ひたくなるのである。改札口で行列を作らせたならばそのまゝ乘車まで順序よく行進させるが宜い。それでは時間が足らず、手數が掛かるといふかも知れないが、改札時間を早めたなら、それは可能である。又行列も不必要であるに違ひない。驛員の能力も省みず、單に形式的に行列を作らせて、乘客を取締れば足るといふが如き誤つた觀念と親切心の缺如とが、この矛盾と混雜とを來すのである。これとよく似た實例、統制のための統制、眞の統制目的と背馳した統制が、各方面に見出されるのは、お互に考慮を要すると思ふ。

印度及印度人

田所耕耘

現在及び今後に於ける印度及び印度人の形勢は、此處數十年來に於ける支那及び支那人のそれと多くの點に於て共通した樣相を示してゐる。

之を大觀すると、この兩者は何れも滔々として改新し復興し行くべき歴史的運命に存するにも拘らず、近く之を觀るといろいろの弊害が鬱積して行路嶮難を極めてゐる。

そこで東亞共榮圏の印度及び印度人に對する態度も、その大方針に於ては、所謂日本肇國の宏謨たる八紘爲宇の精神に基き、これを包容扶掖し、外患英帝國主義を驅逐し、以て搾取なく壓制なき道義的合作關係を、大東亞共榮圏との間に實現せんとするのであるが、當面の實行處置としては、專ら對敵軍事工作に集中せざるを得ない。即ち英國の軍事的基地たる條件を印度より拂拭し、同時に英國抗戰力の源泉として、印度及印度人の物資及び勞力を利用することとならしむるといふ對敵戰略の遂行に、專念するの外ないのであつて、經濟的合作や、民族的結合の如きは當分高閣に委ねた如き形とならざるを得ない。

方針の全面的なるに反し當面處置の斯く局部的である所以は一つに印度及び印度人が將來に有つ所の大局的明るさと、然して現實に彼等を蔽ふ所の立罩めた密雲の暗さとに東亞共榮圏の使命と必要とが反映した結果に外ならない。

抑々我々東亞共榮圏結成の中核たる日滿人の印度及印度人

に對する關心は三方面に在る。

第一は一切の前提となる戰略の見地に於けるものであり、先づ印度の英禍を印度から排除して掛らなければ、外廓印度に對する八紘爲宇主義の光被は別とするとも、差當り大東亞共榮圏の內廓の基礎が固まらない。

第二は經濟的關心ともいふべきものであつて、內廓大東亞共榮圏の完成に對し印度から出る過剩生產品がいる。就中日本纖維工業の原料たる棉花、滿洲穀類輸送に必要な麻袋の原料たる黃麻及將來大東亞共榮圏の建設及經營の爲に必要な巨額の鐵を生產する原料たる鐵鑛が要求され、又、同時に內廓過剩生產品の吐け口として印度三億八千萬人の市場が欲しいのである。

第三は道義世界建設の第一期工作範圍をビルマとペーグ海を西邊とする大東亞共榮圏の內廓に限り、第三期工作範圍を全地球面とすると、第二期工作範圍の第一順位として印度が登場する。

先づ印度及印度人の光輝ある將來に就て語る必要がある。ネール氏が言つてゐる如く地大物博なる印度が太古から開化した多數の印度人を抱擁して、然も現在の慘狀に陷つた原因の中にはこの廣い土地に多くの人口が夙に蔓延し蕃殖した事その事も數へられる。即ち交通、通信の幼稚であつた古代に於ける大國の經營は、支那に見るが如く軈て持ちも提げもならぬ困つた狀態に陷るのが通則である。政令を全國に達する通信の途もなく、全域の政治經濟的結合を圖る交通の便もない印度が、有史以來常に四分五裂紛亂と停頓を重ねることゝなつたのは已むを得ぬ次第であり、其間に各種の禍根や弊習が蟠束固結して國運の進歩を凝滯させる結果となつた。僅にアソカ大王の時代に、しばらく統一强國の狀態を示したばかりで印度は亂雜と頽廢の姿で終に險惡な近世に立至つた。一方恵まれた歐洲事情の下に成立した中位の大きさの國家が互に切磋琢磨して作り上げた精鋭な武器と進步した交通、通信法を具へた來襲者、白人帝國主義の進擊に會つて脆くも印度が挫折屈服したのは餘儀ない運命であつた。

然し今日になつて見ると、その白人が印度を搾取する手段として設けた進步した交通、通信の施設は、偶々今後の印度を結束統一する重要な基礎となつたのである。

同時に何といつても世界の文化は必然的に印度に滲透し來つて、印度人の覺醒を促し、かくて彼等が彼等を壓迫搾取する外的勢力を排除すべく四十年此方翕然として開放獨立の運動を展開する形勢となつた。即ち彼等が同じ有色民族と考へ

てゐる日本の日露戰爭に於ける勝利に強い衝撃を受け、それが導火線となつて彼等は三十餘年前その所謂民族主義の名の下に獨立開放要求の第一回の烽火を揚げたのであるが、此反抗の焔はその後燻りつゝも、底力強く燃え廣がつて今日に至つてゐる。その間世界戰爭に印度人が引出された結果、白人の本質的地金を見て、彼等の因襲的對白人崇拜觀から解脱したといふ事實もあり、其の背信に欺かれた怨みもあつて、今回日本が再び東亞の選手として起つて、英國の勢力を東南アジアに粉碎した此機會に於て、彼等印度人の獨立解放運動が、炎々として燎原の火の様な勢となつた事は歴史必然の運命であつて、此際之を達成すべく彼等の日本の武力の勝利に對する期待は頗る大きい。

併し、然らば我等がこの印度救濟の輪廓を作る武力工作を契機としこれに接着して全面的提携乃至合作を試みるとして、それが大東亞と印度との間に着々實行される見込があるかといふ段になるとそれは明かに絶望である。

第一に印度は英國の羈絆から解放されたとて國の統一は容易に出來ないのである。先づその人口の大多數を占める二億八千萬の印度教徒に對する少數八千萬の回教徒の乖離があつて、後者は久しきに亙る英國の懐柔策に毒されて大部分英國の與黨となつてゐるとみてよろしい。次に多數派印度教徒の内部にも階級の障壁が高く打ち立てられてゐるのであるが、就中その最下級に屬する賤民は何よりも先に國内他の階級と平等に取扱はれる事を要求して止まず、彼等の中にはこの要求の實現覺束無しと見て擧つて回教徒等に改宗し、やがて英國側の陣營に走らうとするもの少くない。更に印度には英國直轄の英領の外に、形成上の獨立を保つ大小數多の封建的自由國がある。概ね英人顧問によつて政治を行つてゐるのであるが、これ等諸國の君主は比々としてその先祖相傳の榮耀榮華を擅まゝにすることに執着する輩であつて、從つて特權者搾取者の排除を綱領とする英領の獨立主義者と捌が合はない。そこで反つて英國の幕下に馳せ參じて、印度の統一的獨立を阻害せんとする。英領の革新政客國民會議派の面々は一層の事自由國内に於ける民衆の自覺に訴へ、これ等王侯をも同時に撤廢して、全印の合同を圖らうとする。そこで自由國の王侯は益々必死になつて之に反抗する。而も一般民衆は尚概ね無智無自覺であつて、此等王侯の壓制に甘んじてゐる體たらくである。尚又英領内に於ても地主資本家等の富裕者も亦大體王侯と同様に、搾取の本尊英國側の忠僕である。

剰へ印度では言葉が二百幾つといふ程澤山別れてをつて、

東西南北意思相通じない。殊に東南地方の七千萬の話すドラヴィダ語系の言葉は北部西部及中部の印度アリアン系の言葉とは全然違つてゐるといふ事である。その上種族も雜多であり、皮膚の色も處により餘程異つてゐる。かういふ風に内部的分裂嫉視が痼疾となつて居る印度の全體の民がいち早く結束して全土を統一した自立國家を完成する事は所詮至難な事業である。

第二に長期に亙る英國の搾取や放擲に禍されて印度の一般民衆は極端に生活程度が低く且つ無智無學であつてその不運の根元たる英禍を認識する能力にすら乏しく、從つて解放を欲する熱意にも缺けてゐる。甚しきは仁義に仗る深切な扶援者に對するよりも暴虐非道な抑壓者に對し反つて一層尊敬し一層忠實に奉仕する傳統に染まつた卑屈者すらも少くない。

第三に斯様に無智であるにも拘らず彼等は自らアリアン人種に屬するが故に蒙古民族よりも高等だと自信し從つて日本人を含む東亞諸民族に對して何がしかの人種的優越感を懐抱してゐるものが多いやうである。只彼等は同じアリアン人種中の白人から奴隷視され虐待せられるが故にその苦境を脱するに必要な武力工作に於て日本に期待するに過ぎないのである。印度人の日本に對する期待にはこの嚴格な消極的限界がしつかり打立てられてゐる。この點に於て自ら蒙古人種たる泰人やビルマ人と全く異ることを忘れてはならない。

第四に彼等は英國の弘報係(インテリジエンスサーヴイス)の宣傳にかぶれて日本に對するあらぬ偏見を抱いてゐる。印度の識者に對して英國弘報係は必ずしも全面的にその英國に對する禮讃を要求しない。曰く「成る程何程か英國が印度及印度人を搾取してゐる事實は肯定されるが、假りにさうとしても有てる國英國の搾取は所詮微溫的である。若し將來有たざる國と自稱する好戰貧國日本の如き者が英國の代りに印度に入つて來るとすれば印度は今日英國から受けてゐるのとは比較にならない手厳しい壓迫搾取を受けるに違ひないといふやうな宣傳をやる。印度人中それに蠱惑されて故なき危惧を日本に對して抱いてゐる者も少くない。

第五に國民主義者中に於て英帝國主義の壓迫搾取を排除する運動の理念として英米の内國的信條たる自由主義的民主主義やソ聯の衡平的信條たる共産主義又は社會主義に求めた結果として、日滿の建國精神とは何程か杆格する思想的背景をも有する。

第六に印度の現在の窮境は正に地獄の様な惨めさであるに拘らず彼等の理想は涅槃のやうな安易さである。彼等は空想

する、若し印度人が外部からの壓迫搾取より解放されさへすればよろしい。世界の實庫といはれる印度を自ら經營し、民主主義と社會主義に立脚して内部を結束し、善鄰主義と以夷制夷の術策とで以つて外列强を操縱するならば十分やつて行けるかの如く自信してゐる。この點支那に於ける大部分の者の支那自身に對する考へと符節を合せてゐるのであつて、それ以上の共榮圈に進む必要迄はまだ考へてゐない。從つて日本を含む外部との合作も外からの立ち入つた援助を期待しないのであつて、大東亞共榮圈との間に不可離の關係に入るが如き事は、少くとも當分のところ彼等の何よりも嫌忌し極力避けんと欲する所である。

その他等々といふ風で、數へ立てれば大東亞共榮圈との合作には、印度の側に無數無量の障礙がある。これを吾等大東亞共榮圈の立場から考へて見ても、當分は遺憾ながらこの多難なる印度を内容的に扶援する餘力に乏しい。第一に人口の過剩に累されて貧困の淵に沈淪してゐる印度民衆の厚生を圖るには、差當り印度外に移民する餘地を見つけなければならない。第二に内に農鑛資源を開發する爲に灌漑開鑛等莫大な投資を要する。又印度の輕工業を奬勵して低級産業の可及的需給を圖り、日本工業品の輸入は次第に高級品にのみ限極する方向に助力すべく尠なからざる投資もやらなければならない。若し日本が不用意に印度の内部經營に入り込むと、印度の痼疾と戰ふ努力の外にこれらの諸工作を進める爲の犧牲にぶつつかつて捗々しく進まないにきまつてゐる。かくて圖らずも印度人が抱いてゐる偏見を眞實化し其鬼胎を現實化した様な形となるに違ひない。

固より天下大勢の歸趨は明白である。印度人の自覺も其統一結束も何日かは完成せられるであらう。更に遂には印度人も内外の形勢を達觀し、所詮印度及印度人だけの能力と技術と設備と資源とだけでは世界に獨立して自立する一經濟圈を組織する事は到底不可能である事を痛感し、自然共存共榮を以て立つ大東亞經濟圈に對し自發的に援助を望み連繋を求めて來るであらう。

それ迄の處我等の印度及印度人に對する援助の實行は對敵戰略の遂行以上に出で得ない。そしてそれで結構である。蓋し此前提なくして一切の理想は畢竟畫餅である。而も狹義の東亞共榮圈の完成即ちビルマ西境の山脈及アンダマン、コタバルの天然の境界として東方に發展した東亞民族原住の地域及水域を基礎として共榮體制を築き上げる前提としても、これを阻害せんとする英米の武力工作其の他の策動を根絶するこ

とが大事業であり、その爲にはこの境を超えて西鄰の印度に於ける英米武力の海陸根據地を勦滅し、以つて印度人を解放して英米の武力の補助に驅使せられることとなからしむるを要する。此武力工作さへ成功すれば自然印度に輸入せらるる日本輕工業製品に對する英本國本位に依る現在の人爲的阻害策も撤廢せられ、この貴重な販銷地域も恢復せられるであらう。從つて又印度より棉花、黄麻、鐵鑛等が自由に東亞共榮圈に供給せられる基礎も出來るであらう。尤も英國の勢力が印度より驅逐せられた場合一時印度内に混亂停頓を見るかも知れぬが早晩彼等の奮起を促し結局或程度の和平統一が生れるであらう。かくて次第に生ずる印度人の自覺に基いて大東亞共榮圈との提携の機運が生れることになるであらう。

即ち當面の狹義の對印武力工作も其の究極の目的に於ては獨り狹義の大東亞共榮圈の建設の爲めのみならず、同時に又此の大東亞共榮圈運營の經濟的必要を印度に於て充足する前提であるのみならず、更に八紘爲宇の人道的宏謨印度及印度人に光被する基礎工作でもある。只これら第二、第三の理想目的に對し今より直ちに驀進すべく印度の内部に入つて援助の手を展ぶるといふ事になると正に所謂鹿を逐ふ獵夫山を見ざるものである。空しく途中の岩石に打當り、泥濘に落ち込み徒らに過大の犧牲を拂ひ、無用の支吾蹉跌を繰り返へし反つて本來の大方針の完遂を遲滯せしむる結果となる。

固より印度人を扶掖包容して共助共榮の關係の誘致せむとする八紘爲宇の大方針は單なる理念的憧憬でもなく、方便的宣傳題目でもない。常に鋭意實現に志し機到らば急速推進せしむべきこと勿論であるが、機熟せられて待機するより外ない。唯當面諸般の事情形勢は、少くとも當分の間後者の態度を餘儀なくせられるであらうと謂ふに過ぎない。

印度及印度人に對する吾人の心的態度及實際の處置を決するに當つては、此の大局觀と現實認識とを併せて各別に明かにしてゐなければならぬものと僕は思ふ。

（筆者は大同學院院長）

治淋内服薬
ギーユーサイド
二四錠入
大陸感染！
こぢらせてはダメ！
發賣元 株式會社 滿洲柳韓洋行
大連柳韓公司

興亞國民動員大會に參加して

本社記者

五月十八日から二十二日まで、五日間行はれた興亞國民全國動員大會に、記者は協和會宣傳部の一員として此れに參加するの榮を得た。時は今恰も建國十周年の記念すべき年であり、勿論此の大會も慶祝行事の一つとして行はれたのではあるが、此の劃期的な歷史的飛躍の意義と成果を、十二分に發揮し得た盛典であつたことは實に欣ばしいことである。建國僅か十歳の我が滿洲國が、どれほどの巨きな歩みを現在迄に遂げて來たか。參加者の一人として、それを言葉や形容ではなく、目のあたりの光景に見た感激は、ちつとやそつとでは云ひ現はせぬ程である。

記者等は、あの建國晴れとも云ふべき快晴の式典當日、御座を斜め近くに仰ぎ見る席を與へられて、在京、全國の代表部隊、及び國外代表が大同廣場を埋め盡して參集した偉觀を唯おほらかなる感動をもつてうち眺めたのであつたが、五萬數千の大群衆が、そのひととき寂として聲なく、皇帝陛下の御臨をお迎へ申し上げた嚴肅な一瞬間は、まこと瑞氣天に滿ちたかと思はれたのであつた。記者はその時、僞りなく、心から滿洲國に生くるものの喜びを感じた。

十年の日子と云へば、それは果して一國家にとつて歷史と呼びうるかどうかとさへ考へられる。歷史には傳統がなければならない。それほど短かく僅かな歳月ではあるけれども我が滿洲國にとつては、それは立派な歷史なのである。傳統と云ふものが未だ生れぬ代りに、全て建設と云ふ文字にうづめつくされてゐる、さう云ふ歷史なのである。

おそらく建國當時から、この一途な建設の爲に身を挺して來た人々にとつてみれば、十年一昔と云ふ俗な言葉にさへ、その裏に、目まぐるしいばかりの我國の發展の樣相と、云ふに云はれぬ數多くの感慨の種が潜んでゐるに違ひなからう。記者は大會分列式の際に、次のやうな一つの光景を見たのであつた。

それは、日本初め各國代表や、協和會義勇奉公隊及び青年國などの堂々たる行進の間にまじつて、可憐な小學生達が整然たる分列隊形で、眦を上げ脚を踏みならし、せい一ぱいの幼ない聲の號令で進んで來た時であつた。記者は、來賓席にゐる一人の協和服を着た長髯の老人が、眼鏡を外してしきりと涙を拭つてゐるのに氣がついた。小學生達の分列は寔に見事なものであつたのだが、此の老人の胸のうちに去來したものは何であつたのであらうか。記者は思はずはつとして襟を正し、共に眼頭の熱くなるのを覺えたのである。

彼等小學生の日系のうちには、或は滿洲第二世も數多くゐたことであらう。そして此の幼ない者たち全てこそ建國の子であり、新しい建設の歷史を、今我々の眼の前に繼承しつゝ脚踏みならして進んで行くのである。やがてそのなかからは新しい傳統も、生み出されて行くに違ひないのである。來賓席の老人は、おそらく建國當時の功勞者であつたとも思はれたが、その昔を知らぬ記者とても、強く胸うたれずにはゐられなかつたのであつた。

南湖畔に行はれた野營訓練には、記者は一夜幕營を共にし、青年達の盛んな營火の集ひを見る機會を得た。廣茫たる地平線を背景に、此處には日本、中華、蒙疆の三國旗を中心として、地方各部隊代表が幕營をつらね、そのまゝ東亞共榮圈の縮圖を見るが如くであつた。青年達は全て質實簡素な此の生活樣式のなかに、共に困苦缺乏に堪へるやう、幾日かの訓練を與へられたのである。

夕暮近く、我が滿洲國代表と各國代表とが放送班の錄音マイクを中にして、座談會を續けてゐた。記者はその傍に坐して、彼等の取交す談笑を聽いたのであるが、自から微笑の湧くを抑へ得ぬ或るよろこびを身内に感じた。各國代表のうちの一人の青年が、次のやうなことを云つたのである。

「僕等が、かうして話合ふと云ふことは、これからの共榮圈の建設に、どれほど大きな力になるか分りませんね。今迄見知らぬ他人であつた僕等が……。」

まことにさうなのである。御身達の談笑の間に交されてゐる深い親しみは、明日の共榮圈の指導者達を心から結びつける、國と國との深い愛情となるであらう。記者は、堪へがたい感激をもつて、心のなかでさう彼等に答へた。

夜になつて、廣い會場を果しなく蔽つた闇のなかに點々と七つの營火が點ぜられた。幾百づゝかの若人の群がそれを圍み、いくつかの感激的な催物が續けられて行つた。ハワイ特別攻擊隊を模した假りの劇が、二つまでも飛び出して、青年達をやんやと喝釆させたが、このやうな逞ましい興亞の精神が、彼等のなかには何の遲疑もなく、唯ひたすらな至情としてあることは何と心づよい限りであつたか。

幕營地の朝、まだ薄ら明りの黎明のうちに、記者は興亞青年達の雄々しい體操の號令に眠りを破られた。やうやく樹間を縫つてさし初めた朝の光に見れば、彼等は上衣をかなぐり捨てた半裸身で、四股を踏んでゐるのである。眠氣覺めやらず、薄ら寒い朝の大氣にふるへてゐた記者の眼は、思ひ掛けなく驚かされたのである。

動員大會は、おそらく今年の慶祝行事のうちでも最も大規模なものであり、且つ最も深い意義を持つたものの一つに數へられるであらう。此の大東亞戰爭下に建國十周年を迎へた滿洲國として、在京及び全國の協和會義勇奉公隊、同青年國代表部隊、それに日本、華北、中南支、蒙疆の四代表も加へて、五萬數千の人を國都に集め、文字どほり高度國防國家の要請に應へた綜合動員訓練が行はれたと云ふことは、どれほど大きな意味合ひが含まれてゐるか分らないのである。

高度國防國家は、單なる國防兵員、兵器の充實では成り立たない。より高い精神的要素が要請されねばならない。動員訓練は、在來の防空演習などとは絕對に異ふのである。國民、殊に青少年の興亞精神の自覺からの實質的訓練でなければならないのである。この自覺なくしては、今日の如き世界情勢下には眞の國防と云ふことは成り立たず、ましてより一層の國家的發展などと云ふことは考へられないであらう。

この度の動員大會が齎したもののなかに、建國十周年の滿洲國にとつて、一つの大きな命題があつた。それは云ふまでもなく我が建國精神である民族協和の顯揚であつた。五族の青年達がかくも美しい統制のもとに、渾然と動いたと云ふことは、我々國民として誇つてもよいことなのである。こゝにこそ、動員大會の本質的使命は盡きると云はねばならない。

民族と迷信

瀧澤俊亮

一、迷信とは何か

常規の信仰を正信とすれば、正常ならぬ異常變態の信仰を、一般に迷信の名で呼んでゐる。けれども正信と迷信との峻別は決して容易な業ではなく、且つ其の境界線は明瞭に引かるべき性質のものではない。それは時と所と人とによつて異なり、絶えず移動進化して止まないからである。

若しフォイエルバッハと同じ觀點に立つならば、「一般に宗教は主我的心情と夢想との産物に外ならぬ。一體神とは人間の無力を欺瞞せんが爲に虚構された希求物に過ぎぬ。」（宗教の本質一八四五年）と言ふやうな、理性一點張な宗教抹殺論に墮する。

かくては迷信も正信も始から問題にならない。人間の理性を信じ合理的歸結に満足するとしても、それは結局人間生活の智的一面に過ぎず、理性の局限に於て要求を滿したる統一は、更に理性を超えたものに對立して、不安を感じ動揺する。

人は確かに理性の動物ではあるが、理性が人間の全生命ではないからである。寧ろ人間の行動は感性的であり、情緒的である場合が多い。「萬物は彼より出で、かれに倚り、かれに歸ればなり。」（羅馬書一一の三六）との最高統一に到達する爲には、有限物の一切の對立を超えて、すべて有るものに基礎を與へ、あらざるべからざるものの目標となる、全智全能なる唯一者卽ち神への歸依がなくてはならない。人が此の世に生れ出た以上、何處までも生き抜かうとする個體の維持存續が最も强力な欲求となつて、それが爲に食物と子孫の問題が中心となり、すべての人間に共通した生命の活動となる。

實に食色はすべての生物に通ずる活動の源泉であり、動物の本能である。人間生活の基根である此の强烈にして本能的な欲望が常に充たされてゐるであらうか。

否、太初人類創まつて以來、彼等が生存條件の第一義たる食料に對する不安と熱望と哀禱に於て、彼等が其の全能力を擧げてなし、又爲さうとした跡を見よ。

無限にして永遠なる天地自然に對する人間の微力を體感した彼等は、集團の共通情緒の激勵下に部族共同の動作に熱狂した。

彼等の生活は律動的熱狂的たらざるを得なかつた。其處に祭が生じて、原始曆は祭と祭との連續を以て綴つた。律動的な力强さと永續性とは、人間生活の統一點たる神への行事に於て得られたからである。

而もさうした周期的記念の祭禮は、同時に季節の周期に外ならず、季節の周期が彼等に齎す價値は、其の食料と關係する爲である。

農耕民族の栽培植物に於ても、狩獵牧畜民族の動物の習性に就いても、季節の循環性が、彼等の行動の標的となり、曆として彼等の心の内に定着する。

彼等は回歸的季節に豫定の祭式を行ひ、食料の豐富を祈願する。けれども飼養の動物が頓死したり植付けの植物が枯死したり、思ひも初めない出來事が次から次にと起つて來て、切實に彼等原始民族を戰慄させる。彼等は全智全能を盡して之が對策を講ずる。

北アメリカのオマハインディアンは、旱天で玉蜀黍が枯れかけると、水牛社の社中の者が大きな容器に水を充たして、四度これを遶つて踊る。

中の一人が水を少し飲んで空に吹出し、霧や小雨のしぶきを立てる。そして後に容れ物を覆して水を地上に流す。すると踊手は轉んで顏中泥だらけにしながら、其の水を飲み干す。それで玉蜀黍は助かるのである。（ジエーン・エレン・ハリソン「古代藝術と祭式」佐々木理譯二六）子孫の繁榮と保護に就いても、世界の人々は有りとあらゆる秘術を盡し祈願を捧げてゐる。（初比他國に行くと、衆俗皆大自在天と稱するものに事へてゐる。精舍の高さは百尺餘で、其の中に天根があつて、萬物之より生ずとて、上は國王より下庶民に至るまで、一同之を崇敬して恥ぢる色もない。諸國の天祠に大抵此の形のものを置いてゐる。」（續高僧傳玄奘傳）那羅延は全く之と同質異名な人種神で、佛道の障害物として一に摩羅延天と呼ばれてゐる所のものであるが、生殖神としての信仰は穢

土の厭離と當に正反對である。婆羅門教の二大派中、現に牛或は男根を神體とするシバ神は、單に濕伐派の神たるに留まらず、全印度に於ける崇敬の的であり、之に對する一派のビシヌ派も亦那羅延天の別名であり、自在天の變名であるとすれば、印度に於ける生殖崇拜の源流の遠きに在るを知ることができる。喇嘛教の歡喜天なども類を等しうするものである。滿洲・支那に於ける娘々系の母神信仰は、それが觀音又は天后・天妃・媽祖或は胡仙・仙姑と名は變らうとも、子授け子育ての祈願對象たることに於て變りはない。けれども出生は最小家族たる夫婦の問題と言ふよりも、多く母性に依存し。小兒は母によつて生長を遂げしめられ、長じては結局自己一人の責任となる。それ故生死の二點を結ぶ生存の線に沿ふてなさるべき食料の蒐集獲得が恆常的問題となる。一日食はざれば一日餓ゑるので、一時も忽に出來ない現實な負荷である。彼等は直接生活資料となる動植物は勿論、それ等の生活資料たる動植物の培養物資となる一切の無機物も亦、間接に彼等の生命と相聯關してゐると考へる時に、動植物は固より、一切の自然物にも自ら生命があり、精靈があると思ふのは、これ又自然の歸結である。原始人を圍繞する自然界は、現實に於てそれ自身神秘に感ぜられる。即ちそれが自然に對する原始民族の思考態度である。原始的低級民族に在つては、すべて知覺は神秘のベールを以て包まれ、一切の複合表象は未分化のまゝ受容される。萬有の生命を信ずる物活教も、一切衆物の靈魔を信ずる精靈崇拜も、アニミズムの階段から眺める者に取つては、一向に不可思議ではないのである。

人の精神は之を論理的立場から見て、何處でも何日でも常に完全に相一致してゐるといふ同一性を信ずる者は、一切所與の條件を等しうするといふ前提を忘れてはならない。人は環境の子である。氣候風土の異る所は、自ら動植物の種類も生育も異る。人間生命の基調である食料のあり方が相異する。隨つて其の土に住む民族の祭式即ち宗教活動も異らざるを得ない。言語風俗を異にし、祭禮の樣式を異にし、婚媾を通ぜざる異民族が全く相似の信仰を有してゐる筈がない。此處に信仰の樣相を窺ひ迷信の異色を探ることが可能となる。エヂプトの食料物資は全くナイル河水の增減に依存し、そこにオシリスの祭式と暦とが存在する。南太平洋の暦はモンスーンに規定され、山紫水明の希臘は其の自然の透徹せる回期と、惠まれたる環境の故に、埃及が長く半人半獸神の低級文化層に彷徨してゐる時から、それ等をデモンの遺物に局限して、人間の到達し得る最高理想の優秀なる形相に於てのみ、眞の

神々が寫象せられ、萬事が人間を中心として展開された。そして宗教と藝術とが渾然融和して、アポロンを中心として完全に合流した希臘神話程、多くの藝術神の分化を見る所はない。北歐神話にも印度神話にもそれ程多く現はれてはゐない。支那では祭祖の外延的儀禮として、民に功德ある始祖を祭つて職業神とする風が今なほ傳へられてゐるが、老子を鍛冶の神としたり、文奎星を學問の神としたり、唯漠然たる抽象の神として喜・貴・財・福・先農・先茶・先蠶・酒仙等としたりして、極めて曖昧模糊の裡に停滯してゐる處に、彼等の低き文化をほの見せてゐる。支那が長く半封建的半植民地として、現代文化殊に精密科學の洗禮を受けることなく、前代の舊套を脱することなく、單に中華の虛名に醉ふた結果である。迷信は言はば現代文化に取り殘された前代文化の渣滓であり、叡智の檢證を經ざる低俗なる常識である。

二、迷信と科學

主觀的な感情生活に甘へ、奇蹟を信じて超自然力に合掌歸依する人の心は、神の恩寵と精靈の祟(タタリ)とを信ずる過去に生きる人である。現實生活に滿足し、來し方の太平無事を感謝し、且將來への安心を求める心は、大自然の偉大さに打たれ僥倖を喜ぶ常識人である。理智の光明を認め、嚴密なる科學に徹し、其の努力の過程に於て完成を願ふ心は、明日の智識に生きる人である。迷信は臍の緒の如き過去の廢殘であり、常識は今日へ奉仕する間に合せの代用智であり、科學は明日に豫備されたる眞理の探究である。

人は生れることから旣に複數に於てせられる。何處迄も社會的動物である。そして人々の行動も亦社會の中に於て作される。其の社會的集團的行動を、主觀的な個人の心的機構からのみ類推する所に、現代人が屢々原始社會の集團的表象を誤解する。例へば舞踊の起原が歌の面白さに釣り込まれてつい踊りたくなる個人の興味からであるとするならば、日本の若者等が山神の代表となつて里の家を訪れ、門に立つて祝言を述べ、惡魔を拂ふ爲に強く地を踏んだ「ほがひ」や、陰陽師が或種の型で地を踏み鳴らして惡い方角を踏み破る反閇(ヘンベ)から出た踊を如何に解釋するであらうか。當に「踊はもと、村總員の勇ましい足踏によつて、目に見えぬ外敵を村外へ追出すべき重要なる信仰上の作業であつた。」(柳田國男・民謠覺書二三) といふ見解を採らねばなるまい。支那で禹歩と呼ぶ道士の惡魔祓の形式が殘つてゐるのがそれであるやうに思はれる。尙古葬禮に悲しんで胸をうつて踊る(孝經喪親禮記)

といふ辟踊も、實際は死靈の祓淨であらうと考へる。支那人は一般に寫眞を撮ることを嫌ふ。肖像には原物と同じ生命が籠つてゐて、直に其の生命を左右されると思惟する。彼等に取つては描かれたものと、被寫體たる實物とは同一の存在であると知覺される。木偶や肖像繪や寫眞が、生體と同様の神祕を以て迫る。彼等の呪物崇拜や偶像崇拜の根柢には、さうした神祕的な物の見方考へ方が横はつてゐるのである。孔子が母の名に關する文學を避けたといふ忌諱の風は支那のみならず到る處に存在する。結社に入る爲に新しい名が選ばれたり、佛教で死者の爲に戒名が選ばれたりすることは、名は體を表すと言ふ諺の如く、名稱と其の名を持つ實體とが不離必然の關係にあることを示すもので、肖像に於けると同様に、實物の神祕性から來たものである。只肖像が視覺的であるに對して、名は聽覺的であるだけである●三尺下つて師の影を踏まずといふ諺も、此の肖像と一連の關係に在つて、影にも亦實體の摹寫を見る。支那では影を棺桶中に閉込められることを恐れて、蓋をする時には近親のやむを得ぬ者の外は皆避け退く。それは埃及人のカーの信仰に似てゐるやうにも思はれる。靈肉の分離を信ずる支那民族には、夢に關する說話傳承が少くない。見えぬ力と自由に交通し、現實に於ける滿たされざる欲望を、屢々充足してくれる完全なる知覺として働く。低級文化人に取つては、時間的の繼起に空間的の距離は無視され、空間的接近には時間的間隔は問題とならない。彼等には說明し得ない偶然といふことがない。物理的論理思考よりも、神祕的飛躍的に何等の矛盾を感ずることなく直に主觀に融即する。幾度經驗を繰返しても決して其の過誤を悟らせることの出來ない論理以前の素朴な心性を持つ彼等である。もと〳〵宗教乃至信仰は、窮極に於ては神そのものではなくて自己の生命に歸着する。自己の生命を安全に滿足に、より充實せしめやうとするのが直接の目的である。假令呪法と雖も、此の宗教的生命愛を以て根本としない譯はない。そして呪術も宗教も社會的產物として發生し共存するのであるが、種族の統合によつて全國民神の系統が立てられ、神々は其の位置職務に應じて系譜的に結合せられて、最高神に從屬せしめられる。其處に國家的宗教が設定せられ、地方的諸神は半神的呪法神として放置される。かくて宗教は國家社會の組織と調和し、人類愛に基いて普く國民を慈しみ、神と人との接近と共同一致とを謀る。呪法は何等進化することなく、種族國家の儀禮と乖離し、更に科學の發達、殊に自然科學や精密科學としての理數科の如き、論理的因果律的思惟に習慣づけられた社會の

人々からは、極度に排斥されて僅かに無智の階級に祕密裡に餘喘を保つに過ぎない。自然人事一切の現象が、嚴密なる法則に從ふことを信ずる者に於ては、超自然的な奇蹟など言ふものは此の世に存在しない。若し法則的世界秩序に奇蹟が割込むならば、自然法は自滅すると考へるのは、科學によつて貫かれた貴い精神である。けれども人間の全生活が科學的にのみ營まれるものではない。たゞ科學的努力によつて迷信が或程度までは驅逐されるであらう。が、迷信の驅逐は直に宗教の否定とはならない。科學者と雖も世界秩序の久遠不變を信ずることなしには、自己自身の未來を想定することができないからである。吾々は世界秩序の本質である神によつて永遠に生きることを信ずるものである。吾々は前人の古き神を捨てゝ、理念に於て全能者を求めて新しい神を創造せずには居られない。最初に神があつて、神に似せて人を創造したが、遂には神の意旨に叶はず、恩寵に浴することもできずして、奈落の底に水火の呵責を受けると、自業自得を冷眼視し若くは衆愚を威嚇する神々或は神人等よりも、ものは總て低きより高きに昇る。人は生れながらにして聖なるはなく、己が努力と周圍の環境と、永い傳統の集積によつて、漸次に向上發展するものである。人々よ、國家の爲に、延いては社會人類の爲に、先づ個としての己を完修せよ。己を修めることによつて國家無窮の榮光を仰ぎ、國家社會の貢獻に於て個人が各々其の任務を完了する、個と全との相即一體を說く科學若くは思想が、どれ程世人を幸福にすることか。

宗教者は須らく時代的制約の裏に生じた古代の教義・祭式聖句の既に神話的傳承となつたものを、眞理の不變乃至普遍性の故を以て、之を現代人に其のまゝ强要し實踐せしめやうとするが如き頑迷固陋の態度に深く反省を加へなければならない。宗教は現實にのみ目を注ぐ新しがり屋の科學とは自ら性質を異にして、古く傳統を有するもの、歴史的實踐によつて展開した社會人の現實生活態度であり、古今の軸によつて貫かれたもの、古きを荷へる新しきものでなくてはならない。假設的な科學の眞を超えて全人的眞に高揚され、人の當に爲さねばならぬ當爲の指標として道德的善の積極性が付與され神殿の莊嚴に於ける藝術が、美の最高峰として民衆に訴へ、其の憧憬の中心たるべく、かくて全人活動の歸一中樞の確立が期待される。古の祭が民衆の血を湧かしたのは、單なる雜踏の故ではなかつた。演劇・音樂・彫刻・建築・繪畫の諸藝術は勿論、日常彼等の求めて得られざる凡らゆる生活の分野が、其處に展開され滿足させられたからであつた。民衆を蔑

視して孤高を誇るが如くして實は民衆を基底として立つ藝術家も科學者も居なかつた。其の最善を提げて民衆に訴へ、其の批評に委せた謙虚な人々によつて、民衆は激勵され指導された。高きを誇る遊離的分子なく、祭は總ての人々の大なる期待に於て洵に綜合藝術であり科學でありそして信仰であつた。神は個人としての人格の完成を示すと共に、種族民族として共同の理想を示現する。理想は事實ではない。人生の事實を處理する倫理さへ、其の處置に苦しむ此の現實が、完全に宗敎目的たる理想と合致する筈がない。割つても割つても割り切れぬ數が嚴存する。其の間隙に乘じて過去の廢物が利用される。迷信はかくて人類と共に終熄する所を知らない。それ故現實は其のまゝ共同崇拜の對象即ち宗敎理想とはなり得ない。而も絶えず進歩し變遷する現實事象は、不可思議なる疑念を生ずると同時に動搖し、終に不安に襲はれる。人は其の動搖を防ぎ不安を克服する爲に、理想と現實との距離を認めながら、其の統合さるべき終結を信じる。それは明日への安心に於てである。若し其處に宗敎的天才が生れたならば、不安の野の燈明臺となつて民衆に進路を指示するであらう。宗敎に個性的色彩があるのは、さうした祖師の人格が反映するからであるが、巫術や迷信は塵埃のやうに捨てゝ顧みられない人生の廢殘であるから、個性がない。尤も其の起原が共同社會の中に在ることも一つの理由である。それで社會智の進歩は、徐々に迷信を消滅に導く。電燈の下には妖怪變化が現はれないし、土佐の名物犬神は平民の家に限られ、決して士族に起つた例がないといふ。又阿波三好郡の池田村は四國の中一番犬神の多い地方であつたが、學校が開けて小學校を卒業した者は罹らなくなつたと言ふことである。それは無智な下級の窮民や婦人に僅かに殘されてゐるに過ぎない。（二六〇二、一、二四）（筆者は奉天第一中學校長）

音樂近事

この前に書いた新京音樂團附屬の樂員養成所（滿系）が、やゝ世の視聽をひいて來たことは喜ばしい。滿系の音樂者の養成がこの國の文化のため如何に焦眉の急務であるか、心ある人々は勿論それを痛感してゐる筈である。

現在の養成所は、語學其他の學科と、滿洲樂、ブラス、聲樂、それに絃樂ピアノを學習してゐる。その成績は驚くべきものがある。それは單に音樂を練習してゐるのではなく、樂人としての「道」を體得させようといふのが、此處の目的であるからだ。學監であり、又優れた作曲者市場幸助氏の獻身的な努力が無ければ到底今日の成果は獲られなかつたと思ふ。市場氏は自分の功を語らないが、色々な感想から察するに、養成所が今の狀態になる迄には大變な苦心があつたらしい。例へば滿洲各地から募集した養成所員は十五六から二十位迄だが、入所當時は、皮膚病に罹つてゐる者が多かつた。それを市場氏は共に風呂に入つて治療しなければならなかつた。顏の洗ひ方、食事の仕方便所の使用法まで敎へた。又生徒の疲勞を測定するには、不動の姿勢をとらせて、その持續する時間や身體の動搖の有樣を見た。全員に靜座を行はしめた。或ひは不動の姿勢をとらせて瞑目させ、いきなり耳の傍で石油罐をたゝいて、その時の樣子を見て各自の性質を知り、「肚」を敎へた。夜中に寢室に飛び込んで、非常に處する法を實地に訓練し、修養の一助とした。音樂といつても、要は「道」であり精神であることを此處の生徒は訓へられてゐる。かうして、生徒等は、晝も夜も全く油斷のならぬ生活を市場氏に依つて體驗し、心身を錬成された。そして音樂の道に精進した。ある時、市場氏が病氣で內地に行つてゐた間、少しく空氣が弛緩したことがあつた。內地から再び歸來した時、市場氏はそれを、各部屋に繪寫眞を飾ること及び花を活けることに依つて忽ち矯正してしまつた、だからこの養成所の音樂は、根本精神からして異ふのである。この意義ある仕事がもつと廣く認められ、もつと強力な且精神的な音樂團體として、滿洲國の文化を高めるため、各方面の協力が切に望まれる次第である。適當な方法で再組織され、どうしても管樂學校の形式にならなくてはならない。現在は經費の關係で募集した、一回生が僅か十四名しかゐないことを書きそへておく。

作曲研究會といふのが新に形成され、その第一回として新絃樂四重奏團の作品の試聽が行はれた、そのうち作曲研究會は小規模ながら公演する筈である。音樂の理論の方面に特に貧しいこの國では必要な研究會である。

新京音樂團の第一回演奏會があつたが、低調であつた。建國十周年全國動員大會に參加した四十團體、千二百名のブラスバンドは、集團の美をつくした。

（鳥羽亮吉）

蘇州ところどころ

瀧川政次郎

一

北京を支那の京都とすれば、蘇州は支那の大阪だ、大商業都市としての大阪に當るものは上海であらうが、文化が古くして圓熟してゐる點で蘇州は大阪に似てゐる。水の都、橋の都であることも、兩者は軌を一にしてゐる。京大阪を見物すれば、大たい古い日本がわかるやうに、北京と蘇州とをよく觀察すれば、古い支那は大たいわかるやうな氣がする。それで私は、北京と蘇州のことには、特別の興味をもつてゐる。その北京には、幸なことに私は二年間住む機會をもつたが、蘇州にはたつた一回行つたきりである。だから北京は、たいていの所は一度見物してゐるが、蘇州はところどころ見たに過ぎない。併し、蘇州に關する書物なら大ていい讀んでゐる。蘇州のことを書いた書物では、唐代叢書に入つてゐる唐の陸廣微の呉地記が最も古からう。それに次いでは守山閣叢書や墨海金壺に收められてゐる宋の范成大の呉郡志であらうが、宋代には都が臨安即ち今日の杭州にあつた關係から蘇州の地が重視せられた爲めでもあらうか、蘇州のことを書いたものは、この外にも澤山ある。龔明之の中呉紀聞、單鍔の呉中水利書、朱長文の呉郡圖經續紀等は、いづれも宋代に成つたものである。元のものでは、高德基の平江紀事、陸友仁の呉中舊事があり、明のものでは、華鑰の呉中勝記や、楊循吉の呉中故語があるが、いづれも短編で、清の同治年間に成つた蘇州府志百五十卷に比すれば、十分の一の分量もない。民國になつてからは、江蘇金石志とか平江城坊考とか、呉郡通典といふやうな書物が作られた、北京に關する書物も隨分あるが、蘇州に關する書物も仲々それに劣らない。日本人の紀行で蘇州のことを詳しく語つてゐるものは、那波利貞教授の燕呉載筆

であらう、芥川の支那游記にも、蘇州のことが書かれてゐたと記憶する、松村天鄰氏は、最近蘇州夜話といふ書物を公にせられたが、流石は蘇州の領事として長らく同地に居られた人だけあつて、蘇州の名所舊蹟はもとより、蘇州に關する名士の逸話から蘇州の風俗迷信まで、事細かに述べられてゐる。私がこれから書くことも、大ていは此等の書物にあることである。

二

蘇州は、右に擧げた地理書の名によつても知られる如く、古くは呉とか呉縣といつた。蘇州といふ名で呼ばれるやうになつたのは、隋以後である。宋の時代には、平江府と呼ばれ、元では平江路といつたが、明清以來ずつと蘇州の名で呼ばれてゐるのである。蘇州の舊名が呉であるのは、言ふ迄もなく此の地が古への呉國の都であつたからである」。春秋戰國の時代に中原に霸を稱へた呉國は、大たい今日の江蘇省の地であり、漢の末に孫權が建てた呉國は、江蘇・浙江・安徽の三省に跨る地であつた。呉の字を日本ではクレと訓むが、クレは日の暮のクレであつて、クレノクニは曾つては支那全體を意味する言葉であつた。日本即ちヒノモトといふ國號は、支那に對して起つた名稱であり、クレノクニなる名稱は、日本に對する名稱である。推古天皇の御宇に小野妹子が隋に齎らした國書に、日出づる處の天子、日没する處の天子に書を致す、恙なきや否やとあつたことは、日本書紀にも隋書にも見えてゐる有名な史實であるが、日没する處の國即ちクレノクニである。然らば呉の字に限つて何故にこれをクレと訓んだかといふに、それは日本人が先づ支那を知つたのが呉の國であつたからであつて、カラ、モロコシの語に韓・唐の字があてられるのも、日本が初めて交通した外國が韓であり、唐であつたからであるのと同じである。有名な賴山陽の天草灘の詩に、雲か山か呉か越かとあるやうに、我が九州の地から支那海を距てて眞向ふにあるものは、呉國即ち江蘇省の地であつて、博多乃至坊之津より呉淞・寧波に至る交通路は、有史以前からの日支の交通路であつたのである、垂仁天皇の御代に、田道間守がトキジクノコノミ即ち蜜柑をとりに行つたのも、この地であつたらうし、雄略天皇の御代に、呉織・漢織が來たといふその呉織も、此の地から來た紡織工であつたらう。クレハトリ、アヤハトリが、トモベを爲して宮廷に奉仕したものが、即ちハトリベであつて、服部なる地名・人名は玆に淵源してゐるのである。又呉服部の織つた着物即ち呉服であつて、呉服物、呉服商の語は、今日日本に於いて普通に用ひられる名詞である、紅をクレナヰといふのも、この染料が呉國から初めて輸入されたからである。クレナヰ即ちクレの藍の約であつて、これをカラクレナヰといふのは、トウモロコシと言ふのと同じやうに、外つ國のといふ形容詞が二つ重なつたものとみてよいだらう。日本に古く傳つた漢字音が呉音と呼ばれるのも、呉と日本との交通が、北支那と日本との交通よりも早く始つたことを證據立てるものであらう。斯く觀じ來れば、蘇州と日本との交渉は、實に古い。故に呉越春秋に見える呉王

夫差と越王句踐との物語りの如きものも、夙くから傳へられて、日本人の常識となつてゐたのである。兒島高德が眞の闇夜に櫻を削り、天句踐を空うすること莫しと赤い心を墨で書いたのも、富士の裾野の仇討をうたつた謡曲を會稽曾我と名附けてゐるのも、皆呉越春秋が國民の常識となつてゐたからである。蘇州の地は、奈良平安の昔に、南路をとつた遣唐使、留學生、留學僧が、長安に赴く途中に立寄つたのみならず、明の時代に大運河によつて北京に赴いた室町將軍の使僧たちも、また立寄つた土地であつて、日本人の足跡は、府の内外に及んでゐるが、中には圓通大師の如く、この地の普門寺に住持して示寂した日本僧さへある。北宋の景德年間、即ち我が一條天皇の御代に、天台宗の圓通大師が住持したといふ普門寺は、今亡んでないが蘇州府志の廢寺の條によれば、それが今蘇州第一の高塔のある北寺の東隣にあつたことが知られる。室町の末期から戰國にかけては、我が西陲の豪族が大いに中南支から呂宋安南にかけて發展した時代であつて、南京さへも一時彼等の掌中に落ちた位であるから、蘇州の地も亦その蹂躙に委ねられた。顧炎武の天下國郡利病書には、蘇州の西郊楓橋鎭のほとりで、倭寇五十餘人が殲滅されたことが見えてゐる。

三

蘇州は、東洋のベニスと呼ばれる水の都である、蘇州の城壁の外側には城をめぐる運河があり、その運河には大小十一の水路がつながつてゐる。閶門の外から西に通ずる水路は、南京に通じ、城の東南角より南に走る水路は、上海、杭州に達する。上海の共同租界と虹口とを分つ蘇州河は、即ち此處から發してゐるのである。城内には、縱横十文字に小運河を通じ、水門口によつて城外の運河と連絡してゐる。蘇州より近郊に至らんとする者及び近郊より蘇州に到らんとする者は、いづれも此の運河を利用して船を遣る。蘇州の周圍にある八つの門外には、四方より蝟集してくる民船が水面を覆うてもやひし、城内の小運河には、家の軒下から軒下へと通ふ小舟が巧みに櫂を使つて橋の下をくぐつてゆく、まことに呉郡水運の利は、天下に冠たるものであつて、南船北馬の語は、人を欺かない。城門外には、いづれも運河に架せられた橋があり、城内の街路と小運河の交叉するところ、また大てい小さい板橋が架せられてゐる。故に蘇州は、水の都であると同時に、又橋の都であつて、白居易は紅欄三百九十橋と唱ひ、楊備は畫橋四百と歌つてゐる。城外の橋では、盤門の前にある呉門橋と寒山寺の前にある楓橋とが有名であり、城内の橋では、樂橋、臨頓橋、烏鵲橋、臬橋、西成橋等が有名である。呉門橋は宋の元豐七年に初めて架せられた石橋であつて、その形式の秀麗優美は遊子の足を停めしめる。竹内栖鳳畫伯がその傑作「蘇州の雨」をものせられたのは、此の呉門橋の橋畔であつて、此の橋の名は、今は巴里の美術館に異彩を放つこの世界的名畫によつて、不朽の名となつた。楓橋は張繼の夜泊の詩によつて、その名を中外に知られた名橋であるが、現在の橋は、同治六年の重建で、橋自體には雅致がない。樂橋は、蘇州城内を南

北に貫通する主要街路護龍街に架つてゐる橋で、丁度城内の中央に位し、昔はこれが呉縣と長洲縣との界であつた。臨頓橋は、呉の臨頓館の舊趾にある橋であつて、唐の詩人陸龜蒙の居宅は、その橋の袂にあつたといふ。烏鵲橋は、古への烏鵲館の附近にある橋であつて、白居易の詩に『烏鵲橋紅帶夕陽』とあるのは、これを謂へるものである。臬橋は、閶門内中市大街に架せられた橋で、その側らに漢の臬伯通の居宅があつた爲めに此の名がある。西成橋は、舊呉縣衙門の前の通に架つてゐる橋で、文徵明が『川容浮動石梁明。領略閒情共款行。』云々の詩を口吟んだ處として有名である。古への浪速の津に榮えた大阪は、東横堀、西横堀を初めとして、江戸堀、伏見堀、阿波堀、立賣堀、堀江、長堀、道頓堀、薩摩堀、堀川、曾根崎川等の大小の堀割即ち運河が町の中を縱横に奔つてゐて、昔から水の都、橋の都といはれてゐる。江戸八百八町大阪八百八橋は、決して嘘八百のたぐひではない。私は、蘇州金門外なる南新橋の橋上に立つて、橋下にもやひしてゐる船を眺めてゐるとき、私はゆくりなくも幼時私が住んでゐた頃の大阪の風景を思ひ浮べた。又樂橋の下をくぐりゆく船を眺めてゐるとき、私はふと昔江戸堀川を上下してゐた肥え取り船を思ひ出した。ことほど左樣に、蘇州の風ぜいは、三十年前の大阪に似てゐるのである。私は、最初この類似を蘇州とベニスとの類似ぐらゐに考へてゐた。併し、蘇州の街を歩いてみると、大阪と蘇州との類似は、それだけに止まらず、道路や店のたたずまひにも及んでゐることがわかつた。蘇州の街路は、平たい石を縱に土中に打ち込んで、少々の雨にはぬかるみにならないやうにできてゐるが、斯ういふ道路の作り方は、昔の大阪にもあつた。今でも大阪の露路には、瓦を縱に打ち込んだ所が多少は遺つてゐる。又蘇州の街の商店の物の並べ方、物賣りの荷物、呼聲等は、むかしの大阪の商店や行商人のそれと何處となく似通つてゐる。のみならず、私が驚いたことは、蘇州の民家の庭に夾竹桃の多いことである。夾竹桃は、中國筋を初め、京大阪には相當あるが、關東地方には殆どない。斯やうに夾竹桃が長崎文化の影響下にあつた京大阪、中國筋に多く見られることは、此の花が長崎を中繼として異國から渡來した花であることを推斷せしめるに充分である、室町季世に長崎が港として發展すると同時に、この地に來り住んだ唐人即ち支那人は多かつたが、彼等の大多數は、蘇州附近の人であつた。故に長崎の道路も、古い町は皆蘇州の街路と同じやうに、平たい石を縱に打ち込んだ道路から成つてゐる。又近藤重藏が長崎にきてゐる支那人から聞いて作つた「清俗紀聞」といふ書物には、その書の作成に協力した支那人の姓名郷貫が署記せられてあるが、彼等はいづれも蘇州人である。即ち彼等は、長崎にきても、蘇州にゐるやうな氣持で、道路を作り、橋梁を架したのであつて、長崎名物の眼鏡橋が、蘇州人の寄進に成ることは、長崎市志の明記するところである。故に夾竹桃の如き植物も、蘇州人が初め長崎にもつてきたのが、だんだん内地で流行して上方に及んだものと觀察しなければならない。而して大阪の夾竹桃にして既に蘇州の夾竹桃と

直接的な關係があるとすれば、大阪の道路溝渠と直接的な關係があるものと考へねばならない。元來堀割り即ち運河を開鑿して交通の便に供することは、日本人の更に考へ及ばなかつたことであつて、これは日本人が支那人より學んだことに相違ない。大阪に大小無數の堀割りが造られたのは、長崎に唐人屋敷が出來た天正以後のことであつて、それ以前には全くない。故に私は、大阪人が大阪の町に大小の堀割りを造つたのは、長崎在住の支那人から學んだものであつて大阪と蘇州との類似は、蘇州とベニスとの類似の如き單なる類似にあらずして、文化的交渉によつて生じた類似であると考へるのである。

四

閶門外七支里にある寒山寺は、蘇州の寒山寺か、寒山寺の蘇州かといはれるほど、日本人にはよく知られてゐる蘇州の名所である。寒山寺は遠く六朝時代からある寺で、古くは妙利普明塔院といひ、又楓橋寺ともいつたが、數時の火災に燬け落ちて、古いものは何一つ遺つてゐない。今ある建物は、光緒三十二年、即ち我が明治三十九年に、江蘇巡撫程氏の再建したもので、俗悪極まる建築物である。その何のゆかしさもない寒山寺が、斯くも有名であるのは、言はずと知れた唐の張繼の楓橋夜泊の名吟があるからである。

月落烏啼霜滿天　江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺　夜半鐘聲到客船

の詩は、日本では三尺の童子も口ずさむほど人口に膾炙してゐる。併しこの詩の語句竝びに解釋については、古來異說があつて、衆訟の府となつてゐる。その第一は、月落ち烏啼いて霜天に滿つといふ以上は、この詩は曉の敍景でなければならない。然るに此の詩の結句には夜半の鐘聲客船に到るとあつて、それが夜半のこととなつてゐるのはどうしたことかといふのである。これに對しては、夜半の鐘聲は、蘇州城內承天寺の鐘聲だと說くものやら　いや寒山寺の鐘聲だと說くものやらがあり、又起句を月落ち烏啼くと訓むからいけないので、あれは月は烏啼に落ちと訓まなければならないと言ふ者も出てきた。併し、この詩全體の調子から見て、それが曉の句であることは明かであるから、夜半の二字は、輕く解して夜明けの意とすべきであらうと思ふ。その第二は、承句に見える江楓の二字に關する疑問であつて、宋の龔明之の中吳紀聞には、それが江村となつてゐるといふのである。江楓といふ熟語も、作れないわけではないが、江村の語の方が更に熟してゐるから、私も江村說に左袒する。

清末の大儒兪曲園は、江蘇巡撫程德全の依囑に應じて、寒山寺の客殿に張繼の詩碑を樹てたが、その詩句は、通說に從つて江楓とし、『江楓漁火の四字、頗る疑ふべき有り、宋の龔明之の中吳紀聞、江村漁火に作る。宋人の舊籍實とすべき也。』と斷り書きしてゐる。楓橋、寒山寺を詠じた詩は、この外にも澤山あるが、いづれも張繼の詩に壓せられて、世に知られない。

畫橋三百映江城　詩裏楓橋獨有名
幾度經過憶張繼　烏啼月落又鐘聲

といふ明の高啓の詩を見れば、明代に於いても、寒山寺楓橋は、ただ此の詩の爲めにその名を喧傳せられてゐたことが知られる。名古屋の篆刻家山田寒山は、此の詩にあこがれ、遙るばる蘇州に來て寒山寺に住持すること二年、寺域中から文徵明の書いた張繼の詩碑の斷片を發見した。その碑石は、今寒山寺の客殿の壁に塗り込まれて、大切に保存されてゐる。寒山寺では、此の斷碑を舊碑といひ、兪曲園の碑を新碑と呼んでゐる。この文徵明の詩碑發見が機緣となつて、今の寒山寺は終に再建せられるに至つたのである。文學の力や偉といふべく、山田氏の功や大といふべきである。山田氏は、寒山寺再建後日本に歸國し、蘇州寒山寺の別院を建立せんことを發願し、文人墨客三十餘名の援助を得て、奧多摩の勝地鵜ノ瀨の巖頭に立派な堂宇を設けた。彼も亦明治畸人傳中の人といふべしである。

宣統三年即ち明治四十四年、再建寒山寺の落成式は、いとも盛大に行はれ、日本側からは上海總領事代理浮田副領事、池永蘇州領事代理が式典に參列した。排日のなかつたその頃の日支の交歡は、實に麗しい極みであつた。明治二十年頃、これも排日などいふ空氣の微塵もなかつた時代の話であるが、淸國公使副島種臣伯は、一日此の寒山寺に於いて、支那の詩人墨客と宴集された。支那人は我れ勝ちに即席の詩を作つて誇示したが、蒼海伯は更に作らうとしない。支那人が頻りに促すので蒼海伯はやをら筆を執つて

月落烏啼霜滿天　江村漁火對愁眠

と書いた。支那人は、蒼海伯は詩を作り得ないので、張繼の詩を書いたと思つて、早くも嘲笑の色を浮べた。伯は更に

姑蘇城外寒山寺

と轉局を書するに及んで、席を立つ者すらあつたが、結句は

無。復。鐘聲到客船

と、纔かに二字だけ替へて、靜かに筆を措かれた伯の才藻と膽略とには、滿場俄かに容を改めたといふ。此の話は、畏友倉石武四郞君が、長尾雨山先生から直接聽かれた話ださうだが、私は楓橋詩話の壓卷であると思ふ。

五

蘇州城の內外には、鶴園、怡園、拙政園、西園、留園等の大小の名園がある。城の東北部にある獅子林も、それらの名園中の一であつて、ひとり蘇州名園中の魁たるのみならず、また支那の庭園を代表する名園中の名園である。獅子林は、周圍數町に過ぎない小園であるが、その支那庭園史上に占める地位は、北京の萬壽山のそれよりも大きい。獅子林は、元の畫聖倪雲林の設計に成つた庭園であつて、淸の聖祖康熙帝、高宗乾隆帝は、各六回此の庭園に玉步を運ばれ、その佳景を熱河の避暑山莊及び圓明園に移された。萬壽山、玉泉山、香山及び北京三海の庭園は、いづ

れも圓明園の一部を模したものである。獅子林を倪元鎭の作と目すことには、だいぶ異說もあるやうだが、倪瓚自身手を下さなくとも、倪瓚が設計圖を畫いたといふならば、やはり倪瓚の作として差支へないと思ふ。

紫野の大德寺の庭が小堀遠州の作であるといつても、まさか遠州自身が庭石を轉がしたわけでもなからう。併し現在の獅子林が果して倪雲林の遺構その儘であるかは別箇の問題である。咸豐十年、蘇州が長髮賊の爲めに劫掠せられたときには、この名園も兵火に燬け、僅かに白松と太湖石とが殘存するに過ぎなかつたといふ。現在の獅子林は、上海の染料王貝氏がその廢園を買ひ受け、臺榭を設け、竹木を植ゑて、大いに舊觀を回復したといふが、私は舊觀をぶち毀した點も尠くなかつたらうと考へてゐる。

此の林泉を獅子林又は獅子林園と名附けた所以に就いても諸說があるが、獅子座といふ佛語から出たといふ說が本當らしい。何となれば、此の林泉は、もともとその南隣に今も存在せる獅子林寺の庭園であつて、此の庭園の造築を發議した主は、その寺の住職であつた天如禪師であるから、此の林泉に抹香臭ひ名前がついてゐるのは當然だといへる。

獅子林は、複雜な形をした池と、太湖石で作り上げた築山（つきやま）とから成る支那式庭園で、築山には松栢、脩竹を植ゑ、池には蓮花を浮べてゐる。築山の奇巖怪石は、影を池に投じ、池畔を廻る曲路は羊腸として庭內所々に建てられた亭榭に達する。その迷路を行けば、獅子峯、含暉峯、吐月峯、立雪堂、臥雲堂、問梅閣、指柏軒、玉鑑池、冰壺井、修竹谷、小飛虹、大石屋等の諸勝がつぎつぎに展開し、身の閙市中にあるを忘れるのである。

次に乾隆帝の遊獅子林の御製を擧げて、庭內の敍景にかへる。

早知獅子林　傳自倪高士　疑其藏幽谷
而宛居閙市　肯構惜無人　久屬他氏矣
手蹟藏石渠　不忘賴有此　詎可失目前
大吏稱未飾　未飾乃本然　益當尋展齒
假山似眞山　仙凡異尺咫　松掛千年藤
池貯五湖水　小亭眞一笠　矮屋肩可掎
緬五百年前　良朋此萃止　澆花供佛鉢
淪茗談元髓　未擬泉石壽　泉石况半毀
西望寒泉山　趙氏遺舊址　亭臺乃一新
高下煥朱紫　何幸何不幸　誰爲剖其旨
似覺凡夫云　悪愧雲林子

抑も支那の庭園は、上古の靈臺、靈囿に淵り、六朝に盛んとなり、唐宋に至つてその盛極つた。詩經には靈臺、靈囿の語が見え、晉の葛洪の西京雜記や、北魏の楊衒之の洛陽伽藍記には、庭園のことが盛んに見えてゐる。支那庭園の最も大規模なるものは、宋の徽宗皇帝が國都開封に築造した艮嶽であらう。艮嶽は、都の艮（うしとら）即ち東北隅に築かれた假山、即ち人工の山であつて、全景を杭州の鳳凰山に象り、飾るに花石を以て

し、廣袤十里に亙つた。此の豪華なる庭園の有樣は、張淏の艮嶽記に詳記せられてゐるが、それには、山林高深、千巖萬壑、麋鹿群を爲し、點綴する樓館臺殿記（しる）すに勝ふべからずとある。艮山造築の材料である花石は、多く江浙の地に產したから、徽宗は、蘇杭應奉局なる役所を蘇州に置き、寵臣朱勔（シュベン）をその長官として花石の徵發と運搬とに當らしめた。朱勔は、蘇州の人で、その邸宅は、盤門內孫老橋の附近にあつた。盤門內にある瑞光寺の塔は、朱勔の獨力によつて建立せられたものである。今も蘇州に名園が多く存在するのは、さうした因緣によるものではなからうか。前述の如く、室町將軍の使僧たちは、北京に赴く途中、屢々此の地に立寄つたから、此等の名園は、彼等使僧たちの眼にも映じたらうと思ふ。京・鎌倉の五山を初め、鎌倉室町の時代に創建せられた禪宗の寺院には奇石怪巖を配置した幽邃な庭園のあるのを原則とするが、此等の庭園が元明に於ける支那庭園の影響下に成つたことは覆ふべくもない。金閣鹿苑寺、銀閣慈照寺の庭には、獅子林に見る如き庭內諸勝の名があり、又太湖石趣味を聯想せしめる如き岩組みがある。私は、獅子林園內を遊歩して竹林の前に出たとき、思はず銀閣寺の入口が頭に浮んだ。金森宗和が造つたといふ龍安寺の石庭は隨分有名であるが、虎の子渡しといふ名も、獅子林と一脈の聯想が通じてゐるやうに思ふ。虎も獅子も共に百獸の王であるからである。外山英策氏の室町時代庭園史は、日本庭園史中の白眉であるが、日支造園術の比較研究については盡さざるものがあるやうに見受けられる。

六

滬寧鐵路によつて上海南京間を往復する人々は、虎邱の塔か北寺の塔を遥かに展望して蘇州に近づいたことを知る。蘇州には七塔といつて、古來七つの有名な塔があるが、そのうちで最も高いのは、此の北寺の塔である。北寺は、蘇州城の北方にある寺であつて、その本當の名は、報恩講寺といふ。光緒二十五年、斂曦禪師の撰述にかゝる蘇州府報恩塔寺志によれば、此の寺は、吳の大帝の赤烏年間、孫權の乳母吳氏の創建に係り、その塔は、梁の武帝の時代に、正慝といふ高僧が初めて建立したものである。その後、此の寺は、數回の火災に見舞れたが、長髮賊の亂のときには、幸に災害を免れた。故に今見る九重八角の北寺塔は、明の萬曆年中の建築であつて、江南佛塔の代表と爲し得る。私が蘇州に着いた日は、秋雨そぼ降る九月の初であつたが、煙雨の中に霞んで見える北寺の塔を城外から眺めたとき、私は卒然として

千里鶯鳴綠映紅　水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺　多少樓臺煙雨中

なる古詩を口吟んだ。蘇州地方は、所謂江南の澤國であつて、大氣濕潤、雲煙は常に山岫に湧き起つて山谷に去來する。此の煙霞靉靆、剩水殘山の佳景を出現する中に、一塔煙雨の裡に隱れるかと思へば、一塔忽ち雲表に現はれる景趣は、まことに千年煙水の故鄉ならでは味はれない景趣である。

七

支那には、生れは蘇州、生活は廣州、死ぬなら漳州といふ諺がある。同じ生れるなら蘇州で生れたいといふのは、蘇州が美男美女の産地であるからである。美男美女に生れて異性からちやほやせられるのは、慥かに人生幸福の一つである。生活は廣州といふのは、廣州即ち廣東が支那で一番安くて旨い物の食へる所であるからだ。死ぬなら漳州で死にたいといふのは、福建省の漳州が楠の産地で、楠の棺桶が一番やすく買へる所であるからだ。日本でこれに似た諺を求めれば、京の女に江戸のはりを持たせ、長崎の衣裳をきせて、大阪の揚げ屋で遊びたいといふ諺であらうが、日本のは支那のより遙かに贅澤だ。それはさて措き、蘇州は、風景の絶佳と泉水の清澄をもつて天下に冠たる所で、その影響か、蘇州の人は慥かに色が白い。色の白いは七難かくすといふから、色の白い蘇州人に美男美女が多いのは、尤もだといへる。北京の狹斜の巷前門外では一等を小班、二等を茶室、三等を下處といふが、小班は又南班と北班とに分れてゐる。南班といふのは、南方の妓女のゐる所であり、北班といふのは、北方の妓女のゐる所であるが、北班の妓女は、その出生を問はるれば、必ず天津と答へ、南班の妓女は、蘇州と答へる。事ほど左樣に、蘇州は南方美人の淵叢であつて、蘇州生れでない妓女は、所謂場違ひ物の一種である。故に南班のことを一に蘇班とも稱するのである。又前清時代前門外の百順胡同には、相公堂子なる男色の市場があつたが、そこに艶色を鬻ぐ相公連中も、蘇州出身の者が多かつたといふ。支那の俳優は、皆相公出身といふわけではないが、相公はすべて俳優たるべく訓練されたものであつた。從つて支那の俳優には、相公出身のものと然らざる者とがあつたわけであるが、花旦即ち色女形や、青衣即ち立女形には、相公出身者が多かつた。名優梅蘭芳が相公出身であることは、人の普く知るところであるが、彼女いな彼は、北京の人であつて、蘇州の人でない。併し、彼の祖父は、蘇州の人であり、彼の父は相公にして有名な北京の相公堂子の主人たりし人である。故に梅蘭芳は、蘇州の男に父祖三代北京の研きをかけたもので、その尤物たるまことに所以ある哉と稱すべきである。又これを歴史に徵するに、蘇州出身の美女は、その例に乏しからず、吳姬越女の名は、古來支那の文學の上に鳴つてゐる。蘇州美人の元祖ともいふべきものは、吳王夫差を溺れしめた西施である。西施は元來越の女であるが、その美女としての活躍は、吳王の宮殿に於いてであるから、これを吳姬と稱して差支ないと思ふ。吳王夫差は、絶代の美女西施に心奪はれ、姑蘇城外の離宮姑蘇臺の西方に更に館娃宮を營み、晝夜宴飲を事とした爲めに、國政紊れ、國力消耗して、終に宿敵越の爲めに亡ぼされた。此の故に西施は傾國の美姬とも傾城の美女とも呼ばれる。日本で遊女のことを君傾城といふのは、やはり吳越春秋が都人士の常識となつてゐたからである。江戸時代には、吉原の一流の遊女を傾城といひ宿場の遊女は、これを飯盛り女といつた。是れ

飯盛りも陣屋ぐらゐは傾ける

といふ句のある所以である。蘇州の西南十粁のところに聳えてゐる靈巖山には、西施が琴を彈じたといふ彈琴臺がある。覆水盆に返らずといふ譬へで有名な漢の朱買臣の妻も、亦蘇州美人の一人である。彼女は容色を恃んで夫を蔑視する風があつたが、會々惡い男にそばから焚きつけられ、夫のとめるのも聽かないで、當時讀書三昧に耽つてゐた朱買臣に離婚を迫り、同じ町の色男の許に走つて愛慾の生活を營んだ。その後數年を經て、朱買臣は螢雪の功酬ゐられて首尾よく官吏となり、會稽の太守に任ぜられて、行列美々しく蘇州の町へ繰り込んできた。この時前に朱買臣に離婚を迫つた女は、行列のそばにまろび寄つて復緣を懇願したが、朱買臣は覆水を盆に返さしめてその復緣を拒んだ。馬前潑水なる支那劇は、卽ち此の事實を脚色したものである。蘇州城外虎邱の中腹に眠る眞孃も、また蘇州の代表的美人の一人である。眞孃は姓を胡といひ、もと良家の娘であつたが、少にして父母を失ひ、淪落して花柳の巷に人となつた。美人で上品で、おまけに風雅な嗜みがあつたから、忽ち嬌名を江湖に謳はれ、彼女の身邊には、豺狼が牙をむいて集つた。言ひ寄るお客の中に王蔭祥といふ金持ちがあつたが、彼は先づ眞孃の遣手婆を買收し、搦手より眞孃の身邊に迫つた。進退谷つた眞孃は、悲痛な書き置きを遺して自殺してしまつたが、事件はすぐに滿城に擴がつて、城民の同情を博し、虎邱の一隅に葬られ、その上に亭を建てられた。後世詩人墨客の眞孃を弔ふ者頗る多く、詩文は積つて一卷の書を爲すまでに至つてゐる。

明末清初の勇將吳三桂の妾も、また蘇州美人の最たるものである。三桂の妻陳圓圓はもと蘇州妓館の名花であつて、所謂細腰爪容、美人中の美人であつた。嘗つて船遊びですれ違ひざまに陳圓圓の顏を見た一貫公子は、あまりの美貌に心を奪はれ、河中に顚落したといふから、國色無雙であつたことは、殆ど疑なきに近い。吳三桂が主命を奉じて山海關に赴き、清の大軍を防いでゐるうちに、陝西に起つた流賊李自成は、彰義門より北京に亂入し、明の最後の皇帝思宗を景山で縊れさした。吳三桂は山海關にあつて此の報に接したが、彼はその軍を反さうとはしなかつた。尋いで吳三桂の許には、陝賊が彼の父を殺害したといふ報知が達したが、彼は動かうともしなかつた。然るに李自成が三桂の愛妾陳圓圓を捕へたといふ報知が山海關に達するや、吳三桂は怫然として色をなし、直ちに清軍と和を講じて、逆に北京を攻め、李自成を破つて陳圓圓を取り戻した。その結果、吳三桂は雲南に封ぜられ、清朝は三百年の社稷を保つことができた。されば西施の一媚は國を亡ぼし、陳姬の一顰は國を興すとでもいふべく、美人の力の大なるを知るべきである。關西のおまへん言葉を女が使ふと馬鹿に色氣があるやうに、蘇州言葉を支那の婦人が使ふと非常に妖艶に聞えるやうである。故に支那の芝居では、婦人が艶言を發する際には、わざと蘇州訛を用ひることがある。これを蘇白といふが蘇白即ち蘇州せりふであつて、むかし蘇州では蘇白のみで話をする芝居もあつたといふことである。

（筆者は建國大學教授・法學博士）

現實主義の諸問題

〔文化時評〕

桐 天吉

浪花節と現實主義

今から十年あまり以前「文學の大衆化」といふことが切りに問題にされたことがあるが、その途上で必然的に次のやうな疑問が現れた。

ラジオの反響などで數字的にも證明されてゐる通り、大衆はまことに浪花節を愛好してゐる。だとすれば我々文學者は浪花節をもまた多く作らねばならないのであるか？この問題は一應眞面目に提起されたのであるが、殆んど大した討論をまつ事なしに否定されてしまつたやうである。僕は當時の論議をあまり詳しく知らないが、傳へ聞くところと、僕の想像とを交ぜ合せて推察するところ、その否定の理由は凡そ次の樣なものであつたやうに思はれる。

一、浪花節は低俗な語り物の一種なのであつて藝術ではない。だから、大衆教育の一つの手段として我々が浪花節をもまた作るといふことはあるし、また作らねばならないかもしれないが、それは文學藝術の運動そのものではなく、從つてまた當面の問題たる「文學の大衆化」といふことは關係のない話である。

一、文學の大衆化といふことは、文學の低俗化を意味するものではない。あく迄も文學の藝術性そのものを以て大衆を把握してゆかうとするものである。

一、我々の文學方法の根本規定は嚴正なる現實主義に立脚するといふことである。浪花節の演出方法は現實主義的でない。

——（現實主義の諸問題）——

僕もまたかういふ考へ方に大して抗議を申し込まねばならぬ程浪花節を愛好してもゐなかつたし、論議自體もさして誤つてゐるとは考へなかつた。だがその後五六年たつて、やたらに浪花節のレコードを聞く機會を與へられてゐるうちに、前記の意見の或部分は多少の訂正をして貰はねばなるまいといふことを考へ始めるやうになつたのである。かうした再考の契機を直接に提供したものは酒井雲吹込むところの「櫻井の驛」とか何とかいふ題のレコードであつたが、その他の天中軒雲月（今の女流雲月にあらず、先代の男の雲月である）とか、新しいところで木村友衛とか廣澤虎造などといふ連中にしたところで、それぞれに捨て難い味と魅力とを持つてゐる。僕はここで浪花節は偉大なる藝術であるといふ禮讃を始めようといふ料簡はないが、ただ、非常にいい浪花節を聞いたために「現實主義」といふものへの、從來の狹い限定的な考へ方から一歩前進せしめられたといふ告白を物語りたいのである。

固より從來浪花節といふものが藝術と呼ぶべくは餘りに低俗な語り物であつたし、現在なほ低俗であるといふことは的歴たる事實であつて異論の餘地はない。だが、浪花節を低俗ならしめてゐる最大の要件は、その臺本の非藝術的低劣さにあるのであつて、優れたる語り手の豪放優艶莊重哀韻切々として變轉極まりなき至藝に接する時は、あれで却々强烈な感動効果をもつてゐるものである。酒井雲なんぞも今は殆んど駄目になつてしまつたが、僕が感心したレコードの時代には、浪花節特有のメロデイの中に、謠曲、長唄、新內、義太夫、常磐津等のいいところを巧みに取り入れて、語り物としての節づけに殆んど最高と思はれるやうな渾然として而も奔放自在な一境地をつくりあげてゐた。

ところで臺本の非藝術性は、すぐれたる藝術家の良心的創作によつて解決され得る可能性があるとしても、問題はあの演出法の非現實性である。獨得の抑揚をつけた節廻しといふものは、我々の普通の物語りの仕方及び會話の中には絕對にあらはれない。我々の現實の生活過程に存在しない語り方の形式を以てしては、我々の生まの生活又は生活感情といふものは現實的効果に於て表現され得ない。

——「地」の文句に節をつけることはまだしもとしても、生きた會話をさへも、長く引張つた節廻しでやつてのける場合の多い浪花節であつてみれば、かうした否定的意見が出るのも一應尤もな話である。

だが、節のついてゐない現實の物語りや生きた會話を、節をつけて表現すれば現實的でなくなるといふ論法は、實は平板な自然主義的現實主義論であつて、ありの儘をありの儘に表現するといふ、馬鹿の一つ覺えに類する抽象的な常識論である。而も論理が抽象論上に固着するといふことは、それ自體、具體的なるべき現實主義の基本規定への自殺的逸脱ではないか。

本來節のない言葉に節をつければ現實的でなくなるといふ飛躍的論理は、恐らく語り物としての浪花節と演劇とを混同したところから跳ね出したのではなからうか。なるほど演劇に於ける現實主義の本道からゆけば、歌舞伎(註)だとか歌劇だとかいつたものは、その發生當時の歴史的意義は別として今日では邪道であらう。

(註) 歌舞伎劇とは何をさしていふかといふ段になると學問的には稍々厄介であるし、歌舞伎劇の中でも鶴屋南北や河竹默阿彌等の作品の中には非現實主義とはいへない多くの傑作もあるのであるが、茲では主として淨瑠璃を地としたもの、もしくはそれに類したものだけを對象として考へて頂きたい。

然るに浪花節は演劇とは全くその演出形式を異にし、藝術としても別箇のジャンルに屬するところの語り物である。言葉に節がつくことによつて現實主義的でなくなるのなら、世の中の歌といふ歌は悉く非現實主義の烙印で押捺されねばならないであらう。從つて浪花節は現實主義的藝術形式ではあり得ないとする理論は、この限りに於て甚だ基礎薄弱であるといはねばならぬ。そこで僕は、表現の非現實的形式といふものと藝術に於ける現實主義的方法といふものとの同異または相關を、以下、別な事例をとりあげながら考へてみたいと思ふのである。

生花と現實主義

花には各々特殊な風情と持味があるので、どの花を一番好むかといふ質問には實は答へられないのであるが、僕はさうした質問を受けた場合「水仙」と答へることが多い。これはどの花よりも水仙が一番美しいとか上品であるとかいふ決定的な價値判斷または主觀的愛着を言ひ表すものではなくて、好きな花として何時も手近な記憶箱から摑み出されてくるといふだけのことである。

とに角僕は水仙が好きである。それも公園の花壇や、日本式庭園の苔石の蔭から斜めに咲き出てゐる、生えたまゝの水仙よりも、床の間の水盤に一二本生けられてあるときのそれ

が好きなのである。

活花にも色々の流儀がある。和歌や連歌や一般生活の形式上にも矢鱈煩瑣な式目を制定して、一切を人工的な型の中に固定せしめようとする風潮の一つの頂點をつくり出してゐた室町時代に、武家の茶の間から發生した遠州流などは、あくどい迄に花や枝ぶりを捩ぢくりまはして、自然生の姿容とは全く別なかたちを創作する。一方封建的諸秩序の典型的な完成期ではあり乍ら而もなほそこに封建的なるものの内部崩壞の契機を成長せしめつつあつた江戸時代の中期に、封建的制約そのものの中に町人的寫實主義を追求してゆかうとする努力の一つの現れは、活花の世界では古流を生み出した。古流の「古」の意味は、同時代に於ける賀茂眞淵等が唱へた萬葉時代以前を憧憬する「復古」の「古」であつて、それは人情の自然を取り戻さうとする思想であり、名乘りは「古」であつても歴史的な性格に於ては新しい意義に輝くものであつた。活花の古流は、むしろ餘りに頼りないと言はれる位に枝ぶりなどを矯める技巧を凝らさないのである。

だがよし程度の如何はいかにもあれ、生えてゐる草や木の任意の部分を翦り取つて任意の形に生けるのだから一應それが植物本來の生態に對して不自然であることは否めないかも知れない。「如何なる巧みな活花も、それの自然な姿には如かない」といふのが自然主義者の古臭い空念佛である。自然主義者の、自然なるまゝの姿をのみ美なりとする觀念は、これを自己本來の欲求にかへりみて、自己以外からの一切の干渉拘束を排除せんとする個人主義的な觀念と結びついてゐるものであり、彼等は、自然なる姿を自然なる情感に於て美と受取る場合の外に、イデオロギー的にそれを美なりと解釋せねばならぬといふ、往々にして不自然な理性的な受取り方をする場合も多いのである。(尤も感情といふものはその内に思想や意志を契機として含んでゐるものであり、その思想的特質が美的感動を自然的に規定し特質づけるといふことも當然なのだから、彼らの自然主義的美學を強ちに不自然呼ばはりに片づけ去る事は愼しまねばならないが)

さて水仙の美しさといふものを、それの自然に生えてゐる姿よりも寧ろ水盤に生けられた姿の方により強く感ずるといふ者は、恐らく僕一人ではあるまい。若し現實主義といふものが、現實的なありの儘を表現するといふことであるとすれば、水盤に生けられた水仙は明かに非現實的な作品である。だとすればこの美しさは、水仙ならざるものの美しさなのであらうか。

活花の方法論は、野や山に生えてゐる植物の美しさを、座敷に坐つた儘で眺めたい等といふずぼらな精神から發してゐるものでないことは明かであらう。それは各植物の持つてゐる本質的な美しさを、他の一切の偶然的に介在する夾雜物から解放して、本然の價値一杯に發揮せしめんとする精神から生れたものである。而もこの精神こそが藝術精神に外ならないのではないか。遠州流などが今日のインテリから非難されるのは、それが本來の美しさを生かすといふ域を乘り超えて餘りに人爲的な概念的類型美の形骸を弄し過ぎるからである。

現實主義とは、在るものを唯ありの儘に再現することではない。在るものの中の本質的な美を、各々の表現手段の特質に相應した方法を以て、より的確に、より效果的に客觀的に再生産せんとするものである。

現實主義を現實主義たらしめるものは、その表現手段の現實性(註)にあるのではなくて、表現内容たるべき美的感動の現實性にある。生ける現實の中に把握され、生きゆく現實世界の方向と共に生きて居り、現實の大地を踏みしめて生きぬいてゆかうとするものの魂の糧となるべき感動美を描き出すことが藝術に於ける現實主義である。かゝる現實的なものとしての表現内容は、自己に即した表現形式を必然的に要求するものではあるが、それは必ずしも櫻を表現するには櫻の枝と花びらを以てせねばならぬといふ式の機械的な方法論とは無關係である。

茲で再び我々は浪花節の話に戻る事ができる。篠田實という餘り優れてもゐない男をして有名ならしめたのは例の「紺屋高尾」の一曲である。是は周知の如く「遊女はお客に惚れたと言ひ、お客は來る氣もないのに又來るといふ」嘘と口說(くぜつ)で固めた色里に於ける、色里らしからぬ人間的眞情の美しさに結ばれた戀物語を脚色したものである。僕は決してこの一曲が現實主義的であると言はうとしてゐるのではない。ただ、感動の現實性と表現の非現實性との關係を説明するための一例として、誰でも知つてゐさうな部分を引合に出す迄の話である。例へばこの浪花節のヤマとなつてゐる所の文句、即ち紺屋の若い衆の木訥な眞實に動かされた遊女高尾が、自分の戀の眞實を説明するとき「わしもやつぱり人の子ぢや、情に變りがあるものか」といふところがある。當時の格式の高いお職女郎は寢言にもこんな男みたいな亂暴な言葉は使はなかつた。吉原には、遊女の方言を矯めるためにちやんとやかましい廓言葉(くるわ)なるものが制定されてゐたもので、恐らく高尾女史も「わちきも矢つ張り人の子ざます、情に變りはありんせ

ん!」とか何とか言つたものに違ひない。況んや篠田實みたいに節をつけたり長く引張つたりなぞしなかつたことは勿論である。にも關らず、これが我々に訴へてくる力は、たとへ水谷八重子の嬌かしい聲で、典型的な廓言葉を以て語られるよりも遙かに感動的なのである。

茲ではこれ以上浪花節論をやつてゐる譯には行かないし、またこれ以上、餘りに初學的な藝術講座を開筵し續ける必要もない。この餘りにも碎け過ぎた嫌ひさへある漫談的評論の中から、現實主義的表現方法への、局限された窮屈な概念からの解放の道を、擧一明三の慧智を以て感得して頂けばよいのである。而して問題は更に茲から具體的な眼前の問題へと進展せしめられる。

方言と現實主義

方言を使つた文學は昔もあつた。その歴史的な穿鑿は省略するが、それにしても方言文學が殊更に氾濫し始めたのは所謂農村文學といふものの盛んな出現に伴つたものの樣である。方言文學論といふ一つのテーマを眞正面から取上げる段になれば、それだけでも一つの大論文になつてしまふし、日本内地に於ける方言文學の意義もしくは功罪といふものは日本的な觀點から論ぜられねばならないのだから、茲ではただ滿洲に於ける日系文學中の方言問題を中心に、簡單に觸れるに止めたいと思ふ。

滿洲の日系文學中で最も多く方言を用ゐてゐるのは開拓地文學である。僕は目下哈爾濱日日新聞に連載中の各省別短篇小説の當選作を非常に樂しみにして愛讀してゐるが、その中の伊藤信雄氏の「拓地の子」の如きは、大半が會話で、しかもそれが馬鹿正直な青森方言で終始してゐるために、讀み辛くて甚だ往生した。それでも我々日系にはどうにか斯うにか分らん事はないが、非常に苦勞して而も標準語だけによつて日本語を勉强した鮮滿系等の人達には恐らく薩張り何の事か分らないに違ひない。

滿洲國の國語教育は日本語の普及に一つの重點を置いて居る。その線に沿つて日系文學者は日本語の文學作品を通じて新しき民族協和の文化建設の活動に參加しなければならないのであり、そのためには標準語の中でも出來るだけ分り易い言葉を選んで使ふといふ心遣ひが必要であらうのに、同じ日系にさへも難解な方言を無制限に使ひまくるといふ事は、問題でなければならぬ。分り易い日本語を使ひ、語學力の豐富でない鮮滿系に愛讀され得る文學を生み、その文學の魅力を通

じて彼等の日本語そのものへの親しみと研究熱を誘ひ出し得るとすれば、それが軈て日本文化全般の正しい姿の彼等への理解滲透を促進する力は如何ばかり大きく、ひいては日本文化を指標としての新しき滿洲文化の渾然たる創造への展望はどんなにか間近き希望に輝くことであらう。我々は日系だけを對象とするやうな態度を以て文學を生産してはならないのである。

開拓地の子供達は、それぞれの方言まる出しで、それに片言の滿語など混へた言葉で會話してゐる事は事實であらう。だからといつて、開拓地をありのまゝに描く爲には、ありのまゝに使はれてゐる方言を以て會話させねばならぬと考へたら、これが即ち機械的な現實主義の惡弊なのである。ゾラは寫實主義の標本の樣に言はれてゐるが、彼の小説はフランス語で書かれて居り、勿論登場人物の會話もみなフランス語である。ところでそのゾラの小説を日本語に飜譯した場合、それはその瞬間から寫實主義の小説ではなくなるだらうか。

國家の文化政策、その一つとしての言語教育は、一切方言の標準語への統一を目標として居る。元來あの狹苦しい日本にさへ、あれだけの雜多な方言が、殆ど縣を異にするごとに異つた形で存在してゐるといふことは、言語はそれ自體時間的には不斷に發展變化してゆく性質をもつてゐるのに、空間的な交流手段が發達してゐなかつたことと、特に封建的な各城各藩の割據的鎖國主義によつてその交流が愈々妨げられてゐたからである。今日出版は盛んになりラジオも普及し、事實各地方への標準語の日常語としての滲透には大いに見るべきものがあるのである。時代の先導者たるべき藝術家が、この言語文化の歴史的進展の方向を先行することなしに、狹少な郷土的愛執に捉はれて、國民藝術たるべきものを不必要に地方藝術として局限することは時代錯誤も甚だしいといはねばならぬ。

第一僕は熊本縣人であるが、標準語で熊本地方の生活を描かれたからといつて、それが熊本らしくもないと思ふ事はないのに、熊本方言をやたらに使用してある場合は、熊本縣人のくせに標準語より遙かに讀み辛いのである。況んや他地方の難解な方言文學となれば、言葉の意味を解釋する方に氣をとられて、まとまつた藝術的感銘なんかとても受け取れはしない事が多いのである。

浪花節を語り、活花を語り、方言を語つた。題目の取り合せとしては奇妙であるが、言はうとしたことは一つである。

駈け足の小説評

紙數がなくなつて、創作評は簡單に片附けねばならなくなつた。本誌六月號、晶埜ふみ氏の「鶯」は、ある二人の滿系女優の結末あはれな挿話を中心に、在滿日系婦人の哀愁やら、滿系婦人から見た日系婦人の生活態度への端的な批判やらを點綴し、女優なる職業の持つ弱さと、女なる者の負はされてゐる運命的な弱さとを、舊き滿洲的家庭―社會の風習の封建的な殘酷さを背景にして詠嘆してある。

粟虹は饒舌な日記のやうに邉もなく話しつづける。

「それからね、研究所のひとのうちに遊びに行つたけどいやでした。日本の女は笑ひませんね。奥さんはほんとは綺麗だけど一ぺんも笑はないの。こんな顏」

さう云ふと、暮れかけた弱い陽がうろうろする街角に立ちどまつて、鬼瓦のやうな表情をしてみせた。瑞枝は自分のことのやうに、虚をつかれる思ひがした。

「さあ、もうその顏おやめなさいよ」。

他愛なくどちらも笑みくづれた。

鋭い。そして巧いものだと感心した。だがこの挿話の前後にある、これとはそれほど直接には關係深くない滿劇舞臺の見物の説明は隨筆めいて稍や冗長であり、壯介との別れの件りや、新京の停電やそれに伴ふ斷水等の話はむしろ取つてつけた感じがして挿話との融合統一を缺いで居り、最後の、新月細き夜空に鶯が亂舞するといふ幻想などは何のためにくつついてゐるのかわからない。

戈禾氏の「大凌河」は大作である。面白くもあり達者でもある。だが、主人公の土地への愛着が、祖先傳來であること又はそれが生活手段の唯一の財産だといふ點からだけ説明されてゐて、勤勞する者の、土地と人と一體になつた農民的本能から、いくら高くても賣らぬと言はせてゐないのが物足りなかつた。なほ又、主人公が行方不明の六年間何をやつてゐたかが明瞭でなく、從つて彼がその六年間の中にどうしてやくざな賭博根性から更生したのかも分らず、何のために彼が郷團から襲撃され捕縛され投獄されねばならなかつたかも、想像がつくやうでゐてハツキリ分らない。さうしたことが、この優れた小説を、どうにも齒搔ゆくしてゐるのである。

なほ五月號の「新天地」に鈴木啓佐吉氏が「蒼人」といふ注目すべき小説を發表してゐるが、殘念ながら茲で諸君の注意を喚起しておくに止める外はない。

陸軍軍官學校訪問記

★ 文　大内隆雄
繪　赤羽末吉 ★

新京の郊外、それも市街からはだいぶん遠い場所に軍官學校があるといふことは知つてゐた。

頃日、私は私の職場に服部隆造氏の訪問を受けた。知る人もあらう、服部氏は、あの支那の新しい小說、巴金の「家」を日譯紹介した人である。（新京にゐる人で、この服部氏と、「官場現形記」の岡本武德氏とが近來の飜譯當り屋だ――と言つては卑俗めくが、別言すれば、多數の讀者を獲得し日滿支文化交流のために大いに貢献したといふことなので ある。――）

その時に、服部さんが言つたのであつた。

「私の勤めてゐます學校はだいぶん遠い所にありますんでねえ。私たちは每日、學校のバスに迎へられて出掛けて行き、そしてまた歸りも送つて貰ふんですよ。ほかにはちよつと交通の便がありませんでねえ……。」

そのやうな話を聞いてゐたものだから、私にとつて、『軍官學校』はますますもつて遠い、遙かな存在であつた次第である。

こゝまで書いて、私は一つの事を思ひ出した。それは可成り以前のこと、鷲崎さんが治安部にゐた頃の話である。一舊友から私は、軍官學校で滿語竝びに支那事情についての講義をやるやうな人を欲してゐる、誰か適任者はゐないかといふ話を聞いたことがあつたのだ。この友人の內心では、私に向つて「お前行かないか、どうだ！」といふやうな意味合ひもあつたのだと思つた私だつた。――若い人たちを敎へ導くといふ仕事の大事さは充分知つて居り、自分でもさういふ仕事は本當にやり甲斐のある仕事だと思つてゐる私ではあつたが、何としても「軍官學校」といふのは私にはいかめしく思はれ、自身の不適任は言ふまでもないこと、外に適格者も思ひ浮ばず事を糊塗するほどの返事しか出來なかつたのであつた。――そのやうな因緣も、思ひ出せば、あるわけだつた。――

その軍官學校――正しく言へば陸軍軍官學校へ、私達は機會を與へられて、參觀に赴く

こととなつた。同行は赤羽畫伯と大西記者。

五月某日――

早朝、私達は南廣場に集合、學校へ向ふバスを待つた。南廣場に家の近い私はよかつたが、同行兩君は朝の五時には起きて出掛けて來たといふことであつた。

八時過ぎ、拉拉屯の學校に到着。すでに授業は始まつてゐた。

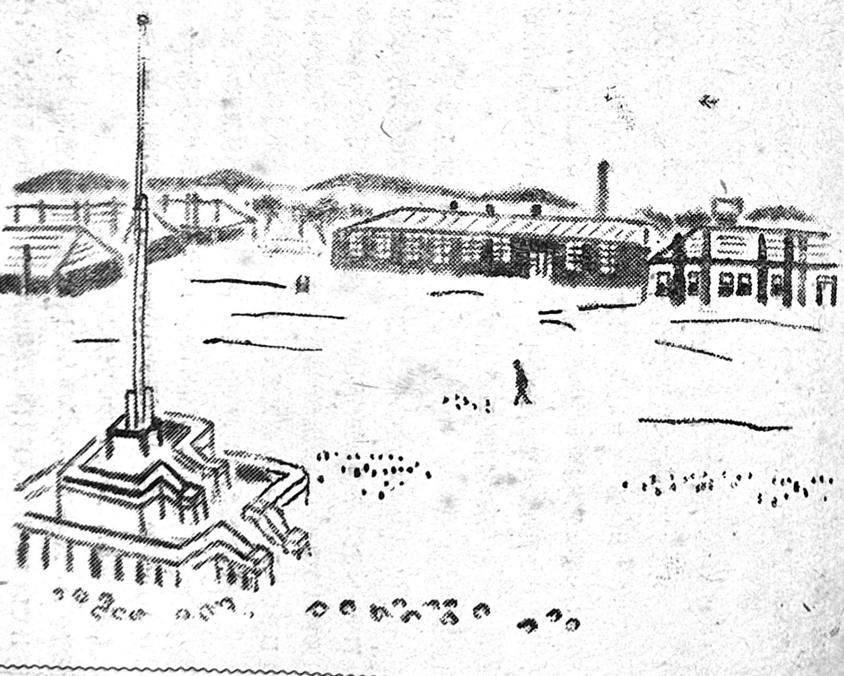
拉拉屯と言へは、新京特別市淨月區に屬し新京驛から東南へ約十三粁、京吉國道に沿ふた場所である。その一帶は高臺となつて居り、振り返れば遙かに新京の街が俯瞰される。また東方には、眼近かに石碑嶺の小山が見える。この廣い展望を持つた、滿洲的な雄大な景勝を持つてゐる場所にこの學校が建てられたのは意味あることであらうと考へられるのであつた。

私達は直ちに高級副官にお目に掛り、學校の事情について概略の說明を受けた。

本校が發足したのは康德六年である。まだ歷史の極めて新しい學校なのだ。

もともと建國以來、國軍の中堅幹部は奉天の中央陸軍訓練處に於いて養成せられて來た。しかし時勢の進展は、國軍の一層の整備强化を必要とするに至つた。こゝに於いて、軍隊の楨幹たる軍官（將校である。つまり士官と言ふに同じい。軍官學校すなはち士官學校なのである。）を養成するために、滿洲國として全く新しい制度たる陸軍軍官學校が創設されたのであつた。

この學校の一つの特色は、日系、滿系兩方



▽校庭の全景―（本部の窓より）―

の生徒を收容してゐることである。また曾つての中央陸軍訓練處（今は陸軍訓練學校となつてゐる。）との本質的な違ひは、こゝではすでに軍隊に在つた者を容れるのでなく、中等學校を卒業した年少氣鋭な若人を入學させ日本の豫科士官學校、士官學校のそれに則つたところの充分に徹底した教育を施すのである。したがつて、中間に隊附勤務も行はれ、また日本の士官學校、陸軍經理學校、陸軍航空士官學校へと進む途もひらかれてゐる。

現在第四期豫科生徒を迎へた段階に在り、本年十二月には第一期生が本科を卒業する豫定である。

高級副官のお話で、私達はこのやうなことを知つた。また、學校の校舍その他はなほ建設の途中にあること、教授陣なども日、滿系雙方によつて成つてゐること等。

校門を入つて以來、私が感じたのは、何處を見ても清潔な、整然たる感じだといふことだつた。校舍が新しいといふことも無論あるしかしそれらを超えて、其處にはやはり一つの學校の行き方、精神といふものがおのづと現はれてゐるのだと思へるのだつた。清楚な美しさである。

副官室にゐると、またやはり一種の「學校的な氣分」がするのだつた。——實は私も私の職場にある養成所へ講義を頼まれ出掛けて行くので、近頃はさういふ氣分を味はつてゐるのである。——壁には何枚もの地圖が掛けてある。一箇月間の行事表がある。いろいろな人が出入りする。何かの點數の調べ合せが行はれてゐる。——私には一種懷かしい空氣なのであつた。

窓から見やる校庭もまた清楚な感じだ。その向ふは生徒舍。その傍らに若い木が植ゑられてゐる。恐らく生徒たちが自ら植ゑたものであらう。春の風が砂塵を捲いて行く。……ふと校庭の片隅に、私は黄色いたんぽぽの花を見附けた。それだけが優にやさしい風情である。……喇叭の音がひびく。黒い鳥が舞つて過ぎた。

私達は校長南雲親一郎閣下にお目に掛つた其處だけ「叩クニ及バズ」と貼り紙した校長室の扉を排して入ると、右の方に神棚がある閣下は立つて私達を迎へられ、私はちよつと頭を下げるのにまごついた。

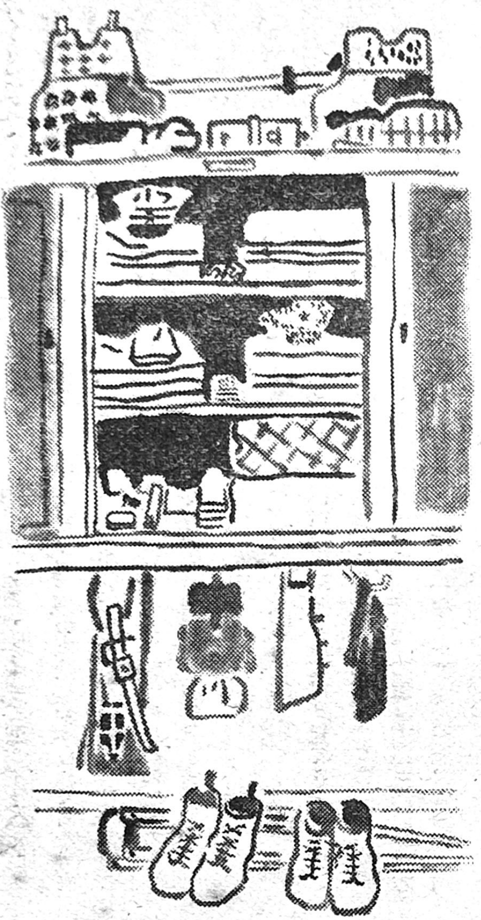
「斯ういふものをこしらへたのだ。」

先づ最初に、將軍は（然う、やはりいかにも將軍といふ感じの閣下だ。）さう言つて私達に印刷物をひろげて示された。私のノートにより此處にお披露する。

同德臺陸軍軍官學校信條

一、一德一心至忠至誠大義ニ徹ス
一、剛健醇厚果斷ニシテ細心ヲ尙ブ
一、純眞謙虚默々トシテ承行ス
一、互尊自敬國民ノ中核ヲ以テ任ズ
一、感恩報謝以テ醇風ヲ顯彰ス

學校は新しい、これをやがて傳統的精神にしたいと思つてゐる、さう說き出されるのだつた。


▽整頓された寢室の戸棚

使命は日滿共同防衛の本義に徹する將校を作るにある、それとともに五族協和の中核たる實踐者を出すといふことだ、彼等は國兵の中へ入つて行き、また配屬將校として各學校に派遣され指導の任に當るであらう、それには　皇道が根基とならなくてはならぬ、　皇道を根基とする不可分關係、共同でなくてはならぬ、建國精神とは何ぞや、それはいろいろと言はれて來たが、今や惟神の道であると言ふべきだ、それ故本校でも軍官學校神社を建立、天照大神をおまつりする考へである、また皇道宣布塔といふものを建てたいと思つてゐる……日系について言へば、滿洲國に殉ずるといふ精神を體得せしめる、國體に徹し、惟神の道を國軍に付與しなくてはならぬ指導とは率先して實踐することだ、先づ日本人を作る、そして獨得の教育をする……滿系は、日滿共同防衛の使命を體得せしめ、赤心を以て挺身する精神の涵養を第一義とする、而して惟神の道を根基とする不可分關係、國際情勢を了得せしめる、さういふ考へでやつてゐる、そのため、教授陣に於いても優秀なる人材を揃へてゐる…將軍の談話は續いた。

だが、學科、實科の時間だけでなく、訓育といふのはその後の、四時以後のみんなの生活を見て貰はなくてはならんなあ、しつけといふものが其處にあるのだ……斯ういふものもこさへ毎日寢る前に反省させてゐる……さう言つて示されたものには「五省」と題し、次のやうにあつた。

一、至誠に悖るなかりしか
一、言行に恥づるなかりしか
一、氣力に缺くるなかりしか
一、努力に憾みなかりしか
一、不精に亘るなかりしか

筆者が思つたこと——其處にあるのは巨きな愛だといふことだつた。巨きな愛から發す

る鐵の規律。斯くしてこそ教育は實を結んで行くものであらう。

南雲中將からはなほいろいろ承はつたが、雜誌に書くわけに行かぬものなどもあり、ここには以上一部をお傳へするに止めなくてはならぬ。

聽けば中將は十六年といふ長い間を陸軍士官學校に在られた方だといふ。まさにその道の大權威と言ふべきであらう。この人が初代校長として此處に在ること丶、この事によつてもこの學校が負ふ使命、それに寄せられる期待の大きさがうなづけよう。

校長室を辭し、私達はM中校の案内で、講堂（教室）、自習室、寢室等を參觀した。

宏大な校域である。學校敷地が百六萬平方米餘、練兵場が百十一萬平方米餘だといふ。學校本部の建物を中心として、生徒舍、中小講堂、武道場、醫務室、食堂、炊事場、厩舍その他があり、また生徒集會所、高等官集合所その他が現に工事中である。

學校の編成は、本部、教授部、生徒隊、馬術部等より成り、生徒隊は更に數箇の連に、連はまた幾つかの區隊に分けられてゐる。生徒は豫科生と本科生に區分され、日滿系別に連長の訓育のもとに育成されるのである。

教育實施の概要を書かう。

一、本校教育ノ目的及要綱

（一）學校教育ノ目的

軍隊ノ楨幹タル軍官ヲ養成スルニ在リ

（二）本校教育ノ要綱

1、建國精神、建軍ノ本義ニ透徹シ日本軍ト一體トナリ至誠至忠、滿洲國ニ殉ズルノ信念ヲ養成ス

2、堅確ナル軍人精神ヲ鍛錬シ嚴肅ナル軍紀ニ慣熟シ且軍官トシテ必須ノ高潔ナル品性熾烈ナル責任觀念、鞏固ナル意志、蒸々タル熱意ヲ涵養ス

3、强健ナル身體、旺盛ナル氣力ヲ鍛錬シ率先躬行ノ實行力ヲ修錬ス

4、軍官タルニ必要ナル識能ヲ付與ス

二、本校教育ノ特質

（一）訓育

本校教育ハ總テ訓育ヲ以テ基調トシ有ユル教育ヲ通シ且常住坐臥ノ間常ニ『本校教育ノ目的及要綱』ノ主旨ヲ銘肝セシムルニ勉メ以テ軍官トシテ必要ナル性格及德操ヲ陶冶涵養スルヲ本旨トス

（二）豫科生徒ノ教育

1、普通學（日本高等學校文科理科ヲ按配セル教育程度）

軍官タルニ必要ナル基礎的知識ヲ與ヘ特ニ將來ノ發達ニ必要ナル素地ヲ與フ

2、軍事學

一部課目ニ就キ基礎的知識ヲ與フ

3、術科

各兵科軍官候補生ニ共通スル基礎的事項ヲ教育シ小部隊指揮法ノ概要ヲ會得セシム

（三）本科生徒ノ教育

1、軍事學

軍事學ニ重點ヲ置キ各兵科尉官ニ必要ナル基礎的知識ヲ與フ

2、普通學

軍官タルニ必要ナル事項ヲ教授シ且將來發達ニ必要ナル素地ヲ與フ

3、術科

當該兵科尉官トシテノ本務遂行ニ必要

▽角力場と食堂

ナル事項ニ關シ基礎ヲ與フ

但シ豫科卒業ノ日系生徒及ビ滿系生徒ノ一部ハ日本陸軍士官學校日本陸軍航空士官學校又ハ、日本陸軍經理學校ニ派遣サレ日本陸軍士官候補生及主計候補生ト共ニ同校ノ課程ヲ修得セシメラル

生徒の起居一般の狀況は次の通りである。一日の行事は概ね次の準則による。

五時三十分――起床、點呼、遙拜、運動、整頓に始り、それより朝食、自習、教授部授業（普通學及軍事學）、晝食、生徒隊課業（教練其他）隨意運動、夕食、自習そして二十一時に――點呼、二十一時三十分 消燈となる。

講堂（教室）を幾つか參觀したが、すべてに規律整然として、眞摯さに溢れた態度がいかにもこの學校らしく、感嘆された。

滿系の漢文は、滿系の教授が論語を講義中だつた。「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。」――これを說いてゐた。無論論語で讀み、滿語で說明して行く。「孔子が川の上で言つた、時はこのやうにして過ぎて行く、夜も晝も一と時といへども休止することがない、だから、われらも常に勉め勵まなくてはならぬ――」魯迅をずつと若くしたやうな先生が熱心に講義されてゐた。

一方、滿系の日語では、賴山陽の「筑後川を下りて感在り」をやつてゐた。日語で讀んで行く。一人の生徒が立たされて讀んだが、巧みなものだつた。先生はまた日語で說明して行く。衞生學の講義は日系の軍醫が滿系に滿語でやつてゐた。（このやうな講義の仕方は私も經驗があることで、興味深く參觀した。）

自習室では各自の机、本立が整然としてゐ

るのに感心した。また滿系の机に、日本の辭典が澤山あるのに注目させられた。富山房の漢和大字典、新撰漢和大辭典、詳解漢和大辭典、いろは新辭典、新辭典、新修漢和大字典等々。そして本立には教材、ノート、參考書類がぎつしり並んでゐる。机の右方には硯箱とインキ瓶。部屋の壁には地圖、國通寫眞時報。部屋の片隅に新聞と「干城」。

寢室はベッド、その傍らに衣類その他をきちんと入れた押入れ式の箱、武道具が上に置いてあり、下にはカバン、水筒類が吊つてゐる。床には靴が並んでゐる。（これらは、赤羽畫伯がたんねんにスケッしてゐたから、それで見られたら一目瞭然である。）

寢室ではあるが、各自の物品の置場でもあるわけだ。尤も、生徒が寢室にゐるのは寢る時間だけであるわけだ。したがつて、その意味ではこれは全く文字通りの寢室であるわけである。

正午近くになり、私達は食堂へ向つた。その途中に、角力場があるのを見た。

「滿系もなかく強いですよ。足が弱いとか何んとか言ふが、鍛鍊してゐないからなんだな。鍛鍊すれば強くなりますよ。」

M中校はさう語るのであつた。

食堂にはすでに多數の生徒が卓についてゐた。炊事當番であらう、マスクを掛けた生徒がお副菜を配つて廻つてゐる。今日のお副菜はごつた汁と言ふところか、肉、大根、野菜、粉條子などの入つた汁がアルミの碗に盛られてゐるそれと大根の漬物。

食堂の天井には萬國旗が飾つてある。入口の上方には食堂内の心得が書いてある。談笑の裡に愉快に食事すべしといふことが書いてある。

腕章をつけた生徒の號令で食事が始まつた旺盛な食慾。血氣さかんな若人たちには何よりも愉しい一と時であらう。私達も食慾をそそられる思ひだつた。

日系も滿系も同じ食物だといふことであつた。民族協和の實かこゝでも實踐されてゐるのである。

私達は炊事場を通つて外へ出た。

朝は快晴だつたが、急に曇つて來、瞬く間に黒い雨雲が空いつぱいに擴がり、やがてポツく雨が落ちて來た。が、その雨も急に通り過ぎて行つた。そして、その後はひどい風、風が捲き上げる猛烈な砂塵だつた。

この日、學校には自動車部隊がやつて來、校庭は近代色に色彩られた。

その横で一時から生徒の教練が始められた密集隊形を作つてのいろくな動きが展開されて行く。それが一と時、砂塵に包まれ、土一色、何にも見えなくなる。無論その間にも訓練は續けられてゐるのだ。砂塵がをさまると、生徒たちの隊形はすつかり變つてゐる。教官も生徒たちも、滿洲のこの暴風には大へんなことであらう。……だが、訓練は依然として續けられて行くのであつた。……帽子の列、上げ下げされる白い手套、上に下に一齊に動く銃、銃先に光る刀……。砂塵を蹴り、風に抗し、若草を踏んで、青春の跳躍、力と魂の躍動。それは砂煙に包まれてゐても美であつた、逞しい力の織り出す美であつた。

私は先刻、生徒のゐない自習室で一人の連長が言つてゐた言葉を思ひ出した。

「一年經つとしつかりして來ますよ！」

その言葉は實に感慨深かげに言はれたのであつた。生徒たちの成長を身近かに見て來た人の言葉であつた。

またその連長は本部の人に向つて「この間は服裝檢査があつてね……」と何やら語つてゐた。その言葉の調子には生徒たちに注ぐ愛情がこもつてゐた。きびしい軍隊の規律の中を、このやうな愛情が縫ふてゐるのだ。それによつてこそ此處での立派な共同生活が營まれて行くのだ。私達はこのやうな面をも見落してはならないであらう。

まことに若い武人たちは此處に若芽のやうに伸びつゝあるのであつた。まさに緑なす春の樹木のやうに伸びつつあるのであつた。

やがて彼等は滿洲國の各地に擴がりわたつて行き、國軍の中堅分子として、指導者としての重任を果して行くであらう。

見はるかす一望千里の草原、その中央にたかまる同德臺其處に若い國軍の魂が鍊成されつつある。

——私達はその平常の一日を觀たのであつた

本當は校長の言ふやうに前日から來てまる一日居さして貰つたらなほよく判つたことであらう。しかし今それは出來ず朝八時頃から夕方の四時までゐて校舍を去る外なかつた。砂塵の中を私達の乘つたバスは新京へ向つた。

▽講堂風景：嚴肅に講義を聽く生徒

聖戰と俳句（日淸役）

宮澤千代咲

日淸の戰端

明治二十七年七月二十五日、朝鮮の豐島沖の海戰は遂に日淸兩國の戰の火蓋であつた。ついで八月一日宣戰の詔は下された。

宣戰の詔勅を拜して

瀧吼えぬ巖に中つて二千丈　香谷

時は今玉と碎けむ瀧しぶき　同

耳塚の藥場探すや盆の月　壹兩

一聲に闇貫くや時鳥　竹南

皇軍は勇躍征途についた。朝野國民の熱い血潮はいやが上にも煮え沸つた。陸では牙山・成歡の大勝を序幕に、着々戰果を收めて、淸軍の京城に於ける敵匿を一掃し盡して、漸次北へと壓迫して行つた。九月十五日、畏くも大纛を廣島に進めさせ給うて、皇軍の士氣は層一層昂まつた。で、

出征兵をおくる

北京の錦着て來よ秋の風　松江

美し騎馬の尾につく秋の蠅　史乘

汝が乘る馬肥えたりな秋の風　鯛腸

義重く負へば寒さは無きものぞ　權堂

右の句は首途を餞けする感懷ではあつたが、なべて當時の送る者も送られる者も齊しく抱いてゐた感激に外ならなかつた。

この未曾有の大事に、國民は擧つて昂奮し感激の坩堝の中にあつた。そして國家愛の發露が益々高潮された。この異常な感情を吐露するには、文學の力に俟たねばならなかつた。で、戰爭文學が當然勃興せずには居られなかつた。小說に戲曲に、通信紀行に、詩歌や俳句に、直接の體驗や實感を盛るか、または事實を基調として創作するかの作品がそれぞれ發表された。それは現在の日支事變による戰爭文學の隆盛と同一の轍を踏んでゐたものであつた。

中でも詩歌俳句の文學形式は、戰塵の中にあつて、最も短的に表現し得るものであり、實感を直ちに盛り得るのである。特に俳句は近世に發生した平民文學の一形式である。戰線にあつて生死の間に在りながら直ぐに執つて以て吟じ得られる。將士にとつて恰好の文學形式であつた。されば本篇は、事實戰場に臨んでゐて、寸暇を得ては作られた多くの句の中から、特殊の句を蒐めて、戰線の進展を追ふて、佳吟を拾つて見ることゝする。そこには有名な將士から、無名の一兵卒に至るまで、その時その場の意味深い句が見られるのである。

戰場の秋

やがて戰線は進んで、朝鮮を北上した一方は鴨綠江に迫り、一方は遼東半島に敵前上陸を敢行した頃は、すでに秋深い日であつた。

京城に於て

壢芥糞小便の流れかな　陸軍中將　鳥尾小彌太

義州に於て

馬斃れ牛も斃れて野路の霜　同

京城では眞夏であつた。が、陸軍大將山縣有朋總司令官の率ゐる朝鮮北進の諸部隊が、鴨綠江に辿り着いたのは十月も末であつた。鳥尾中將の霜の句は、激戰と戰場の苦酸を十分に知ることが出來る。鳥尾中將は山口の藩士で、明治維新の際には勤王の志士として活躍された。日淸戰爭後には近衞都督となり、樞密顧問官に任ぜられ、子爵を授けられ、明治三十八年に五十九歳で歿せられた。

十一月二日鐵子嶺附近に露營

日の旗のあたりは退いて霜もなし　高須重次郎

金州城外ヲ眺

ざくざくと踏み心地よし霜柱　同

旅順口陷落後

又一つ命拾ひぬ鱇と汁　高須重次郎

この三句は、皇軍の誰もが抱き持つた實感であつたに違ひない。初の句は皇軍の武威を、後二句は凱歌の蔭に自分を顧みた喜びが溢れてゐるではないか。

作者は、第一師團步兵第三聯隊附の下士で、東京の俳諧の宗匠先額庵權堂の門下で、師に通信したものであつた。師の權堂は、「義重く負へば……」の句を送つて彼の壯途を勵ましたことは、前述の句に見られる。

海路、盛京省に攻入りて、貔河屯に天長節を迎へぬ

もろこしもひとしく祝ふ御稜威哉　青柳監督

もろこしに立てる日の丸潔し　荒川知事

十一月三日である。作者は大山巖大將の指揮した第二軍に屬してゐた。戰捷と佳節とを祝つた句で、國民の赤誠を代表してゐてくれる。しかも血腥い戰場で……。

雪と氷と

祖國では味はつたことのない嚴寒の冬に皇軍は逢着した。否直面した。でも向ふ所戰へば勝利が待つてゐてくれたから、士氣は愈々振つて雪も氷も蹴立てゝたゞ進軍ばかりがあつた。

案外支那兵の弱ければ

出て見ればけつ句暖し雪の中　原口淺次郎

いざさらば雪見に轉ぶ所までとの先哲のいましめにはそむけど

轉ぶとも飽くまで見ばや雪景色　同

わが軍の向ふ所敵なし

鷹の聲諸鳥は音を止めけり　同

作者は俳號を蘆雪といひ、東京の人であつた。軍中の閑に吟じたものであらう。意氣は敵を呑んでゐた。寒さなど少しも感じてゐない。

第二軍の各將校及軍屬諸士、除夜より元旦にかけての作

啼くも憂し啼かざるも憂し都鳥　藤井少佐

唐土に立てる日の丸潔よし　荒川知事

滿清の闇を照すや初ひかり　有田大尉

金の氷も解くる初日の出　伊豆大尉

戰場で迎へる正月は、ひとしほ感慨深く、且つ故郷が懷しまれるのは人間の情である。金州の戰火の跡で迎へる初春に、風雅に心を寄せたのは奧床しい限りである。右の將士は後年軍官の名士と仰がれたものである。一例が伊豆大尉は名は凡夫といひ、少將に昇進、文筆に冴えた軍人として有名であつた。

松崎助三郎

一息に四百餘州や初日の出

作者は落語家談州樓燕枝の義弟で、第一師團步兵第三聯隊附で、これも金州で迎へた正月の吟である。

外山音磯

盛京省莊河附近、電信隊の守備地を出發する時、厚き氷を渡りて

踏む氷あとへは引かぬこころかな

出陣の命をうけて

ふるもよし濡るるまで行け花の雨　同

寒夜寢に就くも探られず

寒き夜や明けまでたえぬ犬の聲　同

行軍中義州地の霜の景を見て

義州地や雪にまさりし霜の景　同

寒き夜、星の光の明々たるを見て

凍る夜やつねにまさりし星明り　同

第二雪降りの夜に

雪の夜や障子を走る風の音　同

これらの句の作者は靜岡縣の出身、號は松律といつた。句作に馴れた俳生活者である。

俳句はよりよい國民文學である。わづかの素養で、かうして忠に殉ずる身が所懷を述べ記しては自己を慰め、延いて次の時代になつて好ましい文獻となるのである。

戰火の巷は、夏も炎熱に苦しめられるが、日清戰役の當時は、滿洲の寒冷は最も戰士の苦となつた一つであつたらう。試みに日清・日露兩役の戰史を繙いて見れば、皇軍にとつて、死よりも飢ゑよりも尙耐へ難かつたのは、冬の嚴寒であつたらう。ついでは夏の酷暑と、それに伴ふ南京蟲（臭蟲ともいつた）、群れる蠅との襲擊が堪らなかつたらしい。それは今まで島國の樂園に生活してゐて、嘗つてこれらの苦の洗禮を受けたことがなかつたから。

翻つてこの役の戰線を描いて見るのに、一は朝鮮半島の西海岸を縱に一貫して鳳凰城への北進と、一は遼東半島一帶。それに營口を中心とした渤海灣沿岸の掃蕩戰に、も一つ加へては海軍の根據地であつた山東省の威海衞の攻略戰であつた。されば戰線は一轉して冬の威海衞に移つて見よう。

瀬川長太郎

一月二十四日、山東省鞦里郎に於て我が部下看護手の敵彈に斃れしをいたみて

折る氣にもなかりしものを松の雪

瀬川長太郎

二月一日、美亭集の役は大吹雪にて咫尺だも辨じ得ざりければ

吹雪野やたゞ嘶きと銃の音

淚さへまつ毛に氷る寒さ哉

かうした句から見たゞけでも、山東での激戰は想像される。この雪煙る寒氣の中に、作者は戰友のために淚を氷らせてゐる。それもその筈、要塞堅固な威海衞を、淸は海軍の基地としてゐた。指揮は彼の國の俊傑丁汝昌であつた。それを海から攻めたのは汝昌の學友であつた伊東祐亨中將、陸からは大山巖大將の指揮で、遼東の野を風靡して、その餘力を驅つて海陸共に一氣に屠らんとしたのだつた。

この句の作者は第二師團騎兵第二大隊附の陸軍三等軍醫であつた。彼は第一高等學校醫學部を卒業して、職を陸軍に奉じてゐたのだつた。

子規と金州の春

かくて冬に虐げられた戰場にも春が來た。血と砲彈とに荒廢した南滿洲の土に、自然は人事と沒交渉で、草木の萌える日が訪れた。

この戰役の春の句に、明治の文豪正岡子規が、金州の土を踏んで、戰火の跡の春を吟じたものがある。

子規は名は常規。愛媛縣松山の產である。宿痾は遂に彼に學業を捨てさせた。即ち明治二十五年九月、東京帝國大學文科二年で中途に退學して、病をいたはる傍に「日本新聞」の記者となつて、その新聞の俳句欄の選をし、文藝評論を發表してゐた。が、日清の戰の火蓋が切られると、彼の燃える愛國の血は、凝つとペンを弄び風雅の文字を綴つてゐられなかつた。病弱の身さへ忘れてゐた。遲ればせながら「日本新聞」の從軍記者として當局から漸く許可されたのは二十八年三月五日のことであつた。が、彼は喜びに溢れて四月七日に、近衞師團司令部と共に海城丸に乘つて宇品を出帆した。そして一路黃海を北上して大連に上陸した。

大連灣

大國の山皆低きかすみ哉

兀山の笑ふすべさへ知らぬなり

金州

鵲の人に糞する春日哉

永き日や驢馬を追ひ行く鞭の影

珍らしき鳥の來て鳴く木芽哉

なき人のむくろを隱せ春の草

もろこしは杏の花の名所かな

山間や村は杏の花曇り

古城や菫花咲く石の間

子規が大連に上陸した頃は、遼東半島の春もぱつと華やかに開けてゐた。小草もぐんぐんと萌え盛つてゐて、その蔭には菫の花がちら〱とのぞいてゐたり、李も杏も一時に微笑み咲いてゐた。かうした酣の春は血腥かつた戰場をやさしくさつぱりと飾りたてゝくれた。霞の空に囀る小鳥も朗らに聞えて、戰火に荒んだ跡を和ませてゐた。

金州城にて

行く春の酒をたまはる陣屋哉

行く春の鐵漿つけなやむ女哉

故鄉の目に見えてたゞ櫻散る

梨咲くやいくさのあとの崩れ家

梨老いて花まばらなり韮畠

大陸の春は、來たかと氣づくうちに行つてしまふ。暖いなと思へば、もう暑くなる。この斷歩の春の中に、子規はよく異國情調を捕へてゐる。

金州

古城やいくさのあとの朧月

城壁の上に見えけり春の山

戰のあとに少き燕哉

麥畑や驢馬の耳より揚雲雀

蛙はや日本の歌を詠みにけり

外濠の水くさりけり蛙の子

一村は杏と柳ばかりかな

花盛故郷や今衣がへ

金州は現在でも美しい古風な街である。當時は更に異國の色彩が濃かつたであらう。それが子規を湧立たせたのに異ひない。時にこの地で彼を喜ばせたのは柳の芽吹きであつたらしい。

五月金州にて

金州の城門高き柳かな

渤海の平らにつゞく柳かな

駒繋ぐいくさのあとの柳かな

兀山の麓に青き柳かな

大柳しだれぬ程ぞおもしろき

城門を出て遙近の柳かな

のやうに、子規には金州での柳の句が多い。

旅順

砲臺の舳に霞む港かな

蒲公英

外側に蒲公英咲ける臺場哉

以上の二句は旅順での吟である。

子規が金州を中心に遼東半島にあつての從軍記者生活は、わづか一箇月ばかりであつた。

此の春は金州城に暮れてけり

の彼の一句そのまゝのやうに、異國の春を充分に鑑賞した彼だつた。それをそのまゝ寫生して句作した。それが、彼の弱かつた體軀には從軍記者の職責は重荷すぎた。彼の宿痾は悪化して行つた。で、彼は五月十日、思ひ出の多い、好きな自然に抱かれた金州の地を出發して、十四日に大連から佐渡丸に便乘して歸國の途につ

いた。それが十七日の船中で喀血した。雅號そのまゝのほといぎすに似てゐた。その變事は彼を明治三十五年三十六歳の生涯の幕を閉ぢるまで、遂に再起させなかつた。これ以後が病床の子規で彼に最も優れた文學生活をなさしめて、明治の文豪と仰がしめる地位にまで高めたものであつた。

うれしく亭

この役の戰場の春を吟じてゐる者に「うれしく亭」なる變名に隱れてゐる風雅の名士が一人ある。彼は軍醫となつて從軍してゐた。そして當時戰爭雜誌として博文館から發行されてゐた「日清戰爭實記」に數回に亙つて、「支那土產樂雅記」と洒落た題で戰塵雜筆を書いてゐる。次の句はその俳文の中に收められてゐた句である

二月十五日寧海州に在る日、雪降るに閑居して戰死せる看護手を思ふ

呼びかはす友にはなれて雪の道

三月末旅順口行の途上

禿山の霞に春を知りにけり

はげてまた麺のあり春の山

四月某日、牧城子に於て戰地死亡者の招祭あり

咲かぬ間に土にまみれし櫻かな

某隊將校宿舍に梅の花を活けたりけり。何か一句と所望せられければ

こちの來ていけた梅やけふの色

内地の春とちがつて、二月はまだ寒い。三四月となつても華やかな春ではない。遼東の禿山に地味な春が漂ふのである。——これが大陸の春の訪れである。

夏の句がかの「支那土產樂雅記」に見られる。

蝿の多きに苦しむ

今朝もまたせゝり起しぬ蝿のむれ

拂ふたび蝿十あまり仆れけり

某軍醫の病死をいたむ

みのらぬに風に落ちたる實梅かな

某軍醫の罹病を聞き

よけて行く脊にはからずも毛蟲哉

滿洲の蝿には誰もが一驚する。困厄する。句の通りの實感は誰もが抱く。また馴れない猛暑は皇軍を惱まして病魔を跳梁させた。軍醫達の罹病や、果ては病死されたのなどは、困苦の程が知られて、悲痛の限ではないか。

又、うれしく亭は「筆のまに〱」なる隨筆に、句を吟じてゐる。それに、

任鳳凰城

歡迎の聲にさめたる晝寝かな

夕立や暫時と寄りし破れ家

涼しげな蔭なくなりぬ蟬の聲

稗蒔の追泛ほしゝ占領地

などがある。

戰爭と俳句

明治二十八年四月、平和は訪れた、三月中旬圓滿な平和條約が締結され、銃後の國民は勝利の歡喜に燃えて凱旋を祝ふのであつた。

馬關にて追懐　陸軍中將　鳥尾小彌太

夜一夜三十年の涙かな

凱旋　梅雪

身のはれを故郷へ飾る角力かな

最後に、この戰役中に吟じられた戰爭俳句について簡單な考察を加へて見たい。日清戰爭時代の明治文學の新聲は、小說に戲曲に詩に於ての新たな發足であり隆盛であつた時代で、まだ短歌と俳句の革新の緒についたばかりであつたといへる。されば前揭の戰爭俳句も、多くは江戶時代の餘風を繼承してゐたものであつた。しかも正岡子規の如き俳壇に新聲を吹込みかけたに過ぎなかつた頃なのである。で、子規の金州での俳句は流石に秀句である。再誦三嘆に値する詠吟である。その他の將領や兵卒は趣味に生きた吟なのである。されば勢ひ月並の句もある。概して現代の俳句鑑賞眼からしては微溫的な表現であると思はれる。

しかし、在來の詩境を大陸にまで初めて擴げ求め得た機會を喜ぶべきである。俳境はともすれば花鳥風詠の狹い境地に逼息してゐたがるものである。それを異境の地に、異常な現實に直面して、異國情調を得て作句した處に作品の價値が重くなる。又戰爭文學の一部面を語るものとして、國民文學の半面を擔ふものとして、尊い文獻といふべきである。

滿洲の鑛脈を歩く

赤瀨川安彦

○鑛脈發行の濫觴

地大物博の思想を生み出した支那が、神話中の鑛物創造の說を基として築き上げた鑛產の國、鑛脈の寶庫を果して滿洲の邊境に探し得たであらうか。過去の支那は現實の滿洲へ五千年の時の流れは滔々として大地を刻み人を生み物を作り文明へ文明へと進む、鑛脈の神秘は解かれ闇より明へと開かれて行く。

先史時代から漢時代に至る迄は人類も原始的生活の域を脫せず、產業を見ず、僅かにドルメンの巨石や石器、土器に其の片鱗を窺ひ知るのみである。高句麗時代から渤海時代になつて鑛脈發見の濫觴が見られ遼、金時代から元時代に至る間に鑛業の殷盛期に入り初めて鑛脈の黎明が來たものとも言ひ得るであらう。魏書に「高句麗金則出自扶餘」と又契丹志には「女眞其他多金銀」と誌されてある如く千數百年前に既に滿洲でも鑛脈を探し當ててゐる。遼時代には窯業用燃料として撫順や太子河沿岸の石炭を採掘し又遼陽附近の鐵鑛を發見し製鐵を行つて居たことが種々の遺跡に殘されて居る。其後は鑛業の發達見るべきものはなかつたが、淸朝に入つてからは滿洲の地は其の祖愛親覺羅發祥の地として神聖地され封禁政策をとつた爲に恰も鑛業鎖國の狀態であつた。併しこの滿洲の天然資源の魅力は東漸しつゝある歐露勢力の見逃しおくところではなく、十九世紀の半頃から露人は黑龍江を渡つて北方から滿洲侵略の機を覗ふやうになつたので淸朝に於ても人口增强國家防衞上漢人の滿洲移住を解禁した。漢人移住後の鑛業の發達は著しく、光緒年間に入つてから南滿の諸炭坑は續々と掘り出され、尙北方砂金地は露人の越境盜掘頻發するに至つた。これより先、十三世紀の末葉マルコポーロは東亞の天地を世界に宣傳し歐洲人をして東へ東へと憧憬の天地「古くして新しき亞細亞大陸の一角」へ向けられた。目指すは黃金の國日本世界の神秘郷東洋の未開の鑛脈に魅せられつつ野望を抱いて東漸する端緒を作つた。其後歐羅巴人にして滿洲へ遍歷する者ないではなかつたが地質學者として初めて足跡を印したのは獨逸のリヒトホーフエンであつた。彼は十九世紀の中頃支那大陸の地質調査旅行の途次南滿洲を踏破して初めて滿洲の大地に科學

のメスを下し地質學の基礎を造り上げたもので大鑛脈の發見には至らなかつたが、其の將來へのヒントを與へた事だけでも實に不滅の功績と言ひ得るのである。十九世紀の初めには米國のウヰーリス博士やブラックウエルダー博士等が來滿し何れも地質學的に古生物學的に調査研究し有益な論文を發表した。一方露西亞の滿蒙侵入は漸く顯著となり幾多の探檢家や地質鑛山技師が踏査を爲す者多く就中ロマノフ王家から派遣されたアーネルト博士は其の一人である。當時不毛の地謎の滿蒙探檢の壯圖こそ賞讚、駁論、或は疑問の裡に喧々囂々たる嵐の如き世論を浴びて敢行され而も幾多の艱難困苦を克服して、幾多の炭田、鑛脈を發見し當時露西亞の滿蒙經綸の基を築き得たのであつた。彼は其後も滿洲の地を去らず孜々として調査に從事し、革命後の露西亞に歸國せず滿洲國の治下に感激しつゝ八十餘歲の老軀を今尙ハルピンの研究室に運び矍鑠として研究を續けて居る。在滿五十年の彼の奮鬪の出發は實に彼が綴つた感想の中に「金鑛脈はその處女體を禁獵區にねむる鳩の如くに横へて永い眠を恣にして居た。その魅惑によつたものであると語つて居る。日露戰爭後に於ける日本の滿鐵經營に伴ふ資源調査の進捗に就いては今更喋々する迄もない。就中滿鐵地質調査所の業績は沒すべからざるものがあり幾多の地質學上の研究を殘し莫大な鑛產資源を發見した。更に滿洲建國後に於ける日滿の地質鑛產調査機關の活躍は目覺ましいものがあり、今尙孜々として續けられつゝある。

○鑛脈の診斷

地球を人體に譬へるならば、醫者が身體を打診し或ひは解剖して、其の狀態を知り病源を探して醫する仕事のやうに、地球も地質鑛山の技術者に依つて打診され解剖されて其の正態が分るのであつて、鑛脈を探し出す仕事も地殼の診斷であり鑛山の診察であらう。

日本が世界で有名な火山國であり溫泉國であり、又山紫水明、氣候溫順な國であつてこれで地震さへなければ極樂境であると言へるだらうが、この地震も主として火山活動の勢であり、又若い第三紀の鑛脈の多いのも火山活動が盛んな爲である。ところが吾滿洲は日本と反對で火山も少く地震も少く從つて若い鑛脈も少く主に古い岩層や古い鑛脈が多い。言ひ換へれば日本內地は若い地質時代の淺い部分に出來た鑛脈に富み、滿洲は古い地質時代で深い部分若しくは中頃の部分に出來た鑛脈が多いのであつて此の兩國の差違こそ地質鑛床學上から觀た特性と言ひ得る。そこで今滿洲の鑛脈に對して診察して見ると先づ深所に出來た鑛脈の代表として殆んど全滿に亙つて露出して居る金鑛脈がある。此の金鑛脈のうちで風化に打ち克つて地下に潛在するものもあるし又此の鑛脈が永年の間に風化せられ削剝せられて金は自然の淘汰を受け砂金となつて河床等に殘されて居るものが多い。一般に深い所に出來た鑛脈には金等と共にタングステン鑛やモリブデム鑛が出て來るものであるが滿洲でも其の現象が見られる。從つて日本の樣に若い鑛脈で淺い所に出來た種類多い鑛物を發見することは望む方が無理であり、又トランスバールの金鑛や、ミシガンの銅鑛の樣な大物を期待することも豫言出來ない。

それでは此の鑛脈を姙む母體たる地殼の性質から見て滿洲は果して優性であるか劣性であるか。動物の様に優生學上の實證は擧げ得ないまでも地質から見た一通りの診斷は下し得る。例へば滿洲の地質は先づ第一に古期岩層が著しく發達し又古い片麻岩や花崗岩が廣く分布して居ることであり、第二に新しい火山岩の噴出が少く火山活動もなく溫泉の湧出も比較的少く且又地震も少いと言ふ様な特性が窺はれる。從つて此の様な母體に姙まれる鑛脈も、古い地質時代で深い所に出來たものが多いことは當然であり。又火成岩とは直接關係はないが古い成層岩中に大規模の鐵鑛やマグネサイトが賦存して居る。又母體は同じであるが種が異る石炭のやうなものは古生代中生代・近生代の新舊地質時代を通じて無盡藏に埋藏されて居るが、此のやうな地殼を打診するには先づ地質調査が第一である。一歩一歩大地を踏みしめつゝ露れて來る地層や鑛脈に鐵鎚を下し其の存在の狀態や性質を調べることは醫者が言ふ臨床診斷である。又採つた岩石や鑛石を顯微鏡でしらべ化學分析をしたりして其の成因を考へ鑛物の名をきめたり價値があるかないかを確かめること等の基礎研究もいるが、鑛脈を探すのに此の地殼の臨床診斷が絕對に肝要であることは言ふ迄もない併し人智の程度も宇宙の一つである地殼に對しては大海の一滴であり九牛の一毛に過ぎない。數千年來人類が此の地殼を敲きながら發見し利用し得た鑛脈は實に微々たるものに過ぎないであらう。唯こゝに科學技術の進步が人類に依つて齎され、無から有を生み小は大に展開し粗は精となり文明開化の世界は打ち建てられつゝある。鑛脈の探索も足で步き肉眼で見て素手で探し廻る方法から更に地殼に向つて數百米數千米のボーリングを入れ其の地下の狀態を調べたり又近頃は物理學を應用して磁力探鑛であるとか電氣探鑛の方法や又地殼に人工的に地震を起さしめ其の震動を測定して鑛脈の有無を透視する方法も行はれるやうになつた。今迄地下に潛つて居た鑛脈も手術を加へずして發見される時代が來た。恰も昔の漢法醫が、蘭醫がやる人體解剖の外科手術に驚いた様なものであり、更に又將來物質を透視するレントゲン光線によつて地殼診斷が出來るやうにならないとも限らない。

○鑛脈巡禮

それではこれから滿洲國內の鑛脈巡禮を試みることにしやう。專門的に鑛脈といふと地殼中の裂罅を充塡する有用鑛物からなる脈のことをいふのであるが、一般には例へば金鑛脈、銅鑛脈と呼ぶのは勿論鑛脈の形をなさない鐵鑛床でも砂金層でも亦マグネサイト鑛床でも一括して考へる常識でもつて主なる鑛山を一巡する積りである。唯炭層は國內の重要資源であり其の分布も廣く同じ鑛山でも鑛脈とは少し緣遠くなるので他日の機會に讓ることにする。

今日國內重要產業の一として鐵鑛業がある先づ昭和製鋼所の基を爲してゐる鞍山を中心とした大孤山、西鞍山、東鞍山、櫻桃園、王家堡子等の鐵鑛山が竝んで居る。何れも赤鐵鑛や磁鐵鑛の縞狀鑛層からなつて居り含鐵品位は餘り良くない所謂貧鑛であるが鑛量は實に數億瓲に達する位に素晴らしいもので現在で

も年產數百萬瓲を採掘して居る。あの熔鑛爐の壯觀を眺め聳立する大工場を見る度に鐵鑛脈の持つ魅力に動かされる。又遼陽から東に約五〇粁も入つたところに弓張嶺鐵山があるが鞍山附近の鐵鑛床と異るところはないが、數億瓲の貧鑛の中に品質の良い富鑛が多量に含まれて居るので、やはり昭和製鋼所に供給する主要原料である。更に安奉線の本溪湖に設立されて居る製鐵所に運ぶ鑛石は南坟驛から北に約十粁も離れた廟兒溝鐵山のものであるが、此の鑛床も弓長嶺と同じく赤鐵鑛、磁鐵鑛の縞狀鑛層で其の中に在る富鑛も合して數億瓲の鑛量があり、二十數年來年々數十萬瓲の鑛石を採掘し續けて今日の本溪湖煤鐵公司の基礎を爲して居る。建國後登場して來た鐵鑛脈で東邊道の山奧に大栗子溝鐵山と七道溝鐵山がある。前者は通化省臨江縣下に在つて主に層狀をなす赤鐵鑛で高品位の點に於ては國內隨一であつて熔鑛爐に入れて銑鐵にするのには勿體ない位で直接純鐵製造用に供せられる立派な鑛石である。埋藏量も相當なもので現在東邊道開發會社の手で採掘に着手し近き將來に大規模な鐵鑛業が實現するであらう。又七道溝鐵山も同じく通化省通化縣下に在つて鑛質、鑛量共に前者には及ばないが同會社に依つて採掘せられて居るが何れも東邊道一帶の製鐵事業の策源地であり將來の發展を期待される。其他各所に鐵鑛脈も散見出來るが國內鐵鑛の主要產地としては以上の奉天省鞍山一帶と東邊道一帶を一巡すれば澤山であるが唯最近發見された特殊な鐵鑛脈で熱河省灤平縣下に大廟鑛山があるが、鐵の外にチタンやバナヂユームのやうな貴重な鑛物を含んで居るので其の開發が囑望されて居る。

次に鉛、亞鉛鑛脈を尋ねると先づ錦州省錦西縣下にある楊家杖子鑛山がある。其の成立に就いては後にも述べる積りであるが昔嘗て稼行したことのある山で鉛、亞鉛を伴ひ其の鑛脈も大規模なものであり開坑以來八年の間に設備も整ひ增產を續けて來た。時に近年モリブデム鑛が多量に伴つて來たので昨今此の生產にも力を入れて居る。又安東省鳳城縣の青城子鑛山は建國前から稼行され既に相當の鉛、亞鉛を產して居たが、今尚盛んに稼行中で國內屈指の優良鑛山である。其他產地としては各所に擧げられるが大きなもの少く今日鉛增產を叫ばれる折柄地質學上から見ても新發見が期待されて居る。

今日の情勢で最も必要に迫られ而も產額の不足して居るものに銅鑛がある。滿洲では昔から銅鑛脈には餘り惠まれて居ない様であるが、間島省延吉縣下にある天寶山銅山は二十數年前から探鑛を行つて一部產銅を見て居る。併し餘り期待した程でもなく又本溪湖附近の馬鹿溝鑛山や、磐石縣下の石咀子鑛山寬甸縣萬寶蓋子鑛山等目下盛んに探鑛中であるから幾分銅鑛脈の將來も期待されるであらう

次に金鑛方面に眼を轉ずれば元來滿洲の金に就いては餘りにも有名であり全國到る處金鑛あらざるなしといふやうに各地に分布して居るが大體に於て砂金は北滿、山金は南滿と限られて居るやうな有様である。過去のゴールドラッシユに就いては後にも語らうと思ふが北滿の砂金層は何れも蘇滿國境地帶の邊鄙の地方であるから巡るにも容易でない。黑龍江を遡つて漠河呼瑪一帶には今尚昔ながらの

土法採掘も見られ又數隻の新式の採金船が動いて居るし又下流に下れば佛山から羅北の間に昔の金廠式な砂金地が見られる。又佳木斯以南の山石頭や又穆稜縣下、琿春縣下にも採金船が勢よく活動して居る。更に南滿の山金は到る處點在して居るから一通り視察するのでも大變だが吉林の山奥にある樺甸縣の夾皮溝の金鑛脈は今や國內隨一の金山として開發の途上にある。其他奉天省下の清原金山、分水金山や熱河省下の倒流水金山、五家子金山等既に選鑛場も完成して金增產態勢を示して居るが昨今の金經濟の動向は難局に遭つて益々其の歸趨に迷つて居るやうな有樣で流石に豐富なる金鑛脈を誇つて居た滿洲も地下で髀肉の歎に堪へないことであらう。

其他廣い滿洲で鑛脈を探し當てたものは數限りなくあるに違ひない、鑛脈らしくないもので非常に大きな量を持つて居る大石橋附近のマグネサイトや煙台小市附近の礬土頁岩や又撫順の油母頁岩等は夫々重要資源として開發されてゐる。滿俺や石綿、雲母、滑石のやうな非金屬類も追々と產額が增して來るし又タングステン鑛、アンチモニー鑛等の鑛脈もほつ〳〵と地下から頭を持ち上げて來るであらうし又或ひは今迄豫期しなかつた鑛脈が續續と露れてくるであらう。

私が在滿二十餘年の前半は滿鐵地質調查所員として後半は滿洲國政府や採金會社役員として國內を跋涉し巡り得た鑛山、探し得た鑛脈も數限なく多い。それにつけても建國前の調查が、官權の壓迫や匪賊の脅威や交通の不便でいかに困難であつたかを追憶し、建國後今日の實情と照し合して更に產業開發五箇年計畫實施後の鑛業發達の樣を眺め地下に潛れた種々な鑛脈が露はれ採られて重要資源として國家に貢獻し社會に裨益しつゝある現狀に想ひをいたせば感慨更に新たなものがある。

○鑛脈挿話

日本が滿洲に乘り出し滿鐵が大陸經營を行つてから今日まで殘した大きな業績を擧げるならば先づ鞍山の鐵鑛脈の發見であらう。今でこそ鞍山一帶は重工業地帶として盛んな景氣であるが、三十數年前迄は一寒村に過ぎなかつたことを思ふと今昔の感一入深い。この鞍山鐵鑛の發見者である元滿鐵地質調查所長木戸忠太郎氏に當時の思ひ出話を聽いた事があるが其の記憶を綴つて同氏の功績を稱へると共に鑛脈の功德を偲びたいと思ふ。明治四十二年八月十六日こそ鞍山鐵鑛發見の記念日である。戰塵尙をさまらない南滿の後に來るものは產業開發であり鑛產資源の探索であつた。或る日のこと木戸所長は湯崗子溫泉附近の水脈調查に出掛け方々踏查して居る間に北側の小高い丘に登つた。峰の雲を縫ふて西の方、波狀高地の低空を劃する曲線に痂の樣な異樣な山相を遠望した。附近の百姓に山名を聞くと鐵石山と答へた。鐵石山!!その聲こそ彼の耳には天來の福音に響いたに違ひない。猫が鼠を覘つて居る樣にその大獲物目指して一目散に走つた。駈け登つた山頂には豫期した通り岩石の露頭が脊椎骨の樣に突起して蜿蜒として東西に續いて居るではないか。彼は力一杯第一鎚を下して劃つて見ると違ふ方なき鐵鑛であつたのだ。彼は嬉しさの餘り其の鑛石に見とれて居ると側に居た物知りらしい

古老が鑛片を指してそれは蕀がさゝつたとき此の石で撫でると直ぐとれるがそんな石なら向ふの山にも澤山あると指さした方向を眺めると遙かに峨々たる山骨が屏風の樣に立ち並んで居る。この山々はいつも汽車の窓から見る山ぢやないかと呟いたが、まさかあの山が鐵鑛脈であらうとは思ひも及ばなかつたことである。今の千山驛に下りて鐵道線路に沿ふて進むとバラスが悉く黑い石であり拾ひ上げて見ると貧鑛ではあるが間違ひのない鐵鑛であつた。此の勿體ないバラスにヒントを得て西鞍山の頂上目指して進むと果せるかな鐵鑛の大露頭が現れて居る。更に小河を隔てゝ連亙する東鞍山にも全山皆鐵と言ひ得るやうな雄大な大露頭が横はつて居るではないか。思はず快哉を叫んだ。偶然と言はうか僥倖と言はうか否彼の平生の熱意と努力は遂に酬ひられる時が來た。遲蒔ながら日本人として初めて此の大鑛脈を發見した榮冠は彼木戸所長の頭上に與へられたのである。八月十六日こそは恰も彼の故鄕京都東山の山腹に大文字が點火される日であつた。此の日こそ永遠に記念すべき日滿の大吉日であらう。其後附近の大孤山や櫻桃園、五家堡子等の鐵鑛脈も續々と發見せられ愈々日支合辦の振興公司が設立せられ滿鐵では鞍山製鐵所が建設せられ大規模に鑛石の採掘を初め製鐵を初めたのである。今日の昭和製鋼所の盛況を眺むる時鑛脈發見當時を回想して如何に鑛脈の持つ魅力と偉力の大なるかに驚かされるであらう。此の由緒話は菊池寛の滿鐵外史にも書かれてあるが其を讀む毎に感慨更に深いものがある。

更に北滿に於ける金鑛脈の發見の由來を語らう。滿蘇國境を劃する黑龍江沿岸に於ける砂金は概ねオロチョン族の發見せるもの、或ひは露コサック人の侵入に依つて發見せられたものが多いが十九世紀の末葉になつてこれ等砂金地の噂は「黑龍カリフオルニヤ」と稱せられ、ゴールドラッシュの波は北滿の天地に襲來して來た。金鑛脈を探し求める各人種の群は潮の如く押し寄せて來た。就中漠河の金へ、ジエルトウガ金坑へと叫ぶ聲は各方面へ傳播して露人、支那人、朝鮮人、鄂倫人、猶太人等各人種の展覽會を展開し忽ち數萬人の採金夫が蝟集して恰も萬國植民地が支那の一角に現れたかの觀を呈した。此の一小共和國は人種を別にして風俗習慣を異にした聚落が政廳初め各機關を設け病院や教會や又酒屋や遊興所や賭博場が生れ商家百數十も軒を列べる盛況であつた。又種々法律は制定せられ其の獨裁者を長老と稱して一般から選出し一切の支配の權限を與へられ職務を執行したのである。金を追ふて集る住民、流された囚人の群でありながらしかも人種、國籍、階級の差別なく秩序整然たる一社會を形成して居たことは又金の魅力であつたとも言へやう。此のジエルトウガ金坑から掘り出された金は三箇年間に實に二千數百貫餘と推算せられる程の活況を呈したのであるが其の全盛振りは更に西は漠河から東は觀音山一帶に亙る盜掘に依つて續けられて行つた。此の有樣を支那政府としては默過する筈もなく遂に時の北洋大臣李鴻章は越境、盜金を恣にする露人討伐令を下し兵を派すること數回、遂に金鑛脈を巡る民族鬪爭は終を遂げたのである。此のジエルトウガ金坑も僅か三箇年の泡沫景氣で終つ

たが家は燒かれ人々は追放せられ今は跡かたも見られない唯茫漠たる廢跡と化して昔の全盛を偲ばせるのみである。文豪トルストイの「復活」劇の最後の場面に現れるシベリヤの荒野に砂金を漁つて居る囚人の姿を彷彿する。

尚一つ金鑛脈に因む面白い世界があつたことを紹介したい。道光年間の初め吉林の山奥に彷徨する山東流民の群があつた。彼等は挖金賊と呼ばれる集團であつて人參偸掘や金鑛脈を探し求めて長白山麓樺甸の奥地夾皮溝に盤踞して韓邊外と稱して恰も獨立王國の如き世界を形造つて居たのであつた。從つて此の地域は清朝以來民國を通じて其の首領韓登擧を獨裁者として手兵を擁し自衞するは勿論農業、林業や鑛業等の產業を興し就中夾皮溝の雄大なる金鑛脈を掘り出して巨額の財源を得つゝ猛威を振ひ政府も手の下し樣がなかつた。光緒の末頃には採金夫實に四、五萬と稱せられ產金も數十貫目に及んだと言はれて居る。民國になつても滿洲建國前まで續けられて居て全く馬賊が國を作り產業を興し自給自足して政府治外に於て別世界を成して居たのであつて又或る時は外敵露人の侵入を撃退したこともあり長白山の一角に嚴として君臨して居たのである。滿洲建國後は漸く開放せられ今は滿洲鑛山會社の傘下に入り國內有數の金山として產金に邁進しつゝある。

鑛脈と匪賊の話をした序に今一つ綴らなければならない事がある。今でこそ錦州省下の楊家杖子鑛山と言へば鉛、亞鉛鑛山として否最近はモリブデム鑛山として有名であるが滿洲建國當初は同地方が匪賊の巢窟であつて鑛脈は昔から大きいものがあると言ふことだけは分つて居たが容易に近よれない地方であつた。まして其の鑛山の經營等と言ふことは思ひもよらないことであつたが建國の翌年私がまだ政府に在つて鑛業行政に携つて居る頃の事であるが、日本の白城定一氏は敢然起つて此の開發に乘り出し匪情の惡い楊家杖子に乘り込んだ。爾來九年を經て其の經營は滿業系に移り滿洲鉛鑛會社として堂々たる存在となつて居るが、當時は全村匪賊と言はれる程で到底尋常な手段では稼行も出來ようもないと見てとつた彼は、匪賊である住民を懷柔にかかつた。先づ多額の資金を投げ出して宣撫工作に力め或る時は其の頭目數人を日本內地に連れて行つて日本の偉さを知らしめたり、鑛山の勞働者には高い勞銀を拂つて雇つてやるし警備等にも彼等を信用して自衞せしめると言ふ方法で着々自活の途を講ぜしむるやうに努力した結果、曾て匪賊だつた住民も日本人の眞意が分つてくるし、衣食足つてくれば何も苦んで匪賊稼行をする必要もなくなるといふ工合で遂には匪賊化して居た住民も良民となつてしまつた。毒を以て毒を制した例ではないが匪賊も一定の正業を與ふれば良民化する證據であり又治安が惡いから鑛山經營が困難であるといふ觀念を變して寧ろ鑛業開發に依つて治安を良くした適例であると思ふ。十年この方楊家杖子鑛山丈は匪賊の襲撃を受けることなく益々盛況を呈し偉大なる鉛、亞鉛の鑛脈は更にモリブデン鑛脈を生み國內有數の鑛山となり增產の第一線に立つて居る。此の鑛脈の持つ偉大さに關聯して其の經營施策に當を得た功績は讚へらるべきであらう。

（康九、五　二〇稿）（筆者は滿洲採金會社理事長）

美術近事

國展も今年で第五回、宣詔展から通算すると事實上第六回目を迎へ、あたかも建國十周年の慶祝の行事に際會してかつてない盛會が豫想されてゐる。從來公會堂（燒ける前の）や學校の講堂や敎室など借り歩いてみすぼらしい、見世物興行的なものから、今年は曲りなりにも美術展覽會專用のお家を建てゝ貰へるわけである。

每年問題になる審査のことについては前號で池邊氏が觸れてゐたが、今年は東洋畫に福田平八郞、西洋畫に藤田嗣治、須田國太郞の兩氏と決定發表された。顏振れとしては現在日本畫壇を背負つて立つ現役大家であり、これ以上のものはまづ望めないといへる。さてどのやうな審査が行はれるか蓋を開けてみぬことには分らぬが、從來のやうに偏したり投げやりだつたりすることはまづないと期待されてゐる。

さて近事の方の標題に歸ると、一番大きな問題は美術家協會の統制がとれぬことである。感情やいきさつが四方八方にからみ合つてどうにもならぬ狀態にあるといつても決して過言ではない。一人々々會つて聞けば尤もな理窟もあるわけだが、集團的な仕事になると步調が合はない。

美術行政に成功すればその國の文化行政は及第點だといはれてゐる如く、弘報處當局の苦勞も察するが簡單に物が動くと卽斷する傾向は文化を推進する力とはならない。具體的に陳べたてると數々の事柄もあるが、內幕をさらけ出すのが能ではなし、要は畫家同志の反省によつて人の和を得ることだ。

美術界に新しく登場したのに滿洲工藝家協會がある。工藝といつても圖案の方が主になつてゐて、宣傳美術運動の一役を買つて活潑に動いてゐるやうだ。宣傳美術については美術家協會成立當時から問題になつてゐたものであるが、これは普通繪畫を含めた大きな組織を必要とする。從來のエアーブラシュ式ポスターのみではこれからの力強い意圖を表現するに足りない。宣傳美術組織の確立は今後に殘された大きな宿題である。

展覽會としては「黃土坡」の發表が收穫で、ほか數人內地作家のものもあつたが小品賣繪で問題とするほどのものはなかつた。黃土坡で感じるのは同人皆視野に行詰つてゐることで、何年やつても同じ結論しか出ないどうどう巡りをやつてゐるかにみえる。中では鬪合正明、郡菊夫の兩君に進境を認める。

內地から今年は相當繪描が入込んで來るやうだが、展覽會でも開くのだつたら文化的意義を持つが、畫商やマネヂャーをつれて來て紹介狀の盥廻しでコソ〳〵賣り步き、風の如く表はれて煙のやうに消え去る相當の大家がみられることは頗る遺憾で、添書の安賣りをする大官名士にも責任がある。

最後に生必と美術家協會の努力で美術資材の獲得に成功した勞を謝したい。この材料は切符制として美術家協會員に優先的に配給されることになつてゐるが、もし闇に流すやうな不心得な畫家があつたら滿洲文化の恥辱である。

（古長敏明）

濱北線を行く（現地報告）

横山敏男

一

綏化の驛に着いたのは四月下旬のある日の正午に近かつた。出發する頃新京の楊柳は芽が出かかつてゐたのに、流石にずつと緯度の高い綏化では綠りツぽいものは何一つ見當らず、長い長い冬眠からやうやく醒めかかつてゐるばかりで、厚い防寒具が見當らぬことで纔かに春の跫音が近づいて來てゐることがわかるだけである。

昨年の五月、綏化街は地震に襲はれたことがあり、更に地震に引續く火災で街の目抜きの邊りは燒失してしまつたと噂に聞いてゐたのに、一年經過しない日に歩いてどこに震火災があつたかと訝かるほど立派に復興してゐる。店鋪の多くは滿洲のどこにもザラにある街と等しく何の變哲もないが、流石に春耕期を直前にしてゐるせゐか、種子屋が露天店を並べてゐることと、街の割りに料理割烹店が多いことが目についた。

綏化の支那料理屋には新京で禁じられてゐるサービィスガールが必ずゐる。山出しの女中そつくりのものもゐるが、中には垢拔けした小綺麗なのもゐる。私を案内してくれた土地の人が行きつけのさる飯店に目鼻立のきりつとした姑娘がゐた。顏色が土黄色く生氣がないのでよく訊ねるとその母が阿片飲みのため時折それを吸ふらしいといふ。年はいくつかと訊いたら二十三だといふ。どこの生れかと訊くと阿城の生れだといふ。早く結婚したらどうだとよけいなおせつかいをいふと結婚したいことはしたいが、老母と不具の兄を扶養するものがゐないので結婚できないと答へた。何となしにしめつぽくさせられる話しだ。

といつの間にか彼女がゐなくなつたと思つたら暫くして再び現はれた彼女の顏はさきほどとまるでちがふ美しさだ。よく見ると一寸化粧して頬紅をスーと塗つて來ただけらしいが、たつたそれだけで生氣が潑剌として年齢もどうやら二つ三つ若くなつた。そして「どう？」と鮮やかな日本語で微笑みかけた。

この街は由來佳綏線沿線の木材の集散地であり伐採業者の享樂地であつて、カフエーよりも料理屋が多いのだといふ。合作社の綏化よりも、或ひはさうした享樂の綏化といつた方が一部の人には通りがいいのかも知れない。然しそれは決して日系にとつては名譽ではなささうだ。飯店の壁間に掲げてある××××及××に白酒販賣禁止の警察署長佈告とともに。

合作社や縣公署や三菱商事などで調べるだけのことを調べると朝の早い汽車で佳綏線を東行して東津站に向つた。これまで霽れてゐて數日前降つた泥濘の道もすつかり乾ききつてゐたのに、どうしたことか、内地の花曇りを想はせるやうなドンヨリとした曇り方である。北滿で雨に降られたら困るなと思ひ乍ら未だ見ぬ綏化の模範村のことを思ふと心配も吹き飛んでしまひ、眠り足らぬ眼をこらし車窓を通してあちこちと眺め入るのだつた。

二

東津驛で下車して驛前の食料品店で小憩してゐる間に、案内の合作社の職員が津河鎭の方向へ行く大車を見つけて來てくれたのでそれに便乘させてもらふ。この大車は甜菜用の確安を製糖會社が配給してくれたのを東津驛まで受取りに來た歸途だとのことである。甜菜をやるのは面白いかと水を向けると頭から作りたくないが、どうしても作れと命ぜられるので仕方なしに作るのだと例の愛想のいい社交辭で答へた。大車の通る道は纔かに畑と區別されるほどで、通路の左右前後には黑々とした見るからに肥沃さうな土壤がムクリ〳〵と並んで居るが、概して平坦でなくなだらかな起伏があつて所々が丘陵狀をなして居り、それだけ低い窪地の方は排水の便がないから少しでも雨が多く降ると水びたしになる危險があることが想像される。彼方の斜面を犂杖で土を耕してゆく後から種を播いてゐるのが、何かパノラマのやうに見遙かされる。あれは小麥であらうか。

東津驛から鐵道線路沿ひに逆行して約十滿里、津河に架けられた橋を渡ると三、四十戸の店鋪が並ぶ津河鎭へ着いた。鎭の入口にはこの邊には珍しく立派な國民學校の校舍があり、これと向ひ合つて村公所がある。ぼくたちの小學生時代に習つた讀本の中に村役場と警察と學校が並んでゐるといふ一節があつたことを想ひ出した。

ここは津河村の略々中央部に位して居り、津河村民は綏化の縣城まで買ひものに行く代りに日常必要な雜貨類はこの鎭で大抵は間に合はせ得られるらしい。鎭には珍しい大きな燒鍋がある外は、雜貨鋪、果物屋、飯店等が向ひ合つて僅かに鎭らしい面影をもつてゐる。

村公所を辭して飯店で晝食を認めて合作社支社に引返すと豫定通り三人の農家が聚まつてゐた。一人は七七晌自作、もう一人は五三晌の自作で二人とも興農會長だ、もう一人は三一晌の自小作で興農會長が不在のため代理に來た販賣部長。いづれも屯内で中以上の農家でありその屯では有力者だらう。この三人に津河村で實施した共同出荷の模樣を詳細に質問した。質問が具體的だと答へるが——例へばいつ頃精選袋詰をしたかといふやうな——少し抽象的な——共同出荷を成功したと思ふかどうかといふやうな——質問だと三人でお互ひに顏を見合はせるだけでなか〳〵答へない。

問「來年もやつた方がいゝか？」

答「やつた方がいい。」

問「どうしていいのか。縣城の交易場よりも

東津驛の方が近いからか。それとも手取金が多くなるからか？」

答「兩方共だ。」

問「どつちの方がより魅力があるか？」

答「手取金が多くなる方だ。」（三人異口同音）

問「手取金はどの位多くなるか？」

答「大豆一石で七圓、交易場で賣るより多くなる。」

問「嚴寒期の屋外作業は辛くないか？」

答「交易場で待たされるよりもずつといい。」

ざあつとこんな工合である。滿語のわからない私は、私の言葉が通譯されて農民に話されるときの農民の眼いろを絶えず注意し彼等の答へるときの表情を觀察してゐるのだが新しく試みられた共同出荷の成功だけは肚の底から確信してゐたやうだ。それでいいのだ。合作社の指示に從ひ自分たちが自分たちの仕事として創意性と自主性と積極性を以てやりとげたことは、後から誰にどう批判されようと確信を以て答へていいのだ。よしんば口に出して答へられなくとも、私には彼等の信じこみ方が呑みこめればそれでいい。そしてこんな言葉に表現できない農民の確信といふものは滿洲の農民にとつて、恐らく最初のことなのではあるまいか。

私のこころに何となしほのぼのとしたものがこみあげてきた。

三

夕刻農民が歸るときに用意して來た宣撫用のお土産を渡すと、第二號夫人のあるといふ七七晌自作の大百姓も「謝々」といつて顔中笑ひで歪めながら辭し去つたが、その頃からポツリ〱と雨が降り出したので、今宵の宿舍に合作社支社の人が用意してくれたさる百貨店の房子にそのままゴロリと横になつた。その房子は店に連なつて居て店員の宿泊用の廣い房子で勿論店員と雜魚寢ながら、洗濯したての氣持のいい敷布に眞新しい布團だつたので、河北生れの手代の身の上ばなしを聽きつつ夢路に入つた。

翌朝目が覺めると依然として雨が降りつづいてゐる。百貨店の向ひ側に村の公醫の診療所があるのだが、二十四になる村醫が妻を亡くして再婚するといふので昨日から引續いて結婚式のため樂隊を奏してゐるのが雨に混じつて聞えてくる。外へ出てみると、一面の泥、泥、泥だ、泥の海である。

道はすつかりぬかるんでゴム長の踝までがもぐりこむので氣だけは焦つても足の自由が利かない、やつとある大きな農家に頼んで大車を仕立てて貰ひ停車場まで送つて貰つた。

その折の農民の親切は身にしみて嬉しかつたが、停車場で切符を買つた釣錢の札があまりひどいので換へてくれと驛員にいつたらそれでも使へるといふので、私より後に乘つて切符を買はうとする農民風の男にその切れかかつてゐる札で買はさせようとしたら、こんどは驛員の方で受取らない。さつきは使へると私に云つたのに、私でない別のものが使はうとすると受取らないといふのはどういふわけかと押問答すると、いきなり切符賣場の仕切板を降してしまつた。そして切符はもう賣らないと事務所の内部から嘯いてゐる。これが天下の公器たる鐵道の驛員の態度だらうか！とつくづく身勝手な傲慢さに肚の底から公憤

湧迫つてくるのを感じた。

綏化街へ引返し再び用を果してもまだ憤りは消えなかつたが、夕刻再び綏化から列車に投じて降りしきる北滿の雨を見てゐるうちに何時とはなしに心が和やかになつた。津河村で見た氾濫は津河村だけでなく、綏化から北上する沿線附近は一面に水が溢れて、まるで湖水の中を船で進んでゐるやうだ。名も知らぬ水鳥が時ならぬ水たまりに浮んで居り、小波が漂々と湧き立つてゐる。これが播種期直前の濱北線の畑であらうとは思へない位だ。

海倫の街へ着いたのは夜も九時近く、暮れるに晩い北滿の春の夜ながら、もうとつくに陽は暮れて四邊一面は闇がこめてゐるのに、馬車は一臺もなく、霙まじりの雨が厚いシューバを透して膚に滲み通つて來た。驛から三十分もかかつてやつと申込を依頼しておいた筈の××ホテルに辿りつきやれ安心と思つたも束の間、頼んでおいた筈なのに申込は受けてないし部屋はないとにべなく斷はる女中の小面憎さ。今朝の滿農の親切に比べて何と不深切のことか。この霙の中を未知の街を彷徨つて今宵一夜の宿を探さなくてはならぬかと思ふと、今更ながらに旅の辛さが骨身に堪へる。同行の滿系通譯が居なかつたら危く今朝來の疳癪玉がバクハツするところ。

いくら頼んでも「部屋がありません」の一點張りで仕方なしに再び霙の夜の街をぬかるみながら歩いてやつともう一軒の旅館を見つけて拜むやうにして泊めてもらつた。然し時間が晩いので夕食はなし、風呂もないといふ。それでも疊の敷かれた部屋に眠り得ることを感謝して床の中にもぐりこんだ。

翌日も雨と雪だ。二日つづきの雨で海倫の街はまるでおしるこのやうなどろ〲とした泥濘で、水分を含んだシューバが肩に重い。一日街を歩き廻る。海倫街から西北方四十滿里隔てた興農村といふ津河村と同じく共同出荷が實施された村に下屯することは全く絶望となつた。交通機關は勿論ないし、歩くこともできないし、沒法子、斷念するより外ない。

だが夕方まで降りつづいた雨と雪はいつの間にか止み、夜おそく十日頃の淡い月が射し始め、ちぎれ雲が二つ三つ月のあたりを飛んでゆく。月を眺め、星を見てゐると、遙るばる北へ來たものだとの感懷が湧いて來、こんな北にまで街があるのが何となく不思議に感じられ、人間が終の栖家を求め粘り強く生きてゆくさまがいぢらしくてならなかつた。これは旅の感傷であらうか！

四

翌る朝、六時海倫發の北上する汽車に乘るため五時少し過ぎに旅館を出た。早春の曉の冷氣で昨日の泥濘はそのまま凍りついて歩くとザクリ〱と音がし、水の溜つてゐたところは氷が張りつめてゐるのでパリッ〱と硝子の破れるやうな音がする。朝の太陽がまだ昇らぬので戸は重く鎖され、人ッ子一人通らずたまに大きな狗がうさん臭さうに吠えもせず私を見つめてゐるばかりである。死のやうな靜寂が黎明の北滿の街を包んでゐる。無氣味な沈默の街をたつた獨りで歩いてゆくとどこから現はれたか一升罎をぶらさげた少年が私の前になつたり後になつたりし始めた。海倫の朝、少年、一升罎——何か怪談じみた三

題簽のやうな脈絡のない三つのものが私には何と解釋していいのか見當がつかなかつた。然し私の疑問はある店屋の前に同じく纏をぶらさげて待つてゐる五六名の滿人の行列に少年が入つたことで氷解した。その店は燒酎屋だつたのである。白酒が思ふやうに十分買へなくなつた近頃、酒好きの人は人の起きる前から酒屋の店先に行列を作つて店の開くのを待つてゐるわけだ、恐らくその少年は父のために眠い中を叩き起されて並ばされたのだらう、そして店の開くまで四五時間立ち盡すことだらう、その辛抱づよさ、我慢强さは到底太刀討ちができさうもない壓當である。

漢民族特有の不撓不屈の我慢强さがそこにも現はれてゐるのに、私は六時發の汽車が小一時間遲着しただけで、ゐても立つてもゐられないやうな憤ろしさ焦立たしさに我と我が身を苦しめてゐる性ッかちさ。

北安へ着いたのは午前の十一時に近かつた。恐らく海倫と同じく朝は凍つたのだらうが午前の太陽に照らされて道といふ道は綏化や海倫の泥濘とちがつた、まるで搗きたての餅のやうに粘りつき、ゴム長にベトついたまま土塊がはなれないので次第に靴が重くなり體中がカアッと熱く汗ばんで來る。買出しするのだらう、和服の婦人がねんねこ姿で赤ん坊をおぶつてゴム長で歩いてゐるのも、いかにも北安らしい。昨年の十月に北安を訪づれた際も泥濘に苦しめられたが、又しても泥濘に苦しめられるのだ。

周知の如く北安街は康德六年六月北安省が新設されるまでは齊北線と濱北線との接觸點としての交通要衝にしか過ぎなかつたが、省公署が置かれるやうになつて以來、地方政治都市として急速に發展して來た。現に昨年十月私が行つたときになかつた興亞塾の建物が僅か半歳で立派に建築されて居り、外の泥濘道とは凡そ似つかはぬ近代的なグリルを備へた興亞會館が街の名物の一つになつてゐる。

さうした建設のテムポは速いけれど依然として住宅難は深刻の上に、新京よりももつと高家賃で例へば私の知人が住む六疊一間のバラック風のアパート（といふと氣が利いてゐるが實は長屋である）の一室が五十圓もするといふのでも凡その見當がつくことであらう。そしてこれだけ日本人が大勢住んでゐるのに日系の理髪店が一軒もないことで北安の文化水準は想像ができるが、かうした殺風景な政治都市に生活的な潤ひをもたせるといふことはどんなに大事なことであらうか。

五

北安に何の魅力も感じなかつた私も、北滿最古の都會の一つである呼蘭に着いたときには呼蘭が「北滿の奈良」と自稱してゐるだけに淡い希望を抱かされた。そして驛から街まで一直線八滿里の道程も古都への關門としてさして氣にはならなかつた。家屋の作り方も心なしか舊いが堅固で永持ちしさうであり、日本ならばさしづめ老舖と稱したいやうな店舖のあるのも古都らしく、聳え立つ天主堂の塔も關帝廟も異敎徒の眼にはエキゾチックに映らざるを得ない。

折から呼蘭神社の春祭りであるせゐか、それとも陽氣のよさに釣られてか、神社の鎭座する西岡公園の中は藍衣の姑娘や太太でいつ

—（濱北線を行く）—

ぱいだ。そしてどの女も必ず向日葵の種子を噛んでゐるのも北滿らしい。公園は新京の數數の公園を見馴れてゐるものには珍しくも何ともないが、少くとも北安の泥濘を歩いて來たものにはオアシスのやうなものである。もつと春が闌けたならば、嘸かし樹々の新綠も美しからうし、草花も咲き亂れることであらうが、惜しや晩い春はまだ門口まで來てゐるだけで、公園そのものは冬の名殘りが消えやらずたゆたうてゐる。

こんな古都でありながら、日系は非常に少いらしい。恐らく一時間ほどで哈爾濱へ行ける距離にあるため、家族を哈爾濱に住まはせておくからかも知れない。そして北滿につきものの兵隊さんの姿もあまり見當らない。日系が少いせゐか、日本人旅館は××ホテルといふのが唯一軒きりである。所がその××ホテルといふのがホテルなどといふのは凡そをこがましく、女中もゐないし風呂も內便所もない木賃宿同樣のボロ旅館で、古ぼけて黑變した疊が敷いてあるのがせめて旅館といへる特徴かも知れない、狹い四疊半の一室でウトウトまどろんだ私はやがて叩き起されて相客を要求された。斷はれば相手の人が困ると思つて止むなく承知し、どこの誰とも知らぬ人と枕を並べて一夜を明かした。

翌る日、所用を果してからもう一度公園へ行き、興行中の日滿曲馬團といふのを見物する。十二三歲位の少女を臺に載せて少女の毛髮を二間位高く宙に浮いてゐるブランコに結びつけ臺をはづして少女に彈みをつける。少女の體は僅かに一部の毛髮でブランコにぶらさげられて居るきりで前後に往つたり復つたりする。見てゐてその垢脫けのない殘忍さ、肉體虐使が腹立たしくなる。少女は空中で坐る恰好をしたり着物を着たりするだけで、ミソは毛髮で體を支へてみせるといふことだけらしい。地上に降り少女の顏は血の氣が失せて土黃色になつてゐた。

春の陽はうららかに晴れてゐる。ほんの二三日前迄の雨や雪はどこへ行つたのか知らぬやうな表情である。道もすつかり乾ききつて一寸した風にも埃がモウ〳〵と立つほどで、着てゐるシューバが恥づかしい位である。汽車の時間がなくなつたので天主堂の中は見物できずそのまま停車場に急いだ。

それから二三時間後、私は哈爾濱のキタイスカヤのロシア喫茶店でたつた獨りでお茶を飮んでゐた。西洋映畫に出てくるやうな美しい紅毛碧眼の婦人がスマートなスタイルで帽子をチョンと斜めにかぶり、赤い紅をつけた爪のあるきやしやな指を操つてタバコをくゆらしながら、何の屈託もなささうにお茶を飮んでゐる恰好を見ると、これが滿洲かと思ひほんのさつきまで北滿の泥にまみれ埃にまみれて來た自分と自分がちがふやうな錯覺を感じた。だがさうした有閑マダムや有閑令孃にどんな希望があるのか、生命の歡喜があるのかを訊問してみたい衝動に驅られる。恐らく一遍もかうしたお茶やお菓子をたべることもなく、北滿の曠野の涯てに孜々として增産に勵み誰に知られることもなく靜かに眠る日の來るまで働きつづける農民の力がどれだけ尊いことか、血と汗のみが新しい土を耕し得るのだといふことをキタイスカヤで私はハッと氣づかざるを得なかつた。

早春

―或るマクシムの手記―

長谷川濬

（一）雪ひばり

荷馬車（テレーガ）は約束通り十時に來た。たくましいロシヤ馬二頭立の馬車が内庭に入ると、若い人々は僕の爲に乾草を山盛りに馬車に積み上げて行程の安全を祈るのである。

　この荷馬車は春より初冬にかけて三河交通機關の主要なものである。二頭立の馬車は人間のほか、あらゆる物をのせて三河の村から村へ驅け巡るのである。道路が悪い。それで、人間が乗り行く時は家畜の多季飼料である乾草をスプリング乘クッションの代用にうんと積んで、その上に人間が坐つて旅するのである。僕は配給された砂糖三斤と石油一罐をぶら下げて内庭に出た。もはや出發するばかりだ。馭者は毛衣（ダハー）にくるまつた滿人、荷物を乾草の中におし込めて、私は馬車の上にあぐらをかいた。

「えい、ほう―」

　馭者の合圖で馬車は動き出した。

「一路平安（スチャストリーオオプチー）！」と人々が手を振る。僕も應へた。車輪は薄氷をばりばり割つて廻轉した。

　寒い、もはや復活祭もすぎて六日經つたのに、僕は羊皮シユーバに防寒帽子と云ふいでたちで無様に坐つてゐる。四月の半ば近く、春は直ぐ傍にやつて來たのであるが、未だに山々は雪に覆はれ、夜は赤々とペーチカを燃やす。でも、流石に春めいて、道は解水でぬかり、車輪の跡も新しく、人々はカートンキを脫いで長靴やエチギー（ザバイカル地方農民特有の長靴）をはいて歩き出した。各戸毎にはぶらんこが吊られて少年、少女が輕やかに乘つてゐる。もう春はやつて來たのだ。

　僕は遠ざかり行くドラゴッエンカの家を眺め乍ら今更季節の變轉に驚いた。

始めてウエルフ・ウルガに乗り行つのは二月の半ばであつた。極寒（マローズ）で零下四十度はあつたらう。僕は防寒具物々しく毛布にくるまり、眼だけ出して橇で走つた。忽ち眼鏡はばりばりに凍り附き、髮の毛は針金のやうに硬直し、寒さは毛布のすき間からぴりぴりと僕を刺した。橇は雪原と白樺林の間をひた走りに走つた。途中人影も見えなかつた。しんと靜まり返つた林の中に橇の軋しむ音がこだましてひびき渡つた。

　四月。僕は馬車で再びウエルフ・ウルガに赴くのだ。復活祭を送つた三河は、春の息吹に蘇らうとしてゐる。そのぬかるみの道を馬はたてがみを振り、鼻を鳴らし勢よく泥をはねて走るのである。道が悪いので震動が頭のてつぺんまで沁み渡る。

　陽當りのいゝ山の斜面にはもはや雪は消え、らくだ色の枯草や山肌が寒むさうに露出してゐる。そして牛や馬がのろのろと草を食つてゐる。大きな猛犬が二匹飛び出して走る馬に挑みかゝつた。白い牙をむき出して噛み附かんばかりの勢で馬の脚下に吠えつき、またはなれて車の後に牙を鳴らしてつきまとう。馭者がびしりと鞭を食らはすと一層たけり狂ひ、僕にまで飛びかゝらうとする勢だ。三河には到る處に猛犬が潜んでゐて、うつかり夜歩きをすると噛み附かれる。僕も黒い猛犬におそはれたが厚い羊皮シユーバのお蔭で噛み附かれる事だけは免れた。

　二匹の犬は交る交るしつこく馬に吠えつき、鞭に牙をむいてつきまとつたが、やがてあきらめたらしく、立ち停つて我々を見送つた、今までの狂暴はけろりと忘れた目附で馬糞等を嗅ぎ廻つてゐる。馬は深く雪を蹴ちらかして白樺の林へ入つて行つた。見覺えある林だ。車輪のうねりが延々と續いて、はるか山の頂に消えてゐる。行手は遠い、あの山を越え林を拔け、原を通つて馬車は走る。

　僕は乾草の上に坐つて犇々孤獨感に浸つた。これは僕の癖かも知れない。家族と別れ、友人とへだたり、語り手もなく獨りシベリヤの果を旅するやうな寂寞たる旅情が身に沁み渡るのだ。

　僕は車の震動に身を委せて目を閉ぢてゐた。都會に生れ、都會に育ち日本の農村さへ充分に知らない僕が、突然カザックの部落に入つて生活する―あらゆる都會的利便を拒否して、ランプの灯の下に獨り坐す生活と環境に堪へて文學活動を續行するのは容易ではないと覺つた。僕の周圍は蒙昧なカザックばかりである（ロシヤ人に云はしむればザバイカとカザックをグランスと稱して輕蔑する。グランスとはシベリヤに生棲する野生の山羊である）彼等には生活がある。大地と家畜と野獸がある。此の地に生れ、此の地を耕し、牛馬を殖やし、收穫をたのしみ、寺院に祈りをさゝげ、ウオートカと踊りがあり、狼と戰ひ、カザック魂がある。僕はそれ等の生活を掴みに來た異人種の一人である。僕がどれだけ彼等の中に入つて行けるか、土の中に埋まつて行けるか、此の大地と風土を自分の身につけ、こなし得るか、僕は新しい試みに自ら體當りをしなければならない。既成の生活觀念ではやつて行けないのである。三河には三河の生活がある。味噌汁と米飯を思ひ切つて、パンと牛乳と肉を取らねばならない。僕はその日常生活に先づ馴れねば生活出來ないのだ―と。

鳥の聲で目を開いた。僕は空を仰いだ。空一杯に雲雀がさへずつてゐた。それは大地と空の間に滿たされた春の歌であつた。山野は未だに覆はれてゐるのに、空はもはや春の喜びに震え、雲雀は高く、雲の上でさへづり、その聲は地上にも滿ち溢れる感じであつた。雪と雲雀、僕は不圖雪ひばりと云ふ名稱をつけた。たしかに雪ひばりである。三河の春は雪ひばりに始るのだ。

僕はその聲に耳傾けた。

「雲雀(ひばり)が歌つてるね」

僕は馭者にロシヤ語で話しかけた。

滿人は分らないらしく鼻水をこすつてにやりと笑つた。

だくを踏む馬の前を小鳥が泳ぐやうに飛び交はしてゐた。小さく短く鳴き乍ら翼を張り、うれしげに高く、低く飛ぶ、僕は不圖、航海の海豚を思つた。泡立ち騷ぐ舳に群れ遊ぶ海豚の白い腹―遠い日の北の海が胸をかすめた。僕には何處に行つても海の匂がつきまとうのだ。ひばりの聲はしきりなくひびいて來る。姿は見えない。

「春が來た」と僕は獨り言した。

馬車は白樺林に入つた。しんと靜まつて、小枝が微風にゆれてゐるだけだ。黑くかたまつた茂みがうずくまる熊のやうに見えた。

「えい！ほう！」

馬はだくを踏んで坂道にかゝつた。ドラゴッエンカからウエルフ・ウルガまでの四十キロの行程には部落は一つもない、全く無人の境である。時々新運びの馬車や、乾草を積んだ馬車に會ふ位のものだ。人間に會ふ事はたのしいものである。

稜線にぽつんと黑點が現はれ、近づいて來た。ウルガからの馬車である。長靴をはいたカザックの女が馬車に乘らず手綱を持つて歩いてゐる。馬車の上には毛布にくるまつた十歳位の女の子が蒼白く、物憂げに坐つてゐる。亞麻色の髮が寂しく風に震へてゐる。一見して病氣らしい。僕を見やうともしない。

「今日は、何處へ行くかね、おかみさん！」

と僕はあいさつした。

「はい、今日は、ドラゴッエンカさ行くだす、このわらさあ、あんべご惡ぐてね、醫者さ見て貰はねば……」

と母親は目をぱちぱちさせて答へ、哀な娘を見る。娘は默つて動かない。

「それあ、困つだなあ、まあ大事に…。ドラッエンカでわがねなら、ハイラルさ出るんだな。おかみさん」

「すたども…ぜんこねえしけ……」

母親は淋しく笑つて手綱を取つた。

馬車は動き出した。三河農民の衞生狀態が惡いと聞かされた。彼等の無智が主要な原因であるし、家畜の病氣がどしどし人間に傳染するらしい。多くは肺を犯されてゐる。本人は知らずに居る。弱い幼兒は醫者の手にかゝらない裡に死亡する。家畜がばたばた倒れる。その肉を食ふ。

三河で最も不足してるのは醫者である。良醫が居ない。仁術を以つてこの邊境に苦鬪する人道の士が居ない。シュヴァイッエルのやうな醫者は滿洲國で求め得ないのであらうか？

僕は振り返つた。母親は不相變歩いてゐる。子供は動かない。小さい馬車はやがて白樺の村へ入つて了つた。あの娘の目が氣にかゝる。いゝ加減な治療で、その裡に十字架に變るのだらう。可哀相な娘。

馭者が道を間違つたらしい。見馴れない山と耕地が現はれた。丘の稜線にのびてゐる一本道に沿ふて馬車は急ぐ。どうも變である。

「おい、何處へ行くんだ」

「ウエルフ・ウルガでさあ」

「道が違ふ。大丈夫か」

「大丈夫でさあ、これが近道で……」

と馭者は平然と答へる。僕は不安である。周圍を見渡す。人影も見えない。遠方に放牧の牛が動くだけ。

馭者の樣子も變である。どうも自信がないらしい。馬は深い雪に難澁して、首を振つて力(リキ)んでゐる。ますます不安がつのつて來る。―道に迷つて山野を彷徨する。當てもなく馬車を走らす。寒さは增す。ひもじい。震へる。夜が迫る。星がまたたき出す。馬は疲れ切つて動かない。人間はいらだつて徒に鞭を振る。駄目だ。突然馬が異樣に胴震ひする。林の中に凄い遠吠。狼だ。ぎらぎら目を光らせ、牙をむいた小牛程の獸が、長い尾をたらし、耳をぴんと立てゝ、三四五四八四と現はれて我々を包圍する。馬は恐ろしさに震へてすくみ上つてゐる。僕には銃も斧もない。むざむざと人馬もろとも食はれて了ふ。―僕はこんな場面を想像した。

「おい、此の道を引き返せ、逆戻りだ」

馭者は僕の云ふ通りにした。彼は道を知らないのだ。雪原をこえて走ると見馴れない開墾小屋(ザイウカ)のある耕地に出た。一人の蒙古人がバゴーリナ（家畜捕獲用の棒）を小脇に馬を走らせてゐるのにぶつかつた。

「ウエルフ・ウルガはどの方角かね」

と僕はロシヤ語で訊ねた。

「あゝ、ウエルフ・ウルガかね、この山を越えて眞直ぐ行くと、道に出る。それを左に行けばウルガだ」

と流暢なロシヤ語で答へて右手にある丘を指差した。陽にやけたたくましいいかん骨が光つた。

「スパシーボ」

馭者はほつとして鞭を振つた。僕も微苦笑した。臆病者の旅はこんな失態を演ずる。丘を越えると廣々とした低地が展開して、はるか彼方に二臺の馬車がのろのろ動いてゐる。ウルガ行らしい。

「おい、見ろ。あれだ。ぼやぼやするなよ、道も知らねえ馭者なんて眞平だ」

僕は馭者の背をたゝいた。彼は默つてゐた。

「え、ほう、この野郎……マーチ」

と例の母親云々の罵倒で馬にあたり散らして無茶に走らした。

先行の馬車に追ひ附いた。滿人が呑氣な顔で坐つて僕の馬車を見送る。

「何處さ行くかね」

「ウエルフ・ウルガさ」

その答へでまた安心した。

時計を見る。もはや午後三時だ。この時刻には村に到着する筈だ。丘を越えて、林を通り拔けた。廣い野が擴がつて、その涯の山のふもとに點々と人家が黑く見えた。ウルガである。

「あれがウルガだ」と僕は指差した。

馭者は鞭を強く當てた。坂を下りると人家は山蔭にかくれた。そして近づくにつれて寺院の塔が丘の上に高く聳えてゐるのが見え始めた。綠色の屋根が午下りのうす陽ににぶく光つてゐた。

ウエルフ・ウルガ！僕はあの寺の下にある白壁の家に住む。さゝやかな机とペーチカとランプが僕の歸りを待つてる。そこが僕の假の栖家である。

馬車はがた〱ゆれ乍ら、馬糞に埋まつた村の道にさしかゝる。大人のパパーハ（毛皮帽）を冠つた村童が靑い目をみはつて僕にあいさつする。

「ズラーステイー」

（二）復活祭の夜

四月二日に僕はウルガに入つた。五日が復活祭である。どの家のペーチカからも御馳走の匂が漂ひ、主婦達は部屋を清め、晴着を縫つてゐる。窓には眞新しいレースカーテンがかけられ、遠い部落から卵や仔豚が運ばれた。山の雪も日增しに解け始めた。

四旬齋第五週もすぎ、カザックは食を絕つて四月四日の深夜を待つてゐた。

四月四日の十二時から寺院に儀式が始まる。僕は四日の夜、着たまゝベットに橫はつて十二時を待つた。月のない暗い夜だつた。星屑が空一面にばら撒かれてゐた。

鐘が鳴り出した。僕はベットから起きて星明りで時計を見た。十一時半。

鐘はしまりなく鳴り渡り、暗い夜道を人々は寺へ急ぐ、僕も羊皮シューバを着て寺の方へ急いだ。丘の中腹にある寺は星の夜空をバックにくつきりと浮び、鐘樓には赤と綠のランタスが大きくゆれ動いてゐた。その下に「キリストは蘇へり」の文字が赤く浮彫されて蠟燭の灯が風にゆらめき、その文字は小波のやうに震へて見えた。素朴なつつましい光りに彩どられたウルガの寺院は無數の星に圍まれて聖なる儀式を迎へやうとしてゐる。人々はぎつしりと寺院の前に犇めき、手に手に小さい蠟燭を持つて集まつた。司祭が聖像を高く揭げ、その後に村人がつゞいて

寺院の周圍を三回巡つた。やがてまばゆい堂內に司祭は入り、聖歌が高誦された。人々は堂外に溢れ、司祭の祈りのことばに和す。聖像と蠟燭と旗とシャンデリヤの輝き渡る堂內から靜かなバスがひゞき、人々は直立のまゝ十字を切る。間もなく堂內に前進し、扉は固く閉された。

大人も子供も男も女も小さい蠟燭の灯をかざして「キリストは蘇へり給へり」をくり返す。その聲々はあたかも天上より靜に舞ひ下りて風のやうにさゝやいて堂內に滿ちて行くやうだ。僕は扉の傍に立つて黑くうごめく人群を眺めてゐた。陽に燒けた百姓が一張羅を着て、節くれだつた指に蠟燭を握つてしきりに十字を切つてゐた。

僕は獨り、こつそり外へ出た。窓は灯にゆらめき、深夜の合唱は上昇して星をかすめた。瞬く赤い灯、風にゆらぐランプタン、あたりを包む靜寂。僕は丘を下りて、部屋に戾つた。祈りは四時までつゞけられるのだ。

四月五日は晴れ渡つた暖い日であつた。朝から隣室は客が騷々しい。復活祭を祝ふ人々がしきりなく訪ねて來るのだ。

洗面してると、婆さんが甲高い聲で僕を呼ぶ。

「マクシム・ニコライウイチ！來なさい。今日はお祭りですよ」

ラムパース入りのカザック服の校長が二人の學童にキッスをして葡萄酒を一杯づゝ振舞ひ色卵を一つづゝやつた。

「キリストは蘇へり給へり！」

僕は校長の手を握つた。キッスは遠慮した。

朝からウオートカの盃を上げる。卓上には色々な肉やパースハの菓子や色卵が處せまく並べられてゐる。酒瓶も林立してゐる。

カザックの一群が入つて來た。鋲打ちの飾帶をきりゝとしめ、黄色のランパースに長靴、黑いバーシュカの連中がめい〱抱き合つてキッスをする。髭もじやも若者も區別なくやるのだ。僕には見馴れない風景で一寸背中がこそばゆくなる。そしてオートカの乾盃だ。

「マクシム・ニコライウイチ！さあ乾盃しませう！」と村の書記(ピーサリ)が盃を擧げる。一行は僕を誘つてアタマンの處に出かけた。彼等は各戶をめぐり歩いてキッスをやり、ウオートカをのみ、一日中、一晚騷ぐのである。

村の街道は春の陽に輝いてゐた。晴着をまとつた娘の一群が晴れやかに笑つて歩いてゐた。ウルガに入つて娘の群を見たのは始めてである。

子供等の歌聲が到る處からひゞいて來る。白樺の薪の蔭から、家畜小屋から、乾草の山から……。

家々の門、納屋の梁(はり)にぶらんこが作られ、子供等は來り、足をふんばり、合唱をくり返す。長い板の兩端にロープをくゝりつけ、それをぶら下げた急造へのぶらんこである。牛の鳴聲、鵞鳥の聲、馬のいなゝき、豚のキーキー聲に和してぶらんこは高く大きくゆれ、子供等のパパーハやスカートが空に花のやうにゆらめいてゐる。子供の合唱は遠く近く聞え、村全體が合唱してるやうだ。娘がはづかしげに歩く。若者達が亂暴に走り廻る。パースハと共に急に人出が殖えて活氣づいた。鐘はし

きりに鳴り渡つてゐる。山々の雪は雲母のやうにきら〳〵光つて春の陽を照ら通してゐる。

アタマン・アクローフは人參色の頰髭をしごいて我々を迎へた。またキッスの交換である。彼はカザックの古武者である。酒燒けした赤い鼻をこすり乍ら酒をすゝめた。山羊肉でウオートカをのむ。長靴の行列だ。そしてだぶだぶのヅボン、飾帶の金具、黃色い帽子、鈍重なザバイカル土語の會話、赤ら顏、靑い目、黑い目、蒙古人の肌、髭……。祭の中に何か荒々しい男の氣分が漲つてゐる。ロシヤ人の集りではない。蒙古人、ブリヤートのスケツプの人々の集りだ。邊境で奔放に馬を飛ばすカザックの氣分が自ら出るのであらう。

女共はペーチカの傍にうづくまり、物靜かに樹脂を嚙んでゐる。聖像の周圍は美しい造花に飾られ、燈明が小さく綠色に燃えて吊られてゐた。

春の光りと共に、色々な聲が窓から入つて來る。人間も家畜も一所だ。仔牛がよた〳〵步き、仔犬は丸くなつてじやれつき、仔馬が長い脚でひよろ〳〵立ち上つて母馬の傍をはなれない。羊がめーめー鳴く。外も內も陽氣で暖い。

あの極寒より解放された復活祭の歡喜は、この土地に住まなければ分らないであらう。きびしい大齋期より解放された人間復活と回春の調和だ。雲はどし〳〵消えて力强い春の息吹がアルグンに躍動してるのだ。祖國ザバイカルを追はれたカザックの軍國が三河に安住の地を求め、星また〻く聖夜に蠟燭の燈をかざして「主は蘇へり給へり」を昔のまゝに高誦し、ウオートカをのんで祝福し合ふのは大いなる喜びであらう。傳統と宗敎を保持し、昔ながらのカザック軍服に誇りを持つのもこの三河地方のみであらう。醉ふとエルマクを歌い、モスクワの火事や、ステンカラーヂンを歌ひ、長靴をたゝき、床を踏み鳴らして踊るカザックの春は、復活祭と共にやつて來た。

僕はウオートカに疲れて、早く床に橫はつた。カザックの色々な顏がちらつく。會話が耳を打つ。長靴が鳴る。そして聖歌が潮のやうに湧く。

「キリストは蘇へり給へり！」

あのトルストイの生々した描寫がはつきり浮んで來た。つゝましいすが目のマースロワ、純なニエフリユードフの微笑……。敬愛に充ちた祝福のキッス。鬼ごつこ。ごわ〳〵したスカート。ライラックの一枝。汗ばんだ掌。氷の割れる音。……ウルガで僕はトルストイの描いた村のパースルの氣分を反芻してゐた。それはすばらしく生氣に溢れた春の氣分であつた。

(三) 村の婚禮

私がムルガに歸ると、クセーニヤ、ニコラエヴナの處でワシリーがドラゴツエンカから花嫁を掠つて來たと云ふニユースを聞かされた。花嫁掠奪は三河でよくある事件だ。

ワシリーは二十歳位の若者で顏のさくらんぼ色をしたカザックで、母親と妹とつゝましく暮してゐる男である。二月頃だつた。僕に復活祭がすぎたら結婚すると云つ事を僕は思ひ出し、娘(ニェヴェースタ)はドラゴツエンカにゐるとも聞かされた。クセーニヤ、ニコラエヴナの話によれば、夜にこつそり花嫁を連れ出し、十里の夜道を急行してワシリーの家にかくまつたらしい。掠奪と云つても當人同志は承知の上だ。ワシリーの場合、娘の母親が結婚を承知しない。二人は一所になりたい。そして男が無理矢理に娘を連れ出した形にして、不承知の母親に對して强硬手段をとる。まあ一種の驅落ちかも知れない。御本尊の娘を取られて了つたので仕方のない事である。すつたもんだの上、結局、二人の結婚は許されると云ふ筋書通りに落着くのであるが、所謂娘掠奪のほんものも三河にあり、不首尾に終つて破鏡の嘆や悲喜劇も相當あると聞かされた。

ワシリーの場合は筋書通りめでたく終りを告ばたのであるが、それですら簡單には解決しなかつた。僕がその噂を聞かされてた翌朝當人のワシリーがあわてて校長さんを訪ね、何か大聲でわめき、校長さんに靜かに說敎されてゐるらしく、歸りぎはにぱつたり僕に會つたが、挨拶もそこそこに出て行つた。さくらんぼ色がやゝさめて、心持やせて見えた。

娘の母親が强硬で、筋書通りに行かぬらしい樣子であると聞かされた。それからワシリーがフラーシユカをあみだに冠り、額と鼻の先に汗をかいてあたふたと司祭の處へお百度を踏む姿を僕は窓越しにしば〳〵見て、奴さん工作してるなと獨り微笑して成行を注目してゐた。人の戀路であるが、僕は成功を祈る一人であり、ワシリーのシンパであつたのだ。

間もなくワシリーが夜道に馬を飛ばしてドラゴツエンカに急行したと聞いた。それは母親の說得と結婚許可書獲得の重要任務を帶びて十里の夜道を飛ばしたのだ。そして遂に母親を口說き落し、書類萬端整つて意氣揚々と歸つて來た。僕は結婚の前日、ぱつたり道でワシリーに出會つた。

忙しそうに驅け巡つてゐる最中であつた「どうしたね、あの一件は？」と僕は訊ねた。

「首尾よく收まりましたよ、明晚式を擧げます。是非來て下さい」

彼はさくらんぼ色を越したトマト色で昂然と僕を招待した。

「それはおめでとう、是非行きますよ」

僕は彼の手を握つた。彼はうれさしうに鼻汗をふき乍らいそ〳〵と立ち去つた。ウルガにも春が來たのだとつくづく感心して彼の後姿を見送つた。

翌日、ワシリーは朝から獨りで驅けめぐつてゐた。式の準備に孤軍奮鬪の樣子だ。式の始まる前、六時頃であつた。外套のポケットにウオートカや葡萄酒の瓶五、六本突込み、兩手に怪しげなユニヤークを二本ぶら下げてあたふたと驅けて來る花むこに僕は出會つた。

「忙しそうだね」

「この通りさ、ずつと走りつづけで足は棒さ。花むこ兼ボーイで暇なしだよ」

上氣した顔を振り振り答へた。汗をふく手すら持合せがなく、馬のやうに顔を振つてゐた。

七時頃、僕が外出するとワシリーの家の前は近所のおかみさん、村の娘、子供で一杯の人だかりだ。花嫁見物に集まつたのだ。日本と變りない人情である。男は居ない。衣裳やお化粧に興味を持つ女共がわい〳〵と覗いてぺちやぺちやしやべつて居る。

「おいや、未だゞべかね、ずんぶかゝるもんだ」

「ゆるぐねもんだねー。嫁ごも…」

「うるせわらすだ、あつちや行けてば」

「やんだ。おら見ねばけえらねえよ、おがちや!」

「ふるめこで、ゴリコ、ゴリコではあ、やるもんだべなあ!ほんとに、はあ……」

等々の騒然たる有様で、仲々景氣がよい。空がライラック色に染まつて夕星がきらりと光り出した。人々は寺院の方へぞろ〳〵行く。婚禮見物の連中である。

僕も寺へ入つた。堂内は暗く、燈すらなく、その中に人群がうごめいてゐた。近所の百姓共が集まつた。むつと臭い。女の子供達が鼻水をすすり上げ乍らきよろきよろしてゐる。さゝやき、せき聲が小波のやうに漂ひ、うす暗に大小の頭がしきりなくゆれ動いてゐた。やがて司祭が蠟燭の火をつけ、祭壇に聖書をおき、シャンデリヤに火をともした。明るみがさつと流れて、人群を照らした。晴着をまとつた村の娘が五、六人すまして前列に並ぶ、眞新しいルバーシュカ姿の青年が並ぶ、ワシリーの親しい友人や媒灼人であらう。人群が割れて、花嫁花むこが出て來た。花嫁は白ベールを頭より長く垂らしてゐる。小柄な女で、蒼白く、やせて年もそう若くない。つゝましく伏目勝だ。花むこは白カラーの背廣で顔はさくらんぼ色に輝いてゐた。つい先刻まで酒びんをぶら下げて駆けずり巡つてゐた花むことは思はれない程すましてゐた。

司祭が祈りの句を高誦して、二人に蠟燭を持たせた。また祈りがつづき、太いバスの聖歌がひびき、人々は十字を切つた。指環を二人の指にはめる。二人はそれを三回づゝ交換し合ふ。その間聖なる誓ひの句が高誦される。それから金の冠を夫々二人にかぶせる。重そうな冠を戴いた二人はうつむいて十字を切る。燈がかすかにゆれて冠を照らした。そして赤葡萄酒を三杯づゝ司祭の手によつて二人に飲ました。三々九度であらう。

司祭は二人の手を把り、祈り乍ら祭壇を三回廻る。二人は司祭に導かれて冠も重たげに巡る。ベールがなびいて裳裾が小さく震へた。冠は再び脱がされた。式も終りらしい。僕は外へ出た。暗がりの窓によぢ登つて中を覗き込んでる若いカザックがゐた。やがて走り出した。小脇に大きな手風琴を抱へてゐる。婚禮の風琴彈きらしい。

「やあ!忙しいかね」

と僕がひやかした。

「あゝ、忙しいだよ、早速ぶか〴〵やるだ」

と答へ乍らあわてて坂を下つて行つた。

僕は皿の贈物を持つてワシリーの家に出かけた。家の周圍は人群で騒騒しい、暗がりの街道に若者の歌聲がひびいて、足音や笑ひ聲や甲高い聲がうよ〳〵どよめいてゐる。窓邊に燈がゆらめいて人影が動いてゐる。僕は低い戸口に立つて、扉が開いて村娘の一隊がどしんと僕に突き當つて走り出た。花嫁見物の連中である「おんや、まあ、嫁ごあやせだなあ!」「あんずますくはあ、並んでお茶このんで!」等等々の金切聲が闇の中に消えて行く。

お茶の時間がすむまで僕は玄關口で待つてゐた。しきりなく手風琴の音が洩れて來る。婚禮見物の彌次馬も歸つて、宴會となる時、僕は入つた。かぎ形の食卓の奥に、聖像の下に二人は仲むづまし氣に坐り、その兩側には媒灼人夫婦が坐つてゐる。その他カザックの男女が三十人ばかり、處せましと並んで浮々してる。片隅では手風琴彈きがしきりに鳴らしてゐる。日本人は僕一人、一寸氣まりが悪い。

一同席につく。赤葡萄酒の盃が巡り、二人を祝福する。色々な料理が處せましと置かれ、黒パンの山だ。女客には葡萄酒、男客にはウオートカが間斷なく廻つて來る。僕も飲む。カザックが盛にすゝめる。冗談と笑聲がしきりなく湧く。ワシリーは盛に花嫁にサーヴイスだ。肉を切つてやる。自分の飲みさしの半分を飲ます。二人でささやく、大いにやつてる。僕は獨りでウオートカを飲んでゐた。場内はざはめき、人々は上氣し、盃は盛にめぐる。ワシリーのお母さんは一人でてんてこ舞ひだ。

「どうぞ、皆さん、のんで、召上つて下さい。息子の爲に、どうぞ」大きな身體から案外可愛らしい聲を出す女だ。村の娘達は一張羅を着てすましてゐる。葡萄酒等をのんで一應すます處が可愛い。男はカザックの服に長靴、陽にやけた額を光らせてウオトカのがぶ呑みだ。僕はぼーとして沈默してゐた。語り手もないのだ。

「ゴーリコ、ゴーリコ」

カザックが叫んだ。

「ゴーリコ、ロガーム」

一齊に花むこ花嫁に注目した。

二人は立上つてぴつたりとキッスをする。

一同ほつとして盃を乾す。

「これで甘くなつたぞ」哄笑が湧く。

「未だ未だ、苦いぞ!」とひやかす。

「ゴーリコ、ゴーリコ」

突拍子もないソプラノで婆さんが叫ぶ。それに娘が和す。

「にーがーいぞ!にーがーいぞ!」

二人は立上つてキッスだ。當分ゴーリコがつゞいた。

「今度は媒灼人の番だ。ゴーリコ!」

「何を云うか、まだ早いぞ、俺の番は」

「ゴーリコ!」

で今度は媒灼人夫婦がやり出す。混然たる光景で、僕は目先がぼーとし

て來た。ウオートカとキッスが利いてしまつたのだ。

ゴーリコが何回叫ばれたか、僕は憶えてないが、ゴーリコの連發で、盃はめぐり、二人はキッスをする。冷いザクースカがすんで、温いザクースカに變つた。不相變盃は巡る。

老カザックが叫んだ。

「さあ！歌こだ、歌こ、うたうべし」

「おめだのほうからやるべし！」

「何云ふだ、上座から賴むぞ」

「上座、あどだ、やれ／＼」

一人の男が太いバスで歌ひ出した。皆が一齊に和す。忽ち立派なコーラスとなつた。バスとソプラノ、ファースト、セコンドが調和して美しいメロデーが部屋一杯に溢れた。それはゆるいトーンであたかも廣いステップに流れる風か、雲のやうに僕の耳をかすめた。古いカザックの民謠であらう。盜賊や王妃や戰ひを歌ふ古い歌である。

また一人がテノールでやる。婆さんも娘も歌ふ。白いショールをまとつた婦人が靜に和してゐる。昔のまゝのカザック風景だ。

やがて手風琴が鳴り出した。踊りだ。

飾帶をきりつとしめた若者が長靴をふみ鳴らして娘と踊り出した。せまい場所を若い男女が入り亂れてカザック村の踊りをくり返した。金具がぴかりと光り、豐かな胸がゆれ、とき色のスカートがひるがへり、人は足拍子を取る。色々な踊りが註文される。樂士は鼻を赤くして手風琴を鳴らしつゞける。壁に大きな影ばふしがしきりなく映つて去來し、ちぢんだり、重なつたりした。若者の金髮が額に亂れて、美しく見える。

僕は一時頃、婚禮の席を辭して歸つた。星が滿天に輝いて空が低く見えた。白壁の家や丸太小屋が夜氣に濡れ、小路は白つぽくうねつてゐた。僕はなゝめを歩いて星を仰いだ。人影もない道だつた。

夜明前。窓際に手風琴の音がひゞいて、若者の聲が陽氣に流れた。僕は洞ろに聽いた。或は夢かも知れない。婚禮の踊りであらう。やがてその聲も遠ざかり、馬車の走る音が一しきり靜寂を破つた。もの憂い夜明前の一時であつた。僕はまた深い眠りに落ちて行つた。それはゴーゴリの夢であつたかも知れない。

（四）宛名のない手紙、斷片

某兄

距離と云ふものは不思議な空間だ。新京と三河ウエルフ・ウルガのへだたりで僕の生活環境は全く異なる。その現實を凝視する事が必然的に要求される。支へ切れない決意の充滿の中に私は獨り堪へやうとしてゐるのだ。

動き、移る事—これは試煉だ。そこに湧出する一切の現象を把握せねばなるまい。苦しみは我々を偉大に、寬容にする。

泉の傍に立つ、未だ氷雪に覆はれた外部、しかし泉の水は淸冷に澄み春の空を映し、雲の影を受けて動かない。此の冬は何處へ逝くのであらうか？拭ふ如く去り行く冬と共に春が來た。雪原に陽炎がゆら／＼と燃え上つてゐる。巨大なペーチカの如くゆらめいて上昇する。そして空には雲雀が滿天に囀づる。溢れ出る春の歌が地上に、天上にひびいてゐる。童等の聲が枯草の小蔭から湧き立つ。娘が水くみに來る。スカートがくつきりと水に映る。そして彼女の羞恥も……。

私は此の地で夕より夜へ移り行くさまをいつも眺める。それはあたかも運命の如く、變化し、靜に襲ふ。山は近く私の傍に寄り、空は遠のいてライラック色に染まり、天蓋に向つて伸び、放射し、中心を求める。一筋の紅色が山の稜線に流れ漠として徐ろに消えかかる炎のやうだ。刻刻と深まり行く紺靑の淸澄、深淵の如く測り知れない色彩の重なりの裡に星が瞬き始める。私は小さいランプに灯を點じてつつましい光りの中に廣大な空を眺める。

私がこの手紙を書いてゐると、さんさんたる陽が文机の上にこぼれ、群れ遊ぶ雀の影が、ペンをかすめてちらつく。私の指を潛り拔ける翼の影の美しさ。私が獨居する喜びは、私が單純に、すべてを受け入れる事だと思つた。

「貴方は春に死んではなりません」とマーラが云つた。彼女は十七の少女だ。

靑い目が私に注がれた。十七のロシヤ少女と私の對話である。

「何故死んではいけないのです」と訊ねた。

彼女は盛り上つた乳房を持つてゐる。

「春に生き、冬に死ぬものよ。ごらんなさい、みんな喜んでゐるでせう。死ぬのは冬になさい」

ブロンドの毛がふさ／＼とゆれて春の匂がする。十七歳—私はその數を二倍にしたり、三倍にしたり、割つたりしてゐた。退屈な午下りの一時。

村人の踊りを見た。若者と娘がうす暗い廣間に集まつてゐる。手風琴が鳴る。男と女が手を取り合つて並ぶ。床を踏み鳴らし、くるりと身をかはし、足拍子を取つて前進する。長靴とスカートがきりきりと廻轉して、ゆらめきもつれる。ロシヤ農村の古い踊りだ。ランプのにぶい光りの下に、シベリヤの體臭が渦を卷く。古い色あせたフイルムのワンカット。

某兄よ。うら悲しい追憶はやめよう。遠い日にあつた事はまた來るかも知れない。私は三河の寂寞たる寒村に來て、雲を見る如く生きてる事を憶えて居て呉れ。そして星屑がまるで近々と降り注ぐ夜に、獨り步く

事をも……。傾きかけた百姓家の窓に淡いランプの灯がゆれて、赤ん坊が一しきり泣く、ぴたりと泣きやんだ。窓際に狼がそーつと忍び寄る。こんな物語りがあつたやうな氣がする。ウルガとはそんな感じがする淋しい村である。では左様なら。

私のメモより

在滿日系作家は志が低い、下宿屋文學だ、明治維新すら知らないと或る流行作家が放言してるのをよんだ。その流行作家は今まで何をやり、何を書いたか？世相に迎合する事は易い。文學は看板の塗り替へでいゝものか知ら。

×

滿洲文學は成長しつつある。作家はもがいてゐる。志の低さ、トリヴイアルなテーマとは何を指すか？建國十年で、此の土地で文學する心構へは、簡單なものではない。こゝに生きて根を張る爲に、各民族との交渉、生活様式の變化等々一切が考慮されて。文學は植物の如きものだ。時間と忍耐が必要だ。

× ×

私が羊皮シューバを着てナラムト行バスを待つてゐた。バスが來た。私の後に並んで居た中年の日本人が、突如僕をおしのけて滿語(?)で僕にどなりつけた。

「ニーヤ、プシン、オーデトンシーぞ、ターターデ、……」

そして悠々と先に乘り、荷物を積み、いゝ座席に收まつた。私は默つて居た。腹も立たない。滿人に間違はれたのが當り前かも知れない。滿人だと見れば、何をやつても鬪はんとする日本人が在滿日本人の殆んどだ。これでは滿洲國は絕對立派にならん。

×

孤獨に堪へやう。そして果實の成熟を待つやうに生きやう。それが日常の大切な事である。

我々は碎け散る財寶のやうに生きねばならぬ。自らを守錢奴の如く俗物として生くる勿れ。

×

孤高とは反俗の精神、態度であるが狹量ではない。藝術は一切を抱擁し、猶あまりある寄與を指向する大きさを持つ。

或る藝術的作品が良いといふのは、必然性から生れた場合を指すのです。(リルケの手紙より)

あらゆる美果、成就を得るには犧牲が伴ふ、犧牲なき行動、及び犧牲なき成果の美しさを望む者は勇者でない。

水とパン。鹽と新しい果物。新鮮な空氣。泉の如く豐かに溢れ出る精神。安らかな眠り。快活な返答。美しいことば……。(私の求めるもの)

(完)

三河ウエルフ・ウルガにて

映畫近事

大東亜海に今や全く敵影なし。しかし大東亜共榮圏には未だ米英的なものが直接、間接に敵性を發揮してゐる、米英撃滅に一億一心を以て邁進してゐると信じきつてゐる同胞の中にも、心の米英を驅逐してゐない者も殘つてゐるのではあるまいか。日常生活と切離し得ないものとなつた映畫、爆彈にも優る偉力を發揮するものと信じられてゐる映畫、それを送り出す本映畫界から、果して米英を追放し大東亜共榮圏の建設に貢獻する一つの映畫でも生れたであらうか、十二月八日から既に七箇月、皇軍は赫々たる戰果を隨所にあげてゐるのに弘報、文化の尖兵たる映畫は一體何をしてゐるのであらう。「父ありき」「綠の大地」等々、それらが何をもたらし得たか。もたらしたとしても、それは大東亜共榮圏に贈るものとしてはあまりにも視界が狹いのである。敵性を驅逐した筈の上海映街に未だにアメリカ映畫を殘しておかねはならぬといふ事實、これこそ日本映畫の不名譽ではあるまいか。勿論アメリカ映畫に對する人心は離反し、東亜に於て最もアメリカ的であつた上海に於て、三分、二分の入場者を見るに過ぎないといふことは喜ばしいことながら、さてこれに代るものを日本映畫界は提供することが出來ないのである。寧ろ敵性的存在であつた彼の中國各電影公司が中華電影の下に馳參じ日華提携に協力せんとする意氣の方が旺んなるものがある。かくて生れんとするのが日華提携映畫だ、近く上海映畫界の智能をすぐつて日本に於て提携映畫を製作するといふ。その際、最も警戒すべきは日本映畫界の巧利的協力である。

我々は日滿提携映畫の旺んなることを要望した。それは滿映の技術をして日本映畫の水準に向つて昂揚せしむる刺戟であり、同時に日滿一億一心の眞理を氏に體得せしむる方法なりと信じたからである。しかるに日本映畫界は滿映を巧利的に利用したに過ぎない。「迎春莊」を見るがよい。あゝそれすらもフイルムが貴重なために滿洲に於て封切られねばならなかつたであらうか。初め建國十周年記念映畫として製作されてゐたと信ずるが、上映されたものには、左様なタイトルはないことを喜ぶ。嚴肅なるべき「建國十周年」を輕々しく利用して貰ひたくないのだ。

滿映作品中で近頃感銘を深くしたものに「逞しき草原」がある。滿映啓民映畫最初の傑作ではあるまいか。そこにはカメラの意志がある。製作者の意慾がある。單なる技巧の羅列ではない。血を以つて綴られたノモンハン事件の跡に樹立された國境標、我等に感銘深きものがある。しかし滿映啓民映畫の通弊たる冗長さはこの映畫にもあり、折角の感銘を減殺すること夥しい。カメラを意識せず、即ち强引な作爲がなく成功してゐるものに「我們的學校」がある冗長なために折角のよき素材、よき撮影の效果を抹殺してゐるものに「森林滿洲」がある。今一歩大膽であつて欲しい。

どうしたことか。年十二本を目標とする滿映娯民映畫(劇映畫)が、上半期に於て送り出されたものは、一、二本のやうだ。製作本數を減じて「良き映畫」を製作する意向はよいが、これでは、娯民の目的に添へまい。北支で撮影中の「黄河」に期待をつなぐことにしよう。

(高尾憲太郎)

滿洲文學の二十年（七）

大內隆雄

昭和四、五、六年頃の滿洲では詩が非常に盛んであつた。前に「塞外詩集」について一寸書いたが、說明不足であつたので、こゝに改めて書いて置く。

昭和五年六月の刊行で、編輯兼發行者は本家勇、すなはち城小碓である執筆者は

安西冬衞、稻葉亭二、加藤郁哉、小杉茂樹、島崎恭爾、城小碓、瀧口武士、古川賢一郎

以上の八人、何れも當時大連の佳人であつた。そしてこのうち、安西冬衞は詩集「軍艦茉莉」を、加藤郁哉は詩集「逃水」を、古川賢一郎は詩集「老子降誕」を出してゐた。代表作を拔いて、作風を一瞥しよう。

黄河の仕事　　安西冬衞

回回敎は混凝土を發明した。
Lo-lo 族は巴里警視總監よりも優美である。
甘肅省 といふ文字は、建築群の機構を暗示する。私は埋藏された都市の發掘を、支那政府に建言する。
Yangtsekiang Bagdhad Express は、拉里デリー間の tube を要とする。
燉煌の發火集中を見よ。地球開發會社に投資せよ。
主として藏地に於ける蘚苔類が作用する、軌道の峻烈なる腐蝕を避けるために。
黄河は地球を削つてゐる。
Catalyzer を與へよ。
ミシシッピーと河底を共產させるために。

こゝには、毅然たる視野の廣大さが注目されると思ふ。それとともに、新しい東方のエキゾテイックとも稱されるべきものだ。それは稻葉亭二へも通じてゐる。すなはち――

黄土層　　稻葉亭二

貂の群が素通りする。
甘肅の黄土層は一層黄いろくなつた。
月が蠟を塗る。
穴居民族が闇で瞳を輝かしてゐた。
の如くに――

遼河の流氷
（營口にて）　　加藤郁哉

夥しい白いものが
行進する　それは
流れるのではない
黎明の底をかい潜
る無數の白いもの
の行列。
それはこの茫漠たる原野の荒い靜けさの正體である。
ああ、この旺んなるものゝ動きを見よ、それは全宇宙の動きですらある。
しかしこれらは動きの爲の動きではないこれら白きものゝ流が一瞬にして凝結するのを私は知つてゐる。
これらは實に烈しい靜けさの爲の動きである。
おお、このすさまじい情熱を見よ
この果て知れぬ原野にあつて
朝暾と共に誕生した熾烈なる思想を見よ。

こゝには加藤郁哉のおほどかな作風が代表されてゐると言へよう。一方には次のやうな作品もある。

哈爾濱卽興
――キタイスカヤ風景――

靴墨のやうに艶光りのする夜です、
どうかすると行き違ふ拍子にお互の肩がぱつと霧にでもなりさうな夜です。
脇腹から腰にかけてなんともとりとめのない動きやうをさせてお孃さんが流れてゐる夜です。
口紅がぬれてかきぼくろがいきいきしてゐる夜です。
とある家並を出はづれると風！
（みなみだな）
辻馬車の馬の匂が
闇の中にそこらぢうしみひろがつて
安全燈の赤ガラスが汗ばんでゐるのです。近よると馭者（イズウオシチク）が鞭を動か

す轢て、雪汁をはねかえして驅ける二頭馬車の上では
私の腕にお孃さんがもうさつきから可愛い荷物のやうに凭れてゐるの
でした。

この輕妙さ。それが崩れた形に發展して今枝折夫——彼の筆名——の戯文的滿洲風俗案内となるのである。

小杉茂樹は「霧」と「秋」の二篇を書いてゐる。

秋

ビルデイングとビルデイングとビルデイングとビルデイングとに圍まれた菱形の海、

菱形の海。

といふのである。その頃の一つのテイピカルなものなのであらう。これはまた島崎恭爾にも通じてゐる。彼の「大陸」といふ一篇は次のやうなものだ。

大陸

カノ白猫ハ地平線ヲ啣ヘテ動カナイ

城小碓の作品からは「遺產」を探らう。

遺產

故鄕の友よ、
父の遺產は黃塵に汚れた日の丸の旗ばかりだ

これには城のせいいつぱいな詠ひ方があると思ふ。

瀧口武士の「旅順」を見よう。

旅順

旅順は三日月がある。なぜか非常に稚拙な街です。あの風光で風邪をひいて了つた。

●

枯木の下に綠色のパノラマがある。空馬車が居る。氷塊が運ばれて行く。シヤガールを想はせる道。

●

新月がある…婦人が鋪石に出て話してゐる。私はそこを俥で通る。幌の外で入海が干潮を始める。閑靜な街にはもう春が動いてゐる。山高帽の紳士が俥を待つてゐる。懷に手を入れてゐる。ステッキが橫に出てゐる。

齒醫者の窓から婦が首を出した。
私は新月のかかつた街を、無中に俥上で走り廻つた。

●

防備隊の阪は中川一政風なり、樹の間から郵便配達が來るに逢ふ。
街を步いてゐると電話がかかつてゐる「婦人病棟六號室川口さん!」
そんなのがけたゝましく聽こえる街なり。

古川賢一郎のでは「ユイ・リンの像」を探らう。

ユイ・リンの像

野へ豚の仔を追ひながら
五月の微風のなかで
若い羊のやうに呆んやりしてゐるが
あなたの腕は、蒙古犬の足よりも强く
あなたの胸は、靑草の激しい匂ひでいつぱいだ。

靑い燐光をちらちらさせる
翡翠の大きな目玉は
心情を生あたたかく燻ぼらしてゐる。
棗の味をしたあなたの唇は
笛の音のやうな愛情の子守唄をうたふ。

ユイ・リンよ
あなたの嬌羞は、夕闇に飛ぶ白い蛾である。
ユイ・リンよ
あなたの戀は、豫言の洞窟をよろこぶ
羽柔らかな蝙蝠である。

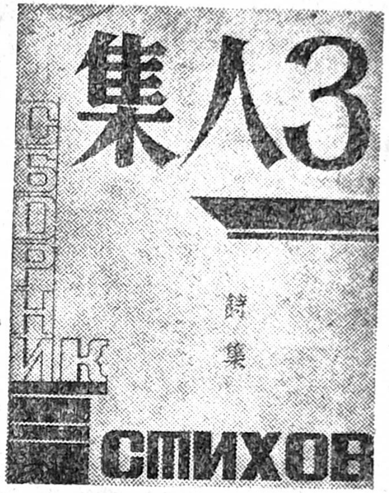
このやうなのが昭和五年刊行の「塞外詩集」に盛られてゐた。この詩集奧附の所を見ると檢印票に中華民國郵票、それも「限吉黑貼用」と黑字を印刷した半分のを使つてゐる。編輯者城か、裝幀者稻葉の好みによるものであらう。

「塞外詩集」について書いたから、それと對比される「三人集」について次に書かう。これは昭和六年に奉天の胡同社から刊行されたもので、土龍之介、高橋順四郎、落合郁郎の三人の詩作品を一册にまとめたものである。

黃塵の底に喘ぐ奉天　　土　龍之介

五月の白天(ひる)
旋風は街々を馬賊のやうに襲擊する、
人も、馬も、犬も、木つ葉のやうに追ひ散らされて渦卷き、吹きまくり荒れ狂ふ黃塵、
街頭は射殺された馬賊の體熱の生ぬくさだ。

城市はじつとりと油汗をにじませて
疲勞、倦怠、困憊、
城壁は陰謀を孕んだ爬蟲類のやうに默して動かず
城樓は徒らに高く黄天にさしのべた蒼ざめた世紀の觸手……
黄天には血のやうな日輪が喘いでゐる、



疾風を突いて、黄塵の城裡深く潜入する影
つぶてのやうな影!

北上夜行苦力列車　同

漆黒の曠野の闇に突入する列車の前燈(ヘツドライト)の模索。咆哮する機關車の前方に光る軌條の直線の曲線の生命の運命の方向。闇を截る尾燈の赤線の速度の計算。――時速五十粁。激動する貨車の内部の測量器(トランシツト)を携帶しない灰色の測量隊の一群を照明する古びた洋燈(ランプ)の怪奇な明暗の幼兒の空腹の蠢めく異樣な群像の堆積と惡臭。激動する車體の生理的昂奮の意慾。破れた毛布にくるんだ家財一切と一家眷族を引連れた豚の如き一群の異狀なる生存力の中に潜在する征服力。驀進する列車の貨車の内部の怪奇なる明暗の鈍重なる豚に似た異樣なる測量隊の彼等迫害と搾取と戰禍に追はれたる燕人群の驀進、北へ!

土龍之介たちは奉天で詩を中心とした雜誌「胡同」を出してゐた。

弟の手紙　高橋順四郎

兄さん手紙ありがとう
シンケイツウの阿母は
床の上で起きたり寢たり
とつても喜んでゐたよ
阿父は田を旦那に取られてからは
毎日　阿母の着物を米婆さんの處に持つてつて
酒ばかり飮んで歸らない時もあるんだよ
阿父は酒に醉ふと、旦那のことを
畜生、糞垂れと、わめいてゐるよ
兄さん　田をとられたんだからもう旦那ではないな――
兄さん　阿母は毎日メソメソ泣いてゐるよ
俺ァ學校は好きだけれど休んでゐる
脩公や平太郎が馬鹿にするけれど
毎日山に行つて茸を取つて町に賣りに行くよ
でも　近頃雨が降らないから少くなつた

村の人は孝行息子だといつて賞めて呉れる
俺ァちつとも嬉しくはないよ、なァ－兄さん
賞められたつてなんにもならないものなァ――

手紙來た次の日、町の郵便局に行つて
送つて呉れた金を取つて、阿母の藥を買つた
兄さん　くすりつてたかいな――
殘りの三圓　阿母渡したら
疊の下に入れて阿母は恐い顏をして
誰れにも云ふな、阿父にも云ふなつてよ
俺ァ　鉛筆がほしいけれど…
俺ァ　阿母の氣持ちがよくわかるよ

兄さん俺ァ兄さんの處に行きたいよ
なんでもよいから働くよ
そして二人で働いた金を阿母に送つてやろうよ。
阿父だつてもとから惡い人ではなかつたんだから
欺されて　旦那に田をとられたんだから

阿父も兄さんの處に行けと言つてゐるよ
でも　汽車賃がないから行けないんだ
兄さん　すまないけれど
仕事があつたら汽車賃を送つてください
阿母が達者で暮らせつてよ
ではたのみます、さよなら。

此處に來て　私達は今までに無かつた新風の吹くのに面する氣がする。高橋順四郎たちは大連で詩を中心とした雜誌「燕人街」を出してゐた。高橋の作品をもう一つ書いて置かう。

滿洲秋の斷章

雜多な雲を孕んだ蒼空の秋である
縹渺たる曠野は
弱き日輪の光を金色に照りかへして
凋落の前期を飾る野菊は
楡木をなぐるほろ寒い風に戰(をのの)いてゐる
●
木乃伊(ミイラ)の樣にやせこけた乳飮子を懷(ふところ)に赫土の一本道に細い影を落しては
親子兄弟
生活に追れた山東苦力の一團は安住の地を求め
あえぎあえぎカラッポの水壺をさげ
弔ひの行列の樣に重々しく過ぎ去る
一聲　雁は南へ行くものに

北へ──北へと

落合郁郎の作品を見よう。彼も「燕人街」で活躍してゐた。

苦力の詩

走り去るものを追ふなよ。
彼奴は野鷄と一緒にくたばる連中だ。
十年の計なんか汗と共に流してしまへ。
俺はお前を信用してゐる、お前も俺を……それだけでいゝんだ。

野が無限でも、俺達
あ歩こう
百靈よ、高くさえず
れよ、足が輕いぞ
山東は奴等にとられ
てしまつた。
季節だつて俺達にや
無關係だが、
百靈よ、お前が鳴かないと淋しくなるんだ
昨日知つた友だつて、別れるのはつらい。だが笑つて送るぞ、彼奴は
元氣で行つたから。
胃の腑が一ぱいになつたら眠くなつたから眠ろう。
明日はいゝ天氣になつてくれ。

なほこの詩集には加藤郁哉と古川賢一郎とが跋文を書いてゐる。加藤は言ふ──

「街頭の詩集──かういふ言葉がゆるされるものとすれば、まさしくこの詩集から受ける感じである。今までに滿洲にゆかりをもつ詩集、それから毎月のあちこちに散見する詩の大方は、せまいわたくしの眼界では、どちらかと言へば、美麗なアヤをもつ布片をつぎあはせ縫ひあげた、人形の着物のやうなもので、ひどいのになると、糊と鋏とでペタペタやつて出來あがつたやうなものさへあるやうに思へるのは、わたくしばかりのひがめではあるまい。そのなかにあつて、少くとも、三人集の作品は、從來の滿洲詩人の好んで書いたものとは、自ら異なつた世界を摑んでゐる。」

さすがに、自ら「老兵」と言ふ、加藤長老だけの觀察であると言ふべきであらう。

それに比べると、古川跋文は、まるでそれ自體が詩みたいである。

『吼えろ！』と誰かが云つた。それは嘘だ。先づ嚙みつけ！である。滿蒙の民族は、現實のパンに嚙み付く事が第一條件である。例へば、楊柳の林を突切る。其處には蛇行せる濁流がある。高粱畑がある。雪原がある。然も尚、追へども〳〵近づけない、地平線上の逃水に向つて、吼えろ！と云ふのか。

あゝ、凄まじい音を立てて流れる、足元の氷河。千里の草原を荒れ狂ふ黃塵の龍卷。その中で、パンよりもウオッカのロシアルンペンだ。白と黑の密賣日本人だ。そして汚れた朝鮮人の性殖と、支那百姓の薄い高粱粥だ。

私は三君の作詩中より、之等の渾沌とした民族の唄を摑み出そうとしたが三君の詩は、未だ、日本人らしい潔癖を捨て切らないやうなものを見受ける。君達よ、山と水の美しい、日本の菓子を欲するな。──これは強ち飢ゑた私の嫉妬ばかりではない。寛城子の支那兵士が、その頰と腰を砲彈にゑぐられ、蟲の息になりながらも、ロシア飴をしやぶつてゐる私に言つた。『凉水（みづ）……拿凉水（みづを）』と。

然し私は失望しない。今まで出た滿洲の詩集の中で、これほど眞實な態度を持してゐる詩集を知らない。詩作品の善惡は批評家にまかせよう。私は三君が今後、滿洲の泥水を吞み、蒙古の黃砂を吸ふて生長し、その將來に大なる風雲を呼ぶであらう事を深く信じてゐる。」

（未完）

寫眞は一、「塞外詩集」二、「三人集」三、「燕人街」

卸商
煙草・酒・飲料水・食料品
化粧品・石鹼・諸雜貨
滿蒙洋行
新京中央通り一六番地
電話 長③三三五一 ③四三四四 ③五一五一 ③六九二七
電略 シンキヨウマンタイ
振替 新京六〇番
支店
大連市吉野町二二
天津日本租界花園町七
北京地安門西板橋大街
濟南市二馬路青年會館西五三

青少年戰爭詩集に就いて

（協和會青少年統監部募集）

大村次信

これに集錄しました二十篇の詩は、本年の二月協和會青少年統監部文化部が新聞社竝に關係機關の協力を得て全國から募集した青少年戰爭詩（三千餘篇）の中から適宜抄出せるものであります。

これまでに古今大人の詠じた戰爭詩は可成多く見て參りましたが遺憾乍ら、國土を守るところの青少年の詠んだものが殆ど見られなかつたのであります。云ふまでもないことですが國家の總力を擧げての戰爭は銃前銃後に働く大人のみの戰ではなく、その中にあつて胸底烈々の至誠をたぎらせてゐる青少年の精神的な力添へのあることを見のがすべきではないのであります。

少くも「生き〳〵とした眞情を自然に飾りけなく、率直に僞りなく言ひ表はしてゐる」といふ點は大人の詩に優るとも劣る事はないと思ひます。何卒この素朴な眞情を御讀みとり下さる樣願ひます。

最も強く感じましたことは今次の大東亞戰爭は物的戰備のみでなく銃前は勿論銃後に於ける精神的準備に於ても既に完了してゐたことを知つたことであります。

といふのは子供達の作品の中に第一線の兵隊たちと同じ敢闘意識がみられ身は銃後にありて銃をとらずと雖も精神は遠く戰線に馳驅してゐることを切實に感ずることが出來たことであります。

即ち彼等の思ひは出征兵は出征兵に對する聲援ではなくて出征兵と共に戰つてゐるのであります。國民學校三年生の子供の「ヒカウキ」と題する詩などをみても思ひはもはや遠く戰線にあるのであります。

次に今次聖戰の意義を明瞭に把握してゐることであります。正義の戰ひ平和のための戰といふことを強く感じてゐる。それ故斷じて負けぬといふ必勝の信念をみることが出來る。然して戰爭の最終目的は大東亞に平和境を建設するにあることを認識してゐるといふことは何と賴母しいことでありませう。然もそれは單なる知解ではなく腹から納得しそこに誇と感激を持つて居るのであります。

この子供達の戰爭目的の體認こそ大國民としての強みであり肇國以來の傳統の中に流れる八紘一宇の日本精神の本に育くまれたものにして始めて體認出來ることなのであります。

さて本戰爭詩の主なる傾向として

一、感情的でない事――この傾向は少しく豫想外に感じたのであります。表現がもつと〳〵感激的であつてもいゝと思ふ程落着いた表現が多かつたのです。始めは何か子供らしくなく大人の詩の樣な味氣なさを感じましたが熟讀する時胸底に烈々の情熱をたぎらせてゐることが觀取出來たのであります。戰爭が戰爭なだけに彼等も腹を据ゑてかゝつてゐる結果の表れでありませう

二、戰爭に對する認識に就いて――これは子供と思へぬ程戰爭の指導精神にしろ戰況にしろ、兵器にしろ吾々の子供時代とは比較を超越して深い認識をもつてゐることであります。戰爭の中に生ききつてゐるのであります。

三、空騒ぎでなく現實をみつめてゐること――單に戰爭に興奮したり感激したりのみしてゐないでそれに對處する方策を考へてゐる。將來をみつめてゐる子供達の目にぶつつかつた。何といぢらしい決意であらう。彼等は斷乎と「國のためなら死ぬ」といふ決意を表現してゐるのであります。私はさうした子供達の決意を屢々見出して私は幾度胸にこみ上げるものを感じ同時に自分の決意がそこにまで至つてゐるであらうかと恥ぢ入つたのであります。

以上かうした子供達の精神的基盤ありてこそ父が、兄が決然戰線に起つことが出來るのであります。またこの父、兄の後をついで戰爭推行より建設戰へと努力が續けられるでありませう。

私は子供達の戰爭詩の中に子供達の戰爭に對する腹構へを明瞭にみ、明日の大東亞の平和な姿といふものを明示せられた思ひがするのであります。

トツシンダ、トツシンダ

田師付校初一　マキノ、トモスケ

トツシンダ、トツシンダ
ヤマトダマシイノ
トツシンダ
ススメ、ウテツ、バクゲキダ
ソラ、ゲキツイダ
バクチンダ
イギリス、アメリカ
ナンデモコイ
ヤマトダマシイノ
トツシンダ

萬歲萬歲叫びます

彌生校初四　重園文枝

進軍、進軍、眞つさきに
日の丸高く　押し立てて
千里野山を　越えて行く
兵隊さんの　勇ましい
ニユースをラジオで　聞くたびに
萬歲　萬歲　叫びます

擊沈、擊沈　波の底
日頃の腕を　あの海に
千里敵艦　やつつける
兵隊さんの　勇ましい
ニユースをラジオで　聞くたびに
萬歲　萬歲　叫びます

爆擊、爆擊　どこまでも
大空遠く　一飛びに
千里敵軍　うちくだく
兵隊さんの　勇ましい
ニユースをラジオで　聞くたびに
萬歲　萬歲　叫びます

皇軍、皇軍、ものすごい
たゝきつぶして　米英を
南の國から　追つ拂らう
兵隊さんの勇ましい
ニユースをラジオで　聞くたびに
萬歲　萬歲　叫びます

ボクラノアラワシ

大石橋校初二　高田俊弘

東亞ノ空ヲ我ガモノト
血ノヨニ　赤イ　日ノ丸ノ
ツバサ　ヒロゲテ　海ノ上
見タカ　ボクラノ　アラワシヲ

一ドイツタラ　カヘラヌト
バクダン　カカヘテ　アレクルウ
太平洋ノ波ノ上
見タカ　ボクラノ　アラワシヲ

アメモ　アラシモ　クロクモモ
日本男子ダ　ナニクソト
日ノ丸　ヒロゲテ　バクゲキダ
見タカ　ボクラノ　アラワシヲ

無敵海軍

八島校初四　片山二美

あゝ、無敵海軍遂に起つ
我等が海の　强者が
見よ！
太平洋の嵐をついて
向ふは　ハワイか
ミツドウエーが
あゝ、世にほこる海の荒わし

れいめいの　黒潮けつて
見よ！
ともに進む　母艦の巨體
太平洋は
　すでにわがもの

ワニ

泉　玲子

ウチノネエチヤンガ
ハナシテクレタ。
「日本ノ兵タイサンハ
ワニノヰル川ヲ
ワタッタケレド
ワニニハ一人モ
タベラレナカツタ。
ワニモ
日本ノ兵タイサンガ
スキラシイ。」トイツタ。

決議

彌生校初六　北川光子

こらえこらえた堪忍の
鞘を拂つた早いわざ
ABCD串ざしに
ぐつと突込む日本刀
世界の度膽を拔きました。

ニユースのあとで兄さんが
「〇中鍛への此のからだ
三年後に役立つ」と
父に握らす力瘤
天晴れ櫻の蕾です。

「斬られて死すとも捕虜なぞに
なつて生恥さらすな」と
母がさとせば胸張つて
「はい」と答へる弟は
初等科二年豆勇士

他所のお家も同じよう
ゆふげの膳で親達が
立派な勳功樹てる様
兵隊さんになつた日の
覺悟をさとしてゐるでせう。

一億一心「海行かば
水浸く屍山行かば
草生す屍」の心意氣
よくも日本に生れたと
嬉し涙がこぼれます。

兵隊さんと子供

敷島校初五　藤原　健

やさしく強い
兵隊さん
A、B、C、D、
何のその
海に陸に
又空に
輝やく日本の
そこ力

兵隊さんの
行く所
樂しい
平和が
やつて來る
やしの木かげに
子供等は
日本のお話
うれしさう

ああ　强い國
日本の
櫻の花は
きれいです
アジヤの子供よ
皆おいで
お手々つないで
行きませう

シンガポール陥ちた夜

敷島校初五　勝俣剛男

戸棚の上にふと見つけたスケート。
あれを買つてもらつた頃は、
お母さんはまだ元氣だつた。
マニラが陥落した時は、
あんなに喜ばれてゐられたのに、
急に寢つかれてしまつてからは、
なんだか暗い日がつづいた。
でも、昨日はよほど良かつたが、
今朝又ひどく熱を出して、
すつかり弱つてしまはれた。
窓ガラスにかつと光がさすと、
すーつと動いて自動車が通つた。
靜かにねむるお母さんの目尻に、
涙が一筋、今にも落ちさうだ。
お父さんが　こつちを見て、
「剛男　陥ちたな　シンガポール
が。」
と、言ふ。
そうだ。明日旗行列があるんだ。
明日は常より早く起きて、
東へ向いて、天子樣に祈らう。
日本の國の萬歳と、
お母さまがよくなりますやうに。
水枕がポチヤリとなると、
お母さんが寢返りを打つた。
電燈のやはらかい光りが、
藥瓶をぼんやり照らしてゐる。

ひかうきだ

本溪湖校初三　上田久美子

ひかうきだ
につぽんの　ひかうきだ
あれは　どこから來た
あれは　どこへ行く
さあ
ぼくたち　私たちも
　いつしよに　行かう

皇國の女性

櫻校高二　山本弘子

皇御國の　もののふが
大君の爲、國の爲
花と散るこそ本望と
勇んで征きし　血をついで
我も今亦　銃とらん。

富士の　高嶺の白雪の
淸き心を　保ちつゝ
大和をみなの　ゆく道は
夫の征きしあと　よく守り
强く優しき　母たらん。

バンバンザイ

加茂校初一　久松　彪

バンザイ、バンザイ
バンバンザイ
日本ノヘイタイサン　ツヨイナー
ヰバッタイギリス
ザマア見ロ
トウトウ　ホンコン　カンラクダ
ヘイタイサンヨ　アリガタウ
バンザイ　バンザイ
バンバンザイ
日本ノヘイタイサン　スゴイナー
ノッポノアメリカ
ヤアイ　ヤイ
トウトウ　マニラモ　ブンドッタ
ヘイタイサンヨ　ゴクロウサン

忘れたか

花園校　鎌田文子

東亞を亂す　英米よ
神國なるぞ　日本は
海國なるぞ　日本は
正義の國ぞ　忘れたか

東亞を亂す　英米よ
無敵日本の　ほまれを見
旗艦三笠を　忘れたか
神國日本を　忘れたか

東亞を亂す　英米よ
太平洋を　我が海と
乘り切る日本は　强いのだ
朝日が昇る　いきほいだ
東亞を亂す　英米よ
泣面したつて　もうおそい
强い强い　日本が
火ぶたを切つて　立つたのだ

大東亞センソウ

東七條校初二　鵜野廣澄

ススメ　ススメ　ヘイタイサン
シンガポールヲノツトレヨ
ハヤクセンリヤウシ
天ノウヘイ下ノ　オ思ヒヲ　オヤ
スメシタイト　チカラヲアワセテ
タタカフゾ
シンデモカツゾマケナイゾ
サウユウ思ヒダカラ　マケナイノ
ダ
アメリカナドハイノチガヲシイ
トイフカラマケルノダ
アメリカヘイハムリヤリニツレテ
コラレタモノバカリ
イツシヤウケンメイ　タタカハナ
イカラマケルノダ

尊い日本、強い國

敷島校初五　若林久子

輝やく歷史三千年
父祖の心をうけついで
大東亞建設に
今一億の　民は起つ
尊い日本　强い國

勝たねばならぬ此の戰
進む眞紅の日の丸に
一億心を　一にして
この國難に當るのだ
尊い日本　强い國

輝く戰　長期戰
みのり　かしこみ　ひたすらに
どんな不自由しのいでも
銃後に勝どき　あげるのだ
尊い日本　强い國

星港陷落

櫻校高二　山本弘子

世界に　ほこる米英の
東の海の　たから島
シンガポールの　眞相は
假面かむつた　鬼ヶ島

忠勇無比の皇軍が
夜も日も進む　精鋭に
支へ切れずに敵兵は
命からがらにげて行く

昨日の雨は　今日晴れて
鬼ヶ島には　鬼見えず
今は樂しい　寶島
朝日は映ゆる日章旗

あの日の感激

天領校初六　大石幾松

かしこくも
宣戰のみことのりは下された。
ラジオの前で
おぢいさん　母さん　妹と弟と一
しよにかたまり
どきどきする胸をおさへて
ニユースを聞いた。
敵艦撃沈大破
ハワイ沖　太平洋で日本　目下海
戰中
フイリツピン近く敵百機　撃墜す
連戰連勝であります。
つぎつぎに聞えるニユース
アナウンサーの聲　すでにかれて
ゐる
「ニユースを終ります」とアナウ
ンサーがいへば
ありがたいで息をつぐ
弟が「バンザイ」で家中大笑ひ
東を向いて
天皇陛下「バンザイ」をとなへた。

開戰の朝

撫順高女三　北島富士子

やみませる祖父のみとりに
私の十六歳の年は終らうとした。
だが私は末永く
この昭和十六年を忘れられないだ
らう
それは十二月八日の朝まだき
ラジオはけたたましく鳴り響いて
臥所に横たはる私の耳を打つたの
だ。
「帝國陸海軍は八日未明
西太平洋において米英軍と戰鬪
狀態に入れり」
繰返す放送に　私は
パツト起きあがり
夢現の　なかにきく
大きな力のこもるアナウンサーの
聲
あゝ私の心臓は激しく躍り初めた
窓の外は未だ眞暗だつた
でも家の二室の電燈は明々と輝い
て
やせ給ひし祖父の白鬚を照らした
だが　私の魂は遠く
太平洋のかなたに飛んで
海上をさまよひ、
この身も亦波の上にある樣だ。

砲煙暗く天を掩ひ
霹靂高く海波をゆるがす
「西太平洋」のいづれあたりか
私の眼には
かつて地圖で見た　ハワイ群島の
島影がうかび
南海に散らばる蘭印の島々も見え
る樣だ。
報道は餘りに短く
戰場は海か陸か　いづくとも知り
難い
しかしたしかに陸海軍部からの發
表だ
水陸に今や大きな戰は始つたのだ
祖父は低い聲で
日露役　仁川沖の戰を語り給ふ

日本軍隊强いんだな

無名氏

日本陸軍强いんだな
いくら敵が　強くても
日本魂には負けるだらう
來るなら來いよ
彈丸やるぞ
死んだまねしてもだめだ
だまされないぞ

日本海軍强いんだな
いくら敵が　進んでも
日本魂には負けるだらう
來るなら來いよ
魚雷やるぞ
逃げてもだめだ
そら又やるぞ

日本空軍强いんだな
いくら彈を　うつたつて
日本魂には負けるだらう
來るなら來いよ
ばく彈やるぞ
かくれたつてだめだぞ
ばく彈やるぞ

少年航空兵

平安校初六　山浦理子

日本の男子と生まれ
大空の守りとなる
はえある日本航空兵よ
巣立て、飛び立て
大東亞に、うづまく砲煙の上へ。

あゝおんみ
香港、マニラ、シンガポールも落
ち
電撃の如くに、光の如くに
今私達國民のこぞる志も
建設の强き、强き理想に突進す。

海鷲の歌

撫順高女三　中島泰子

曉闇深き蒼茫の
太平洋に怒濤高し
霧立ちこむる甲板に
潮風を衝く命令一下
エンヂンの音も心地よく
今ぞ飛び立つ海の鷲

ひとたび空へ飛び立たば
生命を的の梓弓
惡辣あくなき英米の
とゞめさすまで戰はん
巨翼を張つて悠々と
賴母しきかな海の鷲

「敵艦見ゆ」の報告に
魚雷いだきてひとまたぎ
敵は雲霞と多くとも
日頃鍛へし此の腕
一發必中一ひねり
我精鋭よ海の鷲

十字砲火の大魔空
地上掃射に爆撃に
刃向ふ敵は數十機
男子の本懷こゝにこそ
亂雲を背に亂舞する
壯烈俊鷹海の鷲

征け銀翼を輝かし
南十字の星の下
異境萬里の空の上
昇る朝日に燦然と
大和櫻の香も高く
凱歌を擧ぐる海の鷲

鐵つくる人

毎日流す油汗の量を計算したところで何うして現場人の苦勞が算出できよう。汗なんど出るだけ出ればすぐ無くなるものである。そして其の後に來るものは最早苦痛でなくして唯機械のごとき手足の運動である。自分の體の存在を忘れて時間のみが唯一の意識であると言ふ狀態をわれ〱は此處において程まざまざと見せつけられたことはなかつた。人間は唯習慣的に動いてゐるのであつてかゝる危險な場所においては其の習慣が身につく迄公傷の多いのは當然である。漠然と眺むれば炎

と炎との間を灼熱した鋼板を引きづつて無雜作に往來する多數の群像が瞼の中をちらつくばかりである。この薄板工場の床は百五十度位あると言ふ。見れば水道栓からふき出した水が床に當つてジリジリと沸騰してゐる。それは内地や滿洲の夏の暑さと比較しても到底問題ではない。自然の恩惠の及ばぬ熱地獄の現出である。

鐵つくる人達の辛苦は炎熱の國境草原を警備する兵隊のご苦勞にも決して負けないのである。

（繪と文）中村伊助

書物談義

田中總一郎

藝文政策の基調が、文化財の増産とその適正な配給にあることは、明白に指示されてゐる。

これは建國十周年を迎へた我國の文化政策が、決戰下における文化的指向を決定し、勝利の日に到る迄の期間と勝利の後に來るべき日のための精神建設を重視しての施策であることを雄辯に物語つてゐる。

文化財、特に出版物の現狀と歸趨に就いては、難しい議論は別として、ありのまゝの姿を拾ひあげるだけでも、幾多の話題があり、考へさせられることと、蒙を啓かなければならないこと等が、あまりにも多すぎる。

以下は、我國に於ける出版物の配給面を擔當してゐる私が、日常見聞してゐるものゝ中から、一般讀書人や書店の人達に興味ともなり參考ともなりさうなものをひろひあげて、私見を加へた漫談である。

どれだけ讀まれるか

新聞といふものは、その報道性が强い成因となつてゐるから、早くから、いはゞ生活必需品となつてゐるといつても差支へはない。

書籍や雑誌も、報道性こそ新聞やラジオに及ばないが、生活との密接な結びつきは、それらにまさるとも劣らないものがある。現在、一冊の書籍、一冊の雑誌も買つて讀まないといふ人は殆んどないといつてもいゝ。子供にとつては、繪本は、おやつに優る魅力があるし、婦人雑誌は主婦の生活指針的役割をつとめてゐるし、多かれ尠かれ小説も讀まないといふ人は、捜し出すのに骨が折れよう。學生には參考書が必要であるし、娯樂讀物は、老人にも欲しがられる。

忙しくて書物も讀めないといふ詞はよく聞く詞だが、實際は、それは多くの場合、その人の謙虚な詞であるか、或は一種の擬態であつて、さういふ人こそ、その忙しい仕事の間で、よく讀んでゐる。

私の調べた範圍では、新京では、個人で新刊書を月額百圓近く買つてゐる人が十人以上ゐる。これは勿論特異な例だが、一つの家庭で、書籍雑誌に支出してゐる金額は、恐らく五圓を下ることはあるまいと思ふ。

ある十家庭の隣組で聞いてみたことだが、どの家庭でも必づ婦人雑誌を一冊以上買つてをり、二冊買つてゐる家庭が五軒、三冊以上の家庭が三軒あつた。主婦のための雑誌でさへもその通りだから、主人の雑誌や子供の雑誌も一冊平均は買つてゐようし、藏書の中に新刊書舊刊書が月に一冊宛増えない様な家庭は珍らしい位であらう。

日本から輸入されて全國に配分されてゐる數量は、毎月、雑誌が七十萬冊、書雜が四十萬冊といふ巨額に上つてをり、それが殆んど全部消化されてゐる。

國內生産の方は生産量が尠いので日文満文、蒙文、露文等を含めて、毎月、雑誌、書籍共に各十五萬冊程度のものが配分されてゐるが、特に満文出版物に就いては實際需要の約半分位しか充當されてゐないので、出版文化に對する一般的希求が高まりつゝある現狀からみて、又どうして潤澤に出版物の配分をしなければならない必要からいつても、満文出版物の増産といふことは、急速に解決しなければならない問題である。

何れにしても、一箇月に、新しい雑誌が八十五萬冊、新しい書籍が五十五萬冊國內で消化されてゐる譯であるが、この厖大な數量でさへも、決して實際要求の全部を充たしてゐるのではなく、寧ろ、必要なもので不足をしてゐるといふのが實情であらう。人口の増加と識字層の漸増と文化の向上に比例して日文も満文も、出版物の讀まれる數量は増加することは當然であるが、特に、満系國民の中に於ける需要は、獨り満文のみならず、日文においても激増することは豫想に難くなく、現に激増しつゝある。

何が讀まれてゐるか

讀書といふものは、由來個人主義的なもので、各人が讀みたいと思ふものを讀み、買ひたいと思ふ書物を買つてゐるのが通常であつて、文化政策の指導面からいふと、『何を讀ますべきか』といふことが論議されようが、それにしても、現に『何が讀まれてゐるか』といふことを見究めることは必要であらう。

日本に於ては、出版物の生産規正が色々の角度から行はれてゐて、漸次『何を讀ますべきか』といふ問題が解決に近づきつゝあるから、將來は、出版される限りは、『是非、讀まれるべき』出版物のみになることが理想として實現

しようが、現在は、尙未だ『讀む必要のないもの』やそれに近いものも、相當出版されてゐる。從つて、將來は、出版物の生產規正や配給規正が更に强化されると共に、その消費規正にまで進むべき傾向は今や濃厚である。現に最近顯著になりつゝある圖書推薦制度の運營はこの傾向を十分暗示してゐるといへよう。

何れにしても、我國に於て『何が讀まれてゐるか』といふ問題は、誰にとつても興味のあることとであらう。

書籍と雜誌とでは、必ずしも同じ傾向にあるとはいへないかもしれないが、書籍の方は中々調査が困難な上、正確な資料が完成してゐないので、雜誌に就いてのみ述べるが、大體の傾向は推察がつくと思ふ。

雜誌といつても種類が頗る多く、最近、大分整理統合が行はれてゐるといつてもまだ〳〵大變である。大體これを種目別に分類してみると三十種目になるが、我國全體を眺めて、その中で最も大量に配分消化されてゐるのはその名の示す如く、大衆雜誌であつて、總數の三六・八%である。勿論、大衆雜誌といつても、現在二十九種ある。その次は、婦人雜誌で二三・八%を占め、それも十四種ある。第三位は兒童雜誌十九種で一〇・八%、第四位は綜合雜誌十種で六・七%、第五位は少年少女雜誌十三種の五・二%、以下は時局雜誌の二・六%、文藝雜誌の二・四%、工業雜誌の一・七%、經濟雜誌の一・三%、科學雜誌の〇・七%である。

大衆雜誌と婦人雜誌で、全體の約六〇%を占めてゐるといふことは、當然のことの樣でもあり、また考へさせられることでもある。

兒童雜誌や少年少女雜誌が、現在の比率であるといふことは、決して充分であるとは思はれない。特に、我國の樣に半歳に亙る屋內生活を餘儀なくされる生活環境にある兒童達に對して、健全な讀物や繪本を與へなければならないといふ必要は、恐らく絕對的なことであらう。

私は、婦人雜誌や娛樂雜誌の消化比率が高いといふことに對して、あながち滿洲の文化の水準が低いと斷定する程の馬鹿ではないつもりだが、兒童雜誌に對する比率からいへば多すぎるのではないかと思ふのである。

婦人雜誌のあるものゝ如きは、新しい雜誌が着くと書店の店頭で二三時間の中に賣切れてしまふものがある。その不足を充當するためには、恐らく現在の輸入總量を倍にしても過剩ではあるまいが、それが出版元の生產狀態に支配されて、また中々困難な事情にある。

書物談義

我國に於ける讀書の傾向を最も强力に支配するものは、近い將來に滿系讀書人になると思ふが、最近、建大、工大、法大、醫大竝に女學校在學中の學生生徒から蒐めた意見を綜合すると、現在讀んでゐるもの、今後讀みたいものゝ種目別順位は、文藝書、靑年修養書、時局讀物、自然科學、古典、大衆小說等であることを知つて、中々面白いと思つた。勿論、これらの學生生徒が社會人となつた場合、必ずしもこの順位のまゝで讀書に對する傾向が持續するとは思はれないが、これは一般的傾向として共感のもてるものである。

新刊書は來ないのか

二三年前までは、新刊書といふものは書店の店頭に溢れてゐたが。最近は殆んどないではないか――といつてゐる人が、相當ゐる。

それは、判つきりいへば、認識不足なのである。新刊書は、相當來てゐるのである。それが、『殆んど來てゐない』樣な印象を與へてゐることに就いては、一應首肯のできる原因がある。

昔は、出版といふ企業は、特殊の少數の良心的出版元を除くと、大概は投機的な企業であつた。從つて、出版元は、數種或は十數種の賣れるか賣れないか判らない書物を出版してその中で一つでも賣れゝば利益が期待できる樣なやり方をしてゐて、小賣店に對しては、賣れ殘りの書物を引取る條件で多種多量の商品を店頭に送りつけてゐた。そこに返品制度といふものが、出版元或は取次店と小賣業者との間に生れた。然し、この制度は、資材、運賃、輸送等の無駄を節約する必要からいつても當然改善されるべき制度であつたが、一方、生產の規正が行はれるに從つて、さういふ販賣條件は不可能になつた。あり餘る程の生產が、然かも當然返品が考慮される樣な生產は、强く規正されつゝあるから、必要なものが、必要に近い數量だけしか入手出來なくなつたのである。

新聞その他の新刊廣告を見て註文した時には、もう既にその新刊書は賣切れてゐて、出版元自體の在庫品もないといふのが最近の實情である。

だから、その需要に全面的に應じるためには極力多量のものを入手しなければならない譯であるが、それがまた中々困難である。

新刊書といつても、專門書、學術書から子供の繪本に至るまで、その種目の雜多なことは驚くべきものがあり、何といつても日本出版文化は多彩豐富を極めてゐる。

それらのものに對する萬人の需要に

餘すところなく應じるためには、厖大な常備を必要とする。それは決して箇箇の小賣店の店頭が耐へ得るものではなく、資金だけで解決し得る問題でもない。

そこで、配給の計畫性が必須となり、計畫配給の實施が不可避となる譯であつて、必要なものを、必要な箇所に、必要に近い數量を配給することによつてのみ、需要に極力應じ、場合によつては需要の規正にまで進む必要が生じてくる。

現在滿洲へは、日本出版物の生產總量の五%强が輸入されてゐるが、新刊書だけを抽出して見ると、配給總量の約一二%が入つて來てゐる。小賣業者の販賣政策又は見透しから發註してゐる數量に對しては、總量の約七〇%が即時調達されてゐる。この數字は日本內地に於ける現況から見ると寧ろ好成績にすぎるもので、我國としては、日本の出版元或は配給統制機關が、日滿文化のために拂つてくれてゐる絶大な協力に感謝しなければならない。

書店の性格

我國の既存書店は、大都市にある若干のものを除くと、殆んど總て、副業を持つてゐるか副業としてゐるものである。

それは僻地に於ては當然避けられないことであつて、書籍雜誌の販賣のみをもつてしては、生計を樹てるだけの需要はなく、從つて他商品或は他營業を兼營してゐるのが、現在では普通の狀態である。

出版文化の普及滲透といふ任務の上からいふと、たとへかういふ營業態でも必要の度は變りなく、寧ろかういふ業態を更に普及奬勵して、全國隅なく、凡そ識字人のゐる限りの土地には、出版物の配分をしなければならないのである。然し、その場合、需要や資金の關係から、總ゆる出版物を、總ゆる需要に應じ得るやうな店頭常備は困難である。

我國の書店は、全般的にいつて、この環境の下にあつては、純粹書店的性格を明確にすることは無理であるが、尠くとも都市に於ける書店は、その性格をもつと明確にできるし、又しなければならないのではないかと思ふ。

例へば、一都市にある甲乙丙丁の四書店が、その何れの店も出版物のデパートの樣な業態をとつてゐる必要があるだらうか。それよりも、甲は專門學術書のみを賣る店であり、乙は教科書や參考書を賣る店であり、丙は一般修養、文藝、娛樂、趣味に關する出版物を賣る店であり、丁は特殊な兵用圖書を賣る店であるといふやうな性格づけ

が明確になれば、十分ならざる多種多樣の出版物が、廣く淺く配分されてゐるよりは普及滲透の效率は高まるのではないだらうか。

現在、全滿を通じて、述上の意味に於ける書店の性格を明確にしてゐるものは、醫書のみを扱ふ店が一軒と、兵書のみを扱ふ店が一軒あるのみである。

昔の經濟機構であれば、賣れるものは何でも彼でも賣りたいといふのが常道であつたが、現在はそれも漸次困難になりつゝあるし、將來は益々困難になると思ふ。又さうならなくても文化財としての出版物の計畫配給の效率を高める必要上からは、さういふ書店の性格づけが要請されるのではないだらうか。

然し、そのためには讀者の、購買者の訓練とか理解とか習慣の修正とかゞ必要である。いつて見れば現在の各書店の店頭は、總ゆる人の總ゆる需要に應じようと努力してゐるのであるが、それは、いはゞ不可能なことを可能にせんとする努力であるにすぎない。如何に潤澤な生產と配給があつたとしても、總ゆる人の總ゆる需要に完全に應じるといふには、書店の棚にも經營資金にも限度がある限り、明白に不可能である。

然し、讀者といふものは、どうもさういふことを考へないものらしい。どこへ行つても、どんな書物でも、すぐさま左から右に手にすることができるものであると考へ易いし、またそれでなければいけないのだと斷定してゐるものらしい。だから、書店としては、書店自ら努力はしてゐるにしても、中々その希望に添ひ得ないことが多いのである。

私は、書店の性格づけによつて、これは或る程度まで緩和し得ると思ふが、これは書店だけでやらうとしても困難であり、讀者の理解と協力が必要なのである。

推薦圖書

推薦圖書は即ち良書である。その推薦圖書が滿洲にはまるで入つて來ないではないかといつてゐる人があるが、この人は實情をまるで知らない人で一二軒の書店の店頭をみただけの印象なのであらう。

現在、推薦圖書制度としては、日本に於て、文部省と日本出版文化協會の兩者によつて實施されてゐるのがオーソライズされてゐるものであるが、滿洲では未だ滿洲としてオーソライズされた推薦制度は實施されてゐない。

推薦圖書制度は、出版規正の一種の積極面であり、現に日本では、推薦圖書に對しては爾後の用紙制定査定に增配

さへ行つてゐる。從つて、推薦圖書は是非國民に讀ますべきものであり、必讀の書であるともいへよう。推薦の決定は刊行發賣後行はれてゐるのであるが、日本出版界の現狀は、出版元が、新刊書の全部數を配給機構に持ち込むのではなくて、その三分の一、半分或は大部分のものを見本として配給を希望し、殘餘のものを出版元在庫として保留し、註文を待つといふ形であるが、實情は、見本提出と共に在庫に對する註文も殺到して大概なくなつてしまふものが多い。そしてそれがいゝ書物であればあるだけその傾向は顯著である。從つて、滿洲に入つてくるものも、見本で相當數を確保し同時に註文に於ても所要量を發註してゐる譯であるが、全體として讀書人が激增し、日本の出版物が、擴大された大東亞共榮圏内に急激に流れつゝあるから、全體として不足してゐることは事實であるし、推薦が決定した時にはもう既に初版は賣れ盡してゐるのが例である。從つて推薦決定を見て讀もうとする人は、再版まで待たなければならないが、その再版が早くて三箇月後でなければ出ないといふのも實情である。だから出來るだけ多くのものを初版によつて確保輸入する樣に我々は努力してゐるが、それがなか／＼希望通りには行かない。

日本國内の各地域や華北、中支、南支その他共榮圏内に昂まりつゝある日本出版物に對する渴望とそれに應じ切れないといふ嬉しい現狀を想ふと、我々は、滿洲だけを滿足させればいゝといふやうな我意を張ることは愼しまなければならないと思ふ。

滿洲に輸入する場合、我々は推薦圖書に重點をおいてゐる。良書の輸入配給といふ任務は、當然、この制度を基準として行はれなければならないからである。

それは輸入全量に對して三〇％弱に當つてゐて、殘りの七〇％が書店の發註品を檢討して輸入するものである。この比率がせめて五〇％宛にまで進むことが理想であるが、この三〇％を確保することが相當以上に困難なことなのである。

昔は推薦圖書は賣れないといふ定評があつたが、現在はその反對である。書店もそのことに努力してゐるし、一般讀者の傾向もさうなつて來てゐるやうである。

私は、滿洲でも、國内出版物に對しても、輸入出版物に對しても、權威ある推薦制度が急速に樹立されることを望んでやまない。

（筆者は滿洲書籍配給會社專務）

演劇近事

撫順炭礦は石炭でのみ有名であつたが、それ以外に思ひがけない有名物を生産して了つた。私は嬉しい悲鳴をあげしばし呆然とした。演劇コンクールの名の下に昨年、一昨年と演劇會を催してゐたが、第三回の今年は俄然「藝能競演會」に發展したのである。『演劇も亦國體訓練である』と、確固たる信念の下に行はれた競演會の成果は、私等の想像以上である、十五組が五日間に亙つての激戰で、之に審査し獎勵賞も出してゐる、脚本十五の中には「或る日の坐漁壯」「君ケ代初吹奏」「同志の人人」「病院船」等々名作も數へられる。如何に眞摯敢闘されたかゞ想像される。――やつた諸氏もえらいが、やらした會社に敬意を表する。――何時迄もすこやかに成長することを心から祈る。

× ×

滿藝唯一の專屬であつた「協和舞隊」が、四月の半に一場の惡夢さながらに、ひそかに解散して了つた。發展的解散とは無理にも思へぬ筋があるが、指導者鳳久子は滿洲に殘つて舞踊研究創作と後進指導のため、獨力で頑張るとかの由、日本の藝術家であつた鳳久子にも、滿洲に於ける活動の誤算、その他事情があつたとも思はれるが、中途半端な處置は滿洲國の恥辱である。――今後かゝる問題が惹起せぬとは限らぬ、藝術家育成擁護の藝文指導要項の具體的徹底が望ましい。

× ×

私は今この稿を天津の宿で書いてゐる。それは「大同劇團」の建國十周年慶祝滿華親善大公演のためにである。北京は五日二十九日より三日間、天津は六月三日より三日間を決定した。滿洲國藝文の初の華北進出である。演目は「林則徐」である。

華北に來て驚いたことは、新文化の餘りにも甚だしい、貧困狀態である。北京の四一劇社公演、曹禺の「雷雨」を觀たが、中等學校の學藝會に劣る。之では東洋一と自稱する京劇の本場眠れる古都北京だけに、頭から拒否される譯である。（英米への留學生も混つてゐる由）――いろいろ事情もあらうが、結論は靑年の覇氣が無いことである。――北京と違つて天津は話術（新劇）運動は相當活潑で、特に華北に於ける治安强化運動に協力してゐる點で、活氣横溢である。代表的な劇團では「新亞話劇團」「大亞話劇團」があるが、しかし之も滿洲新演劇界に比すれば寥々たる内容形式である。外觀内容共に、英米依存の華人都市天津の靑年は、英米の如何なるところを學んでゐたのであらうか？

とまれ華北の新藝文は今正に立ち上らんとしてゐる。

（藤川研一）

ロシヤに於ける滿洲研究（下）

坂口數雄

四、ハルピンにおける滿洲研究

東洋學の轉生　ロシヤ本國における變革、それにひきつづく內亂戰のため、ロシヤ・東洋學には一大變化がもたらされた。「シベリヤ研究の諸條件は革命後根本的に變つてしまつたイルクーツクには新しい大學が建てられ、ウラヂウオストックの舊專門學校（東洋學院──引用者）は大學に昇格した。」(1)とのウエ・バルトリドの言葉は全東洋の研究について云へるのであるが、たゞに研究の諸條件のみならず、その方法その組織もまた舊き衣をぬぎすてさせられたのであつた。

たとへばペテログラードの實科東洋學院は東洋研究所となつて、若い實際的な活動家、宣傳工作員の育成を目指し從來東洋研究機關をもつてゐなかつたモスクワには「ナリマーノフ東洋學院、東方勞働者大學及び振義仙大學が開設され、また國民經濟研究所でも東洋經濟部が新設された。」更にその研究に當つては新しい認識論を適用せんとし、社會的、經濟的、そして政治的な調査を主體とするに至り、これらの諸問題の綜合的研究がロシヤにおける新東洋學の根本的內容であるとしたこれをより具體的に明かにするために平竹傳三氏の敍述(2)を借用しよう。彼はつぎの如く述べてゐる。モスクワ政權の確立によつて「凡ゆる社會、經濟の研究方向は辨證法の基礎のもとに行はれる樣になり」、東方社會にたいする「觀點もこの方法によつて統一され、多士濟々たる新進の社會學者、經濟學者によつて……研究の陣營も面目を一新する」ひきつづいて社會生活や政治形態も畢竟、經濟を基礎としてのみ決定されるといふ觀點から、彼らは現段階における……諸國の狀態を……發展過程に遡つて觀察すると共に、又その調査も集團主義にもとづいて共同勞作的になる……

……等これらのことは研究內容に大革命を齎らした」と書いてゐる。だがこゝで忘れてはならないことは、これらの調査や硏究が恐るべき東洋赤化の目的を以ておこなはれ、その成果を自らの東洋政策の基礎たらしめんとしたのであると說かれてゐることである。我々が戒心警戒すべきところであるこの問題についてはエム・ゲ・ガルコーウイチの一九二八年の勞作「東洋とソ聯邦」(3)とロストフスキー著、東亞近代史研究會譯「ロシヤ東方經濟史」（昭和十七年刊）の第十三章とを參照されたい。

ところでこのやうな變化に、一方では照應し、他方では一九二四年の蘇支協定以來漸次勢力を伸張したモスクワ政權の指導と影響をうけた東支鐵道當局は、從來の「東省文物研究會」を再編强化し、さらに「東支鐵道經濟調査局」を組織して現地における實態調査を前進させたのであつた。そしてこの實態調査はロシヤ本國の滿洲研究に貴重な事實資料を提供するのであるが、この時期は一九三〇年まで續くものと見てよい。

東省文物研究會　ロシヤとくにハルピンにおける滿洲研究のこの時代は我々にとつて大きな關聯があり見逃すことができないので、若干詳細に敍述することにしたい。なによりもまづ、東省文物研究會から始めよう。

東省文物研究會は一九二二年に開設された當時東支鐵道は支那に返還されて國際管理の下に白系露人の經營に委ねられてゐた。ためにハルピンは白系露人の天國でありこゝにこの研究會がそれらを背景として生まれでたのである。「同協會は滿洲にきてゐるおよび將來來る科學者並に科學的調査に從事する人々殆ど全部を結集し、多くの障礙を打破して彼等をして野外及び協會內において科學的調査を遂行し、且つ又成果の多くを公表するを得せしめる諸條件を作りだした」(4)とE・アーネルトが書きかつまた「最も實質的な部門は自然科學史、考古學、商工業、土俗學等の部門であつて研究會は急角度に發展して非常に多くの文物が蒐集され、一九二八年には約六萬二千六十二箇の種々の文物が蒐集された」とア・エス・ルカーシキンが述べてゐるやうに、明らかにこの會はエミグラントたちの東洋學とくに滿洲學、そしてまた自然科學的滿洲研究の本據として成立したものである。いはば「エミグラント・東洋學」の東洋における一大基點としてロシヤ・オリエンタリスト協會や一九一二年頃設立された「滿洲農村經濟協會」のメンバーを以て、出發したわけである。

だが一九二六年からヴエストニック・マンチユーリイ（東省雜誌）の地方研究欄に本會員の滿洲に關する研究論文が發表せられ、「東支鐵道當局は研究會の事業の異常な發達に鑑み每年補助金を增加した」ことを知るとき、東省文物研究會が財政的に、方法論的に、變革を經たロシヤ本國の影響の下に立ちはじめたのをみとるのである。それにしても本研究會は一九二七年には異常な成長をなし、博物館、圖書館、植物園、松花江生物研究所、現地刊行物保存所、出版所をもつに至り、地質學者Eアーネルトの「北滿における有用鑛產物」（一九二八年）、蒙古語支那語學者ア・ペ・ヒオーニン「最新支露辭典」（一九二八年）ゲ・ゲ・アヴエナリウス「支那の同業組合」（一九二八年）イ・ア・ロパーチン「オロチー滿洲族の近隣族」（一九二五年）などを刊行してゐる。

このやうに自然科學的研究と舊來の「アカ

デミック・滿洲學」に活動分野をみいだした東省文物研究會は政治的背景の缺除とソ聯のアジア政策が所謂第三段階――防衞的段階に入つたために東北政權の壓迫をうけて一九二九年に閉鎖の悲運に遭遇した。その後支那官憲によつて再建された「東省特別區文物研究會」は名目だけにすぎず、ロシヤの自然科學者は「支那人の魔手を避けるためにアメリカの旗幟の下に一九二九年の秋にキリスト青年會內に『自然科學及地理研究クラブ』を組織」(6)して餘燼をたもつた。なほ一九三一年一月に東省特別區文物研究會は東省特別區立文物研究所と改稱されて舊東省文物研究會員を招集したが、もはや研究活動に見るべきものはなくみじめな殘骸をとゞめるにすぎなかつたのであつた。

註(1)ウエ・バルトリド「東洋研究史」四六八頁

(2)平竹傳三「シベリア經濟地理」五四―五五頁

(3)この邦譯は露亞經濟調査叢書の一として昭和七年に刊行されてゐる

(4)E・アーネルト「滿洲の探檢と鑛業の歷史」二八八―二八九頁。こゝで彼は「一九二二年には、東支鐵道開設二十周年記念に行はれた事業と關聯して九月二日に哈爾濱に東省文物研究會……が創立された」と書いてゐるが、東支鐵道二十五周年記念祭は一九二三年七月にひらかれ、そのときの展覽會の出品は東省文物研究會內に陳列して一般觀覽に供してゐる。

(5)ルカーシキン「露人の爲した北滿洲の學術研究」(「滿蒙」昭和八年十二月號八八頁)

(5)前掲九一頁。このクラブはいまもなほ存續してゐる。Memoirs of the club of Natural science and geography of the YMCA. Harbin. 1941 參照

五、滿洲經濟の研究

東省雜誌 さきに擧げた「東省雜誌」は一九二五年に創立された東支鐵道經濟調査局の機關誌であつた(1)。その前身は一九二三年から發行された「エコノミーチエスキー・ヴエストニツク・マンチユーリイ」(滿洲經濟通報)であるが、一九二五年に前記のごとく改題されて北鐵接收に至るまで活躍したところの、滿鐵調査月報と比肩する大物である。この外に經濟調査局は時事問題に關する「エコノミーチエスキー・ビユレテエン」(經濟週報)を週刊し、さらに一九二六年以降は支那語雜誌をも發行してゐる。しからばこれらの機關誌にどんな論文が發表されたであらうか。幸ひ前二者に一九二三年から一九三四年に至るまでの間に亙つて載せられた主要論文の目錄が北滿經濟調査所によつて邦譯作成されドライ・タイプにされてゐる。これによると編纂技術の劣惡なため幾分の重複はあるが、項目別の論文數は大體つぎの如くである。

	項目	件數
1	住民、植民	一一三
2	勞働	四八
3	習慣、宗教	二九
4	教育、藝術	四二
5	法律、國際關係	六一
6	統治、消費組合、保險	二五
7	醫學、獸醫學、氣象學、氣候	四三
8	考古學、歷史、地理	一〇八
9	國家財政、通貨、銀行、取引所、稅關	一六〇
10	港灣、水運、海運	一四〇
11	非鋪裝道路、荷馬車自動車輸送	二七
12	北鐵(東支鐵道)	五五三
13	滿鐵其他滿洲國內鐵道	一一九
14	運輸、郵便、電信電話、ラヂオ	
	度量衡、工學	一七三
15	農業、園藝	四二九
16	狩獵、養禽、漁業、養蜂、養蠶、養畜	一五五
17	林業	八二
18	鑛物	一一二
19	工業	二七七
20	商業	八五九

これによつて如何なるところに調査研究の重點があつたか、そしてまた東支鐵道はなにを求めたかがおぼろげながらも判明するであらうがこれら諸論文のうち滿鐵によつて邦譯されたものには次のごときものがある。

ア・エ・ゲラーシモフ「北滿に於ける在來工業の勞働條件」(北滿產業資料第二號)昭和十二年

エ・エ・ヤシノフ「北滿農家の收支」―滿鐵調査月報十九卷二號

ペ・ア・コンスタンチノフ「北滿に於ける農業」―滿鐵調査月報十八卷十號

何れも貴重な論文である事に疑ひないが、まだまだ邦譯もされずに顧みられない論文が多く、こゝにも我々とくに現地にあつて滿洲經濟の動向調査、進んで其構造的分析に關心あるものゝ一層の探求が要請されてゐる。

次に經濟調査局刊行の調査單行本にもすぐれたものが多いのであるが、その一部分を示すだけに止めなければならない。

1 エ・エ・ヤシノフ「支那農民經濟」一九二六年刊
2 エ・エ・ヤシノフ「北滿の支那植民」一九二七年刊
3 ペ・ペ・トルガシエフ「遠東の鑛產と資源」一九二七年刊
4 ペ・ペ・トルガシエフ「石炭資源」一九二八年刊
5 ヴエ・ア・コルマゾフ「バルガ」一九二八年刊
6 ア・イ・ポグレベツツキー「支那の貨幣流通と財政」一九二九年刊
7 エヌ・ア・セトニツツキー「世界市場における大豆」一九三〇年刊
8 ヴエ・イ・スーリン「滿洲の林業」一九三〇年刊

さらに地圖、年鑑、要覽などの出版物も數多いことを指摘しておかねばならないが、一九三四年の「滿洲大觀」第一冊を以てこの出版の最後とするのである(この第二冊はタイプ原稿のまゝで、ついに日の光をみることができなかつたと傳へきいてゐる)。

經濟調査局 一九二五年に創設された東支鐵道經濟調査局は露名をエコノミーチエスコエ・ビユローといひ、現在の哈爾濱にある滿鐵の北滿經濟調査所の前身にあたるものであるが、次の事業を目的とした。

一、接壤地域經濟の一般的組織的研究
二、鐵道營業上の一般的要求竝に東支鐵道管理局の特命による接壤地域に於ける箇々の根本的經濟的問題に關する調査研究
三、鐵道の貨物及び旅客輸送作業の如何、經濟的諸要求に對する其の適應如何、竝に鐵道沿線地方狀況如何に關し常に監査を行ふ
四、鐵道沿線所在の諸官廳商工機關及び商店等との情報連絡
五、外國經濟情報の飜譯
六、出版事業

かゝる意圖をもつ經濟調査局はその組織においては成立當初にあつて局長のもとに次のごとき部課をもつてゐたのであつた。

1 總務科
2 商務實業及出版科
3 經濟調査部
4 飜譯科
5 統計科
6 編輯科

この組織と目的の其の後における變動の有無は殘念ながら不明である。私のしらべた限りにおいては公刊の書物乃至は雜誌には資料が見あたらないが、北鐵接收文書のなかには恐らく發見されるであらう。これは今後の篤志の方の調査に俟たねばならない。なほ局員

の數であるが、一九二六年一月一日現在で定員二〇名、臨時職員囑託三七名計五十名である。これから推測すると經濟調査にあたつたものは非常に數少いわけであるが、こゝに彼らの調査方法の特異性があるのではないかと思はれる。といふのは沿線各地にある商務代辦所が經濟調査の第一線にたち、しかも哈爾濱にある各調査員が自己のポケット・マネーで助手をやとひ、出來高拂ひで、市中のものに飜譯させてゐたといはれてゐるからである。それでこゝの調査員はそれ〴〵現地における一流人物であつたと考へられるのである。

こゝで哈爾濱にあつてさきの東省文物研究會、經濟調査局、法政大學などの學術機關において活躍した學者についてふれなければならない順序となつたが、既にのべた蒙古學者リヤザノフスキー、それに經濟調査局の刊行書によつて知られる人たちのほかに、經濟關係のエル・イ・リユビーモフ、イ・エフ・コンスタンチノフ、ゲ・ゲ・アヴエナリウス、歷史考古學者のヴエ・ヤ・トルマチヨフ、イ・ア・ロパーチンなどがゐた。だがこれらの滿洲研究家のうちとくに我々にその名を知られてゐるのはエ・エ・ヤシノフである。

ヤシノフの前記の二勞作はともに「北滿洲支那農民經濟」(滿鐵調査資料第百十編昭和四年刊)「支那農民の北滿植民と其の前途」(露亞經濟調査叢書、昭和六年刊)として邦譯され、譯は決して良好とは云へないが、我が國の滿洲經濟の調査にたづさはる人たちによつても非常に多く利用されたのであり、いまもなほ讀まれてゐる書物である。だが指摘しておかねばならないのは、かゝる貴重な具體的事實資料の提供者である彼は、一九三〇年から一九三五年に至るロシヤ・東洋學の發展段階において理論的にいろ〳〵と批判され檢討されたことである。たとへばヴエ、アヴアリンが「コンドラチエフ・チヤヤノフの學説を奉ずる有名なる滿洲の『農學者』ヤシノフ」(2)云云と書いてゐることは彼の勞作を參照するものにとつて無視できない。なほこれに關聯してエル・リユビーモフもまた「もう一人の『滿洲通』」と卑喩的に批判されてゐる。

次の段階においてなされた以上のごとき批判に關聯してペ・エフ・コンスタンチノフの「北滿に於ける農業」を俎上にのせよう。農業技術に明るい彼は全體としてその敍述に大きな自己矛盾を敢てなしてゐる。まづ彼は「支那の耕作法を古風な、舊套墨守の方法と見ることは愼しまねばならない」(3)と書きながら結論として反對のことを述べてゐる。即ち「我々はこゝでは支那の農民の多數が文盲であること、農業の領域に於ける彼らのすべての知識は幼時から父に學んだところの、そして代に傳はつて來たところの慣習と傳統の範圍を出でないこと、彼らはその農作物を非難の餘地のない、動かすことの出來ない眞理と見、最も完全なものとさへ見てゐること、これらすべてのことは勿論支那の農業經營の主要な缺點であるが、これについてはここでは述べないことゝし、たゞ純技術的側面のみに觸れることゝしよう。そのうちで最も大きな問題は、我々が既に述べたやうに、不良の農具である」とも述べまた、「次に支那の農業經營、特に大經營にとつては、種子の選別、收穫、打穀その他のためのより完全な農具

が必要である」(4)とも云つてゐるのである。

「支那から滿洲への移民の流入が始まつた時移民は先づ自分の氣に入る所に落着いた。……しかし年と共に來住者は多くなり、好ましい良質の土地の選擇は限られて來た。新たな移住者は地主と過重な小作契約を結ばねばならなくなつた。そして零細農經營が出現した」(5)にいたつては著者は支那から滿洲への移民を、ロシヤ本國からシベリヤへの農業移民と同樣に描きだしてゐる。現地にあるわれ〳〵同胞の滿洲經濟調査の現在の水準が如何に高いものであるかは、さきの描出をたとへば石田精一氏の論文「北滿に於ける雇農の性質」の記述(6)と比照するだけで充分であらう。

いづれにしても、これらの人々が哈爾濱にあつて現地の實體調査に獻身的な努力をさゝげ、いまにいたるも事實資料的價値を失つてゐないところの多くの勞作をものしたことは高く評價さるべきであらうと信ずるのである

註(1)「尙は曾てハルビンでは北鐵接收前、滿洲地方研究協會(漢名、東省文物研究會—引用者)といふのが在つて、その機關『滿洲報知』(漢名・東省雜誌—引用者)によつて滿蒙、北支の狀況を報告したことも記憶すべきである」と述べてゐる勞作「シベリヤ經濟地理」は、こゝに現地性の缺除を明瞭にしめしてゐる。

(2)滿鐵調査月報昭和十年十月號、一六三—一六四頁

(3)ペ・コンスタンチノフ「北滿に於ける農業」滿鐵調査月報拔刷、二頁

(4)前揭　四四頁

(5)前揭　六頁

(6)滿鐵調査部編「滿洲經濟研究年報」(昭和十六年版)一六六—一六七頁

六、白系露人の滿洲研究

現地調査の衰微　一九三〇—一九三五年はロシヤに於ける東洋研究のさかんな發展をみせた一期間であつた。けだし一九三〇年に「正式に學士院東洋學研究所が創設せられ」(1)て、「その東洋研究が所謂東洋學として正式に發足した」(2)からであり、一九三五年には、ロシヤの現地調査が不可能となり、他方では歷史學の分野における「古代東洋」の規定づけを繞る年來の諸論爭が一應の結論に歸着したといはれるからである。それでこの間におけるロシヤ・滿洲學の最大の達成のうち是非とも擧げねばならないのは、一九三三年に刊行されたスカチコフの「支那書目」—この書目の三分の一は滿洲書目にさゝげられてゐる—とヴエ・アヴマリンの「列强對滿工作史」二卷(ロシヤ問題研究所譯、昭和九年刊)であらう。まことにこの二勞作は、この時期を特徵づける重要指標である。

このやうにロシヤ本國においてはその東洋學の發達と密接にむすびついて滿洲に關する研究が發表されたのであるが、その反面現地における調査は所謂哲學界におけるブハーリン批判、經濟史學界におけるゴーデス的轉回に關聯して振はなくなり、三〇年以降みるべき成果は發表されなかつた。一九三四年の通俗本「滿洲大觀」がロシヤ人の現地調査のみじめな「有終の美」であつたのである。

こゝに我々はかゝる事態をみて、我が國の滿洲經濟の研究が同じくこの一九三〇—一九三五年の期間に異常な發展をとげ、立派な「滿洲經濟年報」のごとき成果をあげたことに非常な心强さを感ずる。即ち「極めて最近に發

生したのであるが……滿洲近世社會經濟の分析が急速に展開されたことは注目すべきである。『舊慣調査』以來坂倉眞五氏の『滿洲土地法論』に發展した滿洲經濟の研究は、これ等の科學的分析の對象となり昨年（昭和九年—引用者）以來著しい進歩を示した」(3)のであり、「たとへば滿洲經濟調査會が昭和八年より刊行した滿洲經濟年報は、內地學徒の手嚴しい批判を受けて、本年度に於ては格段の進境を示してゐる」(4)のである。かゝる高き水準に立つところの我國における現在の滿洲研究がいまや輝しき大東亞戰爭のもとにあつて、滿洲經濟に課された「至上命令」の完遂のため以上のごときロシヤの成果をより一層深く、しかも批判的に攝取することを要請されてゐるのを銘記すべきである。

エミグラント・滿洲學　最後に白系露人の滿洲研究として記憶すべきは、シロコゴロフの「北方ツングースの社會構成」（昭和十六年譯）と後者は(一)滿洲史概觀(二)滿洲探檢史(三)滿洲鑛業史の三部より成つてゐるアーネルトの「滿洲の探檢と鑛業の歷史」（昭和十四年刊）である。のちの勞作のうちで我々の問題となしうる前二者は決して科學的な歷史研究とみなされることを要請するものではない。この點では通俗的な便利な書物といへるのみである

シロコゴロフの昭和八年に上海で出版された英文の「北方ツングースの社會構成」は早くから我が國の學者とくに東洋史家たちによつて注目されてゐた。たとへば八幡一郎は「自分は曾つて大冊の原著が出版された直後それを繙いたことがあるが、そのボリユームに壓せられて長嘆息し、三頁程讀んで卷を覆ふたのであつた」(5)と述べ、和田清博士もまた、「私共は好んで同氏の著述を漁り讀んだ」と邦譯の序に書いてゐる。そしてまた大上末廣氏はその周く知られた昭和十年の論文「滿洲經濟の史的考察」においてシロコゴロフの研究を引用してゐるのである。

だがシロコゴロフを最もよく紹介し、且つその達成をかなりな程度に充分に利用したのは柴三九男氏のすぐれた論文「ツングウス族の土地所有關係」（昭和十一年）である。こゝにシロコゴロフの一應の功績を認めねばならないのであるが、だからと云つてこのシロコゴロフの勞作は決して缺陷のないものではない。元來彼は民族學的にツングース族を研究したものであるが、北方ツングースの民族生活の敍述においては幾多の貴重な事實を提供しながらも、クランの定義づけにおいて若干の混亂がみうけられるし、それの歷史的發展過程における考察が缺けてゐるごとくである。確に彼はある一部のものが云ふやうに厖大な資料のまへにひざまづいてゐるやうである。かくて我々をして、充分の解明を缺く事から生ずる疑ひをいだかせ、理解にくるしめさせる箇所が若干あるが、それにも拘らず貴重な事實資料を供與する文獻たる事には間違ひない。我々はこの書物の非常に良心的な邦譯がでたことをよろこぶとともに、現在邦譯中と聞くシロコゴロフのいま一つの勞作「滿洲族の社會構成」の出版を鶴首するものである。

をはりに前に一寸ふれたロパーチンの勞作「オロチ」について一言したい。この四六倍版三十頁の小論文は我々の間ではあまり廣く知られてゐないのだが、シロコゴロフもまた引

用してゐる價値高きものである、こゝではその序文の一部分を邦譯して、拙い紹介にかへよう。

「シベリヤおよび滿洲の土着民族の人種學にたづさはつてゐた私は、昨年まで最も東方に住むツングース種族卽ちシホタ、アリン山脈より東方の太平洋岸に居住するオロチと直接に接觸することができなかつた。私はやつと一九二四年の夏に、この小數狩獵民族が居住する地方を旅行する事ができたのである。

滿洲史に興味ある總ての人たちにとつてゴルヂと共にオロチは大きな關心事である。問題はこの兩民族が滿洲族の最も近い血緣族であり、滿洲族とともにツングース民族群の南方分派あるひは滿洲分派を構成してゐる點にある。オロチ語は滿洲語にすこぶる近くすべてのオロチは滿洲語を理解する能力をもつてゐる。……………

前記の三民族の近緣性は、古代に於いて彼らが同一の文化をもつてゐたといふことを物語る。この結論は、一方では、滿洲族が多分の原始的な狩獵的性質を保持してゐたことが明白となつてゐるところの古文獻によつて是認されるし、他方においては、オロチ、ゴルヂ、滿洲族の物質的生活狀態、家族、社會制度、信仰の比較分析によつて是認される。しかして滿洲族が文化的に發展し、自己の祖國をすてて支那に突入し、其處に滿洲朝を打建てたが、ゴルヂとオロチは黑龍江畔と沿海州にとゞまり、依然として狩獵者、漁撈者の原始生活をつゞけてゐる。それ故にオロチとゴルヂの研究は過去に於ける歷史的滿洲族の理解にとつて重要である……………」

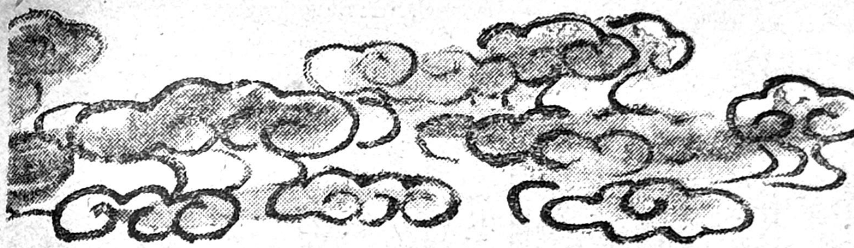
滿洲における民族學　歷史學の研究に白系露人が活躍したのは以上に止まらないのであるが、殘念ながら、それらの研究成果は充分に利用も紹介もされてゐない。しかし我々にとつてはエミグラント・滿洲學をも無視し、これを放置しておくことは許されないのである。

註(1)安藤英夫「ソ聯の東洋研究二十年」雜誌「蒙古」昭和十六年一月號八二頁
(2)前揭　七九頁
(3)「滿洲史研究」—「歷史學研究」第五卷第二號二九一頁
(4)「歷史學研究」第五卷第二號、こゝでは前揭號二九一頁より引用す
(5)「圖書」昭和十七年三月號參照

むすび

われ〳〵は簡單ながらもロシヤ・滿洲學の過去の達成を瞥見してきたのであるが、その現段階については詳細を知ることができないそれにしてもロシヤ・滿洲學の古い價値ある文獻の所在と研究達成の水準を知つて、それを參照し、あるひは取るべきものは遠慮なく我物化して、その上に我々の滿洲研究をつみかさね、以て白鳥庫吉博士が云へるごとく「現代に於ける諸般の事業」を「確實なる學術的基礎に立たしむる」との要請に答へなければならないのである。

北守南進といひ、北居南面といはれる現下にあつて、現地にすむ我々にあたへられた課題は重且つ大である。この小稿が現地の正しき認識、それより生まれる逞しき實踐に幾分でも役立てば幸ひである。（十七、五、十八）



正氣の歌

明石寺雪夫

古人言ふ正氣時に光を放つと
亞細亞大陸を擁して東海に連り
太平洋を睥睨する列島
君臣和にむすぶうまし國
小なりと雖これ神國皇土
夷禍何ぞ忍びむ
英米もと先進を名とし修交を求む
不遜　倨傲　術策多かりし
今また我に臨むにＡＢＣＤ陣の包圍をもつてす
平和を提唱し爪牙をとぐ

斯くて太平洋の風浪急を告げんとす
英米そも何物ぞ
終に立ちぬ
十二月八日宣詔を拜して我等は立ちぬ
古人の言ふ
正氣たるや正に隆々潑剌
正氣の秋水玉ちりて
眞珠港灣の波をくゞり空を壓し
マレー半島の波をけり密林を縫ひ
はたまたビルマに濠洲に
神速よく陸に海に　空また天かけり
醜の御楯の盡忠報國に
もえにも燃えて一死萬軍に當る

美なる哉　偉なる哉　又壯烈
たちまち拂ふ東亞の妖雲
皇風よく八紘を光被せんとす
おゝ世紀の曙ぞ
直視せよ神武建國の理想が
昭和產靈の神話となつて
今大きく羽ばたいてゐるではないか
滿洲建國既に十年
邦家と兄弟の盟を爲す
骨肉相食む四年の戰禍
慘ましき犧牲に滿つれど
新らしく中華は立ち上らんとす
今こそ

青

我等は親鳥の如く
もえ上る焰の中から
共榮圈下のまよへる諸民族をしつかと懷に抱いて
共に苦しみ共に生き榮えん心願
猛き男子優けき慈母の心をもちて
我斃るれば子是を受け
子斃るれば孫業を繼ぎ
肅然誠心を傾けて
完遂す王道亞細亞の聖業
嗚呼
快なる哉
昔日に劣らざむ皇國の正氣

—一七・四・二〇—

托鉢放談

寒月清光第一賓

溪白雲

▽　▽

烏兎匆々光陰は疾きこと矢の如く、往事を追懐すれば總て是れ一夢で、吾人が還暦を期とし總ての要職を退き、阿倍野の小院に閑居し花鳥風月を友とし悠々自適の境地に住せし折柄、天來の一音は滿洲事變の勃發である。

滿洲獨立の建國なるや、滿洲建國の基礎を爲せる某顯職に在りし舊知の道友より或日一葉の雁信を得た。其の文に曰く、滿洲建國の我が皇國の現在及び將來に於て如何に重大なるかは、玆に贅言を弄する要なし、然るに滿洲建國の端を發して以來各宗各派の僧徒は續々と來滿あるし、皆な是れ造寺建設の爲めに土地其の他に對する利權の要求あるに過ぎずして、昔日の行基空海の如き皇威の宣揚、人心の歸趨に就いて開示せる一隻眼ある示導者は、不幸にして片影だも見ることなし、是れ我等同志の甚だ遺憾とせる處である、一體日本の宗教家は滿洲建國に對して如何なる見解を有せらるゝかと云へる詰問的の文意であつた。

此の雁信を得て、吾人密かに思ふに、是れ世に云ふ負ふた子に敎へられて淺瀨を渡るに等しき者なるが、此の負ふ子たる舊知の道友こそ卽ち列祖の再來にして、列祖が舊知の道友となつて吾人の怠惰を誡しめ給ふものなりと欽喜の涙を以て深く是れを感謝し、今時我國の狀態たるや悠々自適の秋にあらず、敎徒の本分は度生利益にある、衆生は無邊なり、誓つて度せんことを願ふ。是れ禪僧の朝夕に諷誦する四句誓願の第一句なり、口誦を休めて身誦してこそ本分を全ふするものなりと自警し、趙州八十重ねて行脚の行履を踏襲し、還暦を過るの老軀を以て滿洲行脚の發願を立てた。

されど吾人元來頑迷にして且つ魯鈍、加ふるに淺學非才にして彼の行基空海の如き博辯宏辭の高邁なる識見あるにあらず、唯虎山十年山居の砌り、栢樹高源の二老漢鉗鎚の下に敎外別傳たる單傳直旨の妙道の開示を受けしに過ぎず、それたるや未だ其の蘊奧に到達せるにあらず、恐らくは識者臍茶の笑となるならむも笑ふことなかれ。吾人の信念は其の法器の如何を顧みる暇なし、唯捨身報謝の一念あるのみ。徒に坐食して餘生を貪らむより老後の殘骸をして滿洲曠野の捨石の一つか堆め草の一端ともならば眞に本懷の至りなりと、識者の笑を後にして一笻に身を托して滿洲行脚の身となりしは昭和七年四月の五日にして指を屈すれば足掛十一年の昔である。

同日午後二時、近親知友に見送られて大阪築港より大連航路のうらる丸に便乘し、同月八日大連の港に著いた。大連市は過ぐる明治四十三年吾人が曾て、臨濟宗妙心寺派の參事會長たりし當時に鮮滿視察の途路、別院と修養道場建設の敷地選定の爲めに來連して、相生町の相生由太郎氏の宅に旬日滯在せしことのある思出深き有緣の大陸初入門關の都市である。

△　△

現在の修養道場には、舊知の道友圓山大嶺師が在住あるを以て直に老師の丈室を訪ひ、往事を追懷して二十幾年の山雲海月の情を一夕語り明した。翌日老師の嚮道にて大連神社に詣で、相生由太郎氏の未亡人の閑居を訪れ往年の勞煩を深謝し、故人の思ひ出を語り、故人の展墓を思ひ立ち、同道して墓前に詣で變る姿の相生氏の靈に淨水を手向け、大悲神咒を諷誦して靈位を弔らひ、更に附近に羅列せる石塔の間を甘露門を讀誦して行導せる時に、尤も大なる角塔婆の直立せるあり、是れこそ其の當時吾人の最も印象深き言葉敵きたりし金子雪齋翁の墓標である。

金子翁は其の當時泰東日報の主幹にして、人も知る支那通の國士の風格を備へし鴻儒にして、近代稀に見る毀譽褒貶利害得失を超越せる硬骨の奇人であつた。或日相生氏と倶に翁の寓居を訪れ、談論縱横の間に翁は偶々坐禪の妙諦に就いて批判的の言辭を弄するあり吾人言下に之れを退けて禪門の端的は禪者にして始めて會す、門外の漢たる俗漢の敢て嘴を下す限りにあらずと云へば、翁勃然として此の靑面郞我をして俗漢とは此の何をか云ふと詰め來る。吾人は平然として、千里横行は蟹の本質にして、直言直行は禪僧の本領なり俗漢を指して俗漢と云ふに何の不可あらんと云へば、翁益々激怒し傍らの火鉢に掛けありし沸へ立つ鐵瓶を取つて吾人に向つて擲たんとす。側にありし相生氏は驚いて中に入りて漸く之れを遮ぎり、吾人を促がして歸路に就いた。途中車上に於て相生氏吾人に語るに、困つた事になつた、金子翁の性格として決して此儘では濟まされまい、必ず明朝來つて決鬪を申し込むかも知れませんぞと威嚇された

吾人は笑つて明日の事は明日轉身の一路を見出して可なり、今より持ち苦勞は無用ならむと歸り來つて華胥の人となつた。

果して翌朝未明に激しく門戸を叩く者あり相生氏は吾人の寢所に來り、今門を叩くは必ず金子翁ならん、和尚は會はれますかと云はれた。吾人は靜かに答へて、吾人に會はんと云ふならば會ひますと談話中に、氣短かの金子翁は案內もなく吾人の寢所に來り、何んだ禪僧に似合ぬ朝寢坊だねと云つて吾人の傍らに坐し、時に昨夜の話しでは今日は修養道場の敷地見分に行くとの事なりしが、道場の敷地の選擇は相生君より已れの方が一日の長がある、同行しようかと云はれた。吾人はそれは頗る好都合である。是非御同行を願ふと答へ、然し先生朝食はと問へば未だ喰はぬと。傍らの相生氏は風雲の穩かなるを見て安堵の面を上げ、それでは今に茶粥が出來るであらう、一所に喫却して同行しようと云つて坐を立たれた。勿論道場の敷地選擇は後藤伯の紹介にて、時の滿鐵總裁中村是公氏に會見して同氏より先づ附近の山野を巡見して適當の士

地を選擇せられよ、出來得る限りの便宜を御與へしようとの內諾を得てあつた。朝食後三人連行して各所に道場の敷地を巡見して廻つたことがある。其の後滯連中屢々金子翁に會見して談話を重ねしことあるも、彼の俗漢云云の言に就て毫も觸れしことは無かつた。流石は世に知られたる金子翁、是れ尋常一樣の俗漢にあらずと密かに畏敬の念を拂つたことがある。

▽　△

世に十年經てば一と昔と云ふ諺があるが、二十幾年を經過し來れば變らざるものは背後の靑山と目前の亘海のみにして、其の當時知遇を得し福島總督も、中村總裁も、大塚理事も、末永鐵巖居士も皆な白玉樓中の人となり幽冥境を異にす。白仁長官や、河西博士や、久保田理事は今は何處にあるか其の後の消息を知らず、遷流無常の人世の尋常とは云へ過去を追憶し來れば感慨無量である。

滯連七日、四月十六日筇を奉天に向けた。奉天は當時關東軍司令官の駐屯せられる處である。奉天驛に着けば思ひ懸け無き土屋師夫妻の出迎を受けた。是れは圓山老師より通電ありし爲めである。土屋師は奉天新高町大義寺の貫主にして、吾人が曾て敎義講習所長たりし時代に、臨濟大學の學生にして舊知の人であつた。大義寺は日露戰役の當時に於て哈爾濱にて露軍の爲めに護國の花と散りし沖・横川氏始め、幾多烈士の菩提の爲めに同志の建立されたる義士の寺である。同夜は大義寺に宿泊し、翌十七日浪花通りの東拓支社の關東軍司令部を訪問し、本庄司令官に會見して、先づ滿洲建國の祝辭を呈し、次いで皇軍將士の勞苦に對し、赤心以て感謝の意を表し翌日第二宿舍に本庄司令官の官舍を訪れ、親しく面謁して將軍の健康を祝し、吾人渡滿の本志を披瀝せしに、本庄將軍は繁々吾人の面を見詰め、老師の御誓願は轉た敬服する處なるも何分滿洲は極寒零下三十度以上の土地なり、老師如き老體の能く堪うる處にあらず、北滿地方の巡錫は十月迄になさるが宜しからうと注意された。吾人笑つて、由來禪僧生涯は寒の時は沙梨を寒殺し熱の時は沙梨を熱殺す寒熱の如き敢て心頭に掛くる事なしと云へば本庄將軍は如何に老師が意氣豪なるとも、白隱禪師も「空蟬の身はなきものと思へども雪の降る夜は寒むくこそあれ」と歌はれしにあらずやと云つて笑はれた。吾人も笑つて、其の雪の降る夜はさむうこそあれが沙門の本領

暗中の視力を護れ

「空を制するものは國土を制す」…日本空軍の敵地空爆の成功は、軍の作戰上大きな成果を收めたことは勿論ですが、戰は長期戰です。敵機の來襲もあるべく燈火管制の强化……作業能率低下…など幾多の災害が豫想されます。戰時燈管下にも暗中の視力を護り夜間の作業能能を落さないやうにするには、體內に榮養特に脂溶性ビタミンを充實することが先決で、この目的に旺んに利用されて居るのがハリバです。毎朝二粒、服用にも手數がかゝりません。

ビ本錠には五百粒入がお徳用

を發揮せしむる生命でありますと答へた。

奉天に滯在すること旬日、本庄將軍より鄭國務總理、多門中將、大橋忠一氏等に紹介狀を貰ひ、錫を轉じて國都新京に向つた。新京に着する。驛頭に山內少佐の出迎を受けた。山內少佐は、新京商業學校の配屬將校にして、吾人が奉天滯在中に本庄司令官の官舍にて會見せしことのある人にして、出迎へ受けしは本庄將軍の副官より通信ありし爲なりと聞く同氏の斡旋にて記念公會堂の橫町の藤屋と云へる三等旅舍の一室を借り受け、三箇月餘り滯在した。此の滯在中に國都に於ける當路の諸公並に各方面に從事せらるゝ上下諸士の建國氣分を知悉せん爲めに、或時は料亭に、或時は飲食店に、或時は劇場に、或時は麻雀倶樂部、或時は碁席と所有方面に出入して實驗的踏査をなした。

▽　△

尙國都在住者の眞の人情宗教的信仰等を親しく觀照せん爲めに、夜間鈴を鳴らして新京市內を託鉢して各戶の門頭に乞食して廻つた或る夜の事である。吉野町の某料亭の門內に鈴を振つて這入り玄關を見渡せば、將校用の長靴の羅列せるあり。吾人是れを見て想ひ起す往年西比利亞出兵當時に於て、第一戰に陣頭に立つて所有寒苦と戰ひ、千辛萬苦を嘗め來りし靑年將校が浦鹽に來り、後方司令部にある人々が每夜の宴會に料亭に出入して、詩歌管絃の間に飲酒酣樂しつゝあるを見て、大いに憤激せしため、適法の處分を受けしことありしを追想して、痛感の餘り我れ知らず停留して凝視せる時に、背後より一將校の門內に入り來り、吾人の姿を見るや物貰ひなればと臺所へ行け、乞食坊主の分際で玄關に立つは身の程知らぬ橫着者めと罵倒され、思はず我れに歸り、左の

樓鏤金箔屋儲珍　錦床帳中多如春
窈窕膝下巧言刀　刺殺靑年知幾人

と云へる卽吟一詩を賦せしことがある。

此の間に於て鄭國務總理を訪問し、建國の祝辭を呈し、又王道學者たる總理と我が皇道と互に所信を披陳して所見を交換せしこともあれば、又吉林に行いて多門中將に會見して皇軍將士の勞苦を感謝し、親しく慰問の辭を述べ、次いで將士の爲めに精神修養の講座を試みしこともある。

其の後南嶺の慰靈堂內に草庵を結び、閑居して滿洲事變の礎石となりし將士の靈に朝夕回向し、或日倉本少佐以下の墓邊を淸め靜かに淨水を手向け、左の

追懷昔日奮戰跡　營舍門前多淚痕
柳綠花紅眞面目　薰風吹度盡乾坤

と追悼の香語を供せしこともある。

其の當時の南嶺と今日の南嶺とは天地霄壤の差にして、一步軒界を越れば匪賊の跳梁するあり、爲めに皇軍は出動して隙にあらず、數千の歸順滿軍の駐屯するありて、治安上に於ても頗る危險千萬であつた故に、夜間になれば各戶門を鎖し、通行者も極めて稀れにして、治安維持の爲めに纔かに三十名程の在鄕軍人が南嶺守備の件に當つて居られた故に、夜間の通行者は辻々の曲り角にて一々誰何され若し答へざれば發砲せらるゝ狀況にして、日暮れて南嶺より新京に歸る途中にて遭難せし者も屢々あり、或る若き婦人は途中に於て慘殺されしこともあつた。是れに依りて一般

の狀況は推して知るべきで、是等も今日では總てが過去の夢と化し去つた。斯くなりしも皆是れ我が皇威の普及せるものにして、皇國の民たるものは、皇恩の底知れぬ深さを忘れてはならぬことである。

▽　△

昭和八年の元旦は南嶺に於て迎へた。年々歳々花相似歳々年々人不同で、歳を閲すること纔に一歳、昭和七年元旦とは吾人の境遇にも天地懸隔の開きがあつた。除夜の挨拶に來るものも無ければ年頭の禮者も無い、只空しく自ら煖爐を焚いて茶を點じるのである。其の時の除夜の感想に

歳月如流今已窮　年々此夕惜相同
通宵獨坐思無邪　只待爐邊起曉風

吟じ終つて顧みて漏刻を見れば、丁度零時であつた。去れど百八の鐘聲の聞こゆるなく寂々零々である。除ろに起つた。面を洗ひ口を清めて衣を改め大悲圓滿無礙鷲咒を諷誦し、謹みて東方皇居に向つて九拜し、今上天皇陛下の聖躬萬歳萬々歳を祝筵し奉り、爐邊に坐して煖爐の上に沸え立つ白湯を以て茶を點じ、先づ一碗を東方皇居の方へ獻じ奉り、一碗を取つて喫却し、何心なく仰いで窓を眺むれば、寒月の皓々とし照すあり。思ひ出すは往年良寛が越後の草庵に閑居せし時に熟睡の中、賊來つて只一枚の掛蒲團を持ち去る。良寛更に驚く色なく却て熟睡中故、持ち去るに便なりしならむと喜びの色を以て窓を眺め、明月の清光を見て詠みし句に「盜人の取り殘したる窓の月」の名吟昔日の良寛と今の我れ倶に禪者の流れを汲む一所不住の沙門、凡聖の隔て暫く措く其の境地に更に變りなし。富士の高根を照すも月なれば、賤が伏屋を照すも月にして、月に變りは更にない。分け隔て無き乾坤一德の表現にして變らざるものは天地自然の大道、即ち神ながらの道であると深く感銘し机上の料紙に

元是無爲閑道人　新京雪裡又迎春
天涯破屋誰相伴　寒月清光第一賓

と新年初頭の偶吟を書した。是れ吾人が榮華の夢より目覺めて、三界無庵の沙門の本然の姿に歸り、天涯孤客となつての初めての感想である。

（筆者は元臨濟宗大學々長）

體力強化
疲勞恢復
胃腸強化
神經痛
脚氣
強力メタボリン錠は大人一日のビタミンB1必要量一ミリグラムを僅か一日二錠で補給します
最強力ビタミンB1製劑（一錠中ビタミンB1含有量〇・五ミリグラム）
強力メタボリン錠

寫眞近事

建國十周年慶祝興亞國民動員大會は五月十八日より行はれた野營、二十日の動員演習、廿一日の式典並に行進、などの大きな行事を中心として、極めて雄大な構想のもとに木の芽立ちそめた國都一帶に展開された。そしてこの大會に對し、一般寫眞隊も動員の形式をもつて十數名が參加せしめられ、それぞれ寔に眞摯な態度をもつて與へられたポストにおいて擔當部面の撮影にあたつてゐることは、實に涙ぐましいほどの感激をおぼゆる。自分がこの樣に感ずることは、あるひは誇大に過ぎ、時代の趨勢をわきまへざるものと言はれるかも知れぬが、美しい精神はあくまで美しいのである。

寫眞家が國家的行事に對して動員せられるのに金錢的報酬を望むことは勿論ない。併しその自己の手になる作品、時に寫眞家の場合はその厚板にたいしては限りなき愛着をもつものである。しかるに今回はその凡てをとりあげられて尙欣然參加してゐるのである。この氣持は全く技能を以て國家翼賛にはせ參ずるものであり、前線兵士の義勇奉公の氣持に相通ずる貴いものと稱さねばならない。

本執筆中いまだ大會は終つて居らないので、その成果については判らないが、相當を期待出來ると思ふ。

それからこの種の行事においてよく問題になることであり、また本大會においても注意をうけた所であるが、寫眞がとかく不規律な態度、服裝などのために會場の空氣をみだすといふことである。この點はたしかにうなづける。本大會においてもなかつたとはいへない。但し自分の見たかぎり、前記の動員された寫眞家の中にはこれに該當する人は居なかつたことを誇りとする。寫眞は人格のあらはれである。時に現在の斯界は、寫眞家の眞善美を綜合した教養の向上を先決の基礎的問題とする。從來のカメラマンを下劣なものとする一般社界の通念を生ぜしめた責任の大部は、カメラマン自身にあつたことを考ふべきである。

○　○

建國十周年慶祝光輝滿洲展は、五月十六日より一週間新京寶山に開催された。展示は寫眞を大部分とし、これに漫畫、圖表をあしらひ、構成も美しく會場のスペースのとり方もあの場所としては適當であつたとおもふ。きはめて熟心な構成擔當者の努力がうかがはれるのには頭がさがる。たゞ難をいへば寫眞があまりに畫面構成上の取材としてのみあつかはれすぎはしなかつたか。寫眞はあくまで實物を再現してこれによつて看者を納得せしめることが使命であつて、たゞ氣分を醸成せしめるために繪畫的にのみあつかはれたのでは空虛である。本展に於て說明文が極力省略されてゐて、その意圖は結構であるが、說明不足になつて終つたのでは意味がない。實際を見せつけられねば納得することのない滿系に對して、何時、何處の何、と克明な說明のないかぎり寫眞も畢竟筆であがいた畫に等しい。

（加持正範）

鍬の文化と犂(からすき)の文化

薗村光雄

ボグダノフに依れば「最初の農具は先端を削つた棒であつて、それで地面に種子を入れる穴を穿つた」と云つてゐるが、この「掘り棒」は最も原始的な自然發生的な農具であることは誰しも首肯し得る所であらう。現にマレー土人、ニューギニア土人、オーストラリヤ土人、南アフリカ土人の樣な極めて原始農耕を營む未開土人間には今以てこの「掘り棒」が用ひられてゐると云ふ。北海道のアイヌや臺灣の土人も「掘り棒」やそれより幾何も進步してゐない鹿の角を最近まで農耕に用ひてゐた。

日本に於ても古文獻にクシ又はフクシの語がある。フクシは即ち圃串(ホグシ)であると解されてゐる。

この圃串が更に石器時代に入つて石鍬となつたのであつて、石鍬又は鍬形石器は日本に於ては石器時代の遺物包有層から見出される。尚木製「掘り棒」から石鍬に發達する過程に於て海岸地方にては貝殼が土掘り具に利用されたことも想像し得る所である。

◇

かくて時の經過するにつれ、大陸文化は次第に東漸し砂鐵の發見は遂に日本列島の文化を石器文化から鐵器文化へ押し揚げたのである。鐵が出雲を中心として備中、備後、安藝、石見、伯耆、常陸、播磨等から產出されたことは古風土記に見え、各種の鐵製品が造られ、天孫種族の集團移民は次第に東征し、生產性の一層大なる鐵製利器を得て農業は支配的生產部門に登場したのである。

最も古く「くわ」と云ふ言葉の現はれたのは古事記仁德天皇の項にある「つぎねふ、山(やま)代(しろ)女(め)のこくわもち、うちし大根(おほね)云々」の長歌のこくわであるとされてゐる。こくわは即ち木鍬である。又「くわ」の語原は「鏵」の音から來たのであると云ふ說と「喰ふ齒」から轉化したと云ふ說とあつて何れとも判然としないが、前者の說の方が正しくはないかと思はれる。「鏵」は鍬を意味する文字であるからである。然し支那、滿洲には眞の日本の鍬に當る農具は無く、之に類するものがあつても、鍬と云ふ字を用ひず、「钁」と云ふ字を當てる。「钁」は「唐鍬」で滿洲の「鎬頭」に當る。

唐鍬は云ふまでもなく唐から來た鍬の意味で、日本の鍬と異なり一般に刃部は凡て鐵製であり厚く重く細長であり、岩乘で土工用又は掘り起しに適してゐる。之に反し日本の鍬は一般に刃の幅廣く薄く多くは風呂と稱する木部があり、この風呂に鐵製の刃先が嵌つてゐる。又其重量も割合輕く、日本人の器用なる動作に依り耕起のみならず耙碎、中耕、除草、根切等の各種の作業に輕快に使用し得る構造を有してゐる。

◇

又西歐諸國に於ても鍬に類する農具は無い。之を以て見れば鍬は日本獨自の農具であり、日本の國民性並に社會的事情及農業事情に最も適する農具であると云ふことが出來る。即ち耕地の割合に人口が多く一戸當りの耕地が狹少であり且佛教の爲に養畜の發達が遲れ且つ畜力を利用せんとする傾向も農業規模の小なる爲多分に抑制せられて來たことは爭へない。それ故に小規模且集約的農業に適する鍬が早くより發達し日本農業に於て重要な役割を演じて來たのであつて、鍬に依り日本農業が生れ、それ故に日本文化は鍬の中から生れて來たと言つても過言ではないと思ふ。故に鍬は農具の中でも最も重要視され「夫鍬は和漢とも種植第一の要具にして百穀はいふに及ばず、人世日用の菜蔬に至る迄、此具なくしてはつちかふことあたはず、然らば稼穡の基、貴賤ともに人命のあづかる所なれば、何ぞ十玉夜光と日を同じくしていふべけんや、實に國家の大寶、億兆の司命とも云ふべし、世の人やゝもすれば、農はいやしき業にして農具は瓦礫とひとしくいやしめり、かゝる人はいふもさらなり、辨へある人誰か是を仰がざらん哉」と大藏永常が「農具便利論」の中に鍬を禮讃し、鍬の重要性を力說してゐる。

大藏永常は德川時代の農學者であるが、彼が憤慨した程、當時は農業が賤まれ、農具が瓦礫に等しく看做されたか、どうかは疑問であるが、さうした傾向のあつたことは確であらう。然し農具の如きも日本では古代より非常に尊重され、尊き方の御名にも農具の名が用ひられてゐる。例へば懿德天皇の御名を大倭日子鉏友命(オヤマトヒコスキトモノミコト)と申上げ、垂仁天皇の御子に豐鍬入姫命(トヨスキイリヒメノミコト)と申上げる方のあつたことは周知のことであり、東大寺正倉院に所藏されてゐる有名なる「子(ね)の日(ひ)の鋤(すき)」は孝謙天皇が天平寶字二年七月の子日に農神を祭る時用ひられた儀式用の鋤である。又鍬を官吏の祿として給したことが「令義解」に記されてゐる。又鍬形の兜(かぶと)等あるを以て見ても鍬は日本の各階級を通じ尊重されたことが窺はれる。

◇

橘南谿の「東遊記」に「蝦夷島(北海道)は文物いまだひらけず、物事質朴のみにして、唐日本の大昔の如し、金銀米錢といふものもなく、綾羅錦繡といふものもなし、唯むかし

より持傳へたる寶物あり、鍬先といふ、金銭にて作りたる兜の鍬形のやうなるものなり（中略）此鍬先に甚神靈ありて病氣或は災難などある時に是に祈請すれば甚奇特ありてしるしを得る事なり、故に此鍬先を持傳へたる者は島中の者より尊信して、自然に其所の頭のやうに成り居る事とぞ」とあつて、こゝでは鍬は神靈となつてゐる。又諸鍬神社等のあるを以て見ても鍬は神としても祭られてゐることが判る。

以上の如く鍬は農事のみならず日本國民の諸相に滲透し其文化に大なる影響を及ぼしてゐる。

◇

鍬は日本に發達した唯一無二の農具であり其國民性たる勤勞精神の表徴である。今後如何なる精巧なる農具が現はれ様とも鍬は鍬として何處までも尊重されると同時に鍬の精神は飽までも之を堅持されなければならぬ。

加藤完治先生が鍬鎌農業を力說せられるのも亦この精神に外ならぬ。日本農道の理念たる勤勞精神を忘却するに於ては如何にプラウを用ひカルチベーターを使ふともそれは單に歐米者流の淺薄なる個人主義的農業の糟粕を嘗めるに過ぎない。開拓民、開拓關係者はこの鍬の精神を忘れず。否これを高揚してこそ初めて眞に、開拓事業の達成が期せられるのである。

◇

犂は鍬と同樣、耕墾器具ではあるが、鍬は人力を以て地に打込み土を起すのであるが、犂は畜力に依り牽引して土を起す構造を有してゐる。更に大型のものは機械力例へばトラクターに依り牽引し能率が極めて大であるから廣大なる耕地を有する北米、ソ聯、カナダ等に於ては之等トラクター用犂が數多く用ひられてゐる。

犂の種類は極めて多く各々其土地に發達した地方的のもの例へば日本の和犂、滿洲の犂(リー)、杖(ジャン)、朝鮮の朱鉬(ザンキ)、臺灣の犁(ロエ)等の如きものがあり和犂も亦之を分類すれば幾種かに分れる。

洋犂即ちプラウは最も進步した型態構造を有してゐるものであるが、洋犂の種類に至つては極めて多岐多端到底、枚擧するに遑がない程である。

かくの如く種々雜多なる犂の根元も亦鍬と同樣「掘り棒」ではあるが、その後の發達經路は地を引いて土を起す原理に基き自ら鍬と異なつてゐる。然し其の起原も史實に徵するに東亞に於けるものと西歐に於けるものと大別して考へられる。即ち東亞に於ては太古支那の神農民の耒耜(うし)に始まると云はれ、西歐に於ては古代エヂプトの「く」の字形の自然木又は鹿の角なりと解されてゐる。

◇

耒耜に就ては古文獻に「神農氏削木爲耜。揉木爲耒」とあるを見れば耒耜は木製の刃（耜）に木製の柄（耒）を附けたもので其當時役畜を尙用ひなかつたことが明であるから、現在の鋤の如き手用耕墾器であつて眞の意味の犂ではない。役畜に依り犂を牽引せしめたのはズット後世で殷周の時代であるとされてゐる。

犂の字を分解すれば判る通り牛に依り土を

利(きりひら)く意味より來たもので犂を牽引するに用ひた役畜は支那では最初牛であつたことが想像される。又すきの語原は淸める即ち淸(スガ)から轉じたものであると云はれてゐる。即ち日本の鋤は古(いにしへ)田を耕すのみでなく神の齋場を造る時、地の穢を去る爲に用ひたからであると云ふのである。

又犂を鋤と區別する爲、からすきと云ふことがある。これは犂が支那から日本へ將來されたことを明に物語つてゐるものである。

◇

西歐に於ては古代エヂプトに於て既に牛耕が初まつてゐたと云ふことはエヂプト文學及び古墳に於ける壁畫等に依り想像し得る所である。ギリシヤに於ても西暦紀元前二三百年頃より犂が用ひられギリシヤの第一回植民たるマグナ・グレジヤ及びシシクーにて使用されたと云はれる。

又ローマ時代に於ても犂は農具として最も重きを置かれ、其當時既に粘質土用と輕鬆土用との區別が出來てゐたと云ひ、當時の農具專門家は犂の各部を夫々プリス（犂身）テモ（犂轅）スチバ（犂柄）デンタレス（鑱床）ロメル（犂鑱）ドラウト（引棒）オウラ（鐴）クルレル（犂刀）等と名づけてゐる。

◇

英國に於ては八世紀頃、既に裝輪輔が現はれてゐることが當時の風俗畫に依つて窺はれる。其後犂は各地方に於て夫々獨自の發達をしたが、地方に依つては舊態依然たるまゝ推移した例も多い。例へば十八世紀頃に至つてもマレムス國にてはローマ時代の犂に類したものを使用し、ポーランド、スエーデン、スペイン、イタリー、フランス等にても尙極めて原始型の犂が使用されてゐたのであつて其型態は滿洲の犂丈と相遠からざるものであつて、木部を主とし鑱部に僅に鐵を使用してゐた程度に過ぎないものであつた。

又北米に於ても其開拓當初の犂はウッド・プラウと稱される犂丈に類似の極めて不恰好のもので時にはホッグプラウ即ち豚型犂などと呼ばれるものなどがあつたのである。

◇

これら西歐式の犂が近代的色彩を帶びて來たのは極めて最近の事であつて、之を理論的に最初に研究したのはスコットランドのゼームス・スモールであつて西歷一七六四年頃機械工學的に設計して刃部を鑄鐵製とし、後更に全體を鐵製としホワードやランソムは製作工場を建設して一八五〇年頃盛に鐵製犂を製造した。米國に於ても一七九七年ニューボルドが其主要部を鐵製として特許を得、其後ジョン・レーンやジョンデーヤ等も鋼鐵製の犂に就き特許を得て同じく一八五〇年頃工場製産を初めてゐる。ドイツに於ても鐵製犂が工業的に製作され初めたのは矢張一八五〇年頃であつて、今日見るがごときプラウの型態を備へて來たのは、僅々百年に滿たない以前である。

◇

洋犂は其後各國に於て漸次發達した。今日最も製作の盛んなる國は北米、獨逸、英國、ソ

聯、佛蘭西、伊太利等であつて、北米、獨逸、英國等は戰前迄は國內の需要を滿すのみならず重要輸出品として國外に多量輸出してゐたのである。北米の一農具會社の製作する洋犂の種類は百種類の多きに達し各國の農業事情に應じ各々其適するものを輸出してゐたのである。

かくの如く洋犂の製作は近代工業として發達し、其農業に及ぼせる影響も極めて甚大ではあるが、又其製作事業は重工業の一部門として重大なる地位を占めてゐるのである。

獨逸のクルップ工場の如きは平時は農具、戰時は兵器工場として活躍することは有名なことであるが、洋犂を根幹とする近代農具が兵器と並んで製作されると云ふことは決して偶然ではなく兵農兩全を農具を通じて完うしてゐると考へれば甚だ意義が深い。又戰時に於ける食糧が彈丸同樣の重要なる意味を有することを思へば食糧生產用具たる農具の重要性も自ら明であらう。從つて凡ゆる農具の基本となる洋犂の持つ役割も亦重大なるものがあることが首肯される所以である。

今日のアメリカの文化は其農業の機械化に依り農村人口を都會に送つたが爲に築かれたと云はれてゐる。又英國が其本國に必要なきに拘らず農具製作工業の盛んなるは之を其植民地に送り其農業を發達せしめ之を國力增進の基としたのである。

◇

今や滿洲國は農產增殖、勞働力强化、農法改善の立場より所謂プラウ農法への轉換が企圖され、洋犂の使用が先づ開拓地に於て漸次盛となりつゝある。將來之が普及の曉には其農業は全く變貌し、滿洲農業に一大革命が將　來されるものと豫想される。從つて單なる「犂」の及ぼす一國の產業、經濟、文化の諸相への影響も亦大なりと云ふべきである。

然し如何に優秀なる農具なりと雖も之を使用する者がその精神力に於て缺くる所があつたならば、何等の用もなさないのである。この事は大東亞戰爭に於て皇軍勇士の精神力の前には敵國の如何に優秀なる機械力も何の價値なきものと化し去るのと同樣である。

洋犂は鍬に比して極めて優秀なる農具なることは云ふまでもない。然し鍬の勤勞精神を忘却するに於てはこの文明の利器も未開土人の「掘り棒」に等しきものと化し去らぬとも限らないのである。

要は日本的勤勞的なる鍬の精神を堅持して能率的科學的なる犂の技術を應用することに依り開拓增產に挺身することが肝要である。

（筆者は公主嶺農事試驗場農業機械科長）

天兵の戈

天野耿彦

大みいつたゆたふあなた天兵の戈のゆらめき雲に映らふ
おしたふしのりこえてゆく曉(あけ)がたのきほひや天(あめ)の命(めい)のまにまに
天兵はげにあやまたず次々に屠る砦(とりで)や私慾の砦
大みいつひろらにわたるみんなみや西のはたてに天兵駐す
ぎりぎりの際(きは)に發せし手力(たぢから)は天地に光漲らししか
ざんぶりと水をかぶれるわが艦(ふね)のへさきや朝の寢覺に思ふ
砲彈に吊りあげられてばたばたと落つる水より激しきはなく
戰は捷ちはなてりと思ふだに心象すでに水より淋し
遠山のなだりに透きてつらなれる松ともならむ命果てなば
かはたれの道にそひたる川の面(も)をかはせみゆくと老(おい)の人指(さ)す

滿洲文化映畫の方向（座談會）

日時　康德九年五月十三日午後五時
場所　新京特別市「中銀クラブ」

―出席者―

關東軍報道部	長谷川中佐
弘報處映畫班長	木津安五
滿映啓民映畫部長	赤嶺義臣
弘報處映畫班	國谷公光
滿映啓民映畫部次長	木村莊十二
滿映啓民映畫部監督	芥川光藏
滿映配給部長	池田桑作
作家	北小路功光
作家	楳本捨三
滿映宣傳部	津村芳夫
本社側	石河潔・野川邦子

石河　御挨拶を申上げます。本日は御多用中にも拘はりませず、御出席下さいまして、洵に有難うございます。此の度、軍及び弘報處の推薦になりました「遥しき草原」、之れを一つの課題に置きまして、滿洲に於ける文化映畫の重要性、將來の行き方と云ふ事に就きまして種々と皆樣から御意見を承りたいと存じます。映畫と云ふものゝ民衆に及ぼす影響、力と云ふものは内に外に絕大なものでありまして、中にも文化映畫の使命は大きな指導力であり、內地に於きましても種々と文化映畫は作られて居ります が、一體に高度なるものに乏しく、また滿洲に於てはこれをより必要としながら企業性に乏しい故からかさう大したものも現はれなかつたのでありますが、國策の上からも今後滿洲映畫界として、此の方に大いに力を注がれることゝ思ひますので、お集り願ひました諸權威により貴重なる示唆をお洩し願ひたいと思ふのであります。では文化映畫の推進すべき方向について一つ忌憚のない御意見を承りたいのですが、先づ「遥しき草原」の試寫を御覽になつたらうと思ひますので、はじめ之れに對しての御批評を北小路さんからお願ひします。

軍最初の推薦映畫

北小路　どうも始めに口を切りますので堅くなりましていけませんが、映畫は私は好きで見せて頂くだけでして……よくわかりませんが。文化映畫と云ひましても、何が文化映畫であるかさへ分らないんですが、「遥しき草原」に就きまして唯感じだけを申上げようと思ひます。先づ滿洲で作られた物の中で、一番强い感じを受けたやうな氣が致します。あの映畫の對象が實に大きく、それを御取上げになる御苦心は大變だつたらうと思ひますが、あの廣大な對象の中の一木一草でさへ又、皆な一つの感じを持つてゐないものはない。とにかく結構な寫眞を見せて頂いたと存じます。あの記錄映畫の中でもう一つ感じました事は滿洲ではあれ以上望めない程の良い音樂が入つて居つたことで、作曲者紙恭輔氏のよい仕事を聽かして頂いたことは、有難かつたと思ひます。

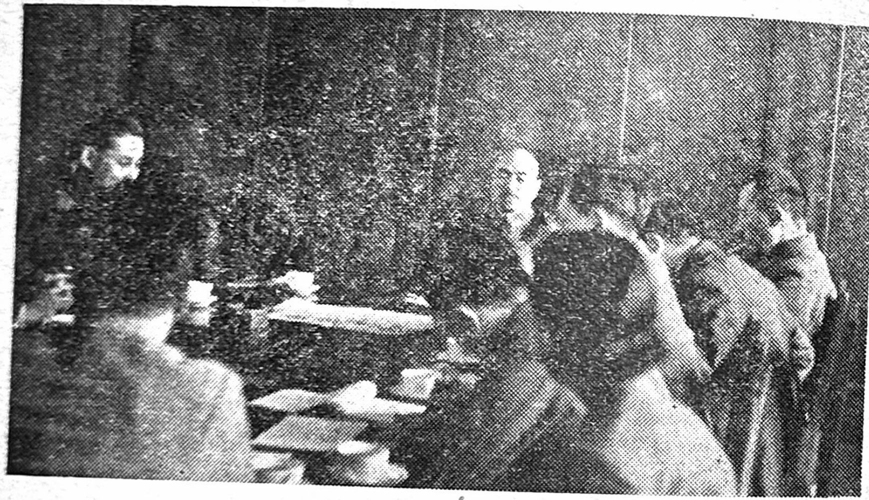
石河　構成、あるひはストーリーとしてはどうですか楳本さん。

楳本　さあ―どうも映畫の方は素人だから、餘りはつきりした意見はないんですが、音樂の批評家の北小路君が音樂を褒められた後で可笑しいんですが、まづ第一は音樂だと思ひましたね、音樂は非常に感動する立派な音樂だつたと思ひます。構成といふ點で少々疑問をもつたが、私が一番感銘をうけたのは、終りの方でしたが、灼けつくやうな白い砂の上に鐵片が散つてゐる……そのシーンにダブつて……可憐な野花が咲いてゐる。すると極く靜かにオルガンで「海行かば……」の伴奏が入つて來る。あのシーンはいゝと思ひました。たゞ全體に寫眞の上りが汚い。どうしてもつとあんなに美しい風物が美しくあがらないか……。まあ僕の印象はそんなものですが……。一寸今迄には滿洲ではあゝ云ふ立派な映畫は見られなかつたですね。全體の風景とか、あゝ云ふ「遥しき草原」から來る壓迫感……新戰場の感傷といつたやうなもの…が。戰場の場面なんか胸を打つものがありましたね。

石河　長さはどの位ですか。

芥川　約三千五百です。

楳本　一寸芥川さんに御伺ひしたかつたのは初めに停戰協定のシーンが出て來る、それから戰爭の場面になりますね。それから停戰して、滿蒙國境確定ですか……。あすこが非常に唐突な感じがしたんです。やはり月並みかも知れませんが、戰爭が初めにあつて、それからあゝなつた方が分りよいと思つたんですが……。



芥川　實は私共に命ぜられましたのは、斯う云ふ重大な事業ですから、その記錄を命ぜられた譯です。私の第一の目的は今度の國境確定事業は充分に記錄に取つて置きたい、と同時に初めから之れを文化映畫として公開しても宜いと云ふ御了解を得て置きましたので、第一に重要な記錄だからミスのないやうな本當の記錄をする。又軍事的其他の點から申しましても、非公開のものであらうと思つて、御了解を得られる限り、如何なる場所でも撮つて歸りました。その中から各關係機關の御許しを得た範圍內で公開の文化映畫を作る、斯う云ふやうな原則の下に撮影したんです。實は此處を出發する迄にその現地作業がどう行はれるかと云ふことが承知出來なかつた譯です。そして戾つてから委員各位の御指示を受けた譯で、初めから斯う云ふ構想でと云ふことを頭に描くことが出來なかつたんです。それですから、歸つて順序を追ひまして、地理的に間違ひのないやうにはつきりさせ、相當の尺數のものを殘しました。その中から御許しを得まして、發表するものだけの場面を頂いた譯です。そこで之れをどう構成すべき

か。結局今の御質問に對して申上げたいのですが、ノモンハン事件と云ふものは吾々の頭の中に充分入つてゐる。ノモンハン事件と云ふものの當時の實寫はあの場合には入れる必要はなからう、實を申しますとあれは昔のフヰルムを用ひたやうな爲めに邪道かも分りませんが、然し一應今度の作業とは離るべからざるものであるから、想ひ出して貰ひたいと云ふ意味でした。それで一體何處に入れるかと云ふことになりまして、繪としての迫力と云ふものを考へますと、これは劇物ではない、情的なものがないので中中長くは引張つて行けない。まあ三十分か四十分は我慢が行かう、さう云ふ考へから三卷から五卷位です。それで愈々標識の場所が決定した、その土地は忘れてならないと云ふあすこへやまを持つて來た考へです。

石河 木村さん、一つ專門のお立場から…。

木村 私が申上げるのは可笑しいが、私としては此の「逞しき草原」は芥川さんの今迄の作品を拜見して、此の寫眞のラッシュを見ました時に、當然これだけのものが出來ると云ふ事は確信を持つてゐた譯です。大體非常に大きなテーマ、これを十分に芥川さんが把握されて周到な準備、具體的な心構へを十分なすつて御採りになつたこと、芥川さんの今迄の作品を拜見して感ぜられる非常に素直な、單純なテーマの表現の良さと、これを飽くまで追求されたと云ふ事が、此の寫眞が非常に大きな成功をして居るところぢやないかと思ひます。それから先程も出ましたが、音樂の良さ、私も昔から紙恭輔君と一緒に仕事をした關係上よく存じて居りますが、今度のは音樂家と演出家とが非常に緊密な共同とによつて生れて來たと云ふ點で、つまりお互が融合して居ると云ふ點で、より宜い效果を發揮したのではないかと思ひます。又構成に就ても非常に的確な組立て方だと思ひましたし、異議がなかつた譯です。ですからラッシュの時も、之れ位の程度にはなると思つてゐましたが、やはり結構で、非常に成功して居ると思ひます。當然此の寫眞は滿映最初の關東軍、弘報處の御推薦になる資格があると思ひました。これからは斯う云ふ傾向の寫眞を出來るだけ澤山作つて頂きたいと思ひます。

純記錄と音樂效果

北小路 勿論あの寫眞の裏には國境を定めるといふ非常な歷史的な裏づけがある譯です。それをしばらく別といたしまして、見た眼だけで申しますと、斯う云ふこの平たい平原ですから、橫の線ばかりです。地平線が實に廣い。皆な山でもなんでも地平に近い線です。それがあの國境を表す石の組立て作業をする、平たい中にあの垂直の形が出て來た時には、實に奇麗だと思ひました。平たいもの許りのところに、例へば碑でございましたか、縱のものがアクセントを附けるごとく出て來たのは、視覺が慰められて、非常に奇麗でした。たゞ惜しいことにあれが天然色でない。天然色だつたらもつと奇麗だと思ひますね。色が出てゐましたら實に素晴らしいものだと想像してゐました。あの繪を見て天然色は大切だと思ひました。

楳本 僕は現在の映畫の力では天然色には反對だな。アメリカ位技術的に進んでゐた映畫界でも天然色となると全然繪が死んでしまふ。どういふものか繪がうそになりますね。やつぱり映畫は色彩が完璧になるまでは黑白の方が眞實性が多いと思ふな。

石河 ノモンハンにおけるエピソードを製作者の芥川さんから一つ。

芥川 一體映畫人と云ふものは、撮影に掛りますのに、苦勞と云ふものは全然ございません。兎に角樂しむと云ふ氣分だけと云ふのが實情でございます。普通に云つてあの旅行は樂な旅行ではございませんが、委員達や兵隊諸君と一緒に寢起きを致しまして、實に愉快でした。多分苦心と云ふのはさう云ふ意味でなく、撮影上の苦心〻云ふ事だらうと思ひますが、その點では實に心配致しました。國家的な記錄として

凝るものですから失敗てはならない、それと實は申合せがありまして、向ふからも撮影する、さうなると向ふの人達にも負けちやいかんと思ひまして、その點では相當張切つて參りました。綠一色、紺碧の空一色、そこへ午後になりますと入道雲がむく〳〵と湧きます。さう云ふ土地柄なんですが、どう云ふ加減か雨天が續きました。さう云ふ中でフヰルターの問題には種々と研究の結果二種類用ひました。一體私は今迄記錄映畫を作りましたが、私の主義と致しまして私は向ふさんの御承諾を願へれば現物を使ひます。例へばあの中の兩國人が杭を打つ、あのアップ、深刻な顏、兩方共實に一生懸命なんですね。ところがあの日は纏まらなかつた。向ふと日本の測定が三米違つたんです。あの大草原で一里や二里はどつちでもいゝんぢやないかと私なんか考へましたが、三米を爭ふ、實際頭が下がりました。然し翌日は日本側の通りに杭が立ちました。それが前日のあの顏ですね。さう云ふ本當の感情を摑む、そこいらにキヤメラ諸君の苦勞はあつたらうと思ひます。それから北小路さんのお話のやうに一望平原で、橫の線が何も無い、そこで水平線を何處に持つて行つたら宜いかと云ふことです。ハルハ河のあの鐵條網なんかもその意味で用ひました。そんなところに苦勞はありました。

石河 期間はどれ位。

芥川 期間は六月二十五日から八月十五日迄ですが、途中約二十日近く標識が立ちます迄歸りました。純記錄の方には相當廣範圍に亙つて撮つて居ります。

赤嶺 實は芥川さんから之れを一つ文化映畫に撮らして貰ひたいと强つての申出でがありました。けれども當時私共は、文化映畫と云ふ事は、實は考へてゐなかつたが、芥川さんが非常に熱を持つて此の意義深い作業を國民にはつきりと傳へたいと希望されるので、それではやらせると云ふ事になつたんです。あの繪の內容は別として、あれだけの繪を作つたと云ふ事は、私は芥川さんの精魂をぶち込んだ努力の結晶だと考へてゐます。その撮影期間に於ける芥川さんは外から見ると氣狂ひ見たいな風に見えて、實にその熱心さには動かされるものがありました。第一にあの現地へ行く迄には短期間の間にノモンハンに關する資料を整理して、地圖なんかも軍用のもの以上の地圖を拵へ、萬端の準備を整へてゐた。私は現地へ行かないので分りませんが、歸つてからの報告を聽きますと、芥川さんは相當の年配になられて居りますのに、若いキヤメラの助手邊りも及ばない元氣さであの酷熱の草原を縱橫に走り廻りキヤメラまで擔ぎ廻つたさうで若いスタフの連中も此の熱意に感激して途中病人も出たのですがたうとう押し通して病氣を征服してしまつたのです。

又或る時はラッシュの試寫後軍の報道部長の所で三時頃から夜の九時頃迄喧嘩腰で部長とラッシュを見た後の檢討をやつて居ると云ふ風で、非常に打たれるものがありました。又音樂にしても作曲者の紙恭輔と云ふ人は芥川さんとは名コンビでよく氣持があつて居る。紙君もあれには非常に愉快に仕事をやつて居りました。作曲の後でも芥川さんの仕事の中で此度程精魂をぶち込んでやつたことはないと云つて居りました。それは芥川氏の熱に動かされたるとノモンハンに散つた英靈に呼ばれてと云つてゐました。

文化映畫の草分け

石河 「逞しき草原」を推薦されました理由に就きまして長谷川中佐殿から御話を。

長谷川 公けの理由と云ふ事に就ては、部長が種々研究されて、關東軍の總意としてなされたのであります。その際どう云ふ意圖か、表向きの事は存じません。恐らく此のノモンハン事件と云ふものが、相當誤解されて居る、隱蔽されて居るのではないかと云ふ未だにさう云ふ危惧があつた。あの結末に就ても前の關係から影を殘して、陰影を殘して國民が理解するのではな

いかと云ふ心配を多分に持つて居つた、ところがそれを種々な流布や、押附けがましい宣傳や文書等を以て、有形と云ふ手を用ひずして難しかつた國境確定と云ふものを、あれ程長く懸つた委員會を……諸君も映畫で御覧になつたやうに、始まつてから兩方が相當眞劍に一寸の土地もお互が主張を枉げないと云ふ意氣込みでやつたからゞ、堂々とそれもすら〳〵國民に分らせる。單にそれだけでも私は此の映畫は國民に對する任務と云ふものを十二分に果して居ると思ひます。さう云ふ意味でこれが映畫としては假に水準以下のものであつても、問題はないんで、軍としては推薦したのだらうと私は想像します。即ち此の目的が十二分に達せられて居ると云ふので推薦されたらうと思ひます。それから私個人として見た感じですが、ハルハ河を見た時にハルハ河が何時も左から右に流れて居つたやうな氣がするが、右から左に流れる所があつたら非常に宜かつたと思ふ。それから戰場を弔ふところから激戰の所が出て、一寸パンして、國境の丘の上ですね、それが出たら途中から切れて戰場からパンして國境が出て來た。勿論戰場が非常に近く、國境で激戰があつたことの意味でせうが、出來れば相當距離が逆にあつたらい丶と思ひましたね。尤も私の見方が間違つてゐたかどうか……。

芥川　さうでございました。あすこはオーヴアーラップ致しましたのではつきり距離が……。オーヴアーラップで兩方のフヰルムを五尺づ丶潰さなければならないので、不幸にして餘り長いカットがないので、さう云ふ無理が出ましたんです。フヰルムが無いためにあ丶云ふ無理が……。どうも甚だ遺憾に存じます。

長谷川　何とか考へ方があると思ひますがね。結局激戰のあつた所はどつちへ入つたかと云ふことに疑問を起すやうなことになると思ふんですね。國境と戰場とが……。

芥川　さう云ふ無理が數々あると思ひます。さう云ふ點で國民に誤解を與へるやうなことがありましたら、非常に遺憾でございます。

長谷川　たゞその點だけに就て細かい事を申上げたんです。

芥川　兩國の者はお互に證明書を持つて居りました。それでも河を越えて向ふに入ることは、向ふでも厭がります。

長谷川　極めて小さい事ですがね。

芥川　小さな事でも大きな結果を生じますので……。

石河　弘報處の立場から推薦された御說明を。

木津　推薦した理由ですが、處長が見える筈でしたが、都合がありまして出られませんので、私から私が處長に推薦方を上申した點を簡單に申上げます。先づ結論から申しますと、寫眞の構想が非常に優秀である。非常に妙味を得て居る。それとカメラの狙ひが非常に適切と云ふか、表現の言葉が固いが、上手に撮つて居ると云ふやうな所が非常に大きな所の理由であります。それに迫眞力がある。それから此の滿映が出來まして六年になりますが、今迄の文化映畫と云ふもの丶跡を見ますと、大體平べつたい映畫が非常に多い。迫眞性に乏しい、だから今迄も何とかして滿映の作品に對して推薦したいと期待しては居つたが、……殊に機會のある每に種々と注意をしたり、指導すると云ふこともやつて來ました。又日本から來る文化映畫でも、全部とは云はんが、中には慊らんものも隨分ある、最近は餘程好くはなつたが、今度の寫眞なんかその點、國民に對して認識させなければならない內容を盛つたものとして、い丶と思ひましたし、又カメラの技術に依つて、凡ゆる角度から撮つて居る。それも非常に巧みな構成に依つてやつて居る。兎も角國民の指導と全く所期の目的をより以上に達して居ると云ふことが、私共映畫を見ました時に感じたのであります。これこそ弘報處として一番最初に推薦すべき所の映畫であると處長に報告したのであります。ですから斯る點が推薦の主なる理由になつたので

ないかと思ひます。それから此の音樂ですが、私は何も歐米の映畫を眞似るとか、模倣するとか申しませぬが、此の映畫は音樂だけで樂しめる、さう云ふところにも文化映畫の色彩と云ひますか非常に多い。一體文化映畫と云ふものは、一番最初に手を着けられたのは芥川さんです。さうなりますと日本、滿洲を通じて文化映畫の草分けが芥川さんではないかと思ふ。ところが音樂の點に於ては劣つて居るところが多々あつたやうに思ふのでありますが、今度の映畫は煩はしい說明なしにしてゆつくり音樂だけ聽けると云ふやうな方法……芥川さんの獨得な頭で考へられた、その點でも高評を買ふだらうと思ひます。是は日本、滿洲を通じて初めてではないかと思ふ。又これが非常に效果があつたのではないかと思ふ。それから惡い點を申しますと、文化映畫と云ふもの丶場面は非常に奇麗と云ふことが大きな役割をしてゐる、然るに此の映畫は寫眞が非常に汚い、これは將來一つ注意して頂きたい。文化映畫の生命はカメラです。寫眞の奇麗か奇麗でないかゞその生命だと思ふ。これだけに限らず一體滿映の映畫は汚い、大體これだけの事を御注意致します。

建設指導の技術化

石河　なにか推薦の制度と云ひますか、基準と云ふやうなものがあるんですか。

木津　さうした所まで內規的には作つて居りません。けれども國民の指導教育上……要するに國家國民の爲めになると云ふ方面から最も優秀なものと云ふ大きな所から行つて居ります。此の前イタリーの「ムソリニ村」を推薦してくれないかと云ふ話もありました。その時は要するに何も外國の映畫だからと云ふ小さな意味でなく、滿洲にも是れ以上のものがございますと云つたわけで、國民に凡ゆる角度から見まして影響を齎す所まで觸れてゐないので推薦しなかつたのです。細かいことは兎も角として、大體そんな所を中心にして推薦するしないと云ふことを決めて居ります。內務省邊りでは三箇條か決めて居るらしいんですね。

石河　將來はい丶ものはどし〳〵推薦して行く方針ですか。

木津　良いものが出來れば一つどし〳〵推薦もしますし又豫算が許せば賞品なんかも出して行きたいと思ふて居ります。何はともあれ優秀映畫をどし〳〵作つて頂きたいね。

石河　かうした映畫を檢閱なさる御苦心を、國谷さん、お願ひします。

國谷　吾々は職務上始終文化映畫も見て居るのでありますが、大抵は記述的通り一遍のやうな感じを受ける場合が多いんですが、今度のは稀らしいものだと思ひました。皆樣から種々御話も出ましたが、「廣漠たる草原に於て、之れを通り一遍のキヤメラを向け、通り一遍の編輯としたのでは、極めて殺風景な映畫になるのではないかと思ひます。殊に說明がなくて、感動を與へると云ふ點に於て非常に優秀なものではないかと考へられます。生まじつかの說明よりも却つて無形に愬へるものが多いと云ふ感銘を受けました。それから中に出て來る音樂が非常に場面と融合して、音樂の力の偉大な事にも感銘を受けた樣な譯でした。全く是は監督と作曲の紙さんとは名コンビだと思つた譯です。映畫の推薦に關しましては今迄も滿映から話が間々あつたやうですし、我々としてもどうかして推薦の意見具申をしたいと思つて居たのでありますが、中々優秀なものが少く種々と意見が出て纒まらなかつたのですが、今度の場合はさうぢやなく、非常に好い映畫だと云ふことを云ひ出しまして、滿映から推薦してくれと云ふのでなく、こちらから進んで意見を上申して推薦になつたやうな譯です。何れに致しましても軍並に弘報處の第一回推薦映畫に滿映作品が上つた事は今後製作の前途を約束するものにして嬉しく感じました。

石河　話を本題に進めまして、滿洲の文化映畫と云ふもの丶過去或は現在に就きまして、亦

嶺さんお話し願へませんか。

赤嶺　どうにも私にはさう云ふ事は分りませんな。木村さん……。

木村　過去の點は兎も角、將來に就てなら種々と註文があるんですがね。（笑聲）

赤嶺　僕は斯う云ふ事を考へてゐるんですがね。まあ滿映のスタフとしては相當反省もしなければならないし、又世間は大きな一つの誤謬を持つて居ると思ふ。滿洲建國は新しい第二の世界建設の理想を以て起上つた。然し理想は持つてゐながら、現實は理想に伴つてゐない點が多い、それは建設の途上なので已むを得ない。其の滿洲國と同じやうに滿映が歩んで居るんぢやないかと思ふ。私は此の間ソ聯の映畫を相當多數見たんですが、ずつと前のソ聯の文化映畫を見た時と較べて、最近のものを見て強く感じたことは、以前のソ聯の映畫と云ふものは、今の滿映と同じ歩き方、同じ程度にあつたやうです。それは非常にイデオロギーの押賣りでそのイデオロギーを裏附ける資料は極めて貧弱であつた。今度見たソ聯の映畫と云ふものには、劇映畫にしても文化映畫にしても、ニユースにしてもイデオロギーと云ふものは微塵も出してゐない。全くの樂土が出來上つたソ聯の姿と云ふものを出して居る。そして見た後でソ聯は好いなあと云つた樣な結論を與へる樣に作つてある。是はやはり僞裝が大半でせうが一方ソ聯の建設と云ふのが相當の年數が經つて、國家の凡ゆる部門の建設が整つて來て文化素材が豐富になつた一面を物語つてゐるのぢやないかと思ひます。それと同じやうに、滿洲の文化映畫と云ふものやはり、國の建設と云ふものと同じ歩みを續けるのだと思ひます。又滿洲の文化映畫は國家と同じ理念を持つて進まなければならぬ。決して製作者個人の趣味に陷ちてはならぬと同時に對象を忘れはいけません。それでゞすね、此の國家性と云ふものをもつとはつきりと然かも積極的指導性を持たせながら、もつと巧妙に映畫的に技術化した一つの立派な繪を作りたいものです、此の點に於ては吾々はまだ〳〵反省し、研究を進めなければならない點が澤山あると思ひます。

木津　此の間の「和尚村」なんかにしても、題材はいゝがどうも黍の餅見たいで腰が弱い。どうも胸を打つものがない。

木村　題材としてはいゝんですが、作品的には不備なところが多いと思ひます。

赤嶺　國の一つの建設過程に於ては止むを得ないと思ひますが、一つの工場を撮るにしても、非常に制限を受けて居る。それが爲に製作者が次第に萎縮して了ふ。伸び〳〵した氣持になれないんですね。それでは新興滿洲を伸び〳〵と描き出せないと思ふ。

木津　それは同情はしてゐるんですがね。本當に氣の毒だと處のものが云つて居るんです。惡いから――と云はれたら、何處が惡いかと捻込んで行く位……。（笑聲）

技術の把握が薄弱

赤嶺　もう少し一般の人が滿映に對して自分のものだと云つたやうな建設的な育む溫かい氣持で對すればいゝんだがね。どうも冷たい批評をする。

木津　一體宣傳が惡い。

赤嶺　それもさうだが、大陸文化を建設すると云ふか、育てゝ行く氣持がなければいかんな。一般に冷淡だよ。滿映邊りに何が出來るかと云つた調子だからね。結局は自分を冒瀆するやうなもんだがね。それが今迄の文化映畫の發達に精神的影響を與へて居つたと思ひますね。

北小跳　製作なさる立場から申せば、種々と困難な事情もございませうか、どうでございませうか。それは映畫を作りますのに主たる監督とかカメラマンは勿論ですが、その他の、例へばレフに光を當てる人、カメラを臺にのせて引張る人達、さう云ふ人達が自分の仕事に深切であつて、そんな小さい仕事にも仕事に對する愛情と云ふものが出て來るやうになれば本當にいい映畫が出來るのではございませんか。これは映畫に限らず滿洲の種々な文化がいくらか粗雜だと思はれ易いのは、やはり自分の仕事に對する愛情、さう云ふ風な心の細やかさが足りないのではございませんか。

―（滿洲文化映畫の方向）―

赤嶺　それは滿映としても改善しなければならないと思ふ。單なる製作者としてゞなく、建設者としての態度ですね。滿映自體としても努力しつゝあるやうですが、製作者はそこから出發しなければいけない。その點甘粕さんはさうしたはつきりイデオロギーを持つてやつて居るやうですが、まあさう云ふ點で一段と努力して欲しいと思ひますね。

木村　私の感じを申しますと、滿映で製作部門に直接携つて見ますと、技術者の誇りと云ふものがどつちかと云ふと輕く考へられて居ります。何か仕事に對して消極的な態度が見えます。積極的な態度が足りなかつた樣に思はれます。それから大きなしかも概論的な問題をどうしても製作對象として採上げると云ふ風な傾向が多いと云ふ感じがするんです。これは滿洲國は建國草々のことですし、無理もないことゝ思ふのですがかう云ふものばかりでなく、非常に端的に、範圍を狹く、深く突込んで見せる映畫が是非なければならないと思ひます。さうでなかつたら折角映畫を作つても映畫の本當の強みである具體的なよさ、徹底して分らせると云ふ點では、なにか薄弱なものになつて了ふと思ひます。そのくせ最近十周年のお祝ひで各方面からお客さんが澤山御出でになりますがさう云ふ方々に御覽に入れる、端的に滿洲を知つて戴く映畫と云ふものを求められましても、案外滿洲概觀と云ふもので御覽に入れるものは、今迄當然作つて居るべき筈なのに適當なものがないと云ふ現狀です。私は文化映畫、劇映畫に限らず何か局限して、一寸ヒツトが出ると、これが映畫だと飛附いて行くと云ふ傾向……そして、さう云ふもの一本鎗で行かうとする傾向、かう云ふことが非常にあり勝ですがこれは嚴に戒しめなければならないと思ひます。滿映は滿洲に一つしかない映畫製作會社でありますし、日本では今度の統制で少くはなつたが、松竹型とか東寶型とか一つの型と云ふものがあつて一應は分けられる、ところが滿映がうつかりさう云ふ一つの型で塗潰して了ふと云ふ事になると、滿洲ではもうそれだけの物しか出來て來ないと云ふ風な非常に片寄つた貧相な結果になると思ひます。やはり映畫の世界に於ては幅廣く考へて、凡ゆる題材形式に勇敢に飛込んで行くと云ふ態度が必要だと思ひます。映畫は形式から云つても、内容から云つてもさう云ふ點での探求が必要だと思ふ。今も眞正面からイデオロギーを振翳して行く映畫は詰らんと云ふ御話もありましたが、又絶對的に之を排擊すると云ふことはいけないと思ひます。さう云ふ映畫も別な意味でどし〳〵作つて行かなけりやいけないと思ひます。時には感情に愬へる丈けのもの、又時には非常に智的な映畫と云ふ樣に必要に應じて自由自在に内容形式を使驅して行くと云ふ心構へが大切だと思ふのです。そこいらを吾々製作の方に關係して居る者は可なり考へなければならないと思ひます。出來た映畫が分らないやうなものでは困る、何にしても採上げた題材を徹底して分らせる映畫を作ることが必要なのであります。結局映畫技術者の心構へとしては、映畫の技術、文法と云ふものをはつきり把握して行くことが必要だらうと思ひます。實際は映畫人の中にさう云ふものを完全に身につけてゐるものがどれだけあるかと云ふ事を考へますと、其處に惱みがある。どうも映畫技術の把握が今迄は薄弱であつたと思ふ。さう云ふ狀態であつたので自分の獨りよがりの分らない映畫を作つて居る、それではいけない。やはり滿映にしても滿洲映畫を本當に好くする爲には、根本的な、基礎的な此の映畫技術の把握の必要と云ふ事をしつかり持たなければいけないと思ひます。そして其の爲には映畫の研究機關、教育機關と云ふものを充實して行かなければならない。日本な

んかでも音樂學校あり、美術學校があるのに、映畫の學校が無いのは、實際可笑しいと思ふ。音樂學校でも、美術學校でも三年や四年懸りますのに、映畫の場合だけは一年かそこいらで濟ますと云ふ考へ方がいけないと思ひます。

冷酷なるキヤメラ

芥川 文化映畫はどうすべきかと云ふ問題でしたが、過去は過去として、將來文化映畫はどう持つて行きますか、斯う云ふ問題、これは吾吾攜つて居る者は一生懸命ではやつて居りますが、どうしても盲になりますから、御教導を受けること。是れが何より大切な事だと思ひます。十分御批評を受ける覺悟はして居ります。一本々々勝負の積りですから、一つ忌憚のない御批評をお願ひ致します。實は此のキヤメラと云ふものは、非常に冷酷なもので、美醜其の儘を出します。問題の主題に向つて溶け込んで行かう、其の主題を十分に把握して了はう、その精神があつても、自分のキヤメラと云ふものは本當に冷酷である。それからもう一つは溫かい氣持、自分の持つて居るものに對して情熱を感ずる、此の例として熱河に旅行した時に、寫眞を撮りましたが、あの承德の離宮、それからずつと八つの喇嘛廟がありますが、其處へ行くとどうにも足が進まん、餘りの雄大さに打たれまして今日はもう止めた、歸らうと云ふので戾りましたが、よりよきものを撮るためには、その前にちやんと調査して、此處は斯う撮るべきだと決めて置くのが原則かも知れませんが、一方また撮影に對して、撮影者が感激を失つたら駄目だと思ひます。それで此の八つのお寺を毎日一つづゝ撮つて參りました。

石河 楳本さん、滿洲に於ける文化映畫への註文はありませんか。

楳本 僕は、文化映畫について一方ではかういふ映畫も欲しいが、又一方では、現實の生活に卽した……つまり滿洲の生活に獨得のもの、すぐ生活に役立つものが欲しいと思ひます。例へばペストなどといふ恐ろしい病氣への對策とか處置とか、或は防寒の智識とか、意外に身近の智識を知るところが少い。滿洲に住む主婦たちが、日本內地そのまゝの生活をこゝへ移してゐます。それでは、肉體的に精神的にいけないのぢやないかと思ふ……。さういふ點を文化映畫とか記錄映畫で啓蒙して欲しい。もつともつとやつて欲しいものが澤山ありますね。

木村 私から申上げますのも僭越ですが、私は滿映の若い監督に要求して居るのは、出來るだけ計畫的な設計をやれ、是は緻密であればある程宜いと云ふ風にして、行き當りばつたりでなしに、大體細かいコンテニユイテーを作らせる事を要求して居る譯です。芥川さんも云はれたやうに本當に作品に對して熱情をもつこと、的確な用意をして置くこと、それは大事な事ではあるが、然しいざ實際撮影する時になつてプランが狂つて來ることが出來て來る、さうなると精密なコンテイニユイテーも役に立たないのではないか、又それだけの情熱を傾けても、そこに大きな方向轉換を餘儀なくされ前の努力は無駄となるのではないかと云ふ考へ方になるものですが、それだからと云つて精密な設計を行ふことを否定してはならないと思ひます。結局は若い監督諸君には出來るだけ自分に與へられた作品に對して熱情を持つこと、又出來るだけ具體的に仕事のプランも考へて、その製作全スタツフにもそれを徹底させる樣引張つて行きたいと思ひます。それからよく云はれる事ですが、監督が敎養が無いと云ふ事ですが、確かに當つてゐる面がありますが、極端なのは監督は何でも知つてゐなければならんと云ふ風に云はれる場合があるんですが、私の知つてゐる或る監督に百科辭典のやうに何でも知つてゐる人が居ますが、ではさう云ふ人は監督として理想的なはずですが、さう云ふものではなく、やはり百科辭典のやうに深さがなく、淺くてどうにもならんと云ふこともあります。結局監督には凡ゆる題材に對して積極的に探求する心構へ、

それを理解し得る或る程度の敎養それと映畫表現の的確な技術とが欲しいのです。與へられた作品を本當に深く把握するには、殊に滿洲國の場合に出來るだけ、各分野の權威の方なり調査機關なりと緊密な連絡をとつて、御指導を頂くと云ふことが必要だらうと思ひます。そして製作者は技術を充分獲得し、技術の點、映畫的表現の點では充分われ〳〵を信頼して戴きその技術をもつて目的を完全に表現する、かう云ふ線に沿つて滿映は發展させて行きたく思ふのです。さうなれば今後滿映の作品と云ふものは、相當いゝ物が出來て來るのではないかと思ひます。

石河 滿洲の文化映畫の配給狀態はいかゞですか、池田さん。

池田 どうも配給の話になりますと、金臭と云ひますか、藝術的な臭ひからかけ離れた話になると思ひますが、從來映畫と云ふものは單なる企業的な對照として、勿論滿映に於てもさう云ふ時代もあつたのですが、現在では映畫と云ふものは、大衆を標準として進むべきものではないかと云ふ風に考へて、配給の部門に於ても其の氣持で突進して居ります。從つて文化映畫の如きも、本當に文化的部面、卽ち啓蒙的な面を考へて、滿映では文化映畫の中にも子供滿洲……文化映畫とは云はんでも、さう云ふ意味で入れて居ります。假に劇映畫許りをかけたら、恐らく今日のお客さんは洵に詰らんものと思はれるだらう、索莫なものだらうと思ふ。やはりプロの中に一つでも文化映畫を入れるやうになつたのは、時代の進步、時代の要求だらうと思ひます。現實の問題に於ては文化映畫は大體日本で製作され、日本にあるものゝ中から、嚴選して居ります。中には下らん物も現存して居る、現在では毎月十本位要求して居ります。それに滿映の作品を加へてゐる。その場合滿映の作品は、館に出す時、日本に出して宣傳された物を出した方が效果的な場合が多いのでありまして、急がねばならん場合も勿論ありますが……。最近日本のニユースが非常に統制の結果高くなつた、從來の三倍以上であります。一寸意外なんですが、やはり供給部門が廣くなつたからでせうが、吾々としては遺憾でありまして、重大なる使命を持つてゐるニユースが算盤的に考へられるのは、實際遺憾であります。日映が立ち行かんと云ふのなら、國家が補助して文化映畫と云ふものを共榮圈內に滲透さすべきものではないかと思ひます。吾々は此の文化映畫の將來の重要性を多分に織込んで、營業の上に出して行くべきだと思ひます。

木村 日系に對してもさうですが、滿系に對してもやはりもつと必要ですね。

池田 滿人館の中には文化映畫をやらない方が儲かるんでやりたがらないのもある樣です。一日の廻轉數がそれだけ多くなりますからね。

赤嶺 根本的な考へ方と云ふものをはつきりして置かないといけないね。ニユースでもかけない所があるからね。

池田 會社內部の事ですが、將來は館の指導とか、宣傳のことなども强力化して行かなければいけないと思つてます。

映畫のみの持つ力

赤嶺 映畫館の經營者の頭にだね、文化映畫の必要性を判らせることも必要なんだね。

木村 日本では一寸出來なかつたんですが、文化映畫を必ずプログラムは勿論新聞廣告にはつきり掲載させる、さうするといゝんですがね。見たい人達にとつては、新聞廣告に載つてゐる、居らないと云ふことは問題ですからね。

木津 滿洲では映畫政策と云ふか、映畫行政と云ふものは政府の代行機關として、滿映をして行はせる樣になつて居るんだから、云ふことをきかない者にはたまにはダンピラを拔くも良いだらうしさ、國策の實行に努めるんだね。

赤嶺 製作上の一つの良心として、大衆と云ふものを無視してはいけないが、媚びるのもいけない、滿映に與へられたはつきりした理念によつて大衆を指導して行くことが必要である。

木津　文化映畫の政治性、政策性と云ふものを多分に考へて頂きたい。獨善的なものも非常に多いからね。

池田　その點選擇が非常に困るんですね。

木津　文化映畫を作る上に、これなら何處へ出しても差支へないと云ふことを、多分に考へて貰ひたいね。非常に政治性がないんだね。

池田　滿洲で文化映畫專門の館は大連の文映館、新京の第一劇場、牡丹江の文映館この三つしかない。それが文化映畫とニュースだけでは立ち行かない。さう私の方の配給も豐かでないし……。だからニュースだけやつても客も呼べないんですね。奉天の銀映なんかもさうですからね。文化映畫專門館が主要都市だけ位にはあつていゝと思ひますね。

石河　滿洲の文化映畫のありかた、斯うあらねばならぬと云ふ結論につきまして長谷川中佐殿から一つお話を願ひます。

長谷川　どうも滿洲の文化映畫と云ふ物も澤山見てゐないし、文化映畫と云ふ概念もよく分らんが、對象を程度の低い滿系に置くと云ふことや、今迄通りの日本內地の人に對して觀光的に滿洲を紹介する、これは材料の剩つた平和な時代にはいゝが、差迫つた時には、もつと全般の計畫を樹てゝ、新聞でもいゝ、ラジオでもいゝ、映畫でやつてもいゝと云ふやうな氣持は捨てなければいかんと思ふ。やはり映畫がなければいかんと云ふものがある筈なんで、文化映畫としても木村さんのお話のやうに深く持つて行く……さうなると大衆をどうするかと云ふことになりますと、大衆の數多くの者は見て分らん、さうなれば或る指導者階級を狙へばいゝ、村へ持つて行つても二三人の分るものを引摺つて行けばいゝ譯なんで、對象をもつと其の映畫の種類によつて決めなければいけないでせう。更に此の對象はやがて吾々としては、日本人を理解すると云ふ程度に行きつゝありますから、さうしなければいかんと思ひます。その點から云つて、此處では青少年を重く見て、實際は文化映畫と云ふものを見に來る者は、滿系の大衆かも知れませんが、もつと日本を知つてゐる、日本的になりつゝある此の青少年と云ふものを目指す文化映畫と云ふものを作つて頂きたいと思ひます。その點なんかから云へば「逞しき草原」なんかも非常に好いと思ひますけれども、此の日本文を解說して、青少年に見せたら尙ほよく分ると思ひます。此の行き方からすればチョイ／＼日本語位は入つた方が却つて青少年はくつ附いて來ませう。日本內地邊りでは、滿系の大衆に見せる映畫は譯の分らん物許りを見せるのだと云ふ面をですね、滿系を一步々々引上げると云ふ方に向けて行く、どうもそれが忘れられて居るやうに思ふんですがね。滿映も四五年にしてこれだけの程度になつたんですが、是は言換へれば、大衆がそれだけ從いて來たと云ふ意味でありませう。滿洲に於ける觀客と云ふものが、どん／＼躍進して行く、大衆が躍進すれば滿映と云ふものも自然躍進することになる。周りの者が熱心になれば、製作者なんて云ふのは自ら立派なものを作り出すと思ふ、出來て來る。一番お願ひしたい事は、映畫でなければ駄目だ、映畫でなければ出來ないと云ふ手段を以て、此の滿洲の大衆と云ふものを見縊らないで、もつと／＼大衆を大事にしてやるんですね。みる人が譯が分らなければ分らない程、繪と音が一致する、アフレコすること、映畫を知らない者には映畫の眞實性を見させる、さうすれば大衆は必ず從いて來ると思ひます。此の點民度が低いからいゝ加減に……勿論さう云ふ人も無いと思ひますが、相手が低ければ、立派な技術が必要なんですね「僕等の學校」なんかあの儘日本へ持つて行つて、滿語の日本語版……變な言葉だが、そんなことも考へて見たらいゝと思ひますね。劇では難しいと思ひますが……。

池田　あれなんか日本では感激するだらうと思ひます。中々いゝですよ。

石河　どうも長時間に亙りまして種々と有難うございました。これで閉會致します。（了）

放送近事

建國十周年を記念する爲め電々會社としては何か適當な事業を企畫してゐると聞き及ぶ。諸々の計畫はあるが我々放送を愛するものに取つて最も強く要望される一つはこの際相當の資材難もあらうが、放送會館の設立を願ひたいものである。放送會館の建設はいまごろ言ふのはおそきに過ぎるかもしれないが、この話は隨分以前から云々されてゐたものである。

或る幹部は、今の放送局では充分な能率も上げ得ないし又その內容施設も時代おくれであるから、何んとか改築せねばならないが、併し今急に大きい會館を作るのは考へものだと言つてゐる。又或る幹部は、ラヂオの持つ使命なり、これが極度の運營は國防上から見ても、銃後國民生活の見地からしても、今こそ長期戰に備ふる最も好果的な武器である以上、外の優秀武器同樣に日々に改良せられて最も良好なコンデションの下に放送されねばならぬ。その爲めには現在の新京中央放送局の施設では最早や第一線に働くには充分でなく、早急改造、改築せらるべきであるといふのである。

兩者の意見は夫々の根據ある議論であるが、公平に考へて、我々は現在の新京放送局の施設ではどうしても滿足すべきなりといふ結論は出ないのである。

文化の殿堂と稱して常に大言壯語してゐる放送當事者としては今の貧弱なる殿堂と內容ではチト恥かしくはないかと言ひたい。聞く所に依れば電々の大幹部は本年の十周年を記念してこの事業に手をつけ樣としたのであるが、熱烈なる電々愛社々員での連中は來年こそ電々創立十周年であるから、來年起工してはといふ話を持ち出してゐると聞く。國家の祝典と社の記念とは、どちらが大切かは夫々の立場で異なるが、我々としては一年でも早くやつてほしいものである。今度の計畫內容はたゞにラヂオ丈けの放送局ではなく、眞の文化の殿堂にふさはしく、凡ゆる團體を充分に收容し得る會館であらしく、ラヂオ、演藝、映畫、ホテル、百貨店、美術工藝出版等々を包含し得る堂々たるものであるとの事、實現の一日も早やからんことを切に望む。

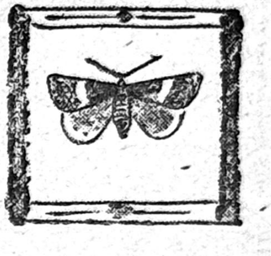
△

アナウンサーといふ名稱が消えて放送員となつた。電々が放送事業を開業して丁度來年で十年になる。その間滿洲で生れたアナ君の數は大變な數字になる。丁度電々が昭和八年創立した時に八名採用した。これが第一期のアナ氏とすれば本年五月卒業の者を加へると日本語では十五期、滿語では十期、計二百名以上になるとの事である。

昔はたゞ珍しい商賣であり又華々しく見えるし、割合に收入は良く、一日中ラヂオを聞いてゐられるといふので其の申込みも多く、中には辯護士の古手や、會社の重役（勿論泡沫の小さいもの）やら軍人さん、官吏もあつたのであるが、近頃の樣にニユースは殆ど東京に獨占されてゐる始末に滿洲育ちの鷲も、啼く時がないらしく人氣も段々下火になつたとの事、なんとか之等の放送員をもつと上手に使へないかなあ　と云つてゐる人もある。併しそれには放送員の質ももつと向上せしめねばならない事は申す迄もない。

野球シーズンになつて來た丈けに氣にかゝる話である。

（新聞愼吾）



滿洲のメイン・テーブルを圍む人々（5）

雅本秀敏

民生部次長　源田松三氏

源田さんは「眞實一路」を歩み續けてゐる滿洲國の御偉ら方の中で源田さん程、物事をパンクチアルに考へる人はあるまい。

滿洲が未だ植民地的空氣から脱却し得ない現狀では、收民官も「荒つぽい」のが多いのは當前である。源田さんの過去の實績や源田さんから感じられる空氣を見ても瞭然であるが源田さんは凡そ「荒つぽい」といふ色彩から遠のいてゐる。それ丈に細い面があるが正直で細緻、しかも過去現在を通じて自己の信條を守り通し「眞實一路」の生活を續けてゐる。

源田さんが稅務司長から主計處長になるとき、「一箇年間外國に出張を命ず」といふ辭令を貰らつて歐米に視察行をやつた時、丁度一箇年目（三百六十五日）に歸任したので或る人が「丁度、一箇年目とは實に几帳面ですね」と云つたところ、源田さんは「いや丁度一箇年目ではありませんよ、歸任が二、三日遲れました。大連上陸の時が頂度一箇年目でしたよ」と答へたそうである。

又、濱江省次長在任當時は夏ならば八時十分前、多ならば九時十分前には必ず省次長室に据はつてゐたさうである。あたかも「哲聖カントの散步」の如く、康德六年四月の新任から康德八年十月の退任までの滿二箇年半、絕ゆまず行はれたといふ話である。

以上の話は源田さんのパンクチアルな面を十分窺ふに足るものであらう。几帳面は細緻に通ずる。濱江省次長時代、全滿最初の省監察に會つた時「官房重點主義で他の部局行政が之に併行してない」との監察評を受けたのは源田さんの細い反面を如實に物語つてゐる几帳面で細い源田さん、之丈なら源田さんは高く買はれないのだが、源田さんには誠實と眞實一路の生活が伴はれてゐる。

「秀才より努力の人が必要である。秀才は時によつては最も必要とする團體行動を破壞する位の役目しかしない」との持論によつて三高在學時代、庭球部の改革に乘出し、腕が出來ても練習をしない人は殆んど退却して貰らひ、熱心な人のみによつて庭球部の陣容を更新、遂に卒業年度に於て、當時、日本一と稱された早稻田大學庭球部と互格の勝負をする迄の地位に三高庭球部を引揚げたのである。

この誠實、眞實一路は現在滿洲國に於ても發揚されてゐる。「滿洲國の官吏陣が最も望み得る地位は大同學院出の人々が中樞に据はり

—（滿洲のメイン・テーブルを圍む人々）—

之等の人々が内地と對等に交流出來る樣になつた時であり、その時こそ滿洲國の政治が板につく時である。それ迄自分等は中繼役として道を踏み誤らずに進めばよいのである」と固く信じ、朝早くから役所で事務を、晝はソバか何か輕い食事を食堂でとり、晝食時間中に本を讀むとか或ひは役所以外の用を果たすといふ生活樣式でもつて、滿洲國次期官吏の善良な仲繼役たらんとしてゐる。その誠實には頭の下がるものがある。

しかも几帳面な細い眞面目な官吏にあり勝ちな官僚臭がなく、協和會運動にとつては難攻不落と唱はれたハルピンを遂に今日の如きハルピンに上昇さしたのは勿論、半田敏治氏といふ協和會切つての利き者があつた事にもよるが、濱江省次長當時の源田さんが官僚臭を捨てて、ラウンド、テーブル式に協和會との提携を計つた結果であり、今日の政府と協和會との二位一體制は源田さんの時代、既にハルピンでは行はれてゐたのである。源田さんは大藏省育ちであり。しかも滿洲國建國と同時に政府入りをしてゐるので所謂「建國大藏組」の一人と見做されてゐるが、肌合ひからすれば全然といつて良い程、渡航の「建國大藏組」とは異なつてゐる。

源田さんは本年四十四歳、大正十二年、東大政治科を出るとすぐ大藏省に入り理財局國庫課、大藏省司稅官、札幌稅務署長を經て、昭和二年一月、關東局事務官として大連に來たり、財務課長時代に滿洲事變に會ひ、關東軍囑託として奉天省政府の財政金融問題の收拾に貢獻爾來、海關及鹽務機關の接收を始めとして幾多の重要問題を解決、大同元年三月、滿洲國政府入りをして財務部稅務司長、康德三年八月、人事處長。康德六年四月、濱江省次長としてハルピンに轉出。昨年十一月、民生部次長として再び、中央に復歸したのである。

學校を出て大藏省に入つた源田さんは札幌稅務署長を最後に外地たる關東局に轉出したのだが、今でこそ關東局の地位も相當、向上されてゐるが、昭和二年頃の情勢では關東局轉出は閑職と見て差支へなかつたらう。秀才と思はれなかつた源田さん、關東局轉出が今日の滿洲國官吏源田松三氏を作りあげたのである。どちらかと云へば物事に消極的な源田さんは人に切れる卽ち秀才といふ感じは與へない、事實、源田さん自身も「秀才をむき出しにする人はすきでない」と云つてゐるとほり、名僧に見る樣な深みとインテリヂエンスは見られるが、一見秀才を偲ばせない。

顏・形・しやべり方等にもよるのであらうが、なんと云つても源田さんの物の考へ方や眞實一路の生活に深く根差してゐるのではなからうか。「次期官吏養成の仲繼役」を以て任じてゐる源田さんに又過去の步み方に對して筆者は「源田さんは消極過ぎはしませんか」と今後の積極的態度への轉換を要望する氣にはどうしてもなれない。

滿業副總裁　高崎達之助氏

高崎さんの本領、手腕、産業人としての實力などは未だ大きな試煉に直面してゐない（關西財界では既に定評を得てゐたが）といつてもよいから輕々には判斷を許せない。高崎さんが日滿經濟界といふ大きな舞臺に上つたのは鮎川總裁の女房役として滿業の副總裁になつてからであり、しかも高崎さん就任以來の滿業があまり大きな變革を見せてゐない事や如何に女房役とは云へ滿業と云ふものが鮎川さんといふ個人色に塗りつぶされてゐる現狀では高崎さんの實力、本面目は何んと云つても未知數と云はざるを得まい。

高崎さんは本年五十八歳、明治三十九年水産講習所を出ると北米、ロスアンヂエルスのビジネス、カレッヂに學び、歸朝後、三重縣の東洋水産會社の技師長、支配人となり、明治四十五年再び渡米、メキシコのインターナショナル・フイシヤリー會社（國際漁業會社）に勤務、大正五年再歸朝して東洋製罐會社を設立、以後東洋鋼鈑會社、東洋機械會社を創設、滿業入り前は十三に及ぶ關西方面の諸會社重役をやつてゐたといふのが高崎さんの今迄の略歴である。

學校を出て少さいながらも東洋水産會社といふ會社の技師長、支配人をやつてゐたのをわざ〳〵渡米してメキシコの漁業會社に入つたのは鮎川さんが學校を出て職工になつたといふ話と似てをり、又水産の罐詰業などに手をつけたといふ先見は鮎川さんの重工業部門への進出の先見と之亦同樣であり、罐詰業を立派にやるのにはブリキ板工業を握らねばならぬと考へて東洋鋼鈑會社をつくり、又ブリキ板工業をマスターするにはブリキ板加工器具製造業をつくらねばならぬと信じて工作機械業製造の東洋機械會社をつくり、小さいながらも「東洋コンツエルン」を作りあげたのは鮎川さんが「日産コンツエルン」を育成したのと同じ道程でありしかも處を同じうしてアメリカに學んでゐる。

以上の樣に今までの高崎さんの道のりを見て來ると全くと云つて云ひ程鮎川さんと同じ方策を採つてゐる。高崎さんが或る意味では未知數であるといつても、裸一貫から今日の如く大成し、又その大成の仕方がメキシコ等迄遠く現業取得のため乘出した非凡や。「東洋コンツエルン」を作りあげた着想などに基く事を知る時に高崎さんのアウト・ラインは自明である。しかしコースは同じであつても鮎川さんと高崎さんとは大部、性格や世間に對する者の見方が異ふ樣に見受けられる。鮎川さんが高崎さんを滿業社員に紹介する時、「私は縱糸ばかりの人間だが、高崎さんは縱糸に横糸の入つた人であり、從つて私をだます樣には高崎さんをだます事は出來ない」と云つたさうである。高崎さんを評する言葉として誠に適切であらう。高崎さんは一言にして云

へば「苦勞人」である。しかもその苦勞が暗いものにならず明朗化されてゐる。苦勞といふものは人間を鍛へるのには最も良い方法であるが世上「あまり苦勞するものではない」といふ言葉が發せられるのは苦勞には暗いものと執着がとかくつき纏ふからである。若い時代から金錢に困つた人が金持ちになつてからケチになるのはこの良い例である。

しかし苦勞して惡くなるのと良くなるのは結局、頭の關係である。頭の良い人は苦勞しても暗くならないばかりか珠玉が磨かれるが頭の惡い人は苦勞すると暗くなつたり、執着といふものが附加される。東洋製罐時代、事業の關係から日本水産を通じて鮎川さんと知り合ひ、吉野前副總裁退任の後を引き受けて滿業副總裁になつてから二年餘、文字通り、立派な女房役振りを見せてゐる。

世の中の深みを體得して來た高崎さんは明朗に、しかも細心に滿業部內は勿論滿業外部に對しても鮎川さんが無關心でゐる「人と人とのつながり」に神經を使つて、從來とかく不圓滑であつたと云はれてゐたこの方面の是正に成績を擧げてゐる。一部には高崎さんは作爲の人心收攬策をやりすぎるのではないかと見る向もあるが、人の上に立つものは作爲、不作爲に不拘、人心の收攬といふ作用を必ずやらねばならない。持つて生れた德望なり、又基礎の固つた事業の上にある時は不作爲が効果を齎らすであらうが、今の如き滿業の地位は決して不作爲のみでは事は足りない。進んで作爲の人心收攬といふ手が必要とされる。

特にこの方面には無關心な鮎川さんの女房役としては必須の條件と稱しても良からう。今の滿業には「とぼけ明君」が必要である。

「とぼけ明君」とは

「肥後、熊本城主細川重賢が米の中に白砂の混つたのを自分のみ承知して食事中ひそかにたもとの中に入れてゐたが、衣服係に發見され、小姓から膳番へと傳はり、膳番頭が辭職を申出でた時「それは何かの間違ひであらう、余は存ぜぬ」とわざと知らぬ顏をした爲、その膳番頭は辭職をせずに濟み、重賢の配慮を銘記、忠勤を勵んだ」といふ話であり、寬容仁心、眞に上に立つ者の心掛けとして說かれてゐる話である。

高崎さんも國內出張の際、政府その他の要路が偶然、同じ汽車で同方面に行く事になつた爲、一等がとれずに會社の係員が困つてゐるのを竊かに知るや「たまには二等にでも乘らんと下情に通ぜぬから、今度は二等にしたい」といふ位の苦勞を持つてゐる人である。

滿業の如き非現業部門は社員の意氣といふものが高揚されない。鐵の增産なり、石炭の採掘强行などといふ直接、その一擧手一投足が國家目的のために向けられてゐる現業部門はその日その日が高い意欲に終始してゐるため、社員の意氣は高められる。

しかるに滿業の如き非現業部門は現在の如き情勢下では組織體たる會社社員の意氣も沸らなければ、又外部からの論判も不必要に加へられ勝ちである。この情勢下にあつては高崎さんの如き苦勞人が必要とされる場合が非常に多い。

大東亞戰爭川柳日記（3）

―昭和十七年中―

居平洞學人

○三月六日

△航空部隊は七回に亙りバンドンを猛襲、蘭印は遂にバンドンを放棄す

夜の明けぬうちに蘭軍遁げ仕度

○三月七日

△大本營發表に依れば開戰以來本日迄海軍の大戰果中擊沈戰艦七、航空母艦三、巡洋艦一一、驅逐艦二二、潛水艦四四、砲艦七、敷設艦四、特務艦三、掃海艇四、魚雷艇九、船舶一〇五、計二一九、大中破合計一四四拿捕艦三に上る

大戰果平出大佐の聲の巾

△我軍蘭印政府機關を接收す

御稜威いまジヤワスマトラに普ねきて

○三月八日

△ビルマ方面陸軍部隊はラングーンを完全占領

イギリスのあてにならぬが今判り

△ジャワ島東部上陸部隊はスラバヤを占領又ニューギニア島東岸の要衝サラマウラエに敵前上陸敢行

ニューギニアこゝも惠の風が來る

○三月九日

△蘭印方面陸軍部隊は蘭印軍九萬三千米英濠軍五千をして無條件降伏せしむ

親分の度量へ殖えた居候

△ラングーン第一次爆擊で群敵と戰ひ燃ゆる愛機に仁王立ちとなり悠々僚機に訣別自爆を遂げた伊倉中尉の母堂いと子さんは「今日この耳で蘭貢陷落の捷報を聞きこの眼に英軍の白旗見ゆるばかりにて嬉しさ胸に高鳴るを覺え候」と谷萩報道班長に出狀した

勝鬨の中にわが子の聲をきゝ

△蘭印方面陸軍最高指揮官は、今村均中將ビルマ方面軍最高指揮官は飯田祥二郎中將と發表

鬼の面とれば優しい父であり

○三月十日

△大元帥陛下にはジャワ島戡定を御嘉尚あらせられ陸海軍に優渥なる勅語を賜はる

捷報は大内山に谺する

△ニューギニアの皇軍はラエ並にサラマウラの敵前上陸に成功折から來襲せる敵機六十機に對し我水上偵察機は之を邀擊一四機を擊墜遁走せしむ

敵機また擊たれた丈けで遁げてゆき

○三月十一日

△印度國內の獨立運動熾烈化に狼狽せる英政府は國璽尚書クリップスを印度に特派する旨發表

成算はないが兎も角命を承け

△國籍不明の一飛行機カリフォルニア州南岸に現れたのでロスアンゼルス、サンヂエゴは一時間餘空襲警報が鳴り響いた

水鳥の羽音におびゆる米本土

○三月十二日

△休會中の貴衆兩議院は本會議を開き一億國民の總意を代表し陸海軍に感謝決議を滿場一致可決した

戰線へ銃後擧つて手を合せ

△ウエ島攻略の多賀部隊はサパン港を吉田部隊はイヂ附近を占領

ウエ島に占領ゴツコの各部隊

△セイロン島では島內婦女子及び重要軍需工業に從事せざる一般市民は同島を退去すべしと布告した

セイロン島自分の番を意識して

○三月十三日

△濠洲軍當局は民間各機關に對し僅かでも軍事的利用價値あるものは總て破壞せよとの徹底的焦土戰術を發表した

恐怖病鼠の音におどかされ

○三月十四日

△英、米兩軍當局はジャワ海戰の敗戰を認め米英蘭聯合艦隊が喪失せる主力艦は十二隻と發表

どうしても敗けた事實は隱されず

○三月十五日

△印度防衞は時機を失したりと敗將ウエーベル悲鳴を擧ぐ

敗戰へ理窟をつけるウエーベル

○三月十六日

△今村蘭印方面作戰最高指揮官は午後四時バタビヤに入る

颯爽と馬上の姿繪の如し

△フィリツピン方面軍はミンドロ島南部サンホセを占領

手の隙いた暇に小島の掃除もし

○三月十七日

△米比軍マックアサー大將は飛行機でバタアン半島を脫出、濠州に到着した

遁げのびてアーサー元の顏になり

△特務艦〇〇〇丸は三月二日ロンボック海峽北口にて敵潛水艦の魚雷攻擊を受け乘員及便乘者〇〇名は壯烈な戰死を遂げたが艦長清水巖大佐は沈着武士道的態度を以て最後まで同艦と運命を共にした美談が某基地へ齎された

山櫻散るに未練も何もなし

○三月十八日

△濠洲東北ソロモン群島中のフロイダ島爆擊

海鷲に睨らはれたのが百年目

○三月十九日

△帝國政府はブラジルの反樞軸的暴擧に對し同國の猛省を促し警告す

迷信はどう悟としても諦めず

○三月二十日

△海軍はイギリスの一方的抗戰權擴大に對應し海戰法規を改訂せる旨公布

さう出れば我はかう出るまでのこと

△日ソ漁業條約暫定取極め成立

先づ今日の平和へソ聯握手する

○三月二十一日

△早朝濠洲北岸ブルームを空襲しターピン港を爆擊

ターピンの夢爆音に破らるる

○三月二十二日

△ジャワ軍政部ではバタビヤ地方行政官會議を召集、中央機構地方行政方針を明示尙ほダブラン、フブツラ氏をバタビヤ市長代理に任命

バタビヤが明るくなつた御仁政

△ビルマ作戰中エンヂンの故障にて敵中に不時着した井上逸雄少尉は豪膽にも群敵を切り拔けビルマ民衆の多大な援助により〇〇基地へ奇蹟的の生還をした

群敵へ日本人の膽を見せ

○三月二十三日

△ソロモン群島北西ブカ島及び南アンダマン島ポート、ブレヤに奇襲上陸敢行

上陸へ何の苦もない日本軍

○三月二十四日

△海軍航空部隊はバタアン半島コレヒドル要塞猛爆

コレヒドルどかん／＼の日が續き

△マレー敗戰查問委員會設置決議案イギリス下院に上程さる

まづ夢が醒めず負けたを不思議がり

○三月二十五日

△イラワヂ河啓開完了海軍艦隊ラングーン港進駐

軍艦旗ラングン港の朝の色

△山東省山岳地帶に舊東共產軍殲滅の火蓋切らる

皇軍に鼠退治のひまがあり

○三月二十六日

△西南太平洋反樞軸聯合軍總司令官マックアーサー大將はカンベラに到着濠洲政府首腦部と防衛問題を協議

敗將の軍議は逃げる手段から

△濠洲西亞派遣軍一部は軍司令官トーマスプレーミ大將と共に濠洲へ歸還

歸還してトーマス一應安堵する

△暴戾なるイギリス機はチモール島クーパン灣航行中の我病院船朝日丸を爆擊す

イギリス機弱いと見れば擊つてみる

○三月二十七日

△前比島大統領ケソンは濠洲に到着す

濠洲に來てもケソンは寢着かれず

△北部スマトラの敵將オプルカル少將部下將兵二百名と共に投降す、更に全スマトラ戡定完了し蘭印軍總指揮官アプシアーカー少將降伏、捕虜三千百名に達す

○三月二十八日

投降の先きを爭う二少將

△ビルマ獨立義勇軍戰歿勇士慰靈祭をラングーンに執行さる

英靈の歡呼が聞ゆ慰靈祭

○三月二十九日

△ポート、モレスビー猛爆し敵機三機炎上四機擊墜、軍事施設爆碎

戰果多々我機の彈にムダはなし

○三月三十日

△小林部隊の岸一等兵は二月二日バタアン半島で最前線の木に登り得意の射擊を以て連日に渉り十七名の敵將兵を狙擊赫々の武勳を樹てたと情報來る

梢から猿が擊つかと振り返へり

○三月三十一日

△濠洲海外派遣軍は本國防衛の爲全部濠洲に歸還す

派遣軍おも家の火事へ引返し

△我油槽船寳洋丸はニューアイルランド東南方洋上で敵潜水艦一隻を擊沈す

わが船と組んでも敵艦齒が立たず

○四月一日

△淮南西南地區の肅淸戰を完了す

午後の陽へ掃除のすんだ水を打ち

○四月二日

△陸軍航空部隊は江西省玉山飛行場連爆多大の戰果を收む

重慶へ又やられたの報せ來る

○四月三日

△星港攻擊戰に○○肉彈部隊長は俺れが斃れても振返るなと血に染む軍旗を肌に卷き敵陣へ突進、軍旗を護れ部隊長を殺すなと伊藤上等兵、高木一等兵、荻原少尉、御下中尉、松村少尉、大金一等兵等は人間防壁陣を築いて奮戰した記錄が○○基地に到着した

人間で砦(とりで)が出來る日本軍

△支那方面陸軍航空部隊は衢州、麗水飛行場に第三次空襲敢行殘存軍事施設爆碎

陸鷲が一と廻りするいゝ天氣

○四月四日

△コレヒドル要塞爆擊中敵彈を食つた愛機より放り出された○○中尉はマリベレス灣の敵雷原中を十五時間も遊泳激浪と戰ひ大魚に喰ひつかれながら堅忍不拔の海鷲魂を發揮し僚機に救はれ奇蹟的生還した

日本兵魚と戰ふ術も知り

○四月五日

△海軍部隊はセイロン島コロンボに第一回攻擊を敢行し敵機五十七機を擊墜し港內敵船十六隻を擊破又洋上にては英甲巡二隻を擊沈せり

コロンボの惡夢をさます日の丸機

△ベンガル灣方面に進攻せる部隊は英船二十一隻約十四萬噸を擊沈、七隻約四萬噸を大破せしむ

英艦の亡靈が出るベンガル灣

△バタアン半島サマット山西方に於て篠原登大尉は一箇中隊を以て敵の背後より肉彈突擊を爲し、野山砲十四、自動車四四索引車一輛を鹵獲し輝しき戰果を擧げた

戰利品篠原大尉の高い鼻

○四月六日

△重慶政府は內亂防止の爲新に二十箇師を編成、各邊區に分駐せしむることゝした

內亂防止あの手この手に忙しい

△海軍航空部隊は印度マドラス州コカナダ港を爆擊

攻めらるる譯が判らぬ印度民

○四月七日

△ジャワ島より辛うじて濠洲に逃れた蘭印殘存部隊は聯合軍司令部指揮下に入る旨を亡命蘭印副總裁ファン、モーク、シドニー聲明す

落ち延びた兵を集める聯合軍

△星港敵前上陸に際し横山工兵部隊の山本喜代一兵長は敵彈に胸部を貫通され、露出した肺臟を押へながら尙も舟艇の操縦を續け、渡過部隊の陸揚げを果して名譽の戰死を遂げた勇敢振りが○○基地に傳へられた

上陸がすみ萬歲の眼をつむり

○四月八日

△皇軍の眼覺ましき戰果に怯えたカナダは太平洋岸の樵夫その他の勞働者を以て遊擊隊を組織するに決した

カナダ軍猫も杓子も呼び集め

○四月九日

△バタアン半島攻略部隊は東海岸の要衝カブカーベン占領、引續きマリベレスに怒濤の進擊午後九時之れ亦完全占領す

各部隊占領ゴツコする如し

△海軍部隊はセイロン島トリンコマリ方面を強襲、英航空母艦ハーミス號及び驅逐艦一隻、哨海艇一隻を擊沈其の他多大の戰果を收む

造船をどう急いでも間に合はず

○四月十日

△セブ島戡定作戰に中村軍曹、伊藤伍長、安松伍長の三勇士は肉彈を以て敵トーチカに突入、名譽の散華により我軍を導入遂に占據した

セブ島に又新たなる三勇士

○四月十一日

△陸軍中將前田利爲侯は新に北部ボルネオ方面陸軍最高指揮官に親補せらる

加賀藩にボルネオ百萬石が殖え

△帝國陸軍部隊はバタアン半島を完全に攻略す

日の丸へバタアンの空澄み渡り

○四月十二日

△バタアン半島に布陣せる我砲兵部隊はコレヒドルを猛攻、又血迷つた敵機はマニラ盲爆

夷ども遁げる途中を荒しゆく

△バタアン半島總攻擊で小林部隊の鹽尻伍長、笠松兵長、笠原軍曹、金谷一等兵は肉彈を以て敵二段構への機銃陣地へ突入し敵兵を手刺にし三百名の多勢を僅か四名にて擊退した

四名對三百我と彼との差

○四月十三日

△海軍航空部隊はミンダナオ島急襲、マライバライ、カガヤンデルモンデ飛行場爆擊

海鷲の今日はこゝらの巢を探し

○四月十四日

△コレヒドル島の攻擊愈々熾烈化す

コレヒドル土鼠の穴が狹くなり

△四月十二日迄に於けるバタアン半島の戰果による俘虜はキング、ジョンズ、フランシスコ三少將以下四萬に達すと發表

宏大無邊夷狄御稜威へ只淚

○四月十五日

△セブ島セブ市周邊の山岳地帶に遁入せる敵を猛爆

兵のひま遁げた兎を遁ふて見る

△二月十日榮光の落下傘部隊がパレンバンに奮戰した際鴨志田曹長は一人友軍のゐない場所に着陸したので單身進擊し敵彈を受けながら手榴彈を十數名の敵へ投げつけ自分は拳銃で壯烈な自決を遂げた情景が華僑によつて語られた

天兵の人間でない腕を見せ

國産ワート

新時代の強壯劑

美味芳佳
服用容易

ビオトニク

從來の强壯劑と異り：細胞の活力を根本から昂進する綜合エキスとも稱すべく、めき／＼食慾を增し、神身の疲勞を醫し、赤血球を增殖す

液　一五〇瓦　五〇〇瓦　二・〇〇〇瓦　四・〇〇〇瓦

植村製藥株式會社　京城・東京・天津・青島

滿洲植村藥品株式會社　奉天市大和區[illegible]

老宋

（國府還都二周年を讃へる作）

山田清三郎

序章

西村は、滿洲に來て、結婚のなかうどをやつた。これは、完全な意味でのそれではなく、式場でだけのものだつたが、そのあとは眞のなかうど以上に、新婚の家庭で彼はなつかしがられ、深い親愛の感情でもつて迎へられた。

新郎新婦は、新京の郊外ともいふべき寛城子の白楊の林の前に、ロシア風の白堊の、しかし如何にも粗末な、平屋建に初々しい家庭を營んだ。朝に、夕に、彼等の家の、四角な赤い煉瓦の煙突から噴いてゐるペーチカの煙を見ることほど、滿洲に單身生活をつづけてゐる西村の胸に、あたたかな思ひを湧かしてくれるものはなかつた。

新郎の白木俊吉は、彼が東京に出てゐた頃にも、西村は東

京で相互の友人を介して一、二度會つてゐるのだつたが、今は新京で、西村が部長をしてゐるある特殊會社の編纂室で、その部下として勤めてゐるのだつた。西村が、式場でなかうどをやることになつたのは、いまいつたやうな二人の關係から、白木に頼まれて引受けさせられたといふわけである。

新婦の方は、在滿日本人の第二世で、滿洲の日本人のあひだではそれを滿洲娘と呼んでゐるが、てんしんらんまんといつた感じの、まだ嬢ちやん嬢ちやんした可愛いお嫁さんで、その名を日出子といふ。

西村も寛城子に住み、白系ロシア人住宅の一部屋を借りてゐたが、彼等とは、呼べば應へるほどの距離だつたので、朝夕の食事に招かれて、日出子の女學校仕込みのお手製の料理を批評させられたりしながら、毎日のやうに、彼等の新家庭を訪づれてゐた。

その後、西村は、新京市内の方に引越したので、彼等の家庭とも、稍遠くなつたが、ここに傳へる物語は、西村が彼等の家庭で、その日出子からよく聞かされた、彼女と彼女の滿人乳母とのあひだに結ばれた、世にも美しい愛の物語を、日出子の口癖をかりて、小説ふうに綴つたものである。

一章

日出子の結婚問題について、誰よりもしんみになつて心配してくれたのは、奶媽（ナイマー）（乳母）の老宋でした。もつとも、しんみとはいつても、老宋には、實際上には、どうする力があるわけでもないのでしたが、それだけに、彼女の氣をもむ様子には、いたいたしいものがあるのでした。

日出子――彼女は自分のことを私といふよりも自分でその名を呼ぶことの方が多かつた――のえらんだ白木については、第一に、親たちが不服だつたのです。わけてもお母さんは、大の反對でした。父は、しまひには、幾らか日出子をふびんにも思ひ、諭しても訓へてもきかない日出子の心の、案外に一徹なのを知つては、半分は沒法子（メイファーツ）といつたあきらめもあつたのでせう。そのあきらめの底から、今度は、白木にも何か取柄はないかと、それをさがすやうな氣持も動いて來たやうで、それは、日出子にもよくわかるやうな氣がして、禿げあがつた薄い頭髪に、さらに白いものがめつきり眼につくやうになつた父の心情を、哀れに思ふこともあるのでした。

その父に引かへ、母の方は、なかなか頑固で、日出子、悲しいといふよりも、ただこはくてこはくて、仕方がありませ

んでした。母は、相當勝氣な性質のところへもつて來て、内地では、地方の小都會でしたが、女學校の教壇に稍長く立つてゐたことがあつて、いはば、婿選びの眼が、世俗的な意味で、高くなつてゐたのは爭へないと思ひます。そんなことから、私と白木が、子供の頃からの知り合ひだといふ關係を超えて、結婚にまで行かうとしたことが、一も二もなく、まどろしくもあり、三文畫家（ゑかき）にも達しない、そして一概に無能者としか思へない白木の、人としての眞實なんかは、ふり返つてみようともしなかつたのです。母の立場になつてみれば、それもむげに責めることもできないのかも知れませんが、日出子はそれで、どんなに苦しみ、また泣かされたか知れません。

ある日も、夕飯のすんだあとで、こんなことがありました。私と白木の問題をめぐつての、父と母との爭ひです。

「もちろんいい縁談だとはわしも思はない、しかし、それも當人たちが欲することなら仕方がないぢやないか。もともと二世の娘にいい縁談などは望めないのだし、それに白木にしたところで、萬更おまへが考へてゐるやうに、見捨てたものでもないとわしは思ふのだが」と、おだやか父の持ちかけでした。それを母は、さも不潔なものでも吐き出すやうに、

「あなたはどうしてさう考へが甘いのでせう。だから、日出子や白木たちからも、馬鹿にされるのですよ」と、いきなりかうなのです。

「かういふことは、なるべく善意にとつて、自然の流れにまかせた方がいいのだ」と、重ねて溫和な言葉で、父は母に說くのでしたが、しかし私たちのことといへば、ただもういきりたつことしか知らない母は、父のいふことなど、まるで考へてみようともせず、ただ自分は不贊成だとか、大野家の運命にかかはる大事な問題だとか、白木のやうな、頼りのない男をどうするのですとか、それはもう、たいへんな權幕だつたのです。今だからこそ申上げますが、白木が、若いくせに頭の毛の薄いのを、まるで、いやらしい病氣のせゐのやうにさへも、母はいふのですからね。日出子、口惜しくて口惜しくて。しかしあとが心配だつたものですから、居堪らない氣持を、齒に嚙みしめて、ちつとそこにこらへてをりました。

母が、父の考へを無視して、あまり自分の思ふことばかりを秩序もなくまくしたてるものだから、溫厚な父も、しまひには赫となつて、口まで持つて來た盃を母の胸に向つて投げつけると「どうなとおまへの思ふやうにするがいい」と、捨鉢の一語を殘して、ぷつと座を立つてどこかへ行つてしまひ

ました。

　このことは、日出子には強い衝撃だつたのです。をぢさんなんかがお聞きになると――日出子は、西村のことを、さう呼んでゐた――なんだ、つまらないと、お笑ひになるかも知れませんが、父が、見るからにお人好しの父が、物を投げるなんて、それも、食事の最中に、母に向つて投げつけるなんて、日出子、始めてなもんだから、ただもうびつくりしてしまつた、これもみな、自分のことからだと思ふと、瞬間、死といふことが、頭をかすめて行くのでした。

　それは、とにかくとして、そのとき、私は「お父さま!」と、背に呼んで、あとを追かけて行かうとしましたが「日出子」と、母にとめられて、出場を挫かれなければなりませんでした。しかし、母が何を私にいはうとするのか、要するに白木のことはよく考へ直すやうにといふにきまつてゐるので、お茶碗に殘つてゐた御飯だけを夢中にいただくと「疲れてゐますから」と、母の前に膝をついて、そのまゝ二階の自分の小さな三疊の間に逃げかへつて、來ましたが、部屋に入ると、われにもあらず、いきなり机に俯伏してしまふのでした。

　翌る朝も、日出子はきつと、まだ眼のふちを赤く腫らしてゐたのにちがひありません。前夜は、日出子、一睡もすることができませんでした。二世の滿洲娘には、女らしい深い感情と細かな神經のはたらきが缺けてゐるやうに、滿洲に住む同じ日本人の男達のあひだに、よくいはれてゐるさうですが、どんなものでせうか。日出子、その晩ほど、白木のことについて、眞劍に考へたことはございませんでした。白木は母のいふやうに、それほど輕蔑に價しなければならなかつたのでせうか。父だつて、今はよほどちがふやうですけれど、決して白木といふ人間を、本當に理解したのでもなければ、認めてゐたわけでもないと思ひますわ。なるほど白木は、吉林の一部の界隈に、物笑ひの種を殘していつたのは事實でせう。しかし、それは白木の人間として全人格的價値に、どれほど關係してゐたことでせうか。御承知のやうに、白木は、ずゐぶん頓馬だし、魯鈍な男ではあります。それを思ふと、日出子、をぢさんに對して、本當にすまないと思ひますわ。をぢさんのやうな方なればこそ、白木のやうな人間でも、すべてを大目に見て、使つて下さつてゐることが、日出子には本當によくわかつてゐるのですもの。そのことは、白木も、口癖のやうにいつて、いつも感謝してゐるのです。

　をぢさんが、誰よりもよく御存じのやうに、白木は決して、出世型の人間でも、才腕のある男でもありません。けれども白木が、善良な心の持主であるといふこと、何を愛し、何を愛さなくてはならないといふことだけは、正しく心得てゐるといふことは、家の老宋だつて、よく知つてゐたのですから。ことによると、私が白木と家庭をもつやうになつたといふのも、白木に心からなついてゐた、老宋の暗示や影響に負ふてゐるのかも知れません。もしも老宋が、白木を好かなかつたなら、日出子だつておそらくは結婚をする氣にならなかつたかも知れないのです。きつとさうだつたにちがひありません。

　老宋は、本當に白木を好いてゐました。

「白木さん、好人(ハオレン)!」と、老宋がほめるときの彼女の表情といつたら、それはありませんでした。皺深い皮膚が、柔和な笑ひにほぐれ、眼は愛情をこめて、奥の方から光り輝いてくるのです。もちろん、老宋はお世辭がいへるやうな柄ではありません。むしろ、お世辭などといふものをまつたく知らないところに、彼女の素朴な眞價がかくされてゐたのです。

「老宋、また白木が會社でしくじつたのよ」と、私がいひます。すると彼女は「噯呀(アイヤ)!」と驚きの感嘆詞をなげて、本當に心配してくれるのです「做什麼事了(ツオシヨマシーラ)、白木さん――」と、年とつた奶媽(ナイマー)は、憂はし氣に私の顔を覗きこみます。

「會社で帳簿をまちがつたのよ、數字をすつかり書きちがへて、新らしい帳簿を臺なしにしてしまつたんですて」と、日出子は説明をしてやります。わかつたのかわからないのか、とにかく白木が、いつもの頓馬から何かとんでもない失敗を演じたことだけはそれと察して「噯呀(アイヤ)」をくりかへし「會社(ホエシヨ)不用掛心麼(プヨンコワシンマ)」と訊きます「老宋、そのことなら大丈夫よ」と慰めるやうにいふと「好了(ハオラ)!」と、始めて安心したやうな顔になるのでした。

　それにしても、白木も、困つたものだと、日出子も、何回思つたか知れないわ。今でも、さう思ひますわ。これが、をぢさんのやうな方の下にゐるのでなかつたなら、この一年のあひだにも、勤め先を幾ら變へてゐなければならなかつたかも知れないと思ひますわ。本當に白木にも、もうすこししつかりして貰はなければ――。

　吉林では、白木は、金融會社にまづ勤めたのでした。白木の身の上話については、本人からもお聞きになつてゐることでせうが、日出子からも、一應はお耳に入れさせて頂きたいと思ひますわ。金融會社では、算盤ができないのに、すつかり參つたらしいのです。その頃、日出子の顔さへみると「弱

つた、算盤には弱つた、一度だつて合つたことがないのだから――」といつて、いかにも參つたやうに、頭を抱へてゐました。だいたいそれには、日出子の父にも、一部の責任はあつたのでした。といふのは、東京に行つてゐた白木を、再び吉林に呼び返したのは、誰あらう日出子の父だつたからです。

　白木の、東京時代のことについては、日出子は詳しくは存じません。手紙はずつとくれてゐましたから、だいたいのことはわかつてゐたつもりでしたが、白木が、中島さんと一緒に、池袋で回覽雜誌屋を始めて、脚を擂粉木のやうにして、毎日東京の郊外を歩きまはつてゐたことなどは、まるで知りませんでした。その中島さんとは、中島さんが白木のあとからやはり滿洲に來られて、日出子も、新京にまゐつてから度々お目にかかるやうになつて、いろいろ白木の東京時代の面白い話も中島さんからうかがつてゐるのですが、何でも中島さんもずゐぶんその頃は、ご苦勞なさつたのださうでございますね。その頃のことから思ふと、中島さんも滿洲では政府關係の合作社にお入りになつて、そこの資料課にはなくてはならない大切な一人となつてゐられるので、失禮ながら日出子もお喜び申上げてゐるのでございますわ。その中島さんとをぢさんとが、前からお友達だつたといふのも、日出子にはどんなにうれしいことか知れませんわ。をぢさんや中島さん御夫婦に可愛がつて頂くことができるだけでも、新京に來た甲斐があつたと、よく白木とも申合つてゐるのでございます。

　白木の東京からの手紙といへば、ほとんど繪の勉强のことばかりでした。でなければ、氣に入つた映畫のことや、感心した小說のことや、それから東京の季節や風景のこと位でした。生活の苦しさなどについては、これつぱかしも書いて來たことがありませんでした。日出子がまた、家の風呂しか入つたことがなく、滿洲とはいへ吉林といふ都會に生れ、そこで育ちながら、錢湯といふものには一度も行つたことがないといふ世間知らずのものですから、自分からそんなことを、訊いてやるといつた心づかひなどその頃はまるでなかつたものでした。今から思ふと、本當に恥かしい氣がいたすのでございますわ。

　何でもその回覽雜誌屋をやつてゐる頃に、中島さんの下のお子さんがお生れになつたさうですね。そのとき夜中に奥さんが急にお產氣づかれたものだから、中島さんがお湯をお沸かしになる、白木が飛出してお產婆さんを呼びにゆくといふ

騷ぎになつたが、白木が無理矢理に腕をとつてひつぱつて來たのは、お產婆さんではなくて、眼科醫さんだつたといふぢやありませんか。お產婆さんと眼科醫さんの看板の區別がつかなかつたのは、あんまりあわてて心がすつかりあがつてゐたからだと、白木はいふのですが、お產婆さんが女であること位は氣がつきさうなものだと、申しますと、いやあのときは、產婆でも醫者でもいいから、ひつぱつて來さへすればいいといふただその一心から、實は、眼科醫とは知らず、ただのお醫者さんだと思つて叩き起して這二無二つれて來たと今になつても、ムキになつて辯解するのですよ。こんなのはさすがに白木にしても、極端な例でせうが、本當にこの人のとんちんかんには呆れさせられることがあるのです。

　來て見て、びつくりしたのは、眼科醫さんで、場合が場合だけに怒りもならず、白木と二人で今度は本物のお產婆さんを呼んで來て下さつたさうですが、そのときにはもう分娩が終つてゐたさうで、この話が出る毎に、日出子、中島さんの奥さんに、どんなにすまなく思ふか知れないのですよ。そんなことから、奥さんに產褥熱の氣味があつて、冷やさなければならなくなり、今度は氷を買ひに白木は出て行つたさうですが、幾ら歩きまはつても、氷屋がわからなかつたのださうです。それには本當に困つてしまつたさうですが、ふと氣がつくと、夜のしらじら明けの光に、下水の溝に氷が張つてゐるのがうつすらと見えたので、白木にしては大出來でしたが、いきなりその溝に靴のまゝ入ると、手にさげていつたバケツに、入るだけの氷を詰めこんで來たといひます。その氷でとにかく、奥さんも急場を救はれることができたのださうですが、回覽雜誌屋時代の思ひ出話を聞くと、中島さんといふ相棒があつて、有形無形に勵まされてゐたからでせうが、白木は白木ながらに、生活の戰ひを戰つて來たことが知れるのです。そんなことを、夢にも想像したことのない日出子は、本當にまだ子供でした。こんなのを、滿洲娘だといはれるのでしたら、それは日出子の場合には、さういはれても仕方がありませんわね。

　白木は、しかし、父にはたまに、生活のことも漏らして來てゐたのでした。日出子の父と、白木のお父さんとは前に仲よしで、白木のお父さんも吉林で長く、白木洋行と稱して雜貨商を營んでゐられたことは、白木からもお聞きのことだと思ひます。日出子の家は、前には滿系しかなかつたなかに割り込んだ木材商で、種々な困難のなかを商運もだいたい順調にきり拓いて來、滿洲建國以來は、治安の安定と日本人の激

増につれて商勢も、漸次確固とした基礎に置かれるやうになつたさうです。現に、日滿人を一丸とした商工公會といふやうなものもできて、父もその役員に推されたりしてゐるやうです。

白木のお父さんと私の父とがお知り合ひになつたといふのも、同じ吉林に業を營む日商同士の關係からだつたのでせう。日出子の父は日露戰爭の頃、まだ今の外國語學校の前身を出たばかりだつたさうですが、ある大きな御用商人の現地派遣員に招聘されて、旅順や奉天に來たことがあり、その後再渡滿をして吉林で木材のブローカーを始めたのが、今の大野洋行の始まりだつたと申します。

白木のお父さんは、白木からもお聞きになつてゐるやうにもと滿鐵の驛長どころをつとめてゐられた方ですが、後に勸める人があつて、この吉林で、日本の雜貨の店をお始めになつたのでしたが、滿洲事變勃發直前の險惡な空氣と情勢のなかで、竟に店を支へることができない破目に陷つてしまひ、その上重なる不幸で奥さんが御病氣になられたりして――白木のお母樣はそれがもとで内地に歸ると間もなく亡くなられたのださうですが――到頭滿洲を、お引上げになつたわけださうでございます。

その頃、白木は、もう東京に出てゐて、美術學校に通つてゐたのでしたが、白木の家が店も家も疊んでしまつて、吉林から去つてしまふといふことには、日出子は悲しい思ひをしたのでした。日出子はまだ女學校に上つたばかりで、世の中のことは何も知りませんでしたが、大野洋行には、お金が相當あるのだらうから、白木洋行にすこしまはしてあげたら何も店仕舞ひをしなくてもよささうなものだと、父をうらめしく思つたことをおぼえてゐます。しかし、本當をいへば、白木のお父さんは、もう商賣といふものには、すつかり嫌氣がさされたのださうです。そしてその後は、四國の小豆島のある村にひつこんで、奥さんが亡くなられたあとも、都會などには出ることなく、悠々と老後の自適生活に入つてゐられるのですが、その白木が、その後何年かして、あの年が昭和六年でしたから、その後八年にして、またひよつこりと吉林に舞ひ戻つて來たのでした。そして白木を再び滿洲に呼んだのが、前にちよつと申したやうに、日出子の父だつたのでございます。

二章

をぢさんがおききになりたいのは、もつと老宋のことや、

老宋奶媽と日出子との關係についてでせう。でも、順序として、もうすこし御辛抱下さいませ。

父は、白木と日出子のことを、特別なものに考へてゐたのではありませんでした。もし考へてゐたとしたら、おそらくは父は、白木を呼ぶやうなことはなかつたでせう。けれども白木の方は、心の底で、父を、特殊な感情でなつかしがつてゐたのですて。父にも、白木にたいして、てつきりそれに應ずる下心があるやうに、白木は東京で考へてゐたのですて。だもんで、今は東京では、お父さんからの送金を斷つてゐること、美術學校もやめて、市役所のインテリ失業救濟の日給仕事に出たり、中島さんと回覽雜誌をやつてゐることなどを外聞もなくいつてやつたのですて。本當に白木といふ人間はさういふお人好しなのですからね。

あれも困つてゐるやうだし、あれの親父とは仲よしだつたし、手頃の碁敵でもあつた、ちよつと金融會社に事務員の周旋を一人賴まれてゐるしと、父は渡りに舟とばかりに、白木を迎へたのでした。ところが、その白木が、先刻申上げたやうなていたらくだつたのです。まさか、それほど使へなくはあるまいと思つてゐた父は、内心後悔してゐたらしく、金融會社の方からいや味でもいはれたときでせう、白木も人間はいい男なのだが――と、暗に不信の愚痴をこぼして、母からあなたがあまり物好きだからですよ、などと皮肉られてゐるのを、日出子は、どんな思ひをして聞いたことでせう。そのうち、白木は、案の定ていよいよ金融會社をお拂箱になつたのでしたが、父も、呼び寄せた手前うつちやつても置けず、今度は、奉天に本社をもつある新聞の支局長に、斡旋して白木を坐らせたのでしたが、これも、半歳とは經たないうちに、美事に馬脚をあらはして、白木は退散しなければならなかつたのでした。配達人には、集金を使ひこまれるし、記事を書いては、地元の人に睨まれるし、勸誘による擴張はお互ひによささうなどと、競爭新聞の支局長と、自分で提議して紳士協約を結んだのはよかつたのですが、そのあとから出し拔かれて、讀者は奪はれるし、業界からは笑はれるし、といつた工合で、さすがに父も、すつかり匙を投げて、白木がその支局長を本社から馘首になつたときには、もうどこへも世話をしようとはいはなくなつてゐました。その白木を、引取つて下さつたのが、をぢさんだつたといふわけです。

日出子、今でもありありとおぼえてゐますわ。白木が、新京に發つて行つたその日のことを。それは、年の暮も押しつまつてからのことでした。もうその頃は、家では、白木と私

のあひだを非常に警戒してゐたのです。といふのは、日出子も、父にも母にも、白木との結婚について申出でてゐたし、白木は白木で、父までそのことをある機會に申込んであつたのです。それがまた、日出子の親たち――わけても母の白木に對する不評を一層募らせることになり、父は、そのことではいつも顔をゆがめて不愉快さうにしてゐましたが、母とくると、顔面神經をヒリヒリさせて「身のほど知らず」とか「どこまでお目出たくできてゐるのだらう」とかそれはきついことを日出子などにも聞えよがしにいつてゐたものです。そして、さういふ白木を心に抱いてゐる日出子を、一圖に齒痒ゆがると共に、何とか二人のあひだを、完全に隔てゝやうとして、日出子の身邊にも絶えずきびしい監視の眼を光らすやうに母はなつてゐたのでした。今から思ふと、×新聞の支局長を白木が追出されたのも、その蔭に母の意志が作用してゐなかつたともいへないやうです。これはしかし日出子の邪推かも知れません。どうせおそかれ早かれ、白木はそこをも出されなければならなかつたのですから。

そんなわけで、白木が發つて行くといふのに、日出子は、見送りに出ることもできないので、老宋にこつそりと手紙をもたせて行つてもらつたのでした。ところが、しばらく經つと、老宋が二階の日出子の部屋にあらはれて、日出子に、市場まで一緒に行つてくれといふのです。白木を送りにやつたのに、妙なことをいふので、白木はどうしたのだといふと、ニヤニヤ笑ひながら、とにかく早く市場まで一緒に行つて下さい、今市場で白菜を買はうと思つたが、品もよくはなく、値段も高いから、奥さんに相談に來たのだけれど、奥さんは今どこかへお出かけになつて不在だから、沒法子（メイファツ）、姑娘（クーニャン）一緒に來て看てくれといふのです。

白木のことばかり考へてゐた日出子は、本當に腹が立つて腹が立つて――いくら利口だといつても、老宋は老宋だ。やつぱり河北生れの百姓女だと、胸がむしやくしやしながらも、仕方なくついて行くと、市場の前は素通りして、ずんずん先きに立つて彼女は行きます。それが、驛の方にでも行く道なら、日出子も、はつと氣がついたことでせうが、驛ともまるでちがつた方角なものだから、可哀いさうに、老宋もすつかり耄碌して、少々變になつたのかも知れないかと、日出子は、本當にそんな氣がしたほどでした。

すると、どうでせう、雪がチラチラ落ちて來たなかに、向ふの町角の時計屋の前に、防寒帽をかぶればいいのに、日出子がナイトキャップに編んであげた黒い毛糸のハンチングを

着て、寒さうに白木が突立つてゐるではありませんか。老宋がそこに待たせて置いたのですつて。かうして、驛にこそは見送れなかつたけれど危いところで、白木と別れを惜むことができたのでしたが、私たちのことを思へばこそ、あの老宋にも、こんな機智がしぼり出せたのでせう。歸りに、市場は? と訊くと、お嬢さま、もうごらんになつたのでせう。だから註文をいたして置きました、とかうなのですよ。可愛い老宋!

話を、このへんで、元へ戻さなければなりません。

さつき申上げました、父と母との爭ひは、白木が、をぢさんの會社に勤めるやうになつてから、新京からまたあらためて父に、求婚をいつて來たのがもとだつたのでしたが、その夜、一睡もしなかつた日出子は、翌日朝は御飯もたべず、家の裏庭の一隅につくつてある、老宋の房子（ファンツ）の扉を叩きました。音で知ると、なかから「お嬢さま!」と日本語でいつて扉をあけるや否や、老奶媽は、手を伸べて日出子をぐつと抱きすくめてくれるのでした。日出子のノックを、音で老宋はよく知つてゐると同時に、その音の强弱、高低、速度、數の多少等で、そのときどきの日出子の感情や心理の種別を、彼女は、人生の經驗を積んだもの丶みがもつ獨得の直感と、審人のみがめぐまれてゐる不思議な叡智によつて、見分けることも、見拔くこともできるのでした。

おたがひに多くを語らなくとも、顔さへ見合へば、以心傳心に通じ合ふ一つの感情に融け合つて、日出子と老宋は、向ひ合ひました。老宋の房子のなかは、いつものやうに、大蒜や葉煙草の匂ひがぷんと匂つてゐます。いやそれはもう、赤い牡丹の花模樣を描いた茶瓶などの、陶器にまでしみこんでゐるといつた方が適切かも知れません。そして、その匂ひだけで、老宋の房子に來ると、日出子は本當に、身も魂もやすらかに投げ出すことができるやうな氣がするのです。

「どんなことがあつたのでせう、最愛姑娘（ツイアイクーニャン）!」と、そのときは、いつもの「お嬢さま」を、最愛づきの姑娘にいひかへて日出子の顔を、老宋は、瞼の底に深い愛情をこめて、しげしげと見入るのでした。多分そのとき奶媽の瞳には、まだ日出子が、彼女の手に抱かれて、彼女のおつぱいにくらひついてゐたときの、幼な顔がうかんでゐたのかも知れません。それが、大きくなつて、いまいろいろ苦勞をしてゐるのだと思ふと、今はしなびたその乳房でもふくませたいほど、いぢらしく思つたことにちがひありません。

「日出子、どうしたらいいの?おまへがもし今の日出子だつ

たらどうする？老宋、一言でいひからそれを教へて頂戴！」

と、私は、老宋に申しました。すると、可哀いさうに「曖呀！」といつて胸に手を當てた老宋の顏は、見る見る困惑した表情にかはつていきました。それは、無理もないことは、日出子にはわかりすぎるほどわかつてゐるのですが、これが甘へるといふのでせう。それに、日出子には、老奶媽(ナイマー)が、日出子の口寫しでもいいから、ただ一言いつてくれさへすればそれで、何もかもがきまるやうな氣がしてゐたのです。それは、白木のあとを追つて新京に行けといふ、その一言だつたのです。こんなことまで申上げるのも、をぢさんのまへなればこそですから、どうぞ笑つてやつて下さいませ。

しかし、老宋は、何ともいつてはくれません。ただますます困つたやうに、そして悲し氣に日出子の顏を見つめてゐるばかりです。かうなると今度は、日出子の方で、老宋をいたはり、慰めなければなりません。かういふ場合は、二人のあひだにはよくあることで、いつてみれば、これもお互ひの愛の絆がさうさせるのだとも申せませう。

「仕方がないわ。おまへに、いま日出子が求めてゐることをいはさうとするのが、まちがつてゐたのだわね。老宋、ではまたおまへのあの思ひ出話でも聞かせてくれない？」

と、そのとき日出子は申しました。するとどうでせう、それが恰も彼女自身の罪でもあるかのやうに、申譯もございません——といつたふうの老奶媽の顏に、一瞬救はれたやうな光の影が射したかと思ふと、お午の支度までにはまだ間があるからと、日出子にとなく自分とになく一應さう辯解をしてから、それでも、手を遊ばせてゐてはならないやうに、母からあてがはれてゐる毛糸の編物を始めるのでした。

そこは、家の裏庭の一隅の、もとは物置小屋だつたのを改造したもので、粗末ながらも房子(ファンツ)としての體裁をそなへてゐました。窓もとつてあり、炕(カン)（温突）も設け、土間に茶卓を置き、アンペラ敷の床の上には、黒塗の支那鞄の一つも据ゑ柱には支那式の金色に彩つたボンボン時計もかゝつてゐるといつた工合でした。この房子のなかで、日出子は奶媽の乳をのみ、搖籃にゆられ、物心がついてからも、母よりも媽奶(ナイマー)が好きで好きで、奶媽にばかりまつはつてゐたのですから、この房子のなかがふるさとのやうな氣がするのも當然でせうし、母よりも奶媽の方が、日出子といふものをよく知つてくれてゐたとしても、不思議はないわけでせう。

日出子が註文した老宋の思ひ出話といふのは、彼女の婚禮のときの思ひ出で、それは日出子が、まだ全く無邪氣に聞き

流してゐた頃から數へると、もう何十回とおそらくは耳にしてゐたかも知れません。しかし、その頃の日出子には、それが——をぢさんだからいへるのですが——やはり胸にふれて聞かれるのでした。

自分たちはまだ本當に若かつた。殊に老頭兒(ラウトル)（老爺）と來たら、まるで小孩(シヤウハイ)（子供）のやうだつた——と、いつもそんな切出で、實はまだ五十には少し間があるといふのに、すつかり苦勞に刻まれた皺深い顏の老奶媽は、物語を始めるのでした。そして、それを語るときの、彼女にきざしてくる初々しさうな物腰といつたらないのでした。たとへば、時々胸に手を置いたり、夢見るやうに空間の一角に眼をやつたり、些末な忘失を、さも大切なことのやうに思ひ出さうとして、表情たつぷりに骨を折つたりして、それらの仕種は、それこそ婚禮の頃の若さに引戻したやうにさへも思はれるのでした。

それに、驚かされるのは、稚拙な表現ながら、その雄辯でした。もちろん、言葉は滿語——支那語ですが、ところどころウロ覺えの日本語をさしはさんだりいたします。

その頃、老宋は——老宋の名は玉英といひますから、この思ひ出に關するかぎりは、玉英と彼女の美しい名を呼ぶことにいたしませう。玉英は、御存じのやうに、滿洲でも農村ならどこでも見られる、數戸が一廓をなした外圍の土壁——あの土壁の內や外に立つて、空ゆく雲や、廣漠とした野や、泥溝をあさる豚等を、ぼんやりと眺めてゐるやうな、田舍の姑娘だつたのでした。家は、貧しいながらも自作農で、その後水害のときに生死不明になつた彼女の兩親は、まだ生きてゐました。年齡の二十にはまちがひなかつたが、普通よりは發育の後かつた玉英には、早婚の多い支那ながら、嫁ぐにはどうかと思はれる位だつたと申してゐます。村の名は三春柳屯(サヌチウヌリユウトン)といひ、屯名の由來をなす三春柳(サヌチウヌリユウ)（アカシヤ）の木にまつはる傳說のある村落が、彼女の故鄕だつたのです。北京、天津に、車馬で數日の距離にすぎないそこは、今でもまだ開けたとはいへないやうですが、といふのは、今はその三春柳屯に住んでゐる彼女の息子からの老宋夫婦への便りで、だいたい知れるのですが、二十幾年かの前には、もちろん文明開化の影などは匂ひほどにも射してはゐなかつたのにちがひありません。五六戸の、緣邊につながる大家族的協同體を築いてゐるやうな、その土壁のなかの一戸に生れ、そのなかで育ち春の摘草や、農繁期の野良仕事の手傳ひを除いては、娘々祭か孔子祭ででもなければ、土壁から一歩も外へ出たことのないやうな玉英は、この世に生きる世界といへば、自分の家と

共同の庭（院子）を包むその土壁の内とまはりとで足りたのでした。

　その彼女にも、年頃になつて、縁談が湧き、婿を求められて嫁ぐことになつたときには、玉英は自分のこととは思へなかつたといつてゐます。兩親は有頂天だつたさうです。その頃、百元といふ求婚金は、三春柳屯は勿論界隈の評判を呼ぶに充分だつたのださうですから。

「忘れもしない、野には春が來て、空には閑古鳥が鳴き、畑には高粱がすくすくと伸び始め、そして、神木の三春柳が、淡い嫩葉の色に彩られて行く頃でした」と、玉英は、誰かに敎へられたやうに、きまつてから斷るのでした。雙方の見合ひが絡つて（相手は同村の少し隔つた、これは中地主位の息子で。宋元德といつて、今の彼女の老頭兒がさうです）見合ひ絡つてもといつても、をぢさんも御承知だらうやうに、本人同士が直接に見合ふのではなく、支那の古くからの風習通りに女の父母たる彼女の兩親が、男を見に行き、次で先方の媒灼人が彼女を見に來て、雙方に異存がないといふことになり、首飾、婚禮衣、羊の肉、鯉魚、酒、饅頭などが男家の方から屆けられて、女家からもこれに對して吉祥物を贈つて、さていよいよ婚禮の日取がきまると、それでもう他家の兒媳婦（嫁）になつたのだと母親から聞かされたときには、玉英はもう身も心も「石のやうに」固くなつたやうな氣がしたといつてゐます。今でもあの天與の素朴さを失はない老宋のことだから、きつとさうだつたのだらうと、日出子本當に同情するのですよ。

　嫁入道具を新郎の家に送り屆けた日には、喜びをいひに來る人たちの接待で、彼女も忙しい思ひをしなければなりませんでした。そして、いよいよ當日になると、朝早くから念入りに化粧に費して、綿入れの婚衣を着せられました。この婚衣の綿入れといふのは、幸福な暮しをした老婦人が曾て用ひたものほど喜ばれるのださうですが、玉英の用ひたのは、同じ土壁のなかの、本家に當る家の八十老媼のその高齢と、かくしやくとした健康にあやかつたのださうです。

　祖先の靈——といつても、それは古ぼけた一幅の軸だつたさうですが、その前に額づいて、暇乞ひをし、落ちつかない思ひで男家からの迎へを待つほどに、やがて土壁の外の方にあたつて、一種のざはめきが感じられたかと思ふと、間もなく土壁の門をくぐつて、美しい花轎（四角な形をした。日本のお祭りの鳳輦に似た駕籠）が家の表に降ろされて、娶親太太が來たのです。娶親太太といふのは、男家の關係者の老婦

で、いはば男家の親代りを意味するのですが、その娶親太太が來て、赤い布切れで、すつぽりと頭から顔を蔽はれたときには、玉英は早くも、泣き出してしまつたといひます。それは、蓋頭といつて、これも婚禮風俗の一つといひますが、聲を出して泣くといふのは、花轎に乘せられる際に、父母への別れを惜しんですることになつてゐるのを、そのときにはそんなことも忘れて、玉英はただもう、泣けて泣けて仕方がなかつたといふのです。

「玉英、玉英や——」と、その日を限りに、他家に縁づく彼女を呼ばふ母親の癇高い聲も、今はうつろに、花轎に乘ると途端に、玉英は視覺を遮ぎられるのでした。花轎の四圍を蔽ふ緞子の幕が、すつぽりと降ろされたのです「噯呀！」と胸に手を組んで、床几にかけた體が、ふはりと持上つたかと思ふと、それが合圖であるかのやうに、一際銅鑼の音が高く響いて、吹鼓手——例の樂隊が始まつたのですて。鼓、銅鑼、拉叭、笛などのあの高調子の婚禮の樂隊は、支那も滿洲も、そして今も昔も變りはないのですつて。

　滿人の婚禮の行列は、滿洲に生れた日出子は、小さいときから見馴れて、いつも眼をたのしませたものでした。花轎をまもつて、金燈、羊角燈、統傘、帝扇などが樂隊に導かれて練つて行く婚禮の行列は、吉林のやうな都會で見ても美しいのだから、廣々とした北支の農村の、見るかぎり淡い緑に彩られた季節を背景にしては、どんなにか床しく、美しく、そして古風な情緒に富んでゐたことでせう。この頃ではもう新京などでは、樂隊入りの婚禮の行列は澤山見られなくなりましたね。花轎が花自動車に變る世の中ですから、これも時勢といふのでせうが、でも日出子など、何だか惜しくもありさびしい氣もいたしますわ。

　その美しい行列、これまで何か指をくはへるやうな氣持で見惚れたことのあるその婚禮の行列に、その日は、他ならぬ自分が乘つて、自分のために、それが村を練つていくのだと思ふと、行列は眼に見えないながらも、村人たちの眼や囁きやを想像して、玉英は顏も胸もぽつと熱くなつてゐました。そして、傳説の神木、村の小高い丘の高い三春柳の前をとほるときには——それはなかから覗いたわけではないが、行列の氣組みで知られたと老宋はいつてゐます——神氣に打たれて、頭がシーンとなつたといひます。

　三春柳の傳説については、日出子、まだお話してゐなかつたか知ら？。その三春柳は、傳説の木だけに、ずゐぶんの古木で、樹も大きく、昔からどんな洪水の害や旱魃の禍ひが

あつても、また旱魃に出會つても、それぱかりは屯の丘の上に、神々しく聳え立つてゐたといひ傳はつてゐるもので、多分さういふところから出たのでせうが、その附近一帶の宋氏——そこは殆んど同姓ばかりだつたといひますが——の祖先が、その神木の蔭から始まり、その三春柳の地下には、今でも始祖の神靈が宿つてゐると信じられてゐるのださうです。

そのうちに、行列は無事婚家に着いたのでしたが、そこで花轎を家の門内に入れるとか入れないとかいつた問答が、豫め待つてゐた番人と行列とのあひだに始めはおとなしく、次第に聲高に戰はされます。これは八百長の押問答で、花嫁の忍耐心を試すものだとされてゐるさうですが、玉英は、豫め母親によく敎へられてゐたのにも拘らず、本當に自分を拒んでゐるのではないかと、しまひには心配になつて來て、もうすこしで花轎の幕に手をやつて外を覗いてみるところだつたと、笑ふのですよ。

邪氣拂ひのために行はれるといふ花轎の炭火跨ぎも終つて、花轎がとまつたかと思ふ間もなく、花轎の扉の幕が開いて、蓋頭の紅布でよく眼が見えない玉英の手に、ひやりと冷たいものが握らせられました。それは、林檎で、それを握らせたものは新郎の元德だつたのです。これも、儀式の一つで、新郎から與へられて、新婦はそれを、嚙ぢらなければならないのですて、玉英はどんなにして始めて新郎の手から直接與へられたその赤い果物を、どんな思ひで嚙ぢつたか、日出子には想像ができません。で「そのときどう思つた?」と訊くのですが、老宋は「不明白」(わからない)といつて答へません。しかし、さういふ表情にも、さすがに今もなほ、ほのかな羞恥の感情の動きが浮んで見えるのもいぢらしく思はれました。次で、庭で、新郎新婦が肩を並べて拜天地といつて、天地の神を禮拜するのでしたが、それにつゞいて屋内に導かれての祖先の靈にたいする婚儀の報告と共に、玉英はただもう、夢のなかを何かに泳がされてゐるやうな氣しかしなかつたと申します。

それからさきのことは、日出子には、實は、澤山だといつてよいのですが、老宋にとつては、それが大事らしく、最後の締括りをつけなければ、話を完了にすることができないのです。老宋の婚禮話があまり長くなりますから、なほ次々につゞく複雜な儀式は、省略することにしまして、新郎と新婦の初對面の場と、それから最後の止めだけを申しませう。

新郎新婦の初對面は、洞房で行はれるのですて。洞房といふのは、新郎新婦の部屋のことでして、玉英の實家は、部屋

が一つしかなかつたが、婚家の方は四つあつたといひます。洞房のなかは、大きな壁鏡、立派な支那鞄、花模樣のある美々しい布團、枕、布を張つた圓卓、卓上の大きな陶物の花瓶などの晴れの調度品で飾つてありましたが、もうそのときは、蓋頭をとつて、眼もさめるやうな單色の晴衣に着替へて、胸と頭に赤い花をつけた花嫁玉英は、これも新裝の新郎と、初めて對座をしたのでした。

元德老頭兒は、今でこそでつぷり肥つて、魂も拔けたやうにおつとりしてゐますが、その頃は、どちらかといふと、むしろ優型と思はれる位の、細身の中肉中背で、色もそんなに黑くはなかつたさうです。新郎を前にしては、さすがに玉英は胸が高鳴つて、言葉も出なかつたさうですが、新郎はといふと、これも人形のやうに、押し默つてゐたといひます。顏はあきらかに上氣し、眼だけはまじまじと花嫁を見つめてゐたさうですが「自分も恥づかしかつたが、あの人もまるで物がいへなかつたのだもの……」といふのが、その場を説明するときの老宋の十八番であり、それをいふときの彼女が、今でも如何に自己感動に浸ることができるかは、彼女の肩の波にも窺はれるのでした。

さて、結婚の第一夜が明けると、婚家の兩親はもとより、泊りこみに婚儀に來てゐた親戚緣者から手傳ひの人たちにいたるまで、朝からなんとなく顏もうきうきとして、家の内外が湧きたつてゐます。玉英はもう、悲しいといふのか何といふのか、ただ人に見られたくないやうな思ひで、自分で自分を心ひそかにいたはつてゐたさうですが、それはその朝、表の門に、へんぽんとして紅い布が掲げられたからです。それは新芽の風に薰つて、紅一點ながら日光に美しく映えて、村びとの眼にも輝かしく見えたことでせう——それは新婦が、をぢさんはもうこの風習はよく御存じなんでせう。それは新婦が、處女だつたことにまちがひはなかつたといふ宣言なのださうです。

「でもね、朝に門に紅布が出されたときには、それでわたし始めて人妻になつたのを知つて、心で、噯呀母上!と、母を呼んだのでした」と、それが、老宋の長い思ひ出話の、締めくくりであり、結びの一句となるのでした。

をぢさん、老宋の話をどうお考へになつて、日出子は、老宋のその思ひ出は、過去と現在、民族と風習、環境と教養——さういつたものの嚴然とした差別や相異にも拘らず、そしてまた、ちよつと親子に匹敵する年齡の大きな隔たりにも拘らず、それを聞いてゐると日出子は、ただ女性のみが、そし

ておそらくは東洋の女性のみが、お互ひに通じ合ひ、觸れ合ふことができるやうな、なんともいへないものやはらかな、そしてふくらみのある情緒と感情の世界に、おのづから誘ひこまれて、一種の幸福感にさへも、浸ることができるのでした。

しかし、それを聞いたからといつて、日出子自身には、どうなるものでもありません。ただ戀愛といふものからば、およそ縁のなかつた老宋のやうな女にも、女なるが故に天から投げられたやうな、さうした若い日の美しい思ひ出があるかと思ふと、日出子はふと、ねたましいやうな氣もするのでした。

三章

前に申上げた小事件があつてから、父は、母にも、日出子にも、めつたに口を利かなくなつてしまひました。商人ながらも、協和服を着て、店に出て帳簿をいぢくつたり、着荷や積み出しの木材を調べたり、製材工場を見廻つたりするときの溫厚さうな物腰や態度には、べつに變つたところは見えないのでしたが、家族には實に不機嫌に、苦蟲を嚙んだやうに苦い顏で押し默つてゐました。

だいたいが、白木を呼んだことに、父は、自分で自分に不機嫌な思ひをしてゐたのです。つひ自分も關係してゐる土地の金融會社に、誰か一人事務員はないかと、頼まれたものだから、白木に白羽の矢をたてたといふわけだつたのですが、子供の頃の白木しかよく知らなかつた父には、白木のサラリーマンとしての不適な性質に氣づくはずもなく、もともと人の世話は好きなたちから、善意で呼び寄せたのでしたがそれが勤め先の縮尻にも拘らず、日出子との結婚問題を持上げることになり、更にまたそれが家庭不和の癌のやうなものになつたのだから、いかに父が好人物型であつたとしても、上機嫌であり得る筈はなかつたのでせう。

母はまた母で、さうした父をよそ目に、家を外にするやうな日が、だんだん多くなつて行つたやうです。國防婦人會だの、何々講習會だのと、吉林の日系婦人界にも、新らしい動きが、活潑になつて來てゐたやうですが、母は、さうしたなかで、相當颯爽として、活躍してゐたやうです。そのことは土地の名流婦人などが、母を訪ねてよく家にもいらつしやるやうになつたことでもわかりましたが、それはまた母が「この頃はわたくしたちも、婦人新體制で、めつきり忙しくなりました」などと、折を見てよく父に得意さうに語りかけてゐることでも窺ふことができました。しかし父は、さうした母

を、べつに批評したりすることはありませんでしたが、同時にあまり興味を寄せてはゐなかつたのは事實のやうです。これは、日出子の慾目かも知れませんが、父はそんなことよりも、むしろ日出子と白木のことを、仕方がないから、早くうまく解決してやりたいと考へてゐたやうです。

そんなことをしてゐるうちに、三、四箇月は經つたでせうか、ある日の午後、それはもう夏のことで、母が、日出子のもつやうな、華美なパラソルをもつてゐたことが、今もなほ不思議に眼にとまつてゐるのですが、表に洋車（人力）を乘りつけて、かざしてゐた華美なパラソルをすぼめて、外から歸つて來た母は、ちやうど表に居合せた日出子を見ると、めづらしく上機嫌で、日出子座敷にお茶を入れるから、と、誘ひこみました。父は、商工協會に會議があるとかいつて、出て行つたばかりのところでした。

「けふは、おまへに折入つて話があるのだけれど、きいてくれる？」

と、何か、そは〳〵しながら、母は申しました「伺ひます。お母さま」と、日出子は、きつぱりした聲でいつて、素直に、母の前に坐りましたが、心のうちは、法廷にでも、引出されたやうな氣が、直感的にしてゐました。

「おまへ、信太郎のことどう思ふ？」

と、母は訊きました。弟のことについては、まだ小學校に通つてゐるのが一人あるとしかをぢさんには話したことはなかつたと思ひますが、信太郎といふのがそれで、弟はどちらかといふと、性來あまり丈夫な方ではありませんでした。

「信ちやん、どうかしたのですか」と、日出子が申しますと

「大野家の子供といへば、おまへと信ちやんの二人きりでせう」と、母が、あらたまつた口調でいひます。そして、だから日出子も少しは考へてくれなければ困ると、母は申すのでした。

「――と仰言いますと、お母さま……」と、日出子はもう、何もかもわかつてゐながら、脣をこはばらせて訊いてみました、果して、だから白木との結婚は、思ひとどまつて貰はなくては――と、いふのでした。母の考へは、しかしむしろ單純なものだつたのではないかと日出子は思ひます。一男一女の、その一男の方は、なんといつてもまだ小さく、萬一將來信太郎に何か故障が生ずるやうなことがあつては、大野家の後繼は、所詮日出子とその夫でなければならないと、母はいふのでしたが、日出子は、それよりも、母が自分の意中の、省の建設廳のある若手の技師が、內地の實家の家柄も相當な

身分であるところから、這二無二その人に日出子を嫁がせようとしてゐたのは、そのときの母の勿體ぶつた口實にも拘らず、日出子にはすつかり見拔くことができるのでした。何故といつて、實は母は後妻で、信太郎は母の實子で、日出子の本當の母は、日出子が生れると半歳も經たないうちに、不幸にしてこの大陸で亡くなつたのでございます。到頭これまでいつてしまひましたが、母が息を引取るとき、當時まだ下女とも奶媽ともつかなかつた今の老宋に、いつたといひます。どうか日出子が大きくなつて、結婚するまで、おまへに日出子の世話をして貰はなければならない。これだけはきつとお願ひをして置くからと。老宋と日出子の關係や因緣が、どんなにか深いものであるかといふことは、これによつてもわかつて下さることができると思ひますわ。

もちろん一概に、母の得手勝手やまた虛榮などといふのではなく、母は母として、家のことやまた世間に對する思惑などをいろいろ考へてのことであつたのは、日出子にだつてわからなくはありませんでした。でも、結婚といふことは、女にとつてはほかのこととは違ふのですからね。どんな方かは存じませんが、見も知りもしない人を、幾ら親だつて母が勝手にきめるなんて。

「お父さまも、おまへさへよければと仰言つてゐるのだから、本當に今度こそはおまへも肚をきめてくれなくては——」

といふ母の一言を、うはの空の耳にとどめて、そこを引下がつた日出子が、逃れる場所といへば、二階の自分の部屋か、老奶媽の房子(ファンツ)のほかはありませんでした。母のまへでは、緊張してゐたからそれほどでもありませんでしたが、一歩座敷から出ると、心に支への力を失つて、脚も體も、一時にふらふらツといたしました。もちろん日出子は、老宋の房子に救ひを求めに行きましたが、老宋はゐませんでした。氣がつくと庭で、元德老頭兒が、のろい動作で、薪を割つて居りました。で、老頭兒に、老奶媽はどこへ行つたかと訊くと「我的(オーデ)不知道(プチド)」(わしは知らぬ)といつて、大きな圖體にくつついた太い首を、懶さうに振るのです。

「困つたわね。どこへ行つたのでせう?」

「我的不知道」

「先刻からゐなかつたのかい」

「我的不知道」

こんな工合で、三度まで「不知道(プチド)」を繰返されると、日出子も思はず怒りを感じ、荒々しい語調になつて「ぢやおまへ

老奶媽がどこへ行つたか、急いで探して來ておくれ」と、命じました。すると、元德老頭兒は、怪訝さうに眼を大きくして日出子の顏を見て居りましたが、しかしすぐには答へず、兩三度手斧をうち下してから「文廟(モンミョウ)、文廟」といひました。女(ニュ)老宋は、仕事の小閑をはからつて、文廟にお詣りに行つたのにちがひありません。

「お馬鹿ね、おまへ。始めからわかつてゐたのぢやないの」

と、日出子は頰をふくらましていひましたが、日出子はこのときほど、元德老頭兒が本當にお馬鹿に思へたことはありません。だつて、まるで日出子の心のなかなど察することが彼にはできないのですもの。老奶媽の思ひ出話によると、前にもちよつと申しましたやうに、元德は昔は體は優形の方で文字も村では讀める一人だつたといひますが、そして事實、日出子が物心のついてからでもどうかすると、滿字新聞の古新聞と、首つ引をしてゐるやうなこともありましたが、後には、さういふことも全くなくなつて、ただ肥ることとしか知らないやうな、大人然とした大きな體を、自分ながらも持てあましてゐるやうにしか思へませんでした。ただ老宋といへば當然元德のことでなければならないはずだつたのに、日出子の家では、單に老頭兒(ラウトル)といふ以外に彼のことを呼ぶものはなく、老宋といへば、誰もが、老玉英をさしてゐるのでした。そのやうに、元德の存在は、まるで無視されてゐる形になつてゐたのですが、元德にしてみれば、そのやうに老妻の蔭に住んでゐた方が、わづらはしくなくて呑氣だつたのかも知れません。

「お馬鹿ね」と、もう一度繰返して、日出子も、老宋のあとを追かけました。文廟といふのは、家から、松花江寄りの方に六、七町位行つたところで、二重屋根の立派な孔子廟です。甍は金色に彩られ、見るからにどつしりとした雄壯な感じの廟宇で、門前には「文武諸官員下馬」と刻んだ石碑があります。正殿の大成殿といふのに孔子の神位が祀られ、西廟には門弟たちの神位が七十から納められてあるといひます。

「可哀いさうに、老宋はまた文廟詣り(モンミョウ)を始めたのかと、日出子は思ひながら急いで行きましたが、果して、文廟の門の表で、お詣りを終つて出て來る老宋に、行き會ふことができました。文廟は幼い頃から、日出子もずゐぶん奶媽につれられて行つたもので、赤い靴をはいて、奶媽におててをとられてヨチヨチと歩いて行つたことも、きのふのやうな氣さへもするのですよ。季節のいゝ頃には、歸りには松花江の岸まで出て、高い尖塔の聳えてゐる天主會堂あたりを、抱つこされた

り歩いたりした記憶は、今もまだ鮮かに殘つてゐます。

老宋が、文廟にお詣りをするのには、一つのわけがありました。それはもう申上げたかも知れませんが、彼等の一粒種の息子である雲福の安否を氣づかつてのことでした。雲福については、日出子の記憶としては、鼻たらしの汚い子供の頃から、中秋節のお休みなどには、生意氣にも日出子の父から貰つた中折帽をかぶつて、こましやくれた恰好で、揚々と遊びに出かけて行つたりした彼の十四、五歳位までしか知りませんが、年は日出子より三つ位上だつたやうです。十四、五歳になつて、太い材木を挽く大きな鋸の一つもどうやら使ひこなすことができるやうになると、突然に彼は家から消えて行つてしまつたのでした。その頃、日出子は、小學校の三、四年だつたと思ひますが、老宋の嘆きといつたら、たいへんでした。彼女は毎日眼を泣き腫らし、狂氣のやうになつて、文廟へ日參をつづけたものでした。雲福は、苦力買ひにかどはかされてどこかへつれて行かれてしまつたのでした。その後幾年か經つて、てつきりもう死んでしまつたと思つてゐた雲福から、成人した自分の寫眞を添へて、青島の日本の製鹽工場にはたらいてゐるといふ手紙を受取つたときの老宋のよろこびは、またどんなだつたでせう。そのときには、さすがに慢性の感情鈍痲に陷つてゐた元徳も、彼の唯一の仕事である薪割りも二、三日は、まるで手につかないやうでした。もつともそのことでは、父も昂奮して、晩酌の徳利を幾本となく替へながら、母と日出子を前に坐らせて置いて、老宋たちの身の上話を語つて聞かせたものでした。

どうも、日出子のおしやべりは、無軌道になり勝ちですが、ここでちよつと、老宋たちが、家に救はれて來たときのことを、簡單にいはせて頂きたいと思ひます。そのとき、父は、商用で、奉天にまで出かけて行つたのださうでございます。父は、新調のオーバーを着始めたばかりだつたと申しますから、滿洲に早い冬が、來始めた頃だつたのでせう。二、三日滯在して商用を終へて、驛前の旅館を引上げ、あの堂々たる赤煉瓦建ての驛の方へ歩いて行くと、驛前の廣場の地上にうづくまつて、しきりに行人に物乞ひをしてゐる支那人の群がありました。折柄夕暮れどきで、うそ寒い風が立つてゐたさうですが、氣の弱い父は、どうもそれを見てすぎることができず、ふところから銅錢を出して三人四人とくれてやつてゐるうちに、ヒーヒーと泣き叫ぶ赤ん坊をつれてゐる夫婦者を見つけたのでした。夫婦共、行倒れに近い弱り方で、もちろん衣類などもぼろぼろになつてゐたさうですが、よく注意

してみると、二人ともまだ年をとつてゐるとはいへず、氣力さへ回復すれば、立派に働けさうに思へたので、赤ん坊の不憫さにひかれて、驚きかつ恐怖する彼等を、無理に汽車に乘せ、辨當をあてがつて機嫌をとつたりなどして、吉林につれて來たのださうです。そのとき露天で、ヒーヒー泣き叫んでゐたのが、雲福だつたのでした。

老宋たちの、新婚生活の幸福は、あまりにも短いものだつたのです。結婚幾年もなく、彼等のふるさとである三春柳屯を一呑みにした、そして相當廣範圍にわたつて收穫期の農村を全滅に導いた、河北省の大水害に遭遇して、彼等もまた多數の農民たちと共に、難民のなかに投げ出されたのでしたが多分そのとき幾千となく北支から滿洲へ流れこんで來たといふ洪水の被害者と共に彼等も山海關を越え、そして次第に八方に散つて行つた難民のなかで、宋夫婦たちは、おそらくは他の若干のものたちと共に、はるばると奉天にまでたどりついたのにちがひありません。この老宋の身の上話は、それだけでもう一篇の長篇小說を思はせるものがあるのですが、それは何れ、別な機會にお話をすることにいたしませう。

ところで、雲福のことでございますが、その後雲福は、これも小說を地で行つたやうな話ですが、その青島からふるさとの三春柳（サンチユンリユウ）にもどつて、いまはささやかながらも一家を構へて立派に百姓をやつてゐるのですて。これはをぢさんだつて、眉唾ものにお思ひになるのも無理はありませんが、それが嘘ではないことは、老宋が日出子に見せてくれた、雲福からの手紙で知ることができました。青島の製鹽會社では、雲福はどうした機緣か、會社の技師長にたいへん可愛がられてゐたのですて。多分彼の數奇な身の上話でもその人の耳に入つて、興味をもたれたのかも知れません。その岡田といふ技師長の方が、事變以後北支の皇軍占據地域に新らしくつくられた、河北省の農事合作社の理事の一人に友人があつて、その大川といふ合作社の理事に岡田さんといふのが雲福のことを御紹介になつて、雲福が郷里に住んで働けるやうにお世話なすつたのださうです。多分その岡田さんといふのも大川さんといふのも、きつと大陸にはよく見受けられる理想家型のロマンチストにちがひありません。大川さんの方でも、それは面白いとばかりにお引受けになつて、始め半年ほどは、合作社の現地派遣員か何かにお使ひになつてゐたらしいのです。ところが、合作社運動の進展につれて、新に指導農家を適當な村に置くことになつて、三春柳屯も選ばれ、三春柳屯には特に雲福をしてささやかながら一戶を再興させて下さつたと

いふのですが、それらのいきさつについては、斷續して雲福から親たちによこす幾通かの手紙を通じて、やうやく判讀することができた位ですから、老奶媽にはなかなか呑みこめず、また合作社なんといつても何のことか、日出子が幾らよく說明してやつてもわからないのですが、しかし何れにしても、息子の雲福が三春柳に歸つて、百姓をしながら無事に生きてゐるといふことだけは、彼女も信じ、どうかこの上とも雲福に幸があるやうにと、思ひたつと居ても立つてもゐられないやうに文廟へお祈りに行くのでした。

「噯呀（アイヤ）、最愛姑娘（フイアイクーニヤン）！」

と、老宋は日出子を見るなり、眼を輝かして抱きつくばかりにいたしました。それが、參詣のすくなくない文廟の表でなかつたならば、彼女はきつと日出子を抱きよせたことでせう。そして老奶媽は、そこで會つたことが、まるで神業（わざ）の寄蹟でもあるかのやうに、感動に胸を彈ませながら、いふのでした。

「爲著可愛的姑娘來禱告孔子哪（ウイロクアイダクーニヤンライタウカオゴウツナ）」可愛いお孃さまのために、孔子さまにお祈りをして來たのだといふわけです「噯呀、老宋！」と、日出子も、すがりついて泣きたいほどに、胸がせまつて仕方がありませんでした。それほどまでに老宋は、日出子のことを心配し、日出子と白木の問題がうまく運ぶやうにと祈つてゐてくれたのでした。

四　章

これからさきのことは、をぢさんも大體、ご存じのことと思ひますが、ついでだからもうすこし話させて頂きますわ。

そのとき日出子は、本當にもう死んでしまはうと思つたのでした。だつて、日出子が、出奔しようと決心してゐるのにかんじんの白木が、煮えきらなかつたのですもの。日出子、腹が立つて、腹が立つて、本當にそのときは、だから白木は日出子の父にだつて、母にだつて、馬鹿扱ひにされるのだと思つた位、本當に齒痒ゆくて齒痒ゆくてなりませんでした。もうすこし待つてくれ、勤め方もまだ充分馴れてゐないし、部屋も四疊半一間では困るからなどと、日出子の思ひつめた心も考へないで、呑氣なことをいつてよこすのですものねえ。さうさう、も一つこんなこともいつて來たのですよ、今寛城子の秋の風景を描いてゐるからといふのです。それが、昨年の滿洲國の國展に入選して、をぢさんもほめて下さつた繪ですが、繪を描いてゐるから早く見に來るやうにとこそ、日出子には、いつてもらひたかつたのです。白木が、いい繪

をかくやうにと誰よりも祈り、また畫家（ゑかき）としての白木を、いちばん理解してゐたのは、日出子ですものねえ。それだのに白木といへば、繪をかくことに、日出子が、まるで邪魔者であるかのやうに書いてよこすのですもの。

その頃、日出子は、家では、相當きびしい監視の下に置かれてゐました。それは、親たちが、特に母が、日出子について、決して意地惡るではなく、母の立場としては最善の、心配をしてゐて下さつたのにはちがひないのです。なにしろ、日出子は、三度の御飯も申譯にちよつと箸をつける位で、顏の色もわるく、夢につかれた者のやうに、ただ氣力もなくふらふらとしてゐたのですから、店の者や老宋たちにもいひつけて、家のなかでも注意をさせ、外へも一歩も出させないやうにと、氣を配らさせてゐたのも、今から思ふと、尤もなことで、何とも申譯がありません。しかし、當時の日出子にしてみれば、家ではそんなふうで、たまにいくらか氣分もはれて、外の風にでも當つてみようと思つて、一歩でも家の外に立つと、滿人の雇人や木挽までもが、半分は好奇心に驅られた眼を光らして「不行（ブシン）」「不行（ブシン）」と、いつかど忠義ぶつて口をとがらすといつた工合で、日出子としては、重い感情のはけ口もなかつたのです。そこへ持つて來て、奶媽にそつと託して出してもらつた、最後の決意を固めた日出子の手紙に對して、白木が、いま申したやうな呑氣といはうか鈍感といはうか、いや本當に意氣地のない態度だつたのです。雲福を見なさい！と、日出子は、そのとき、心の中で白木に叫んでやりました。人買ひか人浚ひにつれて行かれた雲福は、その後恐らくは三年や四年は、苦力群のなかに投げこまれて、事實上足に鎖をつながれたのと同じきびしい監督のもとに置かれて、薄つぺらな布團を毛布のやうにくるくるとまいた、あの苦力の荷物を全財產として、行くさきざきへと擔いで行つて全滿の炭礦や土建地帶を、流れて行つたにちがひありません。しかし、恐らくは南滿から北支の方に移動したときに、彼は苦力群を脫して、青島に走り、そこの製鹽工場に入つて後日ふるさとの三春柳屯に歸つて、家を復興するための、準備にとりかかつたのにちがひないのです。吉林から新京へではないか、汽車で三時間――しかも新京では白木はアパートながらも一間を借りて、をぢさんと同じ會社で、――尤もその頃はをぢさんのお名前きりしか日出子は知りませんでしたが――しかもをぢさんの、部下として。どうやら今度はうまく勤めてゐるといふことでしたから、雲福の苦勞に比べたら、物の數でもないと思ひ、鼻たれ子だつた雲福の昔を思ひ

出して、日出子だつて負けてはならないと、勇猛心を出したのでした。それなのに、白木は、その日出子の決心の前にさへ、たぢろつてゐたのですもの。

「あのときはあのときだよ」と、よく白木は今でもむきになつて辯解します。とりかかつてゐた繪もかきあげ、家も好きな寛城子に一戸を借りて、その上でをぢさんにでもお願ひして、日出子の父に話してもらふつもりだつたと、さういふのですよ。幸ひ、寛城子に一戸を借りるといふことだけは、をぢさんのお力添へで、今の住宅難の新京では、奇蹟のやうに實現いたしましたが、何もかもが、自分で描いた望みどほりに行くやうに考へてゐる白木のおめでたさかげんは、二世だの、世間知らずだのと思はれてゐる日出子にだつて、どんなにもどかしく思はれたことでせう。

しかし、それだけだつたら、日出子は、まだ絶食までは、思ひいたらなかつたかも知れません。仕方がないから、今しばらく待つ。しかし、日出子はもうすつかり決心ができてゐるのだから、俊ちやんも一日も早く迎へる準備を急いでくれるやうにと、日出子がまた白木に書いてやつた手紙を、ひそかに老宋の手に握らせ、早く投函してくれるやうにと頼んだのです。ところが、そのとき老宋は、母にいひつけられて、その日お花の會が家にあるといふので、お座敷の掃除やら招客の準備やらをさせられることになつて、外へ出られなくなつたものだから、折柄學校へ出かけて行く信ちやんに、表まで追かけて行つて投函を頼んだのでした。それを、信ちやんがポケツトに入れたまゝ忘れてゐて、夜になつて、信ちやんの洋服の始末をするときに母に見つかつたものだから、日出子にとつては、三度目の椿事が起ることになつたのでした。

日出子が、さつそく母に呼びつけられたことは、申すまでもありません。さすがに母は、開封だけはいたして居りませんでした。でも、その場で、どういふことを書いてやつたかいへといひます。日出子と白木との文通には大いに警戒して、配達されて來る郵便物には注意を怠らなかつた母でしたが、老宋を介して、信書の往復をつづけてゐた位のことは、母もそれとなく察するが、すくなくとも想像だけはしてゐたことでせう。事實、日出子への白木からの手紙は、近所の女學生時代で、お藥屋さんの麗子さんといふお友達の家に、その麗子さんへ新京のお友達から來たやうに、封筒だけは書いてもらつて、そのお友達から老宋が受取つて來るといふ、あまり愉快ではない方法を用ひてゐたのでした。そんなわけで、心に大きな弱點をもつ日出子は、むしろ大膽になつたといふ

のでせうか、一瞬のいひやうもない困惑の後に、わるびれもせず、それを母の前にひらいて差出しました。

眼を通した母は、何かけがらはしいものにでも觸れたやうに、眉をひそめると「捨ててもいいでせうね」と、言葉は穩やかにいつて、靜かにそれを引裂きましたが、その手もとが、小刻みにふるへてゐたのを、日出子はさうしたなかでも何故か、はつきりと眼にとめることができました。

「すべてはわたしの責任です」と、やがて母は、いとも沈痛な口調で呻くやうに申しました。そして、恐怖と羞恥が、潜在意識から甦つて來て、心臟を抑へなければならないほどの日出子に、母は、すつかり冷靜になつていふのでした。

「よく見せてくれました。今までのことは、これで帳消しになつたのも同樣です。もちろんもう二度と再び無分別のことをあんたは考へることもないでせう。どうかお母さんを信賴して下さい。決してあんたのわるいやうにはしませんから。あの方の話も、實はもうすぐ見合ひといふことまで進んでゐるのです」

お茶を入れるから飲んで行くやうに、お父さんも間もなくお歸りになるだらうから。といふ母の言葉にかまはず、部屋に戻つて來た日出子の氣持はどんなだつたでせう。白木の方は煮えきらたいくせに、手紙ばかりはほしがつてゐながら、日出子のかうした苦勞などは、まるで知りもせず、考へもしないのだと思ふと、この天地にただ一人取殘されてゐるやうな氣さへもして、喪心といふか虚無觀といふか、急に世の中が、味氣なくなつて、生きることの辛さを思ふ、といふよりも、もうそんな考へさへもなくなつてしまつてゐるのでした。そして、その翌朝から、一週間にわたる日出子の絶食が始まつたのでした。

日出子が、滿洲娘の駄々兒ぶりを發揮して一がひに、拗ねてゐるとばかり思つたらしい母は、そして父も、二日目からは何かこつそりたべてゐる位にたかをくくつて、御飯のときにも、日出子を呼びに來なくなりました。その後兩三度、信ちやんが階段から聲をかけてくれましたが、日出子が行かないものだから、この方は多分むくれたのでせう。信ちやんもその後は何もいつては來なくなりました。さうしたなかで、氣の毒だつたのは、老宋でした。可哀さうに老宋は、日出子の結婚を見屆けたら、しばらく御恩返しのために最後のはたらきをして、そして夢寐にも忘れることのできない息子の雲福のもとに歸つて、思ひ出のふるさとで、後生を穩かにたのしまうと考へてゐたのを、日出子が、そんなことになつたもの

だから、どうしてよいかわからず、せつかく大事に永へなければならない老ひの命を、ひとりで創らなければならないのでした。

「嗳呀、都是、我的不對」と、老宋は、私の顔さへみると、本當にすべてが自分の罪のやうに、憂はし氣に、胸に手をあてていふのでした。すべては自分が悪かつたのだといふのです。彼女さへ手紙を信ちやんに託さなかつたら、こんなことにはならなかつたのにと、ひとすぢに思ひこんでゐたのです。

老宋の罪でも何でもない、何もおまへは心配することはないと、日出子はいひきかせるのでしたが、老宋がはこんで來るお膳も箸をつけず、日出子がよくおなかをわるくしたときに老宋に頼んでつくつてもらつた林檎のおろし汁も、心配して老宋が自分でつくつて持つて來てくれても、飲まうともせず、そして日に日に衰へて行く身をただ死を待つばかりに、床に横へてゐたのですから、老宋はこのときばかりは、彼の愛の力もあまりにも脆いことを、嘆かなければならなかつたのでせう。

けれども、老宋は、最後まで日出子を、見放さうとはしませんでした。中秋節も床のなかですぎて、街にはもう菊の花が出たと見えて、日出子の机の上の花瓶は、二、三輪の白菊と、そして赤い實のついたほほづきが、無雑作ながら簡素に美しくさしてあり、また枕下には、林檎や蜂蜜やが、お盆にのせて手の届く距離に置いてありました。何れも、老宋の心づくしであつたのはいふまでもありません。あるときはまたこんなことがありました。日出子が眼をつぶつてゐると、足音をも遠慮する老宋が、半睡半醒の日出子をそつとゆり起すのです。何かと思つて、枕の脇に置かれたものに眼をやると、それは白木のスケツチブツクで、白木が新京に行くときに、老宋に記念のために贈つたものでした。なかには、日出子や老宋の肖顔なども交つてゐますが、すべて白木が、吉林に來てから主に吉林の風物について描いたものでした。

何といふ心やさしい老宋だらうと、弱りはてた氣力のなかにも、日出子は、合掌したい思ひでした。その頃は日出子の部屋には、もう白木の繪は何も懸つてゐませんでした。母のはからひで、どこかへ持つて行つてしまつてあつたのです。

もう死の前に、靜かに自分を投げ出してゐた日出子ではありましたが、やはり老宋の足音だけは、階段に心待ちに待たれるのでしたが、それもやがて、意識することができなくなつて日出子の生涯に、僅かではあつたが生命の空白の時間が置か

れました。思ひ出しても、それは眠りとはまた異つたもので、もちろん死でもないわけでせう。つまり假死か、假死に近い狀態だつたのでせうが、何か、はるかに遠い遠いところから磁氣にでも引きつけられたやうに、失つてゐた意識が、かすかに呼び戻され、それが次第に、自己回復の努力のやうな内なるはたらきに促されて、次第に力を加へて來たかと思ふと、さうした心理狀態のなかに、視覺がぼんやりと生き返つて來て、まづ日出子の網膜に映し出されたのは老宋でした。ああ老宋は心配してまだ見まもつてゐてくれるのだと、まだ夢見心地にそんな心持だけぼんやりと感ずることのできる日出子は、今度ははつとして稍明瞭な意識で、視力を強めやうと努力をするのでした。と、そこにぼつかりと眼に見えたのは白木ではありませんか。背の高い白木は、まるで老宋の頭のところに首を置いたやうに、老宋の後に控へてゐるのがわかりました。そのとき、日出子は、ああこれが死といふものかと、ふとそんな氣がするのでした。でも、こんな場面は、現實世界のこととしては想つてもみることができなかつたのですもの。

次いで父と母の姿が、日出子のすぐ頭の近くにあることに氣がつき、最後に日出子が小さいときからよくお世話になつた、かかりつけの水島先生といふお醫者さんが控へてゐられるのを眼でたしかめたとき、日出子は始めて、自分がまだ生きてゐるのだといふことに氣がつくことができたのでした。

そして、それから、日出子の結婚問題は、急轉して、をぢさんが御存じのやうに解決することになつたのでした。

それといふのも、日出子は、老宋に負ふところがどんなにか多かつたかを思はずにはゐられません。あとできくと、白木は、日出子のそんなときにも、引込思案で、馳せつけて來る決心がなかなかつかなかつたのですてね。心配のあまり老宋が、お藥屋さんの麗子さんにそつと囁いて、麗子さんから白木に二度も知らせて下さつたのに、をぢさんが行つてやれと半ば命令的に仰言つて下さるまで、白木はむしろ日出子をうらんでゐたといふのですよ。といふのは、俺にそんなに心配さす手はないと思つたと、これなんですよ。それでも、老宋のはからひがあつたればこそ、白木もさすがに氣になつたと見えてをぢさんに御相談申上げたのですわ。萬一老宋がいろいろ心をくばつてくれなかつたならば、日出子は、本當に命を無くしてゐたかも知れないのです。白木が新京から驅けつけて來たときには、日出子はもう意識を失つてゐる狀態だつたのにも拘らず、それとも知らない家では、父も母も、白

木を日出子に會はすことはできない、詳しいことは何れあとから人を新京にやるからといつて、斷つたのださうです。そのときばかりは、白木も大いに頑張つたと見えて、取敢ず店に白木を待たせて置いて、母がこつそり様子を見に日出子の部屋に來てみると、日出子は、顔も蒼白に瞼を閉ぢて、脈搏も感じられなかつたものだから、お醫者さんをよんでカンフル注射をするやら、母が狂氣のやうになつて看護をして下さるやら、急に大騒ぎとなつたわけでした。日出子が、危く一命をとりとめることができたといふのも、日出子は、自分では氣がつきませんでしたが、老宋がひそかに湯呑みに溶いて置いてくれた蜂蜜を、無意識のうちに、いつの間にか飲んでゐたことが衰え行く日出子の命脈をどんなに支へてくれたかも知れないのですつて。それは、あとで、水島先生が父や母の前で、日出子に話して下さつたので始めてわかつたのでしたが、老宋は曾ては奶媽として日出子の育ての親であつたばかりでなく、大きくなつてからは、心のこの上もないやさしい、そして眞實な友となつてくれ、ともすれば女らしくないといふそのことから、世間の指彈を招きがちの滿洲娘である日出子の胸に、女性にとつて最も大切な愛の心を正しくよび醒ましてくれ、その上彼女はまた淺墓な思ひすぎから、かるがるしく死を決した日出子の命の恩人ともなつてくれたのでした。また白木との結婚について、彼女が蔭で、どんなにか大きな力となつてくれたかといふことは、今までの話で、をぢさんにも充分想像して頂くことができると存じます。

日出子も、雲福が、三春柳に歸つてゐるといふことを知つてから、老宋たちを、一日も早く河北に送りかへしてあげたいと思つてゐたのでした。しかしそれは、何れ父が考へてくれるだらうと思ひ、また日出子には、まだまだ老宋が必要だつたものですから、べつに自分から積極的に父に願つてみることもせず、彼等にも話してはゐなかつたのですが、いよ〱その時期が來て、をぢさんのいはゆる「歡宴二重奏」となつたわけでした。

あの晩のことは、今から思ひ出してもただ夢としか思へません。本當に、この世のものならぬたのしい夢でした。しかしそれは夢ではなくてたしかな現實だつたのです。でも、現實にしては、あまりにもこの世ながらの夢のやうな世界だつたのではないでせうか。

をぢさんがお祝ひ下さいましたお言葉のなかで「この歡宴二重奏はひとへに今席の主賓である老玉英のつきない深い愛によつて導かれたものである、私は血を異にした民族のあひ

だに、このやうに美しい、そしてこのやうに愛といふものゝ本質にふれた人間的結合が、行はれやうとは想像したこともなかつたし、することもできなかつた。しかし、これは事實であります。しかも大事なことは、これは何かの必要から故意に作爲せられてさうなつたのではなく、最も自然な營みにおいて生み出されたものであるといふことであります。そしてここに、東洋人の眞の道德がその本然の姿をとりもどした一つの典例を見るといつては、いひすぎになるでせうが」と、仰言つて下さいましたとき、ああ本當だわ！と、日出子は、婚衣の巾廣い帶にしめつけられた胸のなかで、その言葉を抱きすくめてゐたのでした。氣がつくと、母も、ハンケチを眼にあてがつてゐました。父は、おだやかな微笑をうかべて、滿足さうにうなづき、白木は兩手を膝の上に重ねて、ぢつと聞き入つてゐましたが、母もわかつて下さつたのだわと思ふと、日出子、うれしくてうれしくて。そして、をぢさんのお言葉が終つたとき、三つの圓卓から一齊に湧きあがる拍手の嵐のなかで、老奶媽（ラウナイマー）も狂氣のやうにたたいてゐるのを見たとき、日出子は、よかつた、本當によかつたと、心の底から思ふのでした。殘酷な運命と長い長い忍苦の生活の後に、わづかに惠まれた私たちの贈物を、彼女は、かくすことのない歡びをもつて受取つてくれてゐることがわかつたのですもの。

本當は、日出子は、式場にも老宋たちに出てもらひたかつたのでした。ずゐぶん老宋たちを口說いてみたのでしたが、元德の方が、何といつても承知をしてくれなかつたのです。家でも、前にも申上げたやうに、まるでその存在が忘れられてゐたやうな老元德だつたのですから、一擧に、世間に引出して、しかも婚禮の固くるしい儀式に列席させやうとする方が、まちがつてゐたのでせう。さういへば、新京へ出て來るといふことも、老元德の方は、なかなか應じてはくれなかつたのですが、三春柳へ歸るには、旅劵が要る、その旅劵のことで、新京に用事があるといふことにして、老奶媽から說き伏せてもらひ、そして康德福飯店の宴會にだけは、彼等の送別の意味も兼ねてやるのだからと、やつとつれて來たやうなわけだつたのです。

宴會も、實は、父は、ヤマトホテルででもと、全く事務的に考へてゐたのですが、日出子が白木と相談して、わざわざ城内の康德福をえらんでもらつたのでした。私たちだけの披露宴なら、どこでもよかつたのですが、むしろあの宴會は、日出子にしてみれば、老宋たちこそ大事な主賓だつたのです

もの。康德福は、城内の滿人飯店のなかでも、北支料理だといふことを白木から聞いたもので、その意味でもあの店を選んだのですの。

おしまひのあの滿洲樂は、始めの計畫にはなかつたのでしたが、日出子、急に思ひついたものだから、父におねだりをしてよんで頂いたのよ。あれは傑作だつたでせう。婚禮の音樂といふものは、北支も滿洲も、昔から同じだと見えて、銅鑼と、鼓と、喇叭と、笛との入りみだれたあの古風な、そして單調ではあるがよく聞き馴れると、如何にも情緒的な樂隊の前には、をぢさんのお祝ひのお言葉のときにもずつと箸ばかり動かしてゐて、表情一つ變へず、終りの拍手のときにも老玉英につつかれて二つ三ついひわけばかりしか叩かなかつたさすがの老元德も、老玉英と仲よく並んで椅子にかけながら、うつとりと眼を細めて聽き入つてゐるのを見たときには、老宋の思ひ出話が心に深く沁んでゐるだけに、日出子、胸が熱くなつて來て、泣けさうで、泣けさうで本當にあのときは困りましたわ。角かくしをかぶつて、涙なんか出しては悪いと、ぢつとこらえてゐなければならなかつたのですもの。

それにしても、老宋たちを、ああいふ宴會にまで呼び、また新京も見物させたのは本當によかつたと思ひますわ。日出子の好きな好きな老宋だつたのですものねえ。

終章

康德福飯店の祝宴で、ただ一度會つただけだけれど、老宋夫婦が、傳説のふるさとの三春柳屯で、息子の雲福と共に、どんな生活をしてゐるだらうと、日出子たちと共に語り合ふことは、西村にとつてこの上もないたのしみである。日出子や白木と共に、彼もその後の老宋たちについて、何かと不安を感じないでもない。でも雲福や、雲福が代筆してよこす老宋からの日出子への折々の簡單な便りでは、どうやら彼等は治安確立の地域も漸次擴大されつつある北支で、幸福な日日を送つてゐることが想像されるのである。

割烹
香蘭
新京梅ヶ江町

最近も中秋節の晩に、西村は白木に招かれて寛城子の彼等の家を訪づれたが、家に入るといきなり日出子が「をぢさん老宋からこんな葉書が來てゐますのよ」といつて彼に見せた。それには片假名まじりの雲福のたどたどしい文字で、中秋節が近づきましたが中秋節にはぜひ奶媽がお敎へしたやり方で、月餅をつくつてお月樣にお供へ下さい。奶媽も月餅をつくつてお供へしますが、雲福にはお孃さまからおそはつたトンカツをつくつて御馳走をしてやります。といつた意味が書いてあり、中秋節にトンカツは面白いと大笑ひをしたが、トンカツが食べられるやうでは彼等の生活も心配はないらしいと話し合つたのである。

そのとき、ふと見ると、白木が描いた老宋の小さな肖像が、額縁にはめて壁にかかつてゐた。眼の下あたりの小皺の陰影までもよく捉へられてゐながら、如何にも柔和な、そして素朴な美しさに描かれてゐた。それを見ながら、西村は思つたのである。白木も會社に來て皆勤一年になるから、規定の休暇をとらせて日出子と共に北支へ旅行させ、三春柳屯を訪づれさせてやりたいと。そしてそのときには、自分も一緒に北支に行つて、雲福の世話をしてくれたといふ合作社の大川に會ひたいと思ひ、自分も大陸に來てゐる日本人のなかの日出子のいはゆる浪漫主義者の一人かも知れないと、心のなかで、ひとり微笑が湧き上つて來るのだつた。

（完）

編輯後記

▽すでに七月號である。半歳を經て、顧みる大いなる太陽。この半歳に於ける一瞬の歴史は、將に大日本國史に肇國以來の劃期を齎したものであり、
皇謨照々、國運隆々として宿志成らざるなく　大東亞の共榮紐帶は遍く日章旗によつて埋め盡された。皇師の武威、まことに日本人が驚くのである。

▽この日、さらに特殊潜航艇の活躍あり、一はアフリカ南端にマダガスカル島を襲ひ、一は濠洲東岸深くシドニーを擊つ。いづれも生還を期するなき必殺の士魂、わがもののふにこれあるかな、あはれこれあるかなと、いま、後記の筆の跡に涙するのである。この筆も、藝文も、肖りてかくこそ士魂を持てと。

▽八號を重ねて、通觀するに、文藝作品の貧困であつた。依頼稿の他に、投稿も相當數に上つてゐる。克明に讀んでゆくのであるが、讀み出すときの氣負ひがやがて挫けてゆくと、それは當事者にとつて堪らぬみぢめさである。どこかに、誰か、素晴らしい人が潜んでゐると思ふ、そんな、恃む氣持ちで一ぱいだ。

▽創作は、文章の巧稚よりも、いまは素材であらう。あへて、硬派文學とやらを提唱するのではないが、かゝる時代であるが故に取材するところ多きを思ふのに、なにか狹められてゐる感じや、把握性の足りなさや、寛濶に把握しようとせぬらしい嫌ひのみえるのはなぜか。生硬なる時局便乘は、また困る。

▽心理學の安倍三郎博士、「民族の本質と民族研究の立場」を説く。澎湃たる民族研究の思潮に一棹をなすもの、學徒の道標である。孫文より汪主席へ、その間に精通する金崎賢氏が「汪國府主席と滿華本然關係」について解明を寄す。滿華交驩の秋、必讀さるべきであり、兩國琴瑟に楔を打つものであらう。

▽南京政府と、滿洲國政府兩々の宣傳機關の元締が、かの日胸襟を開いて對談を行つた。これが武藤富男氏の「林柏生氏と語る」に纏つたのである。大提携を語る一騎打、快文字である。瀧川政次郎博士の「蘇州ところ〴〵」は情操香り高き名隨想であり、白雲和尚の「托鉢放談」また掬すべき淸凉の一劑。

▽匿名で現はれた操觚界の一耆宿宗甚六氏、社會月評「方寸錄」をものする。枯淡稜々、逐號の謦咳に期待したい。軍官學校訪問記の繪と文、協和青少年戰爭詩集、ともに中間を飾る特輯であり、三河入りの長谷川濬氏の現地もの「早春」、山田淸三郎氏久闊の小説「老朱」一〇〇枚は蓋し勞作を疑はぬ。

1942

藝文　第一卷第八號　七月號

定價八十錢（郵税三錢）

康德九年六月廿五日印刷
康德九年七月一日發行

發行人　小原克巳
編輯人　石河潔
印刷人　太田信三
印刷所　太田信三商店

誌代

一箇月	八十錢	郵税三錢
半年	四圓八十錢	郵税共
一年	九圓六十錢	郵税共

新京西七馬路一四
發行所　藝文社
電話二一―六九〇五番
振替新京一二五一番

配給元　滿洲書籍配給株式會社
全滿、日本、北支各書店にて販賣

◎廣告一手取扱
新京特別市中央通
滿洲國通信社
電話三一―四三二一番
同各地支社　奉天・哈爾濱・大連　東京・大阪

富士山牌
藤澤友吉商品

悪疫猖獗に備へて

アドース

强力新吸著劑

日英米佛特許

哈爾濱・滿洲國立東北防疫處長
醫學博士　星崎相陽氏實驗報告

アドースは各種吸著劑に比し吸著力最も强大、五%にして一時間吸著せしめたる致死量の赤痢毒素を無害ならしめた。大體赤痢の如く大腸下部に至るに從ひ病變强度を增加するものは注腸によつて効力を發揮するが故に余は主に一乃至二%アドースリンゲル液三〇〇乃至四〇〇瓱を用ひて良好なる成績を得てゐる

【適應症】一般下痢・醱酵性下痢・鼓腸・急慢性腸カタル・胃酸過多症・胃壞瘍・慢性便秘症・疫痢赤痢・コレラ・腸チフス・食餌中毒・毒物中毒其他各種中毒症等

粒狀　五十瓦入・百瓦入・五百瓦入
錠劑　百錠入・五百錠入・一千錠入
糖衣錠　十五錠入・五十錠入・百廿錠入

奉天市加茂町　大連市山縣通七
株式會社　滿洲藤澤友吉商店
天津日界常盤街　上海密勒路八號